

石川県金沢市

木越光琳寺遺跡

一般県道向粟崎安江町線道路改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

1998

石川県立埋蔵文化財センター

石川県金沢市

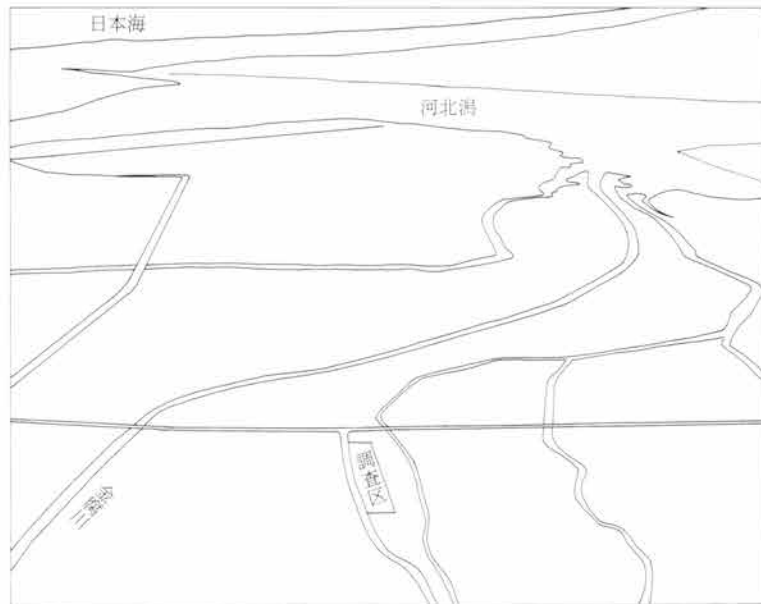
木越光琳寺遺跡

一般県道向粟崎安江町線道路改良工事
に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

石川県立埋蔵文化財センター



遺跡周辺の航空写真（南から）





南側調査区俯瞰（北から）



木越地区の現形図（大正5年頃）

例 言

1. 本書は、石川県金沢市木越町地内に所在する、木越光琳寺遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、一般県道向粟崎安江町線道路改良工事に係る緊急発掘調査であり、石川県土木部道路建設課、及び金沢土木事務所の依頼により、石川県立埋蔵文化財センターが実施した。
3. 現地調査は平成4年6月16日～同年12月26日にかけて実施した。
4. 発掘調査は垣内光次郎（当センター主事、現課主査）、岩瀬（石井）由美（当センター主事）が担当し、端猛（当センター調査補助員、現(社)石川県埋蔵文化財保存協会）の協力を受けた。調査の参加者は下記の通りである。
桶谷義二、鯉野栄、中野静枝、西川庸一、村上浪子、山地俊子（以上木越町）、坂井澄江、坂田進午、高崎春子、高柳美代子、竹山くに子（以上高柳町）、坂井かず子、西村みどり（以上田中町）、最里健太郎（疋田町）、村上勝次（百坂町）
5. 出土遺物の整理作業は、主に平成5年度に社団法人石川県埋蔵文化財保存協会に委託して行った（担当－尾崎昌美、小谷紀美子、辻森由美子、横山そのみ）。それ以外の遺物実測、トレース、図版作成等の作業については、大藤雅夫（当センター調査補助員）、小沢佳憲、川端敦子、メイ亜紀の協力を得た。
6. 遺物の整理作業にあたっては、次の各氏の指導・助言を頂いた。記して感謝の意を表したい。（順不同）
岩田隆、南洋一郎、上田秀夫、山本信夫、大橋康二、永渕友子、小野正敏、吉岡康鶴、宮田進一、山本正敏、佐賀和美、越前慎子
7. 本書の編集は垣内の指導の下、岩瀬が行い、執筆分担は目次に記した。
8. 本書挿図で用いた方位は座標北である。
9. 本調査の出土遺物、記録資料等は当センターが一括して保管している。

目 次

第1章 序説	(岩瀬由美) 1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第2章 位置と環境	(岩瀬) 5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第3章 調査の概要	(岩瀬) 9
第1節 調査区割り	9
第2節 層序	9
第3節 遺構の概要	10
第4章 遺構	(岩瀬) 14
第1節 溝	14
第2節 敷地A	15
(1) 土坑	17
(2) 溝	19
(3) 掘立柱建物跡	20
(4) 整地土	24
第3節 敷地B	25
(1) 土坑	25
(2) 掘立柱建物跡	25
第4節 敷地C	26
(1) 土坑	26
(2) 溝	34
(3) 掘立柱建物跡	36
(4) 耕作溝	38
第5節 水田部	39
第5章 遺物	(岩瀬) 40
第1節 溝	40
第2節 敷地A	55
(1) 土坑	55
(2) 溝	59
(3) 掘立柱建物跡、柱穴群	62
(4) 整地土	66
(5) 包含層	68
第3節 敷地B	70
(1) 土坑	70

(2) 掘立柱建物跡、柱穴群	71
(3) 包含層	71
第4節 敷地C	73
(1) 土坑	73
(2) 溝	79
(3) 掘立柱建物跡、柱穴群	82
(4) 包含層	84
(5) 耕作溝	87
第5節 水田部	88
(1) 北部	88
(2) 南部	88
第6章 自然科学的調査	91
第1節 種実・動物遺体同定	(株)パリノ・サーヴェイ、金子浩昌 91
第2節 金沢市木越光琳寺遺跡出土木製品の樹種	(鈴木三男、西尾典子、能城修一) 103
第3節 出土灯明皿に残存する脂肪について	(中野益男) 117
第7章 考察	124
第1節 銭貨	(芝田悟) 124
第2節 土錘	(岩瀬) 133
第3節 出土陶磁器類の組成について	140
第4節 水郷の世界—その成立と暮らし—	(垣内光次郎) 143
付章 木越光琳寺のあゆみ	(木越祐馨) 1

第1章 序 説

第1節 調査に至る経緯

本遺跡の名称となった光琳寺は、光徳寺、光専寺と合わせて「木越三光」と総称される中世寺院の一つであり、それらの跡地については『金沢の古城跡』(金沢市文化財紀要56)にて比定されている。その跡地を石川考古学研究会会員が踏査し、立地条件等を検証した。その結果を「木越三光を歩く」と題して『石川考古』第198・199・201号(いずれも平成2年刊行)に報告し、光琳寺跡が一般県道向粟崎安江町線の計画路線上にあることを示した上で、緊急調査の必要性が唱えられた。

そうした動きと前後する平成2年6月、石川県金沢土木事務所長から石川県立埋蔵文化財センターに対し、一般県道向粟崎安江町線道路改良工事に係る埋蔵文化財分布調査の依頼があった。それを受けて当センターが平成2年7月10日、10月22、23日にかけて、金沢市東蚊爪～木越町地内の路線内を重機により試掘調査した結果、木越町地内、光琳寺の跡地とみられる地域にて、中世の遺跡を確認し、約3,250㎡の範囲で発掘調査が必要な旨、回答した。

明るる平成3年4月、金沢土木事務所長から発掘調査依頼が出されたが、平成3年度の調査要望量が飽和しており、次年度以降の計画とすることで回答、翌平成4年4月、再度発掘調査依頼が提出され、調査が実施される見通しとなった。

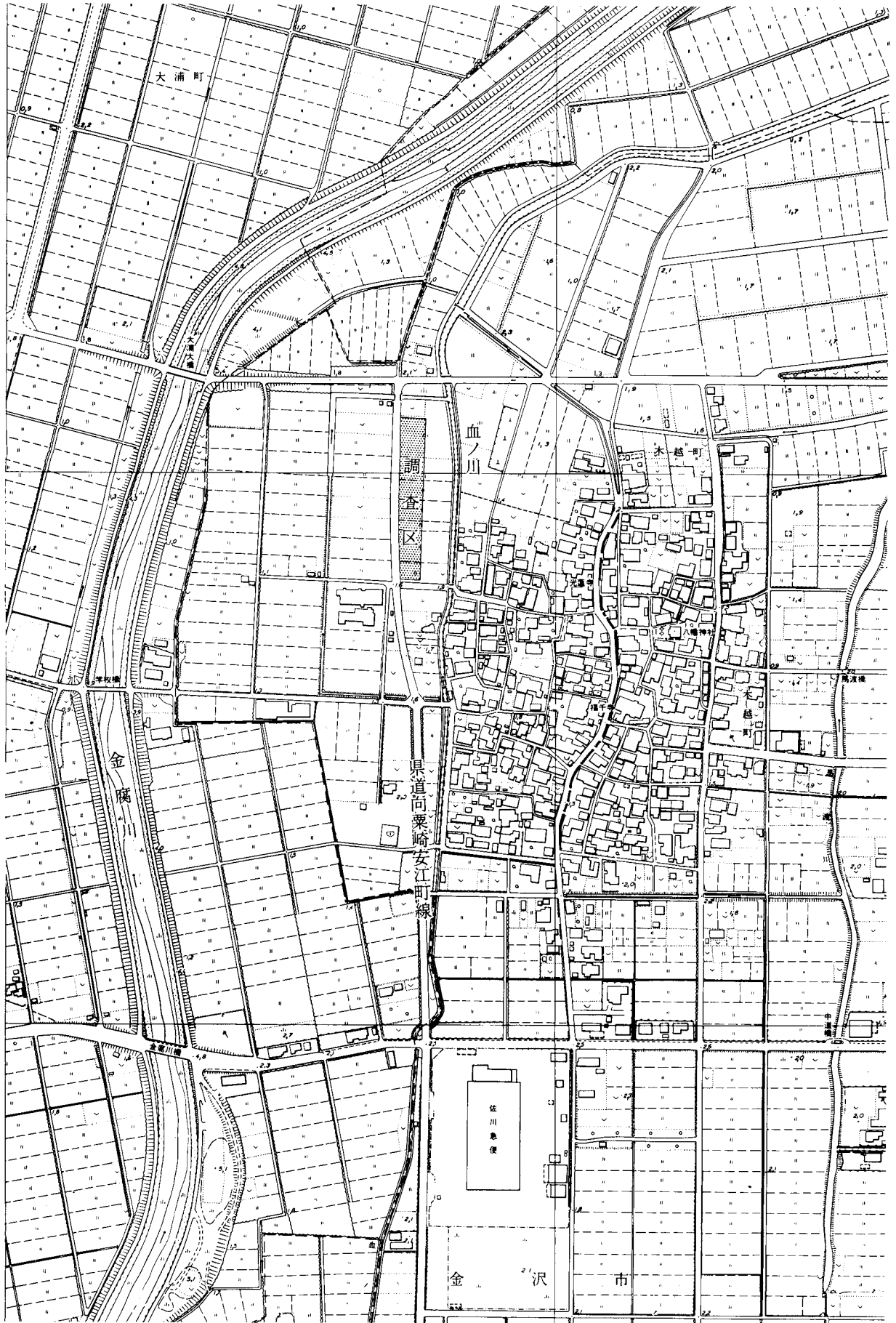
調査に先立ち、平成4年4月22、28日の2回にわたり、調査の進め方等について、金沢土木事務所と当センターの間で話し合いがもたれた。まずセンター側は、調査区が軟弱地盤であることに加え、三方を用水路等、水に囲まれており、土留めや浸水防止の理由からも綱矢板が必要であることを説明し、設置の了解を得た。綱矢板は、5mのものを4m程度打ち込むこととし、費用算定の都合上、南北に2分割して設置することで合意した。また、調査区西側を走る県道の交通量が多いため、作業の安全面を踏まえ、道路側にフェンスを設けることが取り決められた。次に、排土の捨て場所についての協議がなされ、隣接の耕作地に盛土を要望している地権者がいることから、排土は盛土されることとなった。同年6月5日には矢板工事について、土木事務所と真柄建設、当センターとの三者による話し合いがなされた。工事は、耕作地を考慮して北側から行ってほしいとの町会長の要望から、北側から着手することで決定した。また、工事の際、調査区内に、矢板を打ち込む大型クレーン車のための仮設道を設け、打ち込み終了後に調査区外にそれを移動することで合意した。ただし、盛土の厚さなどは工事に立ち会った上で指導することとし、了解を得た。



第1図 木越三光周辺地形図
(『石川考古』第198号より転載)

第2節 調査の経過

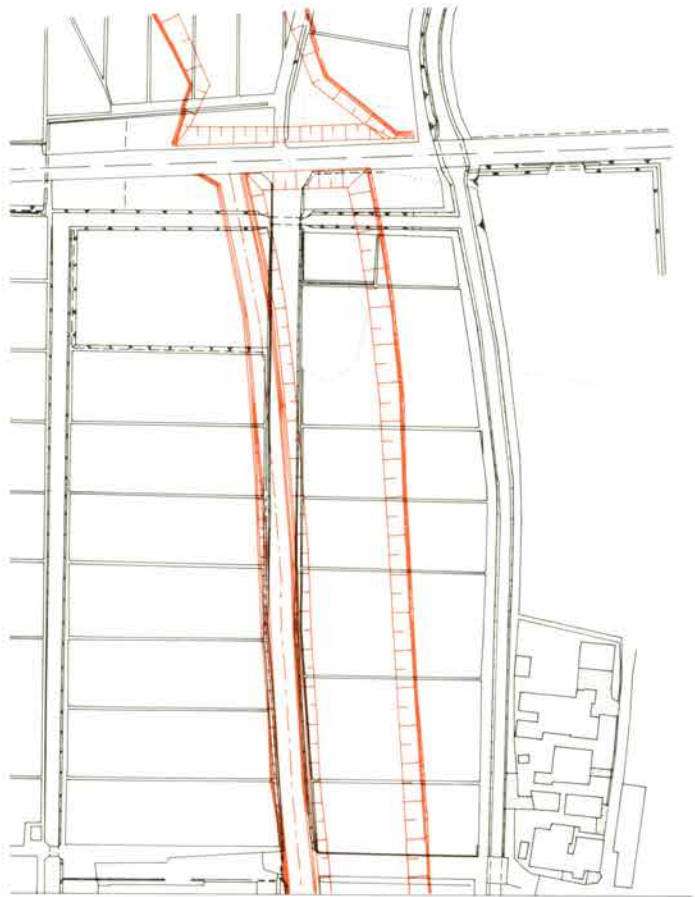
6月9日から仮設道敷設工事が開始され、立ち会いを実施。11日には矢板工事が始まり、17日に終了。仮設道振替工事の終了を待って、23日によろやく北側調査区約1,500㎡の重機による表土除去作業に入る。26日には県道側にフェンスが設置され、矢板と合わせ、調査区を外界から遮断する役目を果たす。7月1日に



第2図 調査区の位置図 (S = 1/5,000)

作業員を投入し、作業を開始した。調査が進み、遺構を調査するようになると予想した通り湧水に悩まされるようになる。やや深い遺構には例外なく水が溜まり、朝一番の仕事は毎日排水から始まった。4 m 地中に打ち込まれた矢板が湧水を緩和していたものと思われるが、それでなおこの状態であるなら、矢板無しでは相当ひどい湧水に見舞われたに違いない。ただ、夏場の矢板とフェンスで囲んだ調査区内は、風が遮断され、照り返しにより高温となり作業員に負担となったのも事実であった。水と暑さを除けば作業は順調に進み、8月28日にクレーン車による第1回目の航空測量が実施された。9月4日に北側調査区の調査を終了し、矢板移設工事完了まで作業を中断した。

9月28日から南側調査区約1,500㎡の表土除去を開始した。現地表から30cm程度で遺構面を検出。29日にフェンスを設置し、30日から作業員が参加した。3週間の間断のために、暑かった気温も下がり、作業は当初スムーズに進行した。北側に比べ、大型の溝、井戸状遺構が多く、湧水がひどかったが、それらが排水溝、溜めマスの役割を果たした。それら大型の溝は遺物量も多く、次第に作業日程を圧迫することとなった。大雨により調査区全体が冠水したことが2度程あったが、その際には矢板があるために水が調査区外に流出しないという問題も露呈した。様々な問題があったものの、12月9日に第2回目の航空測量が、同じくクレーン車により実施された。測量後も既存の遺構の調査、新たに検出した遺構の調査が続いた。12月は天候に恵まれず、切り捨てざるを得なかった作業は挙げればきりが無いが、12月21日、現地作業が終了した。



第3図 県道向栗崎安江町線路線図 (S = 1/2,000)

調査日誌抄

- | | |
|----------------|---------------------------------------|
| 6月23日(火)曇り後雨 | 本日より調査開始。重機により北側調査区の表土除去。(～26日) |
| 6月30日(火)曇り後雨 | 機材運搬。 |
| 7月1日(水)晴れ | 作業員15人にて作業開始。排水路掘削、及びベルトコンベアー設置。 |
| 7月2日(木)晴れ時々曇り | 遺構検出作業を行い、多数の遺構を確認。(～7日) |
| 7月8日(水)快晴 | 18～14区にかけて3本の畦畔を検出。 |
| 7月9日(木)曇り後晴れ | 14、15区旧耕作土調査。(～15日) |
| 7月16日(木)曇り後晴れ | 第1、3号溝調査。 |
| 7月17日(金)曇り後雨 | A12、13区矢板際にトレンチを掘削し、青灰色砂層下に中世の包含層を確認。 |
| 7月20日(月)快晴 | 調査区略図作成。AB11区内の土坑を調査し、柱根を検出。 |
| 7月21日(火)晴れ時々曇り | 第5号溝を調査。溝底から肥前系陶器碗が出土。 |
| 7月23日(木)晴れ後曇り | 第5号溝底部からさし状の銅銭が出土。 |

7月27日(月) 晴れ	第9号溝と周辺のピットを調査し、動物質及び銅製の筭をそれぞれ検出し、撮影する。
8月5日(水) 快晴	第5号溝完掘。本日は朝から暑く、不快指数の高い日であった。午前中の休憩後にベルトコンベアーの移動を行った際、脱水症状のため作業員1名が倒れ、救急車で搬送された。夕方には帰宅できたが、以後、休憩を増やすなど、作業員の健康面に気を配った。
8月11日(火) 曇り時々雨	調査区東西セクションの撮影後、土層断面図の作成。(～12日)
8月18日(火) 曇り時々晴れ	セクションベルトを除去し、その下の遺構を検出、調査。
8月19日(水) 曇り後雨	AB11区の遺構検出、調査。土が湿っていたために、これまで見えていなかった遺構が多数検出された。その多くは柱穴か。
8月21日(金) 曇り時々雨	AB12区に広がる整地土層を除去。第7、8号土坑調査。(～24日)
8月25日(火) 晴れ時々曇り	第14号土坑を調査し、珠洲焼片など多数の土器片を検出。
8月28日(金) 快晴	クレーン車による航空測量。2回目の撮影場所に移動中、タイヤがはまって動けなくなり、別のクレーン車に応援を頼むハプニング有り。そのせいで撮影が遅れ、フェンスの影が調査区に大きく張り出してしまった。
9月2日(水) 晴れ	掘立柱建物柱列断面図の作成。
9月3日(木) 曇り時々雨	北側調査区的全調査終了。以後、矢板移設工事のため28日まで中断。
9月28日(月) 晴れ	南側調査区の調査開始。重機により表土除去。(～29日)
9月30日(水) 晴れ	杭打ち。
10月1日(木) 晴れ	作業員参加。ベルトコンベアー設置、排水作業を行う。
10月2日(金) 快晴	遺構検出作業。遺構が見られるのはA～C8区あたりまでである。(～6日)
10月7日(水) 晴れ	第8号溝上層を調査。(～14日)
10月15日(木) 雨後曇り	C10区の溝状の遺構を調査し、第8号溝がY字状に枝分かれることが判明。
10月16日(金) 晴れ	第8号溝下層を調査。砂層を取り払うと水が噴出し、作業はドブさらいの様相を呈す。12世紀前後の遺物と17世紀代のものが同一層から出土する。
10月20日(火) 曇り後雨	第8号溝南壁の遺物出土状況を撮影する。
10月22日(木) 晴れ	第8号溝にて露卯下駄、及び足跡の残った子供用の下駄が出土。
10月28日(水) 快晴	第9号溝を検出し、調査。上層は灰色砂によって埋められ、それらは近世の遺構に切られている。
11月2日(月) 曇り後晴れ	第10、11号溝検出。第19、20号土坑を調査し、底部に根石を検出。大型の柱穴であると判明。
11月6日(金) 曇り後雨	第23号土坑を調査。近世の陶磁器類多数に混ざって水晶原石が出土。
11月11日(水) 曇り後晴れ	朝まで降り続いた雨のため、調査区内は冠水状態となり、排水に多大な時間を費やす。
11月12日(木) 晴れ	BC7区の床土を調査するが、遺構ははざ穴とみられる小ピットのみである。
11月16日(月) 曇り時々雨	第8号溝南壁を調査した結果、東西に並ぶ杭列を検出。埋め立て時の土留めか。
11月18日(水) 快晴	第8号溝の土層を観察したところ、底部が更に深くなることが判明。
11月25日(水) 曇り時々雨	第27、29号土坑、BC6、7区床土調査。本日より北側調査区の埋め戻しが始まり、ダンプの出入りが激しく騒々しくなる。
11月27日(金) 曇り時々雪	前日の初雪が積もり、調査区は一面の雪景色となる。積雪は8cm。これは11月の積雪量では観測史上3番目の記録という。日程に余裕がなく、小雪の舞う寒空の下、除雪をしながら作業を進めた。
12月1日(火) 曇り後雨	本日より脂肪酸分析のため、土器のサンプリングを開始する。
12月4日(金) 雨後曇り	A9区内井戸状土坑調査、土層断面図作成。
12月8日(火) 曇り時々雨	航空測量を明日に控え、前日からの降雨により、調査区冠水。溢れた側溝から水が流れ込み、排水が追いつかない。
12月9日(水) 曇り後晴れ	クレーン車による航空測量。側溝から溢れた水により、前日の排水前と同程度の冠水状況。必死の作業により、予定時刻に撮影が開始された。
12月15日(火) 曇り時々雪	第8、10、12号溝の最下層を調査。
12月16日(水) 曇り時々雨	第42、43号土坑土層断面図作成。第8号溝出土杭列のサンプリング。
12月18日(金) 雨	遺物の採り上げ。
12月19日(土) 晴れ	久しぶりの晴れ間が訪れたため、休日返上で図面をとる。雨中では遅々として進まなかった作業が実にはかどった。
12月21日(月) 晴れ	柱根採り上げ。機材撤去。本日にて全作業が終了。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

木越光琳寺遺跡は石川県金沢市木越町地内に位置する。金沢市は石川県のほぼ中心部に位置し、北は内灘町、津幡町、東は富山県、南は松任市、野々市町、鶴来町、河内村、吉野谷村に接し、西は日本海に面している。市域の南東部には、霊峰白山を頂とする白山山系に属する山地が連なる。それらに源を有する手取川水系の安原川・十人川、犀川・伏見川、浅野川、金腐川、森下川などが貫流する北西部には金沢平野が広がっており、平野北部には、河北潟が水を湛えている。

河北潟は金沢市北部から河北郡南西部にまたがり、東西約4km、南北約8kmを測る。かつては蓮湖、あるいは大清湖と呼ばれた県下最大の潟湖であった。潟には宇ノ気川、能瀬川、津幡川、森下川、金腐川、浅野川が流入し、日本海へ通じる交通の要所として古くから舟運に利用されていた。また、潟内にはフナを始め、ボラ、ゴリなどが生息し、漁労活動も盛んであった。しかし、江戸時代以降、埋め立て及び干拓が始まり、昭和39～45年にわたって行われた農林省の干拓建設事業などにより、今や3分の2が陸地化し、耕作等に利用されている。

本遺跡の位置する木越町は、北部に河北潟を臨む、金腐川の下流部右岸のデルタ地帯に立地する。一帯は沖積低地であり、標高は現地表で50cm前後である。地層には所々に自然堆積の貝殻層が見られ、陸地化する以前の様子を今に伝えている。全般に水捌けは余り良くなく、古来より、排水、交通、防御等の機能を兼ね備えた水路が無数に走り、「水郷」の名で称されてきたが、道路整備、宅地造成等が進み、現在その面影はすでにない。調査時の平成4年当時は、集落わきを走る血ノ川に、八田舟と呼ばれる川舟が一隻浮かんでいたが、それも今はなく、ただ一つ名残を留む、馬渡川にひっそりと架かる木橋も朽ち果てようとしている。

第2節 歴史的環境

金沢平野の北西部が県内有数の遺跡密度を誇るのに対し、北部に位置する本遺跡周辺の遺跡密度は金沢市内でもかなり低い方である。浅野川、金腐川下流域は、暴れ川であったということを除けば、人々の定住を阻む地形的要因が存在したとは考え難い。本地域では詳細な分布調査が行われておらず、今後の踏査によって更なる遺跡が発見される可能性は高い。

周辺に人類の定住が確認されたのは、本遺跡西南西約2.7kmに位置する近岡遺跡が初めである。縄文時代晩期の低湿地に営まれた集落とされる同遺跡は、イネの花粉が検出されたことでも知られる。また、第4図からは外れるが、北西約3kmに位置する大根布砂丘遺跡でも縄文時代の遺物が採集されている。

弥生時代に入ると、千田遺跡、松寺遺跡、田中A遺跡などが集落を展開する。これらの遺跡は、いずれも弥生時代中期にその初現が見られ、古墳時代前期まで連続と続く。千田・松寺両遺跡では、ともに弥生時代中期の方形周溝墓が検出され、終末期～古墳時代にかけては、住居跡などが検出されている。

古墳時代前期には、前述の三遺跡を始め、田中B遺跡でも集落が確認される。中期以降になると遺物は確認されるものの、様相は明らかになっていない。

古代においては、弘仁14年(823)の加賀国立国以後、金沢平野北西部に立地する遺跡の発展がみられ、大型掘立柱建物を有する遺跡が増加する。近年、それらの調査成果が蓄積され、加賀国衙の所在地論争も高まっている。本遺跡周辺では千木イワスクリ遺跡、千木ヤシキダ遺跡などが知られ、後者は大型掘立柱建物

群と祭祀遺構が多数検出されたことに特徴付けられる。千木ヤシキダ遺跡はその規模、出土遺物等から、国衙機構関連遺跡とされながらも、検証材料の不足から、地方支配機構に属する在地官人層の居宅との理解が示されている⁽¹⁾。また、越中へ抜ける森本谷、能登・越中への分岐点となる津幡町に近く、河北潟を北方に控えることと合わせ、陸上及び水上交通の要衝であることが選地の理由と指摘されている。水上交通の拠点となった大野川河口部に、港湾集落とされる戸水C遺跡、近岡遺跡なども立地しており、それらとの関連が注目される。

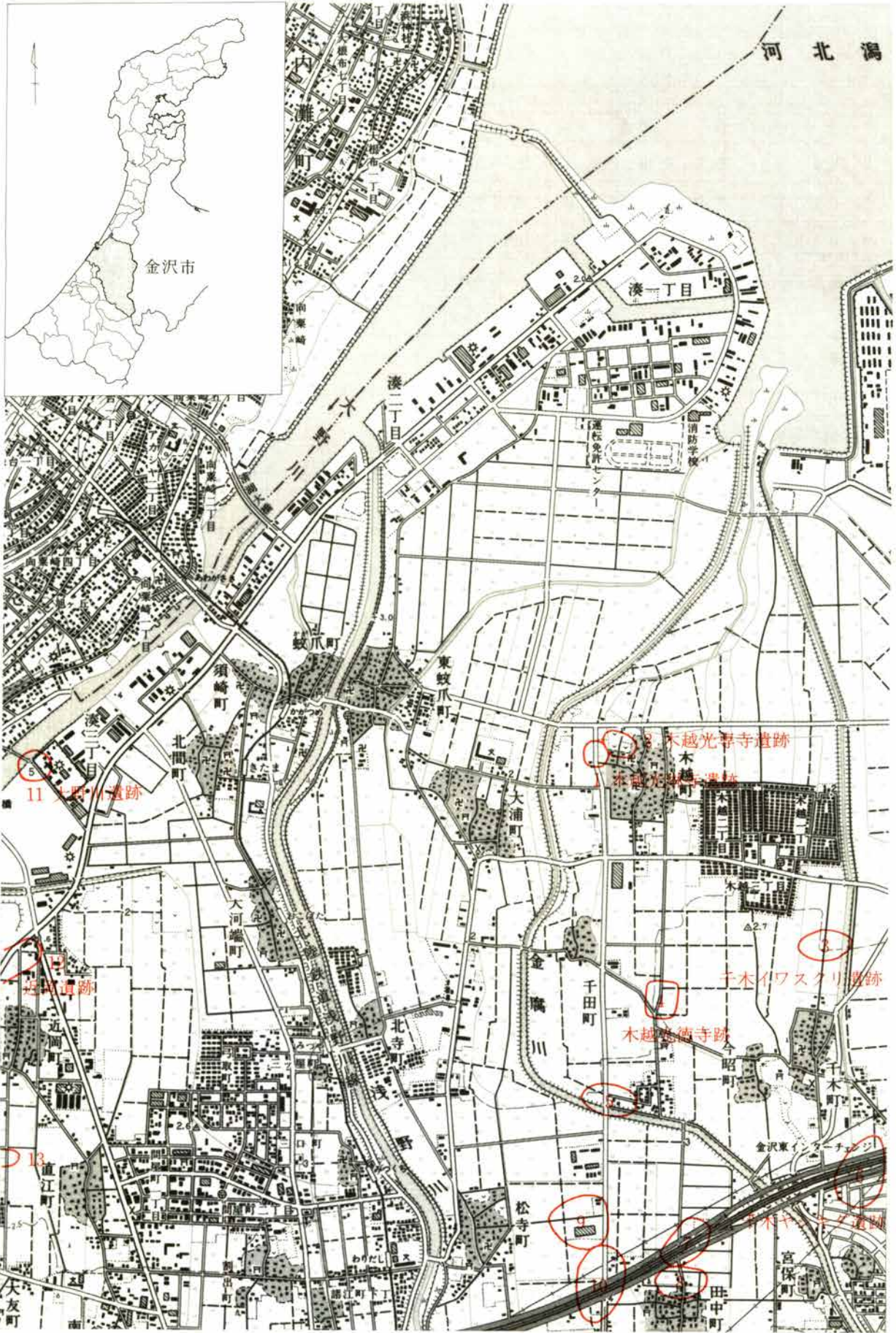
中世には当地は倉月庄に含まれる。室町時代には中山家領となり、戦国時代末期には寺内町を形成した。

本遺跡にて11世紀後半～12世紀代の遺物が定量出土しており、その頃当地域の新田開発が開始されたと推定される。該期の本遺跡の性格については明らかではないが、千木ヤシキダ遺跡同様、河北潟から金腐川を経て内陸部に向かう、水上交通の拠点となり得る位置であることが重要視されよう。本遺跡周辺域では、大野庄湊と呼称された、大野川河口部に前述の戸水C、近岡遺跡、無量寺遺跡、犀川河口部に普正寺遺跡など、港湾集落とされる遺跡が確認されており、それらを経て物資が内陸部に河川づたいに輸送されたことが窺われる。本遺跡からも14世紀後半～15世紀代の遺構から、銭貨が多数出土しており、貨幣経済による物資の流通が想像される。

大野川河口よりの、金沢市粟崎町地内に位置する大野川遺跡（仮称）では、木箱に納置されていたと伝えられる柿経が出土している。『法華経』を書写したものとされ、その形態等から14世紀後半～15世紀前半の所産と推定されている。また、康永二年（1343）頃から起こった、摂津氏領倉月庄、臨川寺領大野庄との境相論の結果、柿経出土地付近が境界と下されていることから、「『法華経』の効験により、境の静謐を祈る」ことに柿経埋納の意義が求められている⁽²⁾。

15世紀も後半頃になると、北陸における真宗本願寺派の布教活動が活発化する。その動きは文明三年（1471）の、蓮如の吉崎下向以降加速され、当地においても木越光徳寺がその中心的役割を担うようになる。長享二年（1488）、本願寺派の坊主・門徒らが時の守護富樫政親を高尾城で自害させた、世に言う「長享の一揆」は、加賀に向一揆の国を樹立するきっかけを作ったとされるが、その主要構成員のなかには木越光徳寺を始めとし、河北郡の坊主・門徒衆が多く含まれていた。

本遺跡の名称となった木越光琳寺は、文亀元年（1501）の開創と伝えられ、同じく木越に所在した、木越光専寺は文亀二年（1502）に羽咋郡小川村（現押水町）に創建され、天正六年（1578）に木越に移ったとされる。光徳寺を含め、後に木越三光と呼ばれたこれらの三寺は、元亀三年（1572）に加賀の一向一揆勢力と、越後の上杉謙信との合戦が開始されると、村の周囲に堀を整備して河北潟の水を引き込み、要塞と化した。天正八年（1580）には北加賀攻略を狙う織田信長軍との主戦場となり、木越三光を始め、河北郡の坊主・門徒が立て籠もり、激しい攻防を繰り広げたが、佐久間盛政、長連竜に攻め入られ、激戦の末、同年三月、ついに陥落した。ここに光琳寺は戦死したが、その幼子が能登の劔地（現門前町）に逃れ、光琳寺を再興し、現在に至る。そして400年あまり経た今なお、金沢市木越町には光琳寺の門徒が残っており、光琳寺と木越の結び付きの強さを感じさせる。また、現木越町の集落西を流れる血ノ川の名称は、討ち死にした兵士の血で赤く染まったことに由来するとされ、往時の凄惨な光景を今に伝えている。



第4図 周辺の遺跡 (S = 1/25,000)

第1表 遺跡地名表

No.	県遺跡No.	遺跡名	所在地	種別	時代	出土品
1	01309	木越光琳寺遺跡	金沢市木越町	散布地	室町	
2	01310	木越光専寺遺跡	金沢市木越町	散布地	室町	
3	01311	千木イワスクリ遺跡	金沢市千木町	散布地	古墳～平安	土師器、須恵器、齋串
4	01308	木越光徳寺跡	金沢市木越町	寺院跡	室町	
5		千田遺跡	金沢市千田町	方形周溝墓跡 集落跡	弥生～古墳	
6	01307	千木ヤシキタ遺跡	金沢市千木町	集落跡	古墳～平安	土師器、須恵器、施釉陶器、皇朝銭
7	01306	田中B遺跡	金沢市田中町	集落跡	古墳	土師器、勾玉、管玉、櫛
8	01305	田中C遺跡	金沢市田中町	散布地	古墳	土師器
9	01304	松寺遺跡	金沢市松寺町	方形周溝墓跡 集落跡	弥生・古墳	弥生土器、須恵器
10	01303	田中A遺跡	金沢市田中町	集落跡	弥生・古墳	弥生土器、土師器、鏡
11		大野川遺跡（仮称）	金沢市栗崎町		中世	柿経
12	01298	近岡遺跡	金沢市近岡町	集落跡	縄文～古墳 平安・中世	縄文土器、弥生土器、人形、木簡等
13	01296	近岡カントンボ遺跡	金沢市近岡町	散布地	弥生～奈良	弥生土器、土師器、須恵器

註

(1) 出越茂和 1991 『金沢市千木ヤシキタ遺跡・II』金沢市教育委員会

(2) 戸潤幹夫 1992 「加賀出土の柿経」 『石川県立博物館紀要』5

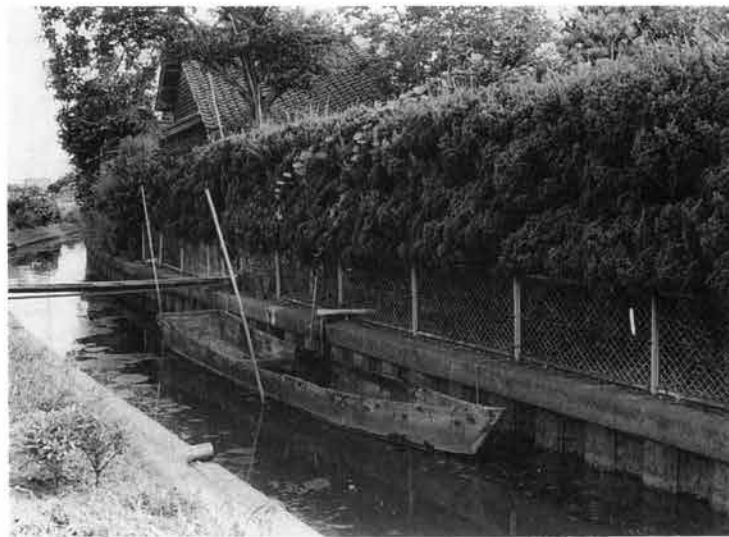
参考文献

金沢市教育委員会 1992 『田中A遺跡』

〃 1994 『田中B遺跡』

石川県立埋蔵文化財センター 1986 『近岡遺跡』

〃 1984 『普正寺遺跡』



血ノ川に浮かぶ八田舟（平成4年撮影）

第3章 調査の概要

第1節 調査区割り (第5図)

第1章第2節で記した通り、調査は南北に2分割して行われた。その際に矢板で囲んだ北側約1,500㎡を北側調査区、南側約1,500㎡を南側調査区とする。また、南北約150m、東西約20mと南北に細長い調査区に任意の10m四方のグリッドを設定した。南北方向を3～17のアラビア数字、東西方向をB、Cのアルファベットで示す杭を設置し、北東隅の杭名をグリッド名とする。A列、18列の杭は存在しないが、調査区東側及び北側に仮想し、A～Cの3～18区まで存在する。

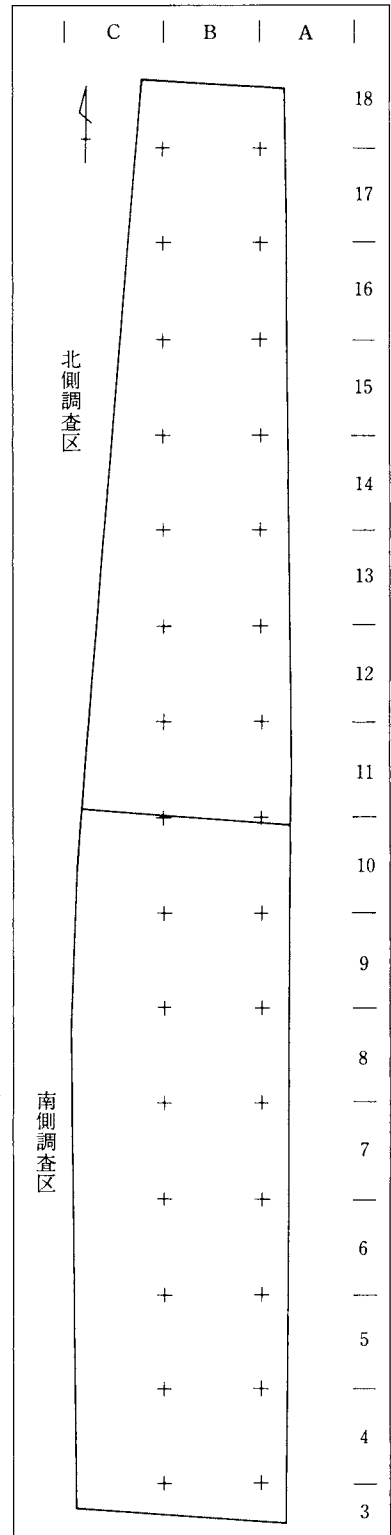
第2節 層序 (第6図)

基本土層は北側調査区南端、矢板近くの東西セクションにて観察した。第1層は現耕作土であり、調査区全域に共通する。第9層は出土遺物の年代から18世紀前半以降の整地土と推定される。この整地により埋没した近世の土坑も数基確認された。検出された多くの遺構は第9層より下層の面から掘削される。土層観察ではそれらは数面から掘削されているが、平面的に層位を追って検出するのは困難であったため、遺構検出は単一面で行った。

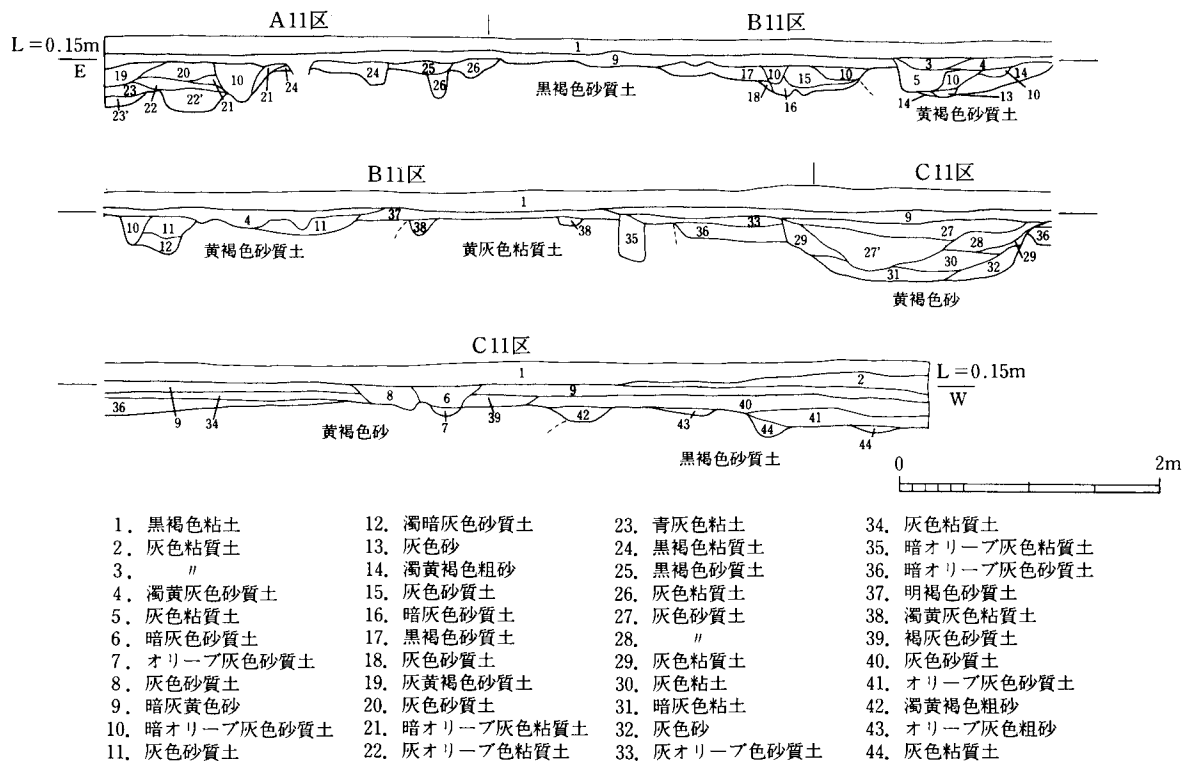
遺構検出を困難にしたものの一つに、地山となる堆積土層の多様性が挙げられる。基本土層を観察した約22mの間でさえ、実に四度も地山の土質が変化する。大きくは黒色系、黄色系、灰色系に総括されるが、それらが地点毎に入り乱れた堆積状況であった。また、もう一つには、その土層の一部に自然堆積の貝殻層が含まれることが挙げられよう。貝殻は黒色系の土に混入しているが、密集することもあれば、少量に留まる所も存在する。更にその貝殻層を掘削して埋められた遺構覆土の貝殻層が加わり、地山、覆土の識別を行いながらの検出作業は困難を極めた。なお、この貝殻はヤマトシジミであることが判明している。

地山がそのような状況であるため、遺構覆土も一定ではなく、時代毎に共通するものではない。ただし、幾度か整地が行われたと見え、共通する整地土層を覆土上層に持つ遺構グループも見られた。

調査区中央付近は以上に述べた通りであるが、南北端はこれと大きく異なる。まず北端部では、第1層下に客土が見られ、一部ではそれが1mを越えて堆積する。標高が低いことから、耕作地のかさ上げを目的としたものと思われる。土中には、鉄屑等と共に古代から近代に至る遺物が多数見られ、その年代から昭和期の客土とみられる。その下層には灰色系の旧耕作土が厚く堆積する。一方、南端部では、第1層下に10cm前後の旧耕作土が広がり、それを除去すると、耕作土とも地山とも判断し難い灰白色系の土が堆積して



第5図 調査区区割り図
(S = 1/800)



第6図 調査区東西基本土層図 (S = 1/60)

いた。それを床土として認識した。

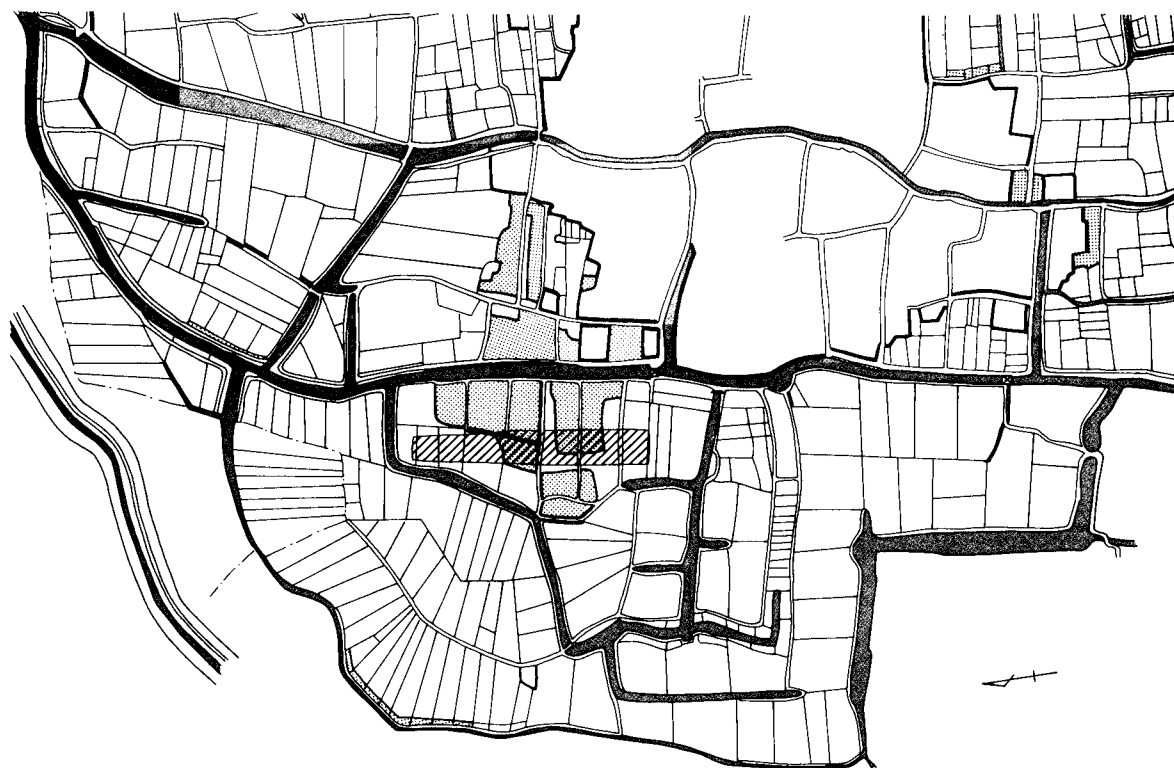
第3節 遺構の概要

本遺跡からは、土坑49基、溝13条、掘立柱建物跡17棟、ピット約300基を検出した。それらの遺構は、北側調査区の南半と南側調査区の北半、つまり調査区全体の南北軸中央付近に集中する。中央付近の遺構密度が極めて高いのに比し、南北端は遺構が殆ど確認されなかった。そのことは、南北端が水田等の耕作地として利用されていたために、土坑等が設置されなかったことを想像させる。遺構こそないものの、遺物は多く出土した。遺構が集中する中央付近については、多くの掘立柱建物跡、土坑、溝等が検出され、居住域と推定される。その中でも一際目を引くのは南北に走る第5号溝と、中心部を東西に貫く第8号溝である。それらによって居住域は三地区に画される。それぞれの地区には、溝に制約される形で掘立柱建物が建ち並び、それらを取り巻くように土坑が配置される。また、北西地区を除いて、地区内に溝を有すること、北縁部に井戸を配すること、居住域を北方向へ拡張することなど共通点が多い。これらのことは、溝に画された地区が、一つの敷地としてまとまりを持っていたことを窺わせる。詳細の不明な北西地区に関しても同様の性格を有すると想定される。したがって、それらを個々の敷地と見なし、北東地区を敷地A、北西地区を敷地B、南地区を敷地Cと以下呼称することとする。

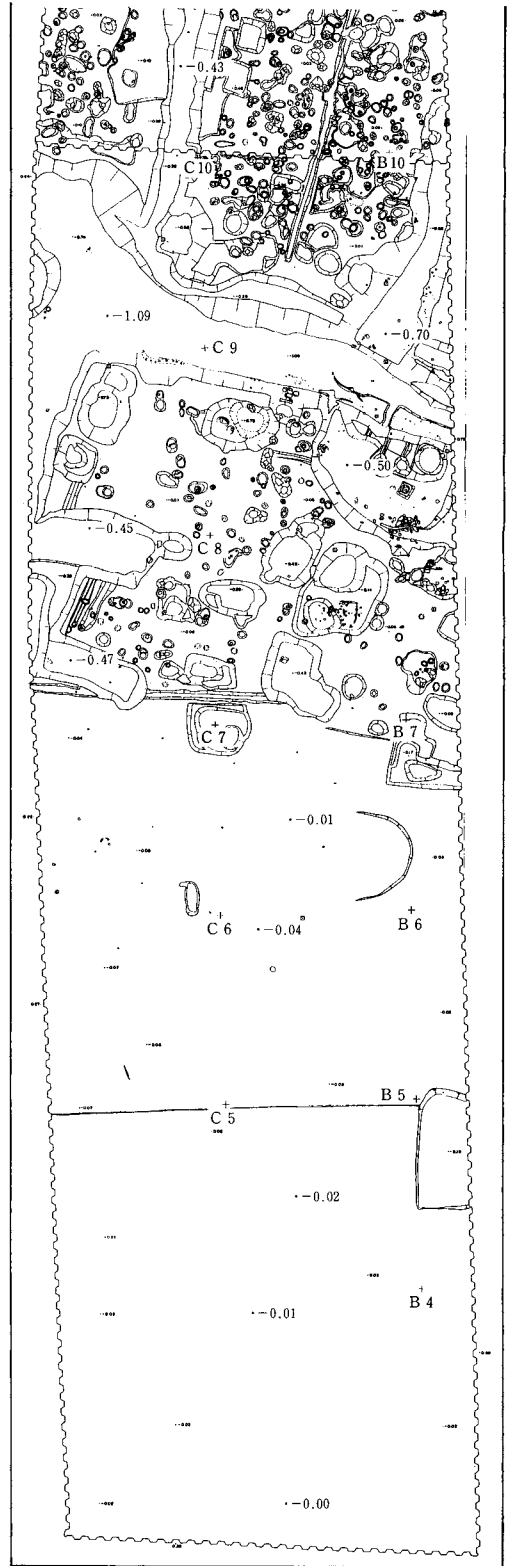
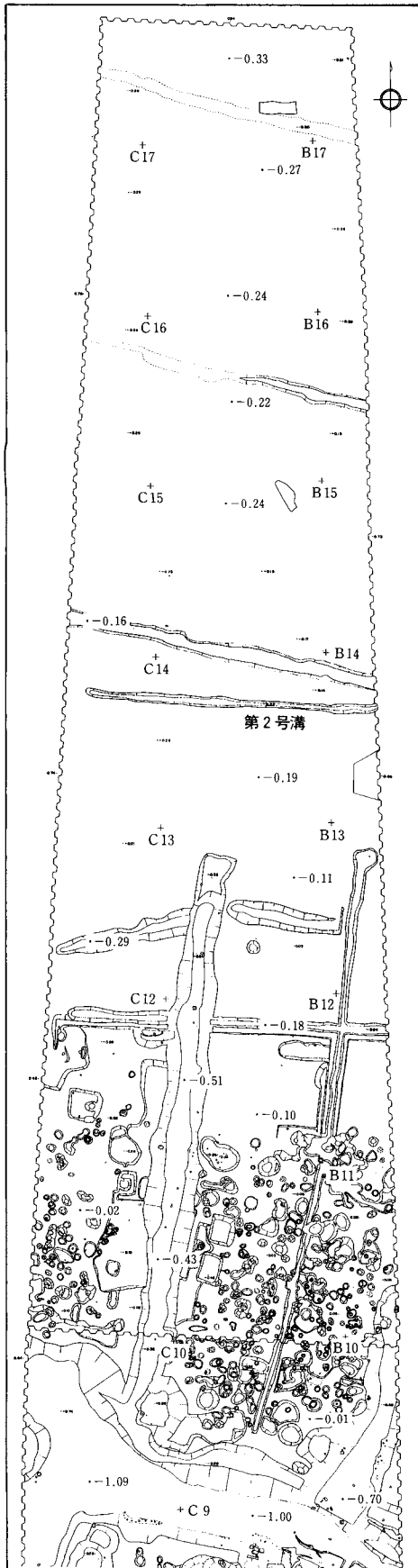
これら敷地は水田部に比べるとやや標高が高いが、それでも遺構検出面での標高値は0m前後と低い。そのため、井戸に限らずやや深い遺構には湧水が見られた。調査区を走る多くの溝の中には、水運にも利用可能な規模を有するものも存在するが、その多くが敷地の排水という重要な役目を担っていたと推定される。そうしなければ、この標高が低く、湧水の激しい沖積低地に人は住めなかったに違いない。溝を掘削して排水を図り、その排土を周囲に盛土しつつ、徐々に集落を拡大していったものと推定される。

第7図は大正5年頃の現形図に調査区を当てはめたものである。網かけしたものが溝、ドットのスクリー

ントーンで示した場所が畑地、白い部分は水田、斜線で示した長方形が調査区である。図面を合成する際に指標としたのは血ノ川及びその水門、そして溝である。現形図中にて調査区付近と思われる地点の畑地に1条の細い溝が記されている。調査区と血ノ川等の位置関係から調査区内で検出した最も新しい第1号溝がそれに相当すると推定し、重ね合わせた。それによると、南北端が水田部であることに変化はないが、やや標高の高い中央部の居住域は畑地に転じている。そして、その畑地に周囲を囲まれつつ直角に曲がり、不自然に位置する水田が第8号溝の痕跡と思われる。本地図と、調査成果により中世から近代にかけての土地利用の変化が追える。

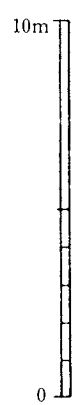
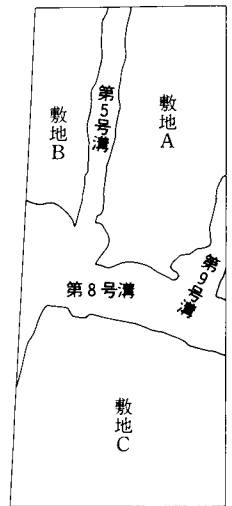
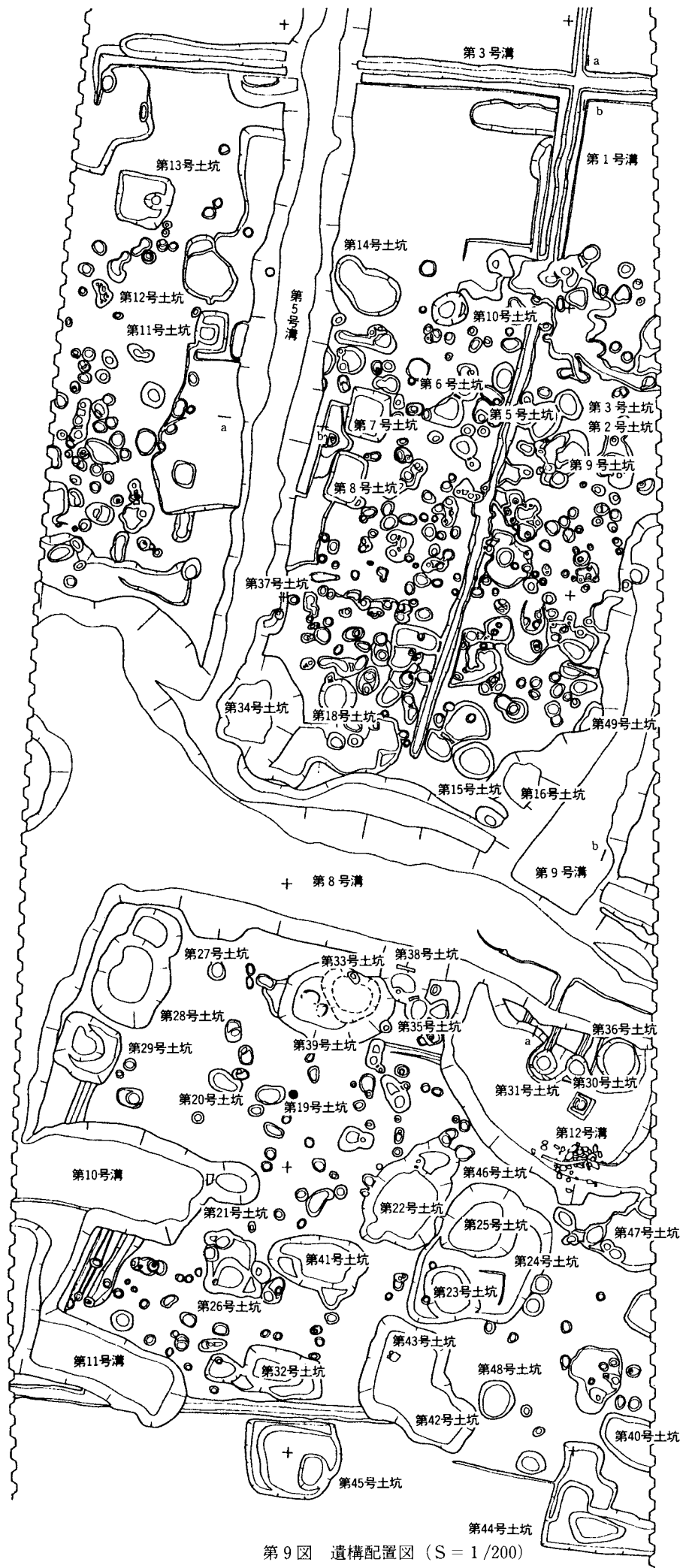


第7図 現形図と調査区 (S = 1/9,600 大正5年頃)



0 10m

第8図 遺構全体図 (S = 1/400)



第9図 遺構配置図 (S = 1/200)

第4章 遺構

第1節 溝

本遺跡で検出された溝は13条を数える。それらは幅40cm前後のものから5m前後のものなど様々であるが、比較的大きく深いものが多い。そのうち、敷地内に伸びる溝については、各敷地の項で説明することとし、ここではそれ以外について記す。

第2、3号溝（第10図）

調査区を東西に併走する細い溝である。覆土が同一であり、同時期に同一目的で掘削されたものと考えられる。耕作に伴うものか。第3号溝は、第4、5号溝を切り、第1号溝に切られることから、19世紀中葉前後の掘削と推定される。

第4号溝（第10図）

第5号溝の上面を走る溝であったため、平面図には記されていない。第5号溝が埋められた後、規模を縮小して掘り直されたものと推定される。出土遺物から、18世紀後葉～19世紀前半の利用とみられる。

第5号溝（第10図）

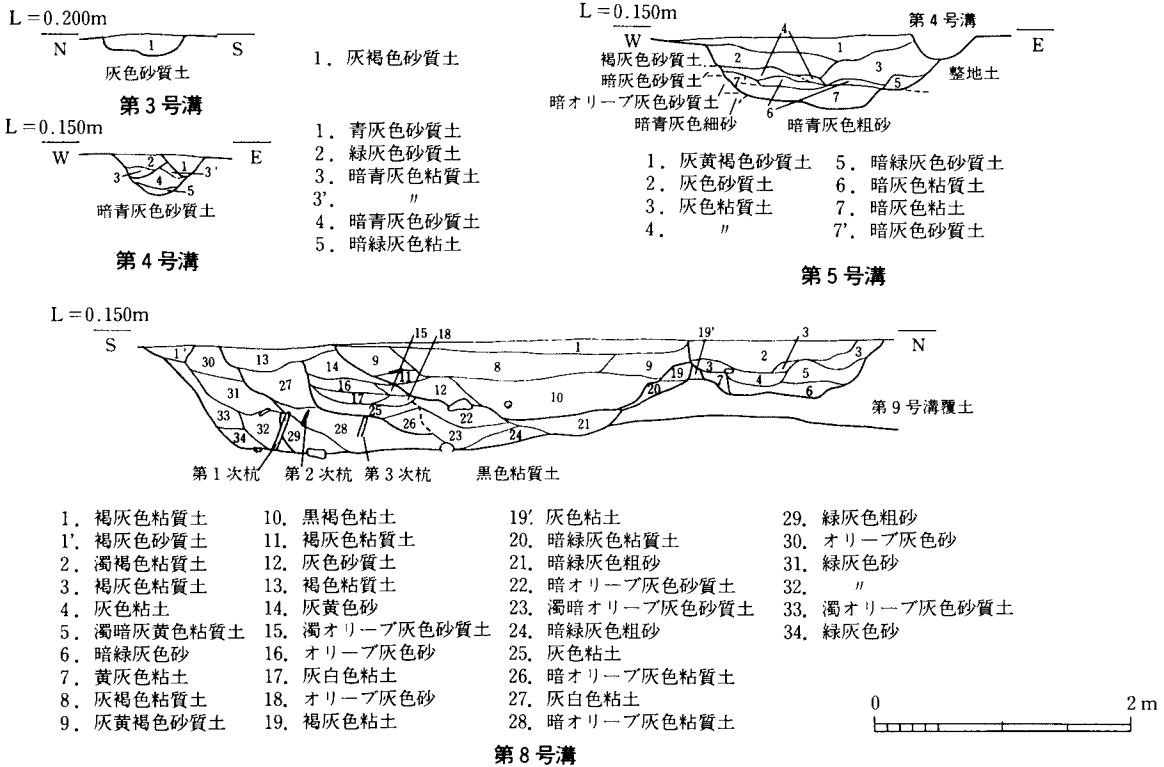
南北に走り、南方で第8号溝に合流する。幅2～2.8m、深さ30～50cmを測る。底面は北方へ進むほど低くなり、第8号溝から水を引いていたことが窺われる。第1層は攪乱であり、溝覆土は第2層以下である。第2、3層は堆積土掻き上げの痕跡と見られる。

当溝は敷地A Bの境界としたが、その掘削は近世初頭と思われ、18世紀中葉まで使用される。敷地を構成する建物群は殆ど中世に帰属するものであり、建物使用時に溝が存在していたわけではない。しかしながら、第5号溝周辺の遺構密度が比較的低いこと、建物配置等を鑑みると、明らかにこの場が境界と意識されていたと判断される。

第8号溝（第10図）

三敷地の中央部を5～6m幅で東西に走り、西方で二股に分かれる。深さは1m前後を測るが、西方へ伸びる溝が浅いのに対し、南方へ流れる溝がやや深く掘削されており、こちらが本流ではないかと考えられる。溝北側中央付近には1m前後の沿道的な平坦面が見られた。その敷地との比高差は20cm程度となっている。第5号溝を始め、敷地に入り込む第9～12号の溝は全て本溝の枝溝である。

土層断面は第9号溝との合流部付近で観察した。第2～7層は支流か。第8～12層は出土遺物から17世紀後半以降の堆積土とみられ、溝の最終規模を示す。第14～18、25～34層は埋め立て土とみられる。南部壁面には土留めを目的とした3列の杭列が検出されており、3次にわたって埋め立てが行われたと理解される。第1次埋め立て土は第30～34層、第2次は27～29層、第3次は14～18、25、26層である。これらの中には自然堆積土も含まれると思われるが、基本的には溝中の堆積土により埋め立てを行ったとみられ、明確には判別し難い。何れも敷地C側から作業が行われており、北方への敷地拡大を狙ったものと推定される。各年代は土層観察を行ったアゼ出土の遺物から、第1次が16世紀前半、第2次が16世紀後半、第3次が17世紀前半に比定される。ただし、平面的な調査においては、各層を段階的に区別できたわけではなく、遺物は「南壁埋め立て土出土」と一括して採り上げているため、第1、2次埋め立ての年代に関してはやや下の可能性も残されている。



第10図 溝土層断面図 (S = 1/60)

杭については20点を抽出して持ち帰り、樹種同定した結果、クリを始めとしてコナラ節、クヌギ節等8種が同定された。それぞれの列での樹種の統一性は見られない。これは、手近に存在した材を使用した結果と思われる、その樹種からは周辺環境の一端が窺われよう。

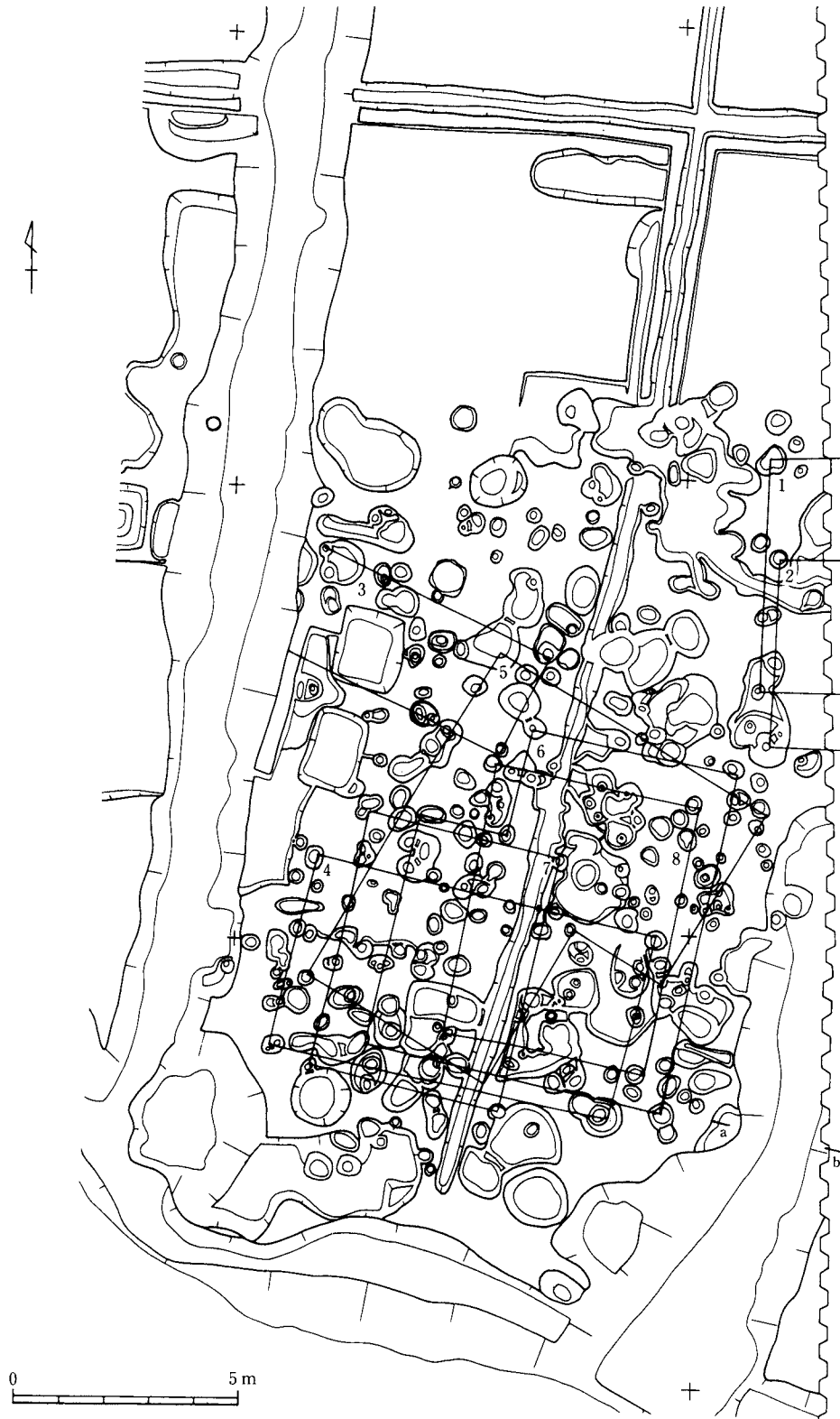
本溝からは多量の遺物が出土した。地山直上の出土遺物から、開削は11世紀後半と推定される。その後規模を変じつつ利用され、最終的には18世紀前半に廃絶する。掘り直しが幾度か行われていることから、水の流れはかなり緩やかであったと思われる。その開削の目的は、標高が低く、湧水の激しい土地であることから、周辺の土地利用のための排水が挙げられようが、その規模から、舟運にも利用されたであろうことが十分想像される。

第2節 敷地A

本敷地は北は水田部、南は第8号溝、西は第5号溝に面する。南北は約25m、東西は12mを測るが、掘立柱建物の一部が東端に検出されており、更に東方へ広がると推定される。北端は第3号溝付近とみられるが、遺構が存在するのはB11杭周辺までである。東に第9号溝が存在するが、調査時の所見では、この溝が隣接の敷地との境界を為すのか、敷地に入り込むものかは不明である。

敷地内には柱穴と見られる無数のピットが並び、それらを取り囲む形で縁辺部に土坑が存在する。大きくは15世紀代、17世紀代の遺構に区別されるが、前者に帰属するものが圧倒的に多い。掘立柱建物跡は8棟復元した。柱穴数からすると、実際には倍近く存在したと思われるが、重複しており、規模の大きいものを優先して復元した。その規模から、同時期に建ち並んでいたのは2、3棟程度と推定される。それら掘立柱建物の多くは主軸を溝に合わせる形で建てられている。

本敷地の北部、AB11、12区付近では広く整地土が確認された。焼壁、土器類が多数出土し、火事場の整理跡と推定される。本来ならば、整地前、整地後の遺構が明確に確認できたはずであるが、調査中にそれらを認識することは困難であった。また、南東部第9号溝付近にても別の整地土が認められたが、これは砂層



第11図 敷地 A 全体図 (数字は掘立柱建物番号, S= 1/150)

であり、出土遺物等から、時期的には火事による整地より下ると判断される。

(1) 土坑

第2、3、5号土坑（第12図）

これら三土坑は重複している。第2、3号土坑は、略円形を呈し、それぞれ径120cm前後、深さ約30cm、径90cm前後、深さ約45cmを測る。第5号土坑は、卵形を呈し、短径80cm、長径120cm、深さ約50cmを測る。切り合い関係から、第3号→2号→5号の順で掘削されたことが分かる。その第5号土坑も第1号溝に切られている。

第6号土坑（第12図）

検出面では隅丸方形を呈するが、底部付近は円形である。一辺約75cm、深さ60cmを測る。井戸とするにはかなり浅いが、湧水層に達しておりその可能性も考えておきたい。

第7、8号土坑（第12図）

いずれも長方形を呈し、第7号土坑は140×170cm、深さ約65cm、第8号土坑は120×180cm、深さ約60cmと近似している。底部は平坦であり、他の土坑に比べてきちんと掘られた印象を受ける。それは壁面が崩れていないからでもあり、比較的短期間で埋められたか、壁面に板を配していたことが想定される。覆土がほぼ共通しており、使用時期、廃絶時期ともにほぼ同時期と思われる。湧水層に達しているが井戸ではなく、溜め升等水に関係した施設と考えたい。

第9号土坑（第12図）

数個のピットと重複しており、全形は不明である。深さは約55cmを測る。近世初頭の遺構である。

第10号土坑（第12図）

敷地の北部に位置する。略円形を呈し、径120cm弱、深さ115cmを測る。底部はほぼ平坦である。覆土は第7、8号土坑と近似していた。井戸側、上屋等の痕跡は見られなかったが、湧水層に達しており、井戸と考えられる。壁面地山には砂層の部分もあり、崩れ易いことを思うと、素掘りとは考えがたく、使用時には曲げ物等が埋め込まれていたものと思われる。東側に浅い段が一段設けられている。

第14号土坑（第12図）

敷地の北西に位置する。ダルマ形の浅い土坑であり、短径110cm、長径250cm、深さ20cm前後を測る。覆土上面から、多数の土器片が出土した。

第15号土坑（第12図）

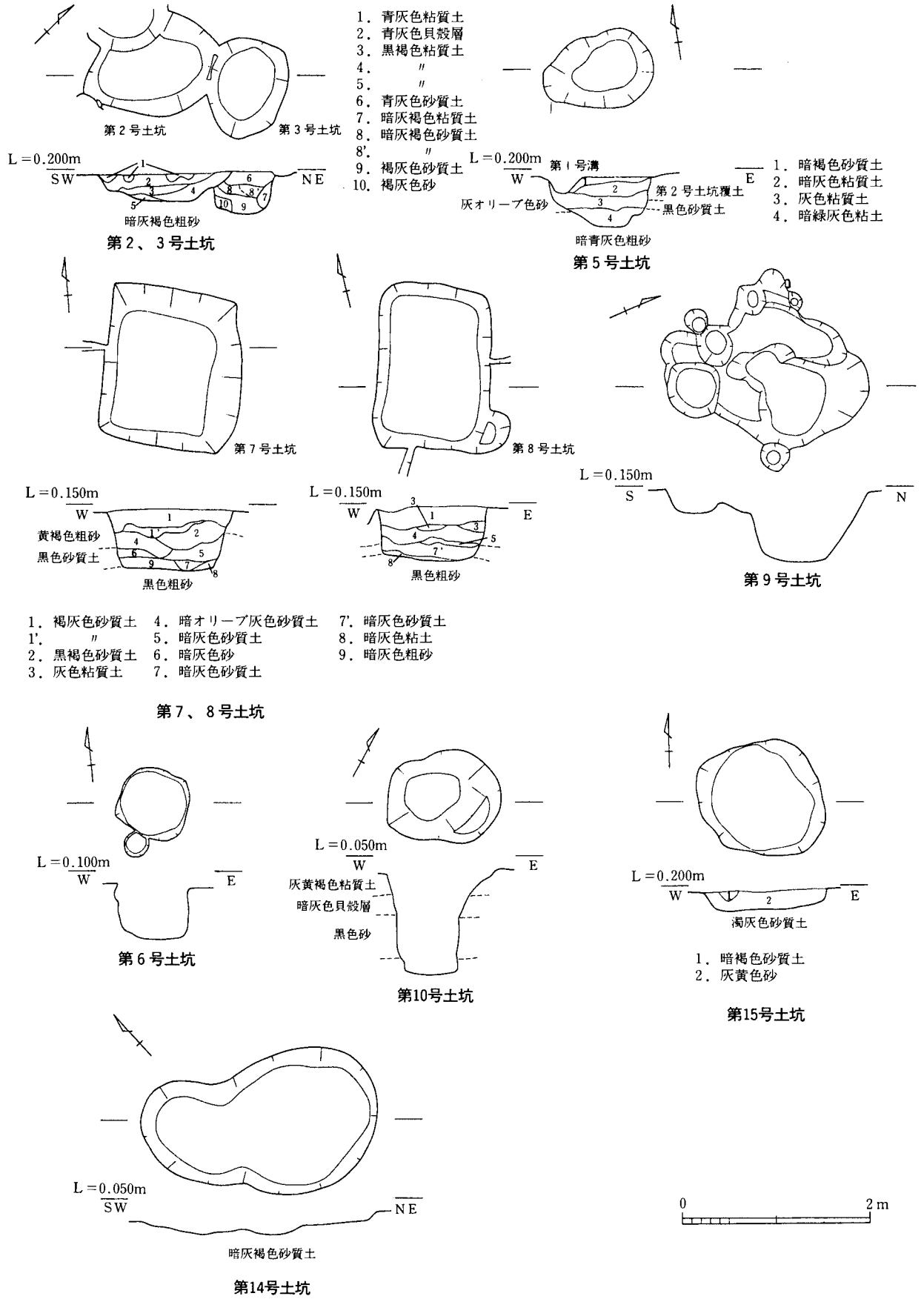
略円形を呈し、径120cm前後、深さ約20cmを測る。覆土は灰黄色砂の単層であり、A B10区付近の整地が為された時に埋没している。整地は近世初頭の行為と思われるが、出土遺物に近世のものは含まれない。

第16号土坑（第13図）

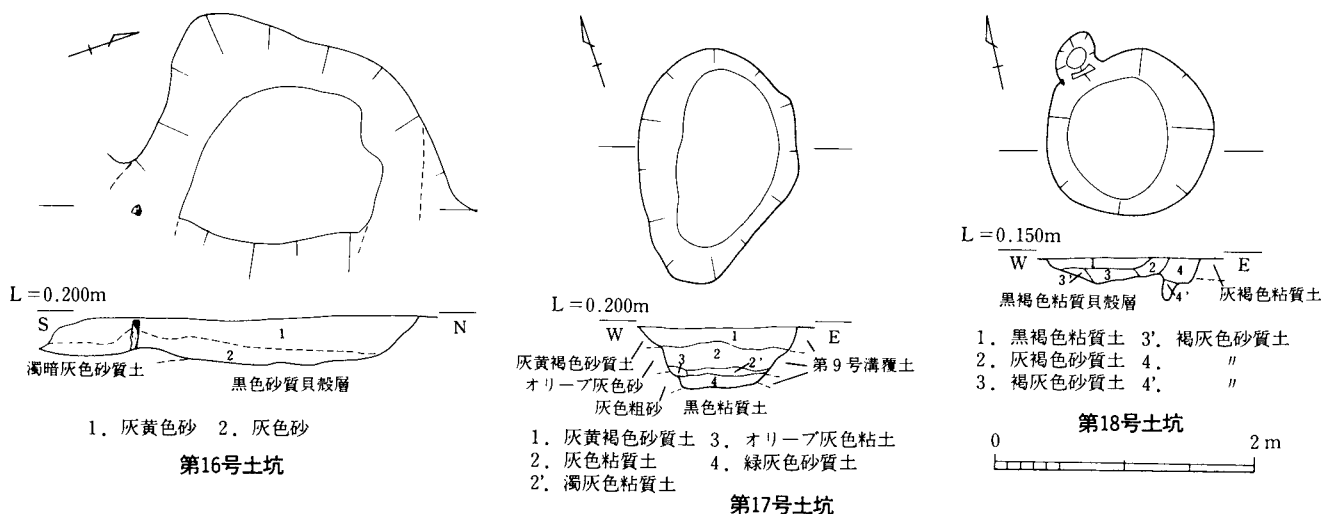
平面形全体を窺える図面は示していないが、隅丸方形を呈し、一辺280cm以上、深さは25～40cmを測る。第17号土坑を切って掘られている。灰色砂のほぼ単層である。第15号土坑覆土と多少色は異なるが、鉄分含有量の差から生じた違いであり、同一層と考えてよく、同時期に廃絶したものと考えている。時期は近世初頭に比定される。

第17号土坑（第13図）

楕円形を呈し、短径125cm、長径185cm、深さ45cmを測る。第9号溝埋め立て後に掘り込まれ、第16号土坑に切られていることから、16世紀後半代の年代が与えられる。



第12図 敷地A土坑実測図1 (S=1/60)



第13図 敷地 A 土坑実測図 2 (S = 1/60)

第18号土坑 (第13図)

円形を呈し、径120cm、深さ20cm程度を測る。一部深くなるが、第5、6層は別ピットの可能性もあろう。下層部にはA B11、12区等で見られた焼土塊が混ざるため、火事の前には掘削されていたと思われる。

第34号土坑

全形は不明である。壁面は擋鉢状に立ち上がり、深さは50cm前後である。切り合い関係は明らかでないが、西方で第5号溝につながり、東方が第13号溝に切られる。近世初頭の遺物が出土しており、第5号溝に付随した施設であったことも考えられよう。

第37号土坑

深さ35cm程度。おそらく西部を第5号溝に切られたものと思われる。

第49号土坑

第9号溝を切って掘られているが、全形は明らかでない。

以上の土坑は、第7、8、18号土坑が14世紀後半～15世紀代、第9、14、16、34号土坑が16世紀末～17世紀前半の2グループに大別できる。第6、10号土坑もおそらくは前者に属するものと考えている。第17、49号土坑は16世紀後半か。

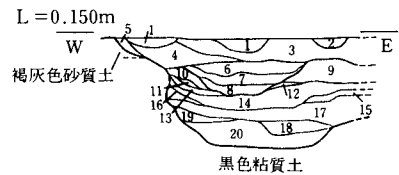
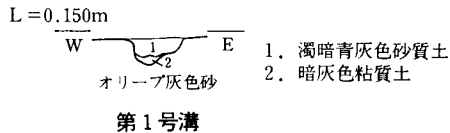
(2) 溝

第1号溝 (第14図)

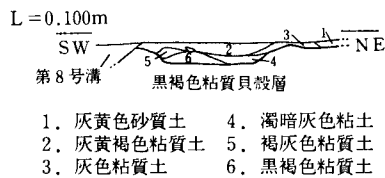
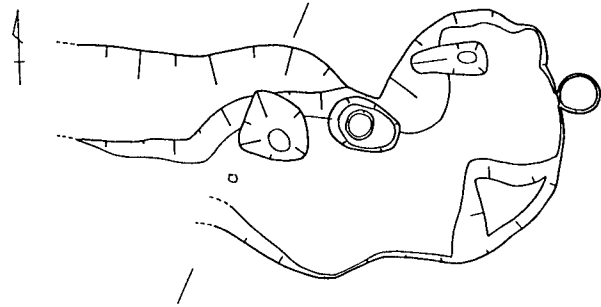
敷地 A を南北にほぼ縦断する溝であり、幅40cm、深さ10～20cmを測る。東壁に沿って径5cm程度の杭列が見られた。検出された遺構の中で最も新しく、出土遺物から19世紀後半～20世紀初頭の使用年代が考えられる。第4、5号溝とほぼ併走している。第5号溝が16世紀末～18世紀前半、第4号溝が18世紀後半～19世紀前半の使用であり、時期的に重複しないことを加味すると、それらは第5→4→1号溝と変遷をたどった、一連の溝であることも推定される。

敷地とは関係がなく、本来は第1節にて説明を加えるべきものであったが、敷地内を走っているためこの項に含めた。

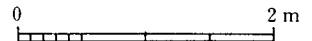
第9号溝 (第14図)



- | | |
|------------|---------------|
| 1. 濁灰黄褐色砂 | 11. 緑灰色砂 |
| 2. 灰色砂質土 | 12. オリーブ灰色粘質土 |
| 3. オリーブ灰色砂 | 13. オリーブ灰色粘土 |
| 4. 黄灰色砂 | 14. 濁緑灰色砂 |
| 5. 灰黄褐色砂質土 | 15. 褐灰色粘土 |
| 6. オリーブ灰色砂 | 16. 緑灰色砂 |
| 7. 黒色粘土 | 17. " |
| 8. 濁緑灰色砂質土 | 18. " |
| 9. 暗灰黄色粘土 | 19. 緑灰色粗砂 |
| 10. 緑灰色砂 | 20. 暗緑灰色粗砂貝殻層 |



第13号溝



第14図 敷地A 溝実測図 (S = 1/60)

敷地の南東端で検出した。調査区外へ伸びているため全貌は明らかでないが、最大幅420cm、深さ60cm前後である。第1、2層は攪乱である。第3、4層は敷地南東部の整地土である。第3、4層最下部には鉄分の沈着が顕著に見られた。第6～8層は殆ど埋まった段階に掘り直しされたものとみられ、それは出土遺物等から16世紀前半でも早い段階の行為と推定される。第9層以下は水平に近い堆積を保ち、殆ど掘り直し等が為されていないように見受けられるが、最下層には12世紀代と15世紀代の遺物が混在しており、堆積土の掻き上げが行われたことを示している。なお、北側調査区では土坑と認識して調査をし、第14層を以て底部と認識したため、下層は未調査となっている。

本溝は、当初大型の溝であったものがある時期に上端幅100cm程に規模を縮小し、ついには埋められるという機能の低下をたどる。南東側壁面に杭を打ち、埋め立てを実施しているが、これはそうした動きに連動した行為と思われる。この埋め立ては第8号溝同様、敷地の拡大を目的に行われたと思われる。溝東方に更に敷地が続く、或いは別の敷地が広がることを意味している。しかし、ある段階で完全に埋め立てられ、敷地Aが拡大していることを考えると、敷地Aに入り込む溝であったとするのが妥当ではなかろうか。

本溝の掘削は11世紀後半、完全な廃絶は、16世紀中葉を下らないと推定している。

第13号溝 (第14図)

敷地南西端に位置し、最大幅200cm程度、深さ10～15cmを測る。溝状の浅い落ち込みであり、滞水の痕跡は見られない。溝内には土器等が廃棄されており、それらの年代から17世紀前半の遺構と思われる。

(3) 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物 (第15図)

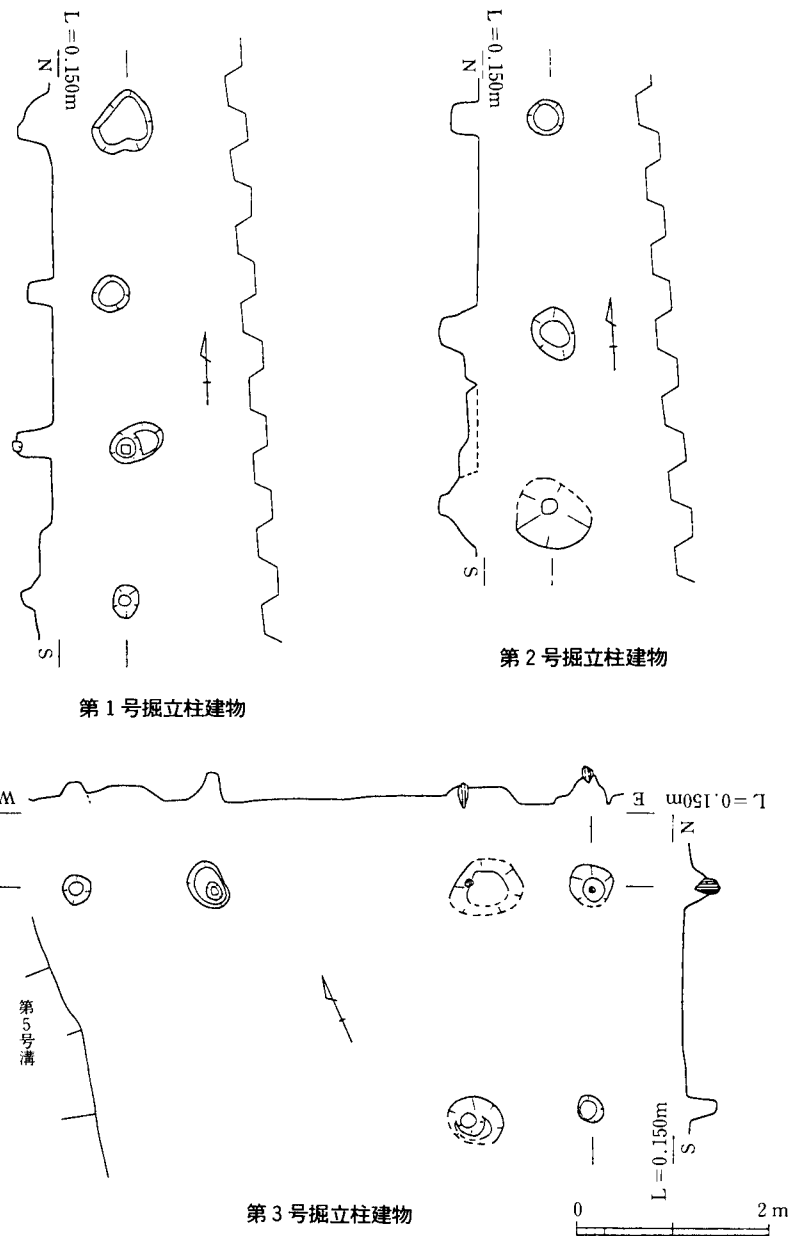
南北3間の柱列を検出した。柱間寸法は北から約175、165、165cm。調査区外に続き、詳細は不明。

第2号掘立柱建物 (第15図)

南北2間の柱列を検出した。柱間寸法は北から約230、180cm。調査区外に続き、詳細は不明。

第3号掘立柱建物 (第15図)

3間×1間と推定される。西側角を第5号溝に切られている。柱間寸法は桁行西から約150、265、132cm、



第15図 敷地A 掘立柱建物跡実測図1 (S = 1/80)

梁行230cm。桁行中央の寸法が長いが、第6号土坑に接するピットが柱穴である可能性もある。主軸はN-68°-W。

第4号掘立柱建物 (第16図)

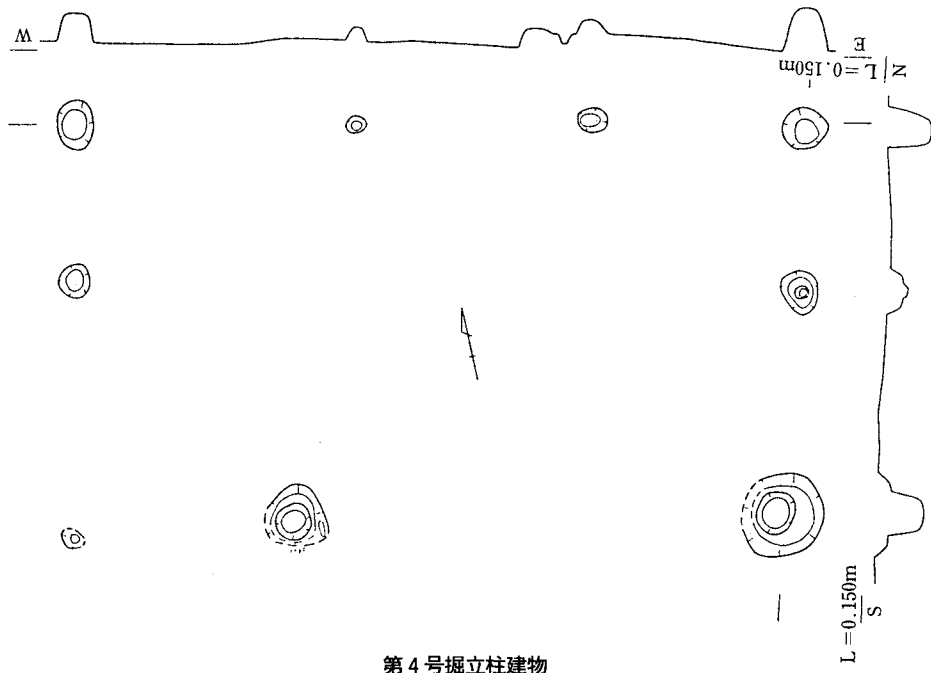
3間×2間で、主軸を東西にもつ。柱間寸法は桁行北側柱列にて西から約300、250、233cm、梁行北から約170、235cm。主軸はN-77°-W。

第5号掘立柱建物 (第16図)

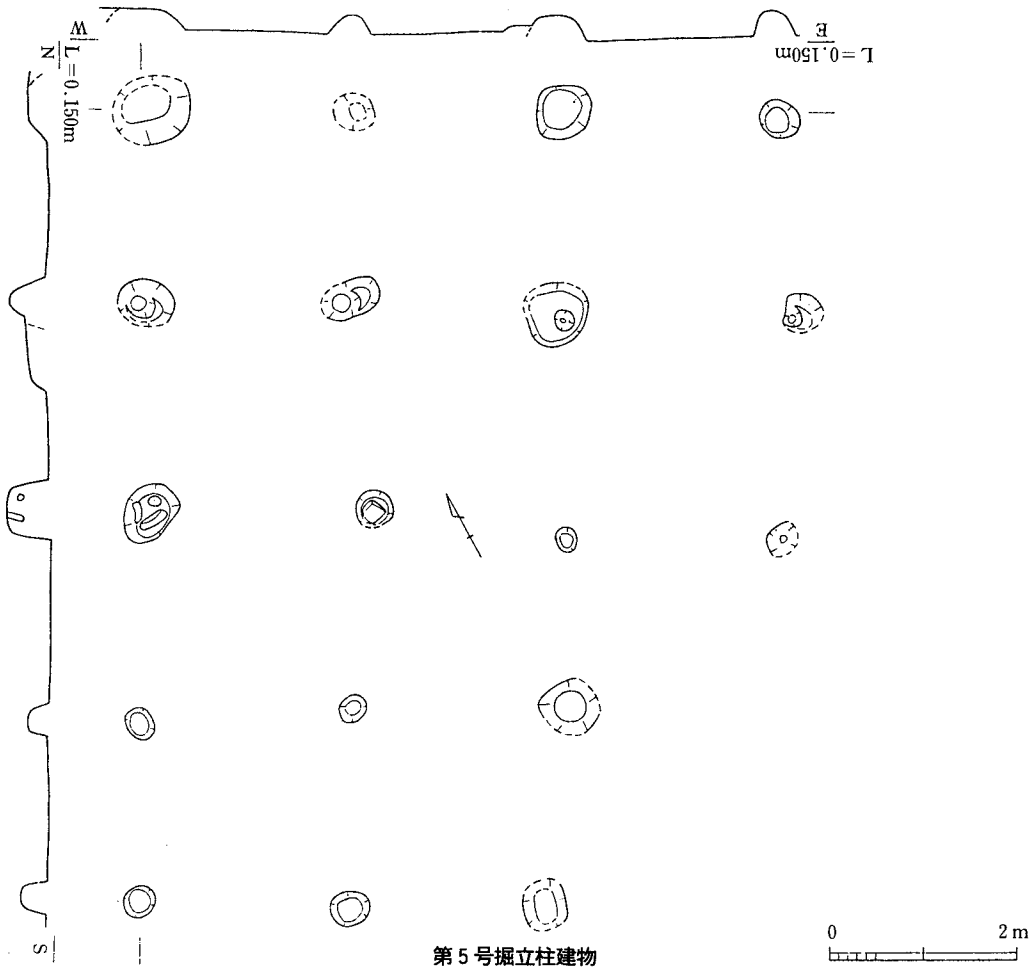
4間×2間の身舎東部に1間×2間の張り出しをもつ。柱間寸法は桁行西側柱列にて北から約190、225、220、210cm、梁行北側柱列西から約225、225、230cm。桁行西側柱列中央部には、柱を固定したと思われる粉挽き白の下白が石とともに埋め込まれていた。主軸はN-30°-E。

第6号掘立柱建物 (第17図)

3間×3間、又は3間×2間に2間×1間の張り出しをもつ。柱間寸法は桁行東側柱列にて北から約255、

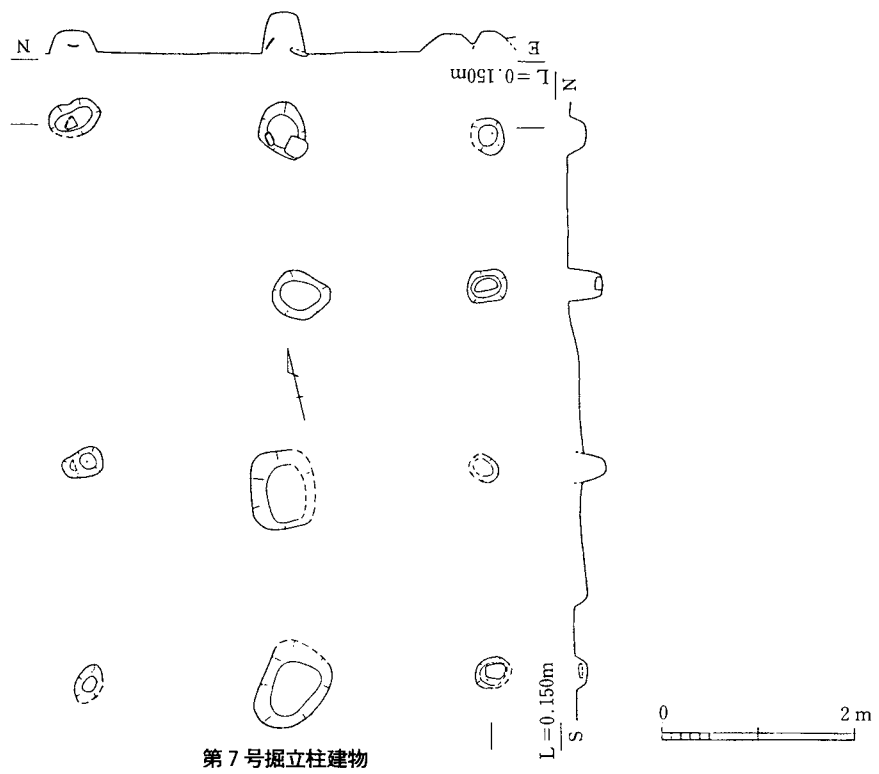
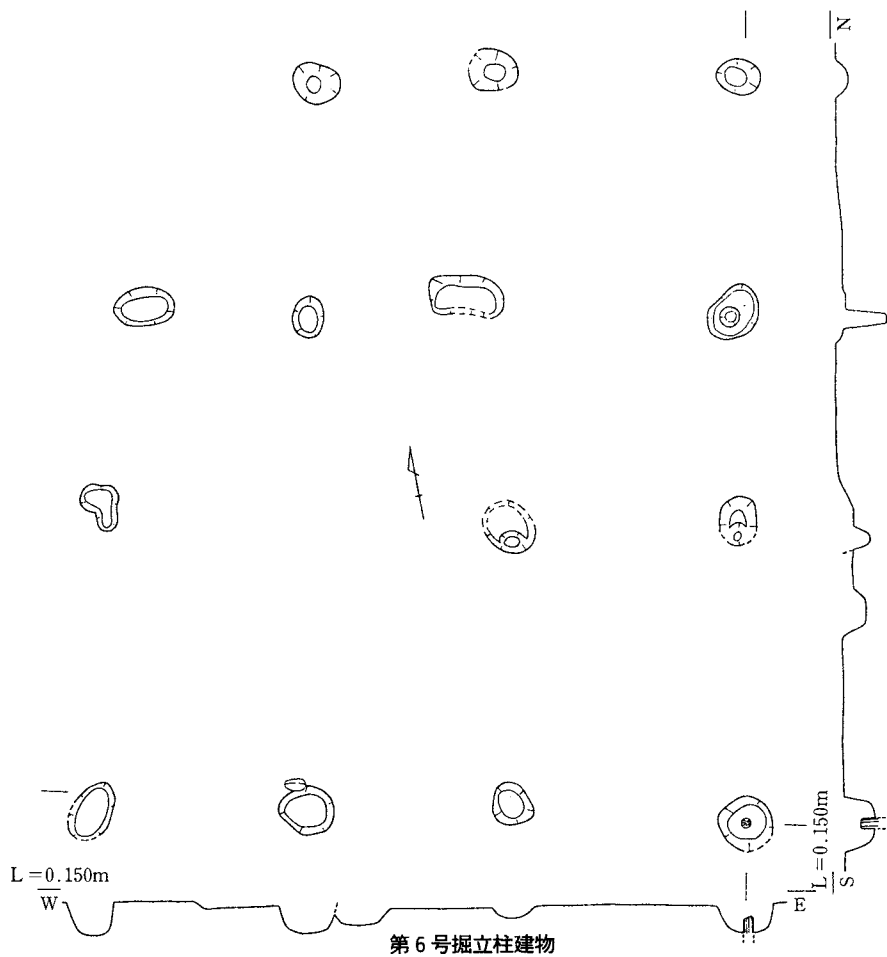


第4号掘立柱建物

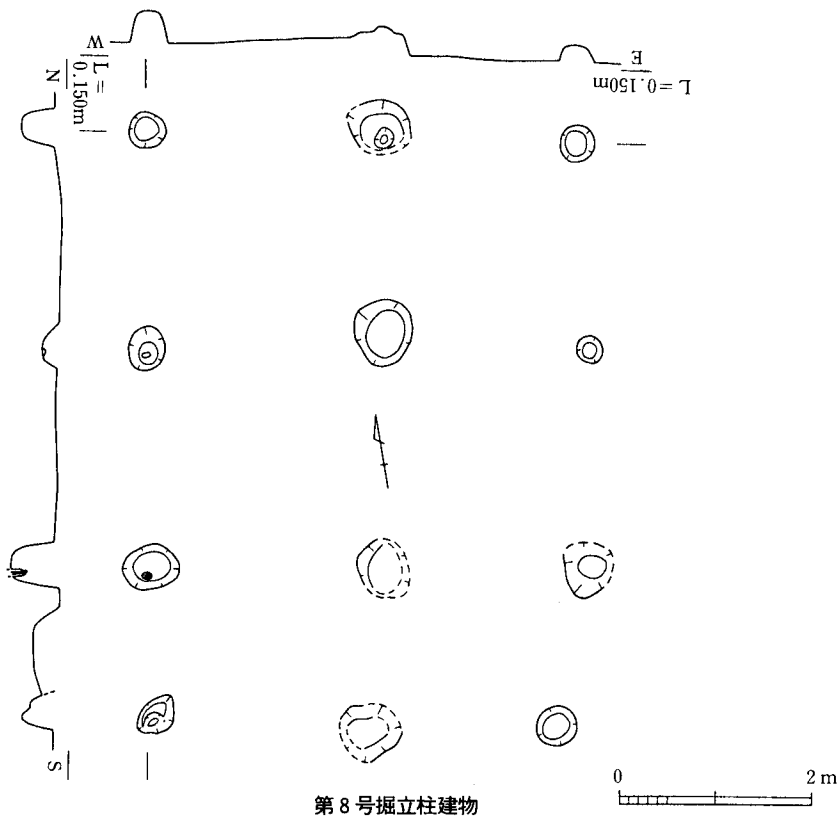


第5号掘立柱建物

第16图 敷地A 掘立柱建物跡実測图2 (S = 1/80)



第17图 敷地A 掘立柱建物跡実測图3 (S = 1/80)



第8号掘立柱建物

第18図 敷地A 掘立柱建物跡実測図4 (S = 1/80)

230、305cm、梁行南側柱列西から約230、220、250cm。主軸は $N-11^{\circ}-E$ 。

第7号掘立柱建物 (第17図)

3間×2間の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行東側柱列北から約160、195、220cm、梁行北側柱列西から約225、225cm。桁行東側柱列北から2番目の柱穴には粉挽き白の下白が根石として底部に配される。主軸は $N-14^{\circ}-E$ 。

第8号掘立柱建物 (第18図)

3間×2間の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行西側柱列北から約235、235、155cm、梁行北側柱列西から約245、205cm。桁行南部の柱間寸法が短くなっており、2間×2間の身舎に1間分の廂が付いたものの可能性もある。主軸は $N-9^{\circ}-E$ 。

(4) 整地土

本敷地内A・B11、12区では焼失家屋の整理跡と見られる整地が見られた。この整地土はA・B11区とA・B12区では様相が異なる。A・B11区では焼壁と炭化物の小片を多く含む層が東西方向に帯状に見られ、層中に土器類は殆ど含まれない。一方、A・B12区では黄色系の層が面的な広がりを見せ、遺物が多く含まれていた。その中には鉄釘も多数見られるが、炭化物は小片が少量出土したのみである。また銅銭も多く出土している。この整地土は、3層程度に細別が可能であるが、遺物に時期差は認められない。

11、12区の整地土はこのように様相が違うものの、同時期に為されたと考えられ、出土遺物から、その年代は15世紀中葉前後と推測される。12区には掘立柱建物が存在した時期の遺構は殆ど見られないことから、11区付近に存在した掘立柱建物が焼失し、そこで使用されていた生活用品等が北縁部の12区に廃棄され、整地されたものと推定される。その後12区にもピット等が掘削されたようだが、整地土上面での遺構検出はで

きなかった。

第3節 敷地B

北は水田部、東は第5号溝、南は第8号溝に面する。南北約19m、東西約6mを測るが、西側は調査区外へ更に続く。北端は第3号溝付近か。北東付近に土坑を3基、西部にピットを多数検出した。それらを柱穴と認識して5棟の掘立柱建物を復元したが、第9号掘立柱建物以外に全形を窺えるものはなく、定かではない。本敷地からは包含層を除いて近世の遺物の出土はなく、中世に営まれた遺構群と理解される。

(1) 土坑

第11、12、13号土坑 (第20図)

第11号土坑は、110cm×145cmの長方形を呈し、深さは20cm前後である。第12号土坑は不定形であり、短径180cm、長径220cm、深さ25cm前後を測る。北部に浅い段が一段設けられる。第13号土坑は、ほぼ一辺180cmの方形を呈し、深さは20～30cmを測る。これらはいずれも浅い土坑であり、敷地の北東部で検出された。

(2) 掘立柱建物跡

第9号掘立柱建物 (第21図)

2間×2間の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行北西側柱列にて西から約270、240cm、梁行北東側柱列北西から145、160cmと桁行方向の柱間寸法が長くなっている。主軸はN-55°-E。

第10号掘立柱建物 (第21図)

2間×2間まで確認できるが、調査区外に伸びており、全形は不明。柱間寸法は東側柱列にて北から約200、260cm、北側柱列西から260、215cm。主軸はN-65°-E。

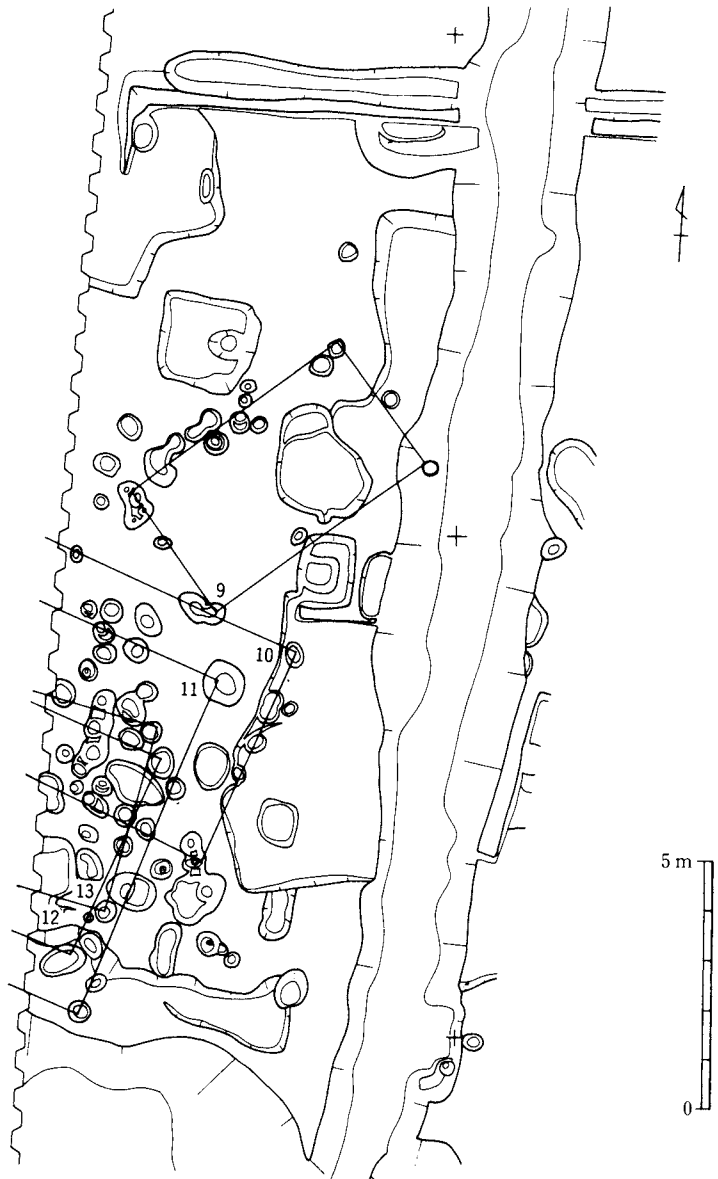
第11号掘立柱建物 (第21図)

3間×1間以上。柱間寸法は東側柱列北から約235、225、260cm、北側柱列約180cm。主軸はN-23°-E。

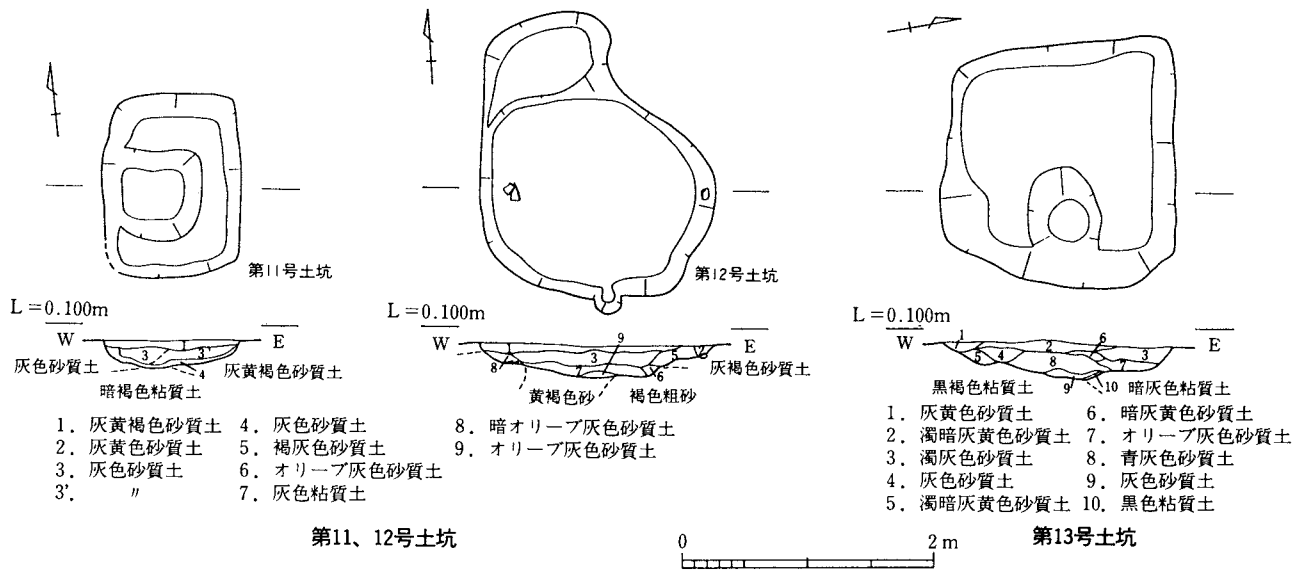
第12号掘立柱建物 (第22図)

2間×1間以上。柱間寸法は東側柱列北から約180、250cm、北側柱列約150cm。主軸はN-16°-Eか。

第13号掘立柱建物 (第22図)



第19図 敷地B全体図(数字は掘立柱建物番号 S = 1/150)



第20図 敷地B土坑実測図 (S = 1/60)

2間×1間以上。柱間寸法は東側柱列北から約170、200cm、北側柱列約185cm。主軸はN-12°-E。

第4節 敷地C

北、及び西は第8号溝、南は水田部に面し、東は調査区外へ伸びる。南北約19m、東西21m以上を占有し、調査区内の三敷地中最も広い。近世初頭に、既存の溝を埋め、或いは縮小することにより、敷地を拡大している。

土坑28基を検出し、第8号溝から分流した大型の溝が3条敷地内に入り込む。縁辺部に土坑を配する様相はAB両敷地に共通するが、それらが大型であること、敷地の中央部にも存在すること等に相違が見られる。土坑は敷地A同様、中世後半、近世初頭の2グループに分けられるが、後者は東半部に集中する。このことは、敷地内において、近世に居住地が東遷したことを示しているとみられる。掘立柱建物は4棟復元したが、ピット数が少ないため、復元棟数も面積の割りに少ない。しかも、全て土坑、溝等の既存の遺構を切って建てられており、ここにおいても敷地ABとの違いが見受けられる。これらの掘立柱建物は他の遺構との関係から、15世紀後半～16世紀中葉の間に営まれたのではないかと推定している。本敷地では、他敷地よりもやや遅れて掘立柱建物が建ち並んだと考えられる。

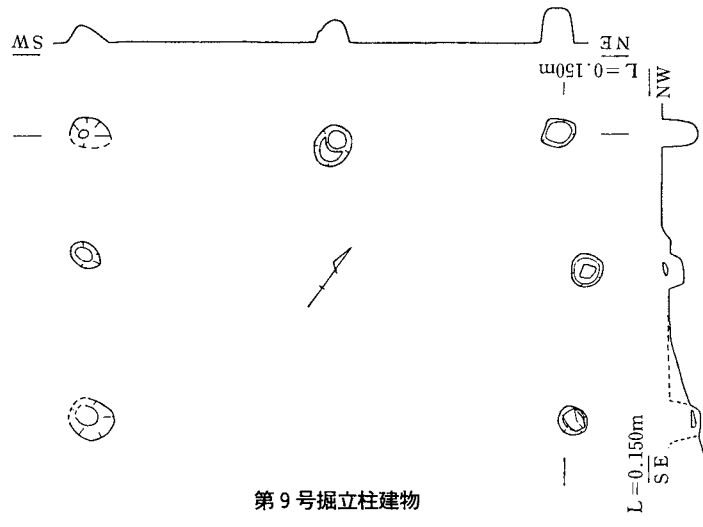
(1) 土坑

第19、20号土坑 (第24図)

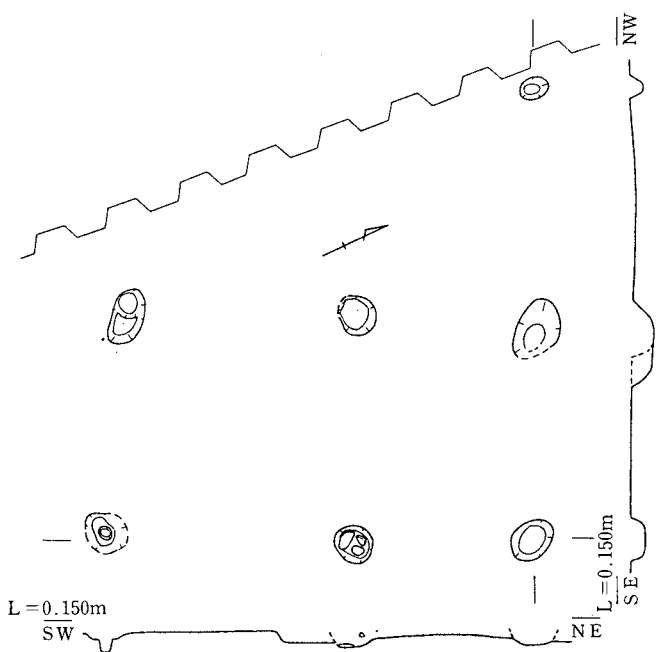
いずれも楕円形を呈す。第19号土坑は長径100cm、短径約64cm、深さ45cmを測る。底部には径30cm前後の根石を配し、その下部に小石を詰める。根石の上面中央部には穴が見られるが、人為的なものか否かは不明である。第20号土坑はほぼ同一法量であるが、深さ約60cmとやや深い。根石等は検出されなかったが、第19号土坑と対を為す柱穴と考えられる。第1～3層は両土坑に共通しており、そのことも同時期の遺構であることを示していよう。

第21号土坑 (第24図)

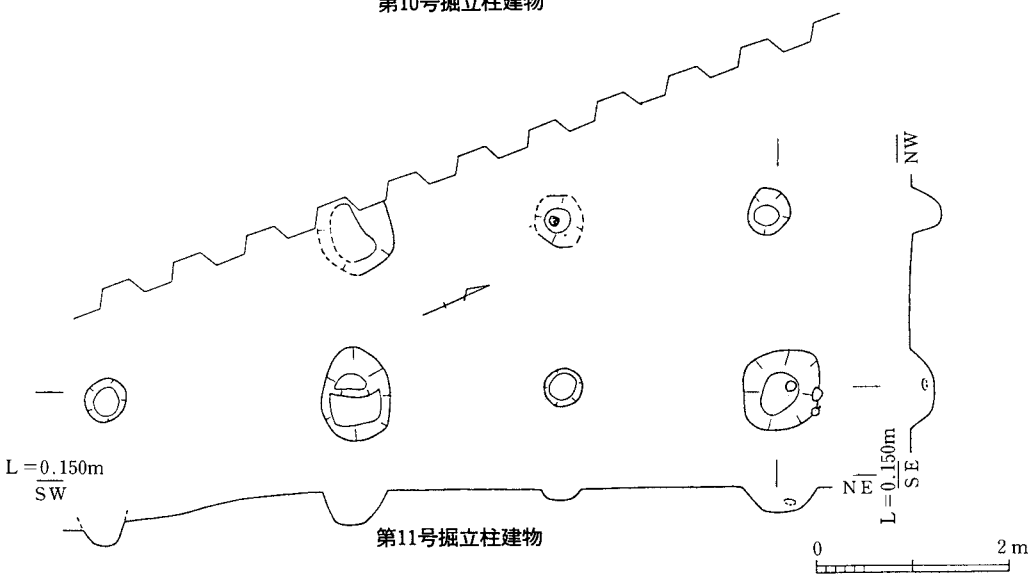
楕円形を呈し、短径130cm、深さ40cmを測り、底部はほぼ平坦である。第10号溝に接し、最上層が同一であることを考えると両者に時期差はそれほどなく、溝に付随した施設の可能性も考えられる。



第9号掘立柱建物

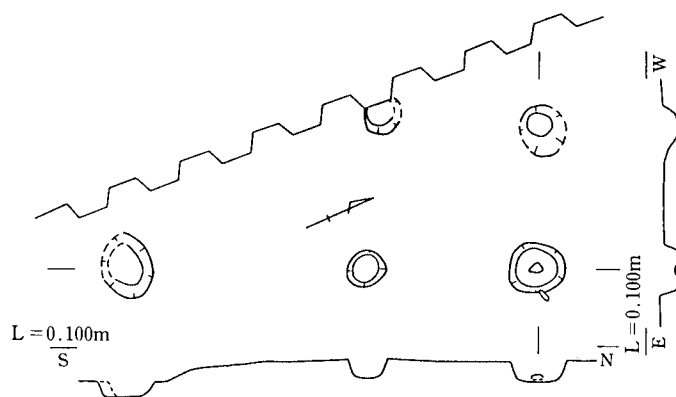


第10号掘立柱建物

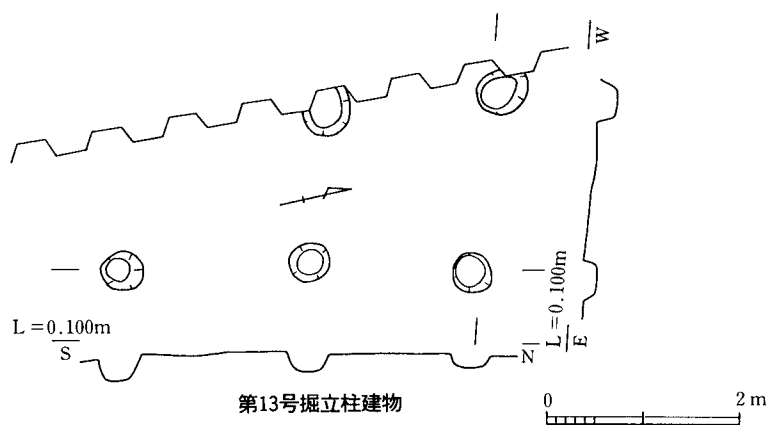


第11号掘立柱建物

第21图 敷地B 掘立柱建物跡実測図1 (S = 1/80)



第12号掘立柱建物



第13号掘立柱建物

第22図 敷地 B 掘立柱建物跡実測図 2 (S = 1/80)

第22号土坑 (第24図)

一辺250cm程度のほぼ隅丸方形を呈し、深さは50cm前後を測る。第1層は埋め込み土である。第2～4層は別ピットの可能性がある。この位置は、第17号掘立柱建物北側の桁方向のラインに近接しており、その柱穴の一つである可能性が高い。第11層からは桧、或いは杉とおぼしき薄板が数枚出土した。

第23号土坑 (第24図)

2段掘りの土坑であるが、第24号土坑と切り合っており、上部の平面プランは不明である。下部の深さは20cm弱を測る。近世初頭のごみ捨て穴と思われ、多量の石、土器等の廃棄が見られ、中には人骨の一部も出土している。また、水晶原石も出土していることから、周辺で何らかの加工が施されていた可能性も考えられる。なお、スクリーンで示したものが土器である。

第24号土坑 (第24図)

全形は明らかでなく、深さは20cmを測る。第25号土坑よりも新しいが、第23号土坑との前後関係は定かでない。第1層の粗砂により一気に埋められたと見られる。

第25号土坑 (第24図)

第24号土坑に切られているが、ほぼ隅丸方形を呈すると思われる。一辺250cm以上、深さ30cm程度である。第11層として示した層は、実際には灰色砂質土、黒色粘土、青灰色砂の3層に分層される。そのうちの黒色粘土中には、藁状の堆積物が層状に見られた。

第26号土坑 (第25図)

多くのピットと切り合い関係にあり、全形は窺えない。第1、2層は別ピットである。

第27号土坑（第25図）

深さ20cm弱の浅い土坑であり、第28号土坑を切って掘られている。第2層には炭化物が大量に含まれており、サンプルとして持ち帰り、洗浄した結果、魚骨、うろこ等を検出した。

第28号土坑（第25図）

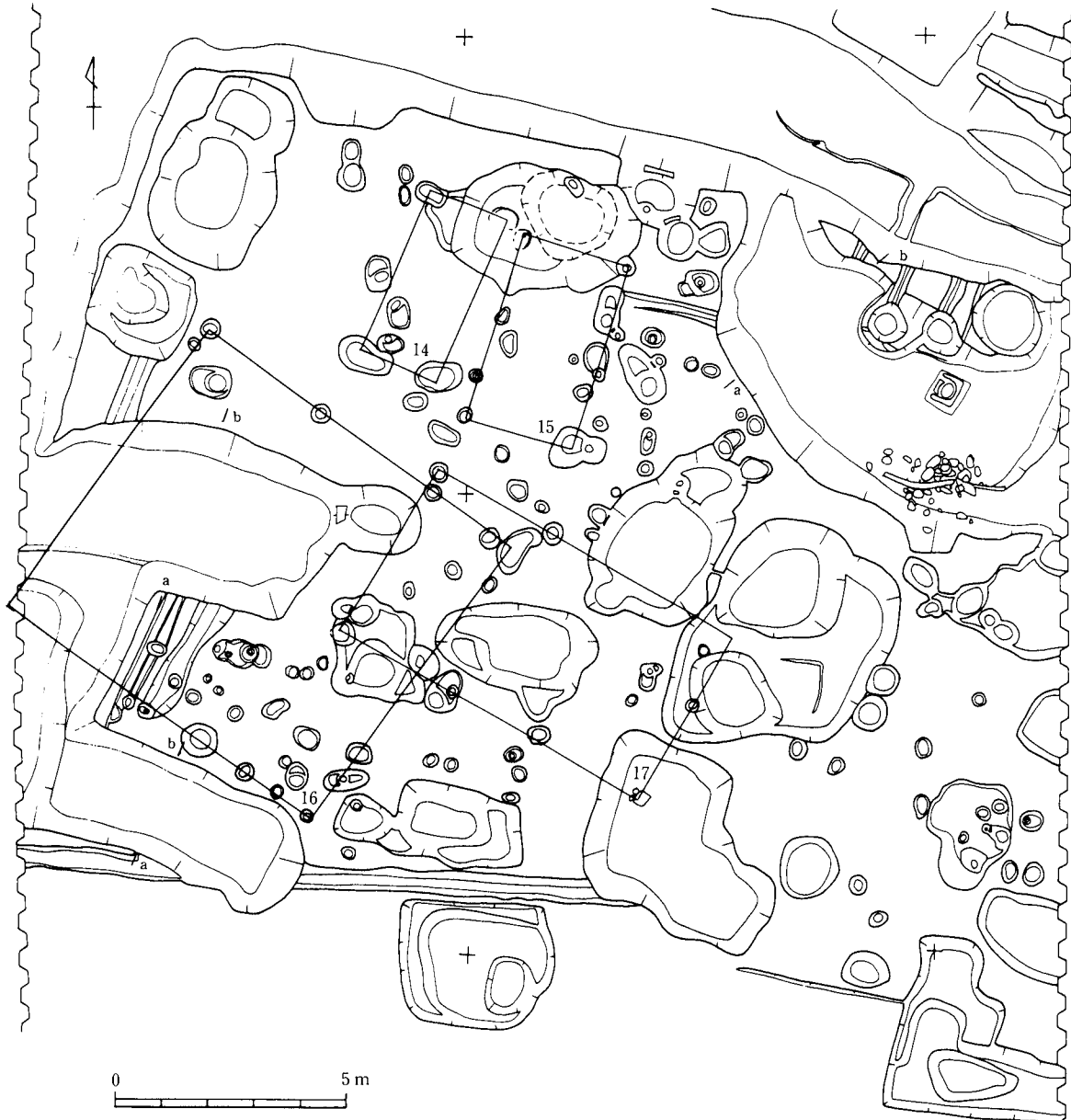
隅丸長方形を呈し、短辺260cm、長辺300cm、深さ50cmを測る。底部は平坦である。湧水層に達しているため井戸であった可能性もあろう。土層は緑灰色砂を主体とする。第7、9層には植物遺体が認められ、後者を持ち帰った結果、ナデシコ科の種子を始め、稲稈等多数の植物が検出された。

第29号土坑（第25図）

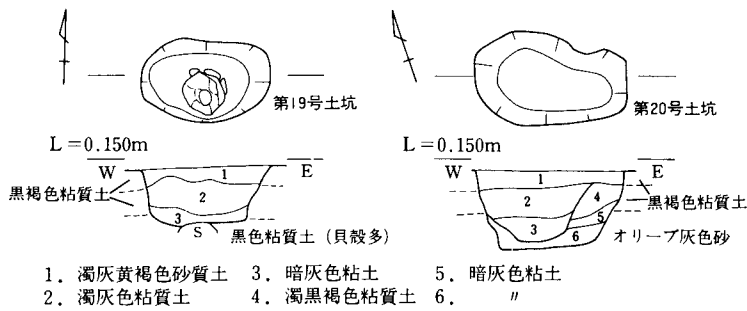
一辺210cm程度の隅丸方形を呈し、深さ40cmを測る。断面は緩くすり鉢状に開く。

第30、31号土坑（第25図）

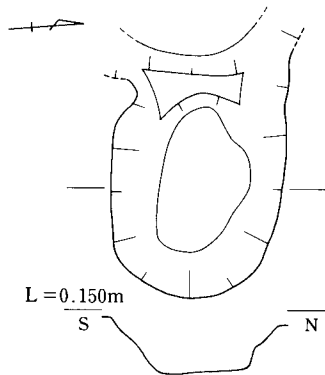
敷地の北東端で検出した。何れも第12号溝新溝を切って掘り込まれた井戸である。第30号土坑は、径90cmの円形で、深さ120cmを測る。上半に比べて下半の径が一回り小さくなっている。第31号土坑は、径80cmの



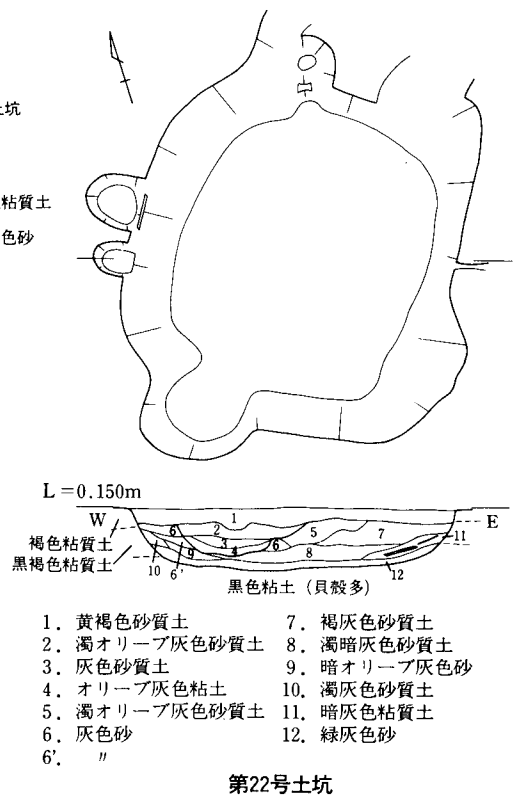
第23図 敷地C全体図（数字は掘立柱建物番号，S = 1/150）



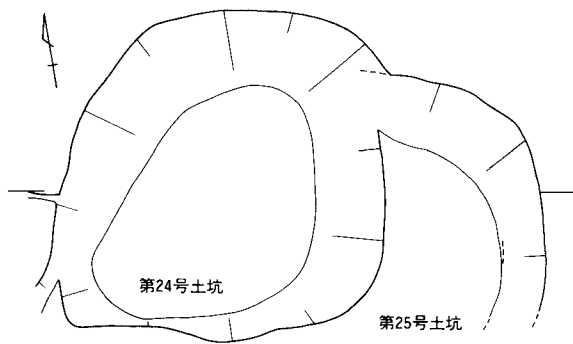
第19、20号土坑



第21号土坑

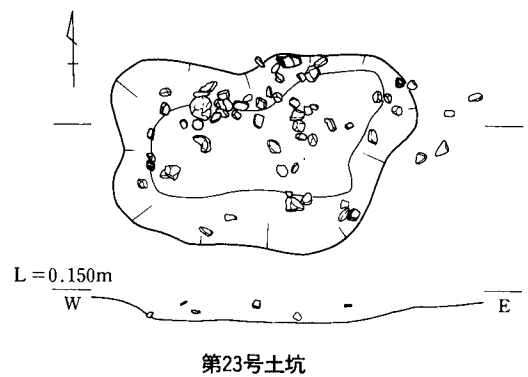


第22号土坑



第24、25号土坑

第24図 敷地C土坑実測図1 (S=1/60)

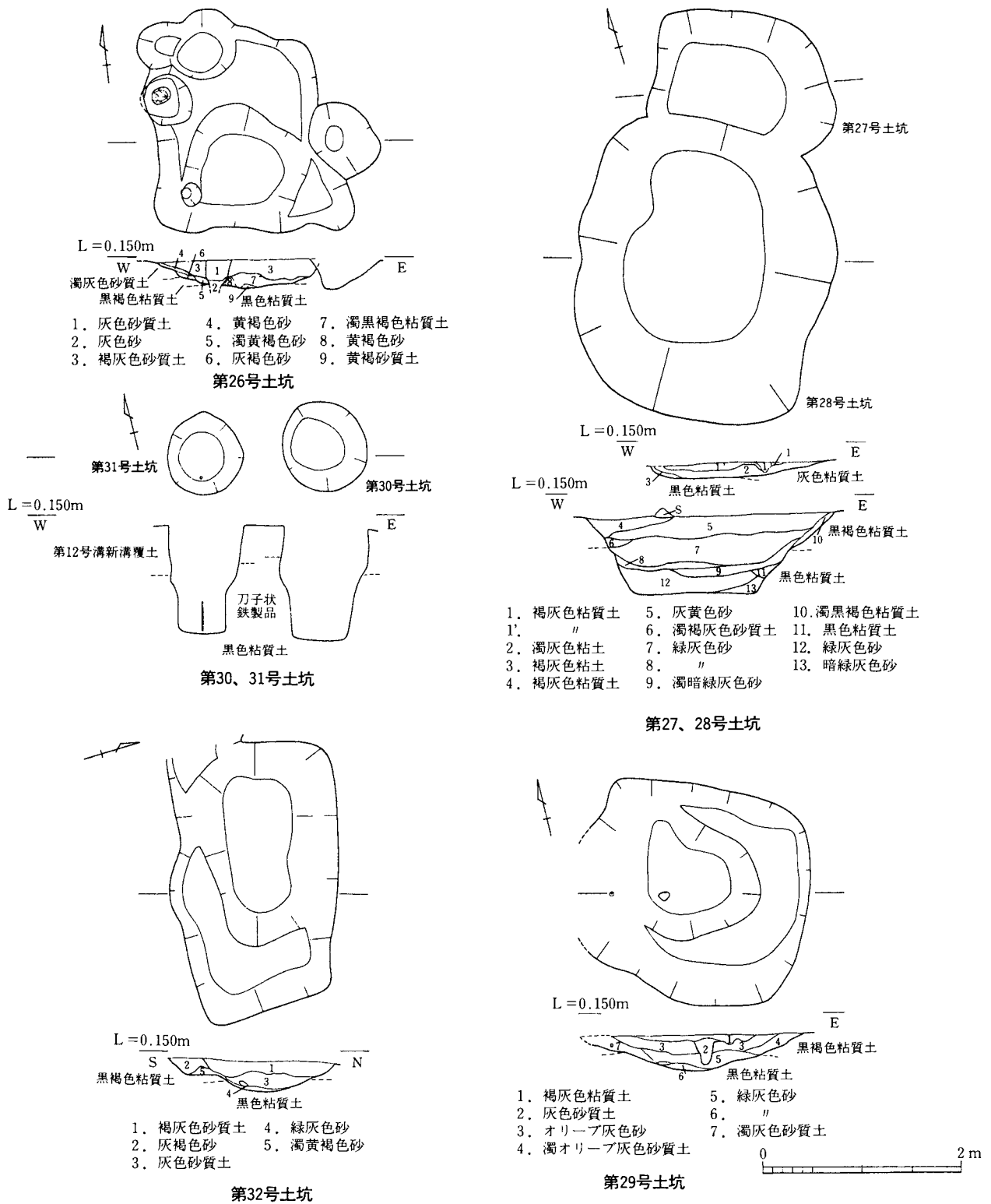


円形で、深さ110cmを測る。規模、断面形態ともに第30号土坑に類似する。底部付近には柄の遺存した刃物が垂直に突き刺さっていたが、それが偶然の所産か、廃棄時の井鎮め等祭事に関わるものなのかは不明である。

両土坑とも出土遺物が僅少な上、土層観察もできず、新旧関係を明らかにするまでに至っていないが、使用時期は出土遺物と周辺遺構の年代から、17世紀初頭～中葉に限定されよう。

第32号土坑 (第25図)

長径280cm、短径180cmの長方形を呈し、深さは25cm前後を測る。南東部は一段浅くなっている。



第25図 敷地C土坑実測図2 (S = 1/60)

第33号土坑 (第26図)

敷地の北端で検出した。略円形を呈し、深さ40~50cmを測る。第39号土坑を切って掘られている。第4層は貝殻層であり、貝塚のごとく貝殻を含んでいた。これが地山に見られる貝殻なのか、食後に廃棄されたものなのかは不明である。なお、地山上層のオリーブ灰色砂は第39号土坑覆土である。

第35号土坑 (第26図)

径90cm前後、深さ約60cmの円形を呈す。底部から根石と目される上面が比較的平坦な石が検出されており、柱穴と考えられる。第1層は、第19、20号土坑の第1層と同一であり、時期的に重なる可能性もある。

第36号土坑（第26図）

敷地の北東端で検出した。径140～160cmの略円形を呈し、深さは100cmを測る井戸である。第5層以下は図化できなかったが、ほぼ単層と思われた。第12号溝新溝を切って掘り込まれており、使用時期は第30、31号土坑と同様の幅で考えられる。上層に肥前系陶器の皿を含み、それが敷地の廃絶年代と重なる資料であることから、敷地の終焉或いは移動とともに埋められたと考えられる。隣接する第30、31号土坑との新旧関係は、限られた遺物で見ると、前述の肥前系陶器がただ1点新相を示す資料であり、第36号土坑が最も新しい可能性がある。これらの井戸は、わずか4m以内に近接することから、3基が同時存在したとは考え難い。10～20年程度の比較的短期間に順次作り替えられた、あるいは2基程度の同時使用が考えられよう。前者とした場合、敷地が北方または北東方向へ拡大していることを考慮すると、井戸も31→30→36と東遷した可能性が高い。

第38号土坑

第8号溝に接し、径約170cmの半円形を呈す。第39号土坑に切られている。第8号溝に付随した施設と考えられ、洗い場等の機能が想定される。北側に隣接して足場状の石組みがあるが、第8号溝南壁を埋め立てた際に土坑も埋められ、その代わりに設置されたとも考えられる。

第39号土坑

敷地の北端で検出した。第33号土坑に切られているため全形は明らかでないが、短軸250cm、長軸400cm程度の大型土坑である。深さは50～70cmを測り、東壁は他の三方に比べると緩やかに立ち上がる。湧水層に達しているため、第28号土坑同様井戸であった可能性もあろう。その考えが許されるならば、敷地Cの井戸は敷地の北辺部を第28→39→31→30→36号土坑の順で東遷していったと推定している。

第40号土坑

調査区外に伸びるため、全形は明らかでない。深さは約15cmと浅い。

第41号土坑（第26図）

南方に一部突出するが、ほぼ楕円形を呈し、短径200cm、長径350cm、深さ45cm前後を測る。底部は平坦である。

第42号土坑（第26図）

崩れた長方形を呈し、深さは20～30cmを測る。第43号土坑を切っている。本土坑からは同一個体の加賀焼甕片が数十点の破片となって出土している。

第43号土坑（第26図）

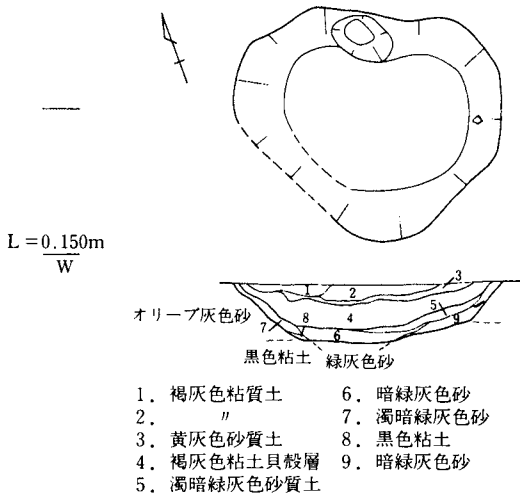
第42号土坑に切られており、南東隅は不明であるが、短辺280cm、長辺350cmの長方形を呈し、深さ40cmを測る。底部はほぼ平坦である。アゼが崩れたため土層は図化していないが、オリーブ灰色砂のほぼ単層であり、一度に埋められたものと判断される。その後に柱穴と思われるピットが掘削されている。

第44号土坑

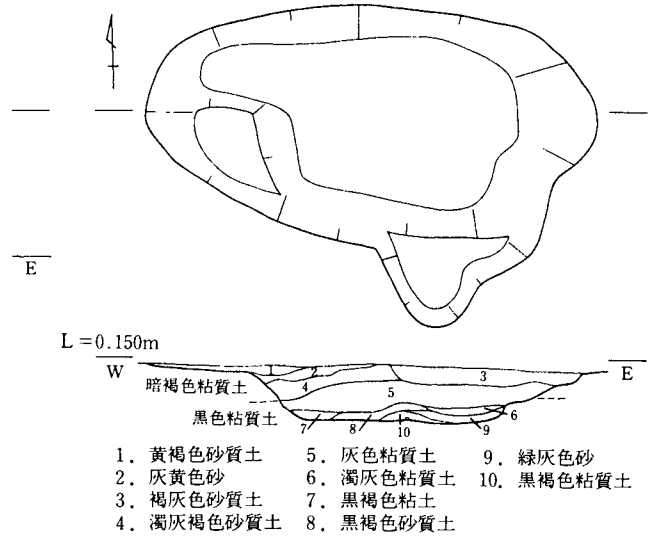
敷地の南東隅で検出した。不定形でプランははっきりしないが、比較的まとまった土器が出土している。

第45号土坑

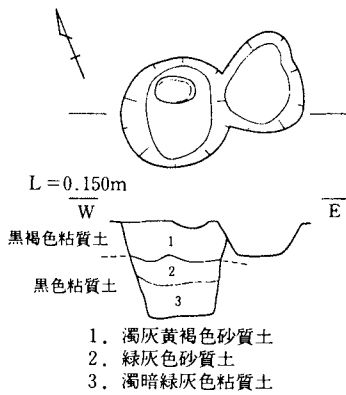
敷地の南端で検出した。径320cm程度の方形に近い土坑であるが、北端は溝状遺構に切られており、全形は不明である。段掘りとなっており、最深部で34cmを測る。



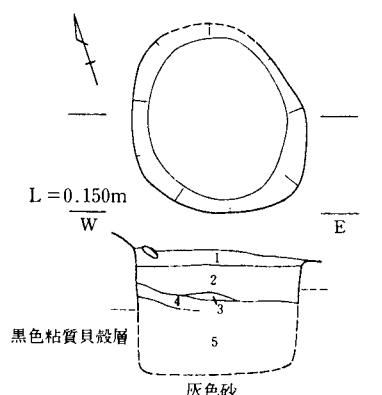
第33号土坑



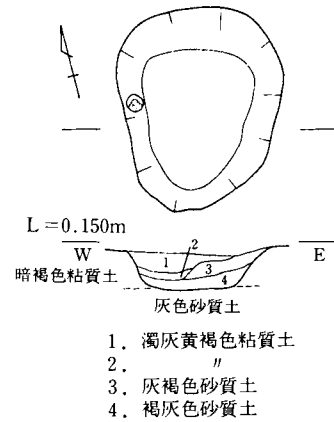
第41号土坑



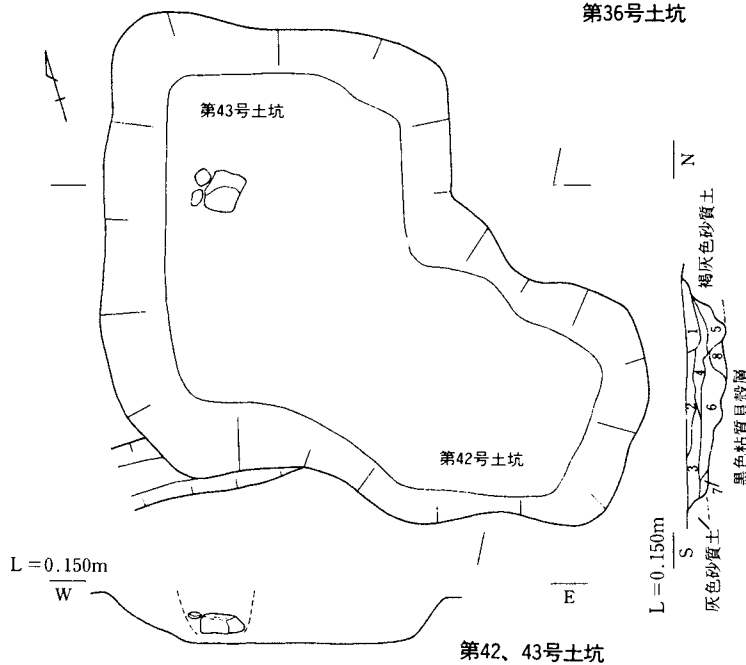
第35号土坑



第36号土坑



第48号土坑



第42、43号土坑

1. 浅黄色砂
2. 灰黄色砂質土
3. 黄灰色砂質土
4. 濁褐灰色砂質土
5. 濁灰黄褐色砂質土
6. 灰黄褐色砂質土
7. " "
8. 灰色砂質土



第26図 敷地C土坑実測図3 (S = 1/60)

第46号土坑

第22号土坑に隣接するが、切り合い関係は不明である。深さは約30cmである。

第47号土坑

数ピットと切り合い、東部が調査区外に伸びるため全形は窺えない。深さは20cm前後と浅い。坑内からは大型の砥石、自然石等が多く出土した。第12号溝集石遺構に近接しており、何らかの関連も推測される。時期的には旧溝と重なる部分がある。

第48号土坑（第26図）

径130cm前後の略円形を呈し、深さは30cmを測る。西部に柱根が残存しており、第1、2層が別の柱穴跡、または本土坑自体が柱穴であることが考えられる。

（2）溝

第10号溝（第27図）

最大幅約360cm、深さは40cm前後で推移する。第8号溝に直行し、ほぼ東西に走る。南西部で直角に折れ、第11号溝に合流する。第1層は耕作溝の覆土である。第2～4は溝廃絶時の埋め込み土と考えられ、ここまですを上層として調査し、遺物を区別して採り上げた。その中には18世紀に下る遺物も出土しているが、耕作時の混入と考え、報告はしていない。第5層以下は粘土を中心とし、使用時の堆積土と推定される。第7、8層は掻き上げの痕跡か。なお、直角に曲がるコーナー付近からは、土層断面にて地山下層を為す、黑色粘土を掘り込んだ落ち込みを確認した。開削は黑色粘土の掘り込みが12世紀前後、廃絶は15世紀後半頃か。埋め立て後は掘立柱建物が建てられたと見え、敷地の拡大を目的とした埋め立てであったと推測される。

第11号溝（第27図）

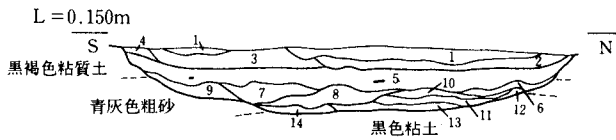
幅225cm前後、深さ40cm弱を測り、第10号溝にほぼ平行して東西に走る。第10号溝同様、第8号溝の支流と思われる。西方は第10号溝からの落ち込みが続き、東方より10cm程低くなっている。第1、2層は埋め込み土である。第4～12層は新たに掘り直した痕跡とみえるが、幅120cm程とかなり規模が縮小化されている。第4～12層からは15世紀後半以降の遺物が出土した。開削は第10号溝と同時期と考えられるが、廃絶されて埋め立てられるのはやや下るという印象を受けている。本溝の規模を縮小したと同時に、第10号溝を完全に廃絶したと推定される。その位置関係から第16号掘立柱建物が存在した時期に、縮小した本溝が使用されていた可能性があらう。

第12号溝（第27図）

本溝は第8号溝南東部から枝分かれしたものであり、新旧2条の溝が確認される。東部の形状は調査区外に伸びているため不明であるが、U字状に湾曲して走っており、比較的直線的な他の溝とはやや様相を異にする。また、第8号溝との分流部では、溝幅がやや狭まっており、流入した水が容易に流出できない構造となっている。従って、第9～11号溝は敷地の排水等がその機能の主体であったと推定されるのに対し、本溝は滞水を主目的とした施設と考えられる。そのことは、溝に付随した作業場的集石遺構の存在からも裏付けられよう。詳細は後に譲り、以下個別に報告する。

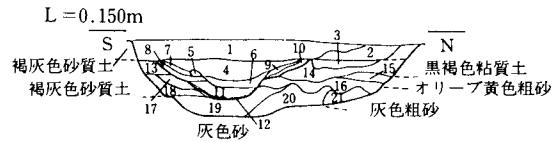
新溝

土層断面を観察した位置で幅210cm、深さ45cmを測る。旧溝を埋めた後、場所を北に1mほど移動して、やや浅目に掘り直される。第1層は埋め込み土である。埋め立て後に第30、31、36号土坑、柱穴が掘り込まれている。最南部の壁面には集石が見られた。出土遺物、周辺遺構との関連から、開削時期は16世紀後半、



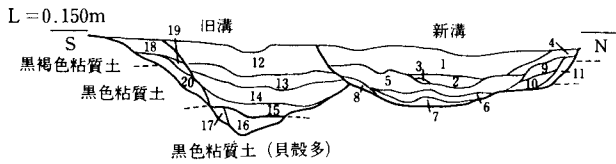
- | | |
|--------------|---------------|
| 1. 濁褐色砂質土 | 8. 暗オリーブ灰色粘土 |
| 2. 濁灰褐色砂質土 | 9. 暗緑灰色粘土 |
| 3. 灰褐色砂質土 | 10. 暗緑灰色粘質土 |
| 4. 褐色砂質土 | 11. 暗オリーブ灰色粘土 |
| 5. 緑灰色粘土 | 12. オリーブ灰色粗砂 |
| 6. 暗オリーブ灰色粘土 | 13. 暗緑灰色粘質土 |
| 7. 暗緑灰色粘土 | 14. 暗灰色砂質土 |

第10号溝



- | | |
|--------------|----------------|
| 1. 褐色粘質土 | 12. 黒褐色粘土 |
| 2. 灰褐色砂質土 | 13. 濁暗灰黄色粘質土 |
| 3. 濁褐色粘質土 | 14. オリーブ灰色砂 |
| 4. オリーブ灰色粘土 | 15. 灰色粘土 |
| 5. 暗灰色粘土塊 | 16. 緑灰色砂 |
| 6. 黒色粘土 | 17. 暗オリーブ灰色砂質土 |
| 7. 灰オリーブ色砂質土 | 18. 黒褐色粘質土 |
| 8. 暗灰色砂質土 | 19. 濁暗灰色砂質土 |
| 9. 灰色粘質土 | 20. 暗オリーブ灰色砂質土 |
| 10. オリーブ黄色粗砂 | 21. 灰色粗砂 |
| 11. 暗灰色粘質土 | |

第11号溝

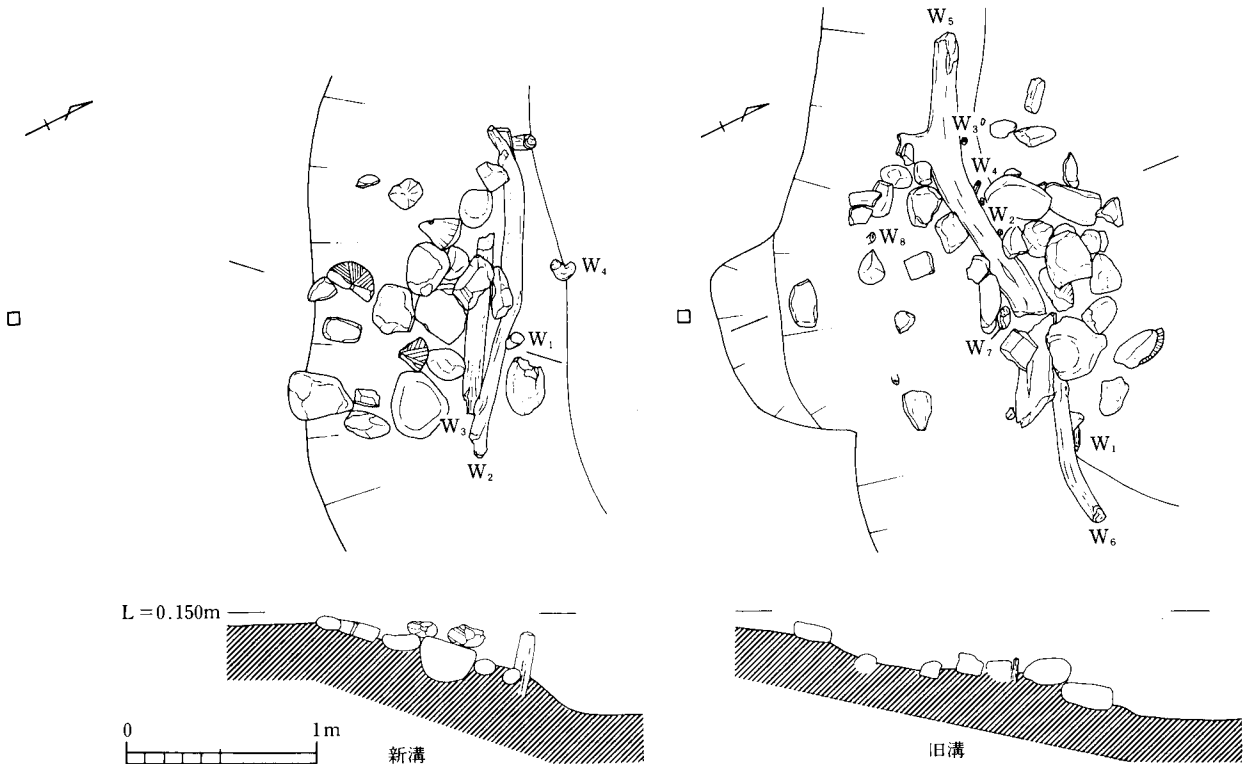


- | | | | |
|----------|-------------|--------------|-------------|
| 1. 灰黄色粘土 | 6. オリーブ灰色粘土 | 11. 濁黒褐色砂質土 | 16. 緑黒色粘土 |
| 2. 灰白色粘土 | 7. 濁灰色粘土 | 12. 灰黄褐色砂 | 17. 暗緑灰色粘質土 |
| 3. 黄灰色砂塊 | 8. オリーブ灰色砂 | 13. 黄灰色砂質土 | 18. 黄橙色粘土 |
| 4. 褐色砂 | 9. 灰黄色砂 | 14. オリーブ灰色粘土 | 19. 褐色粘質土 |
| 5. 灰白色粘土 | 10. オリーブ灰色砂 | 15. 緑灰色砂 | 20. 黄灰色砂質土 |

第12号溝



第27図 敷地C 溝土層断面図 (S = 1/60)



樹種同定対応番号

- | | | |
|----------------------------|----------------------------|-------------------------|
| 新溝 W ₁ -ISF1639 | 旧溝 W ₁ -ISF1645 | W ₅ -ISF1649 |
| W ₂ -ISF1640 | W ₂ -ISF1646 | W ₆ -ISF1650 |
| W ₃ -ISF1641 | W ₃ -ISF1647 | W ₇ -ISF1651 |
| W ₄ -ISF1642 | W ₄ -ISF1648 | W ₈ -ISF1652 |

第28図 第12号溝集石遺構 (S = 1/40)

廃絶時期が16世紀末～17世紀初頭に限定される短期間に営まれた溝である。

旧溝

新溝の南側に位置し、北壁が新溝に切られている。幅は180cm以上、深さ70cm前後を測る。第12～15層は掘り直し後の堆積であろう。その最上層第12層は埋め立て土と思われるが、その面から掘り込んだ遺構は検出されなかった。第13～15、17層には植物遺体が含まれる。地山最下層には多量の貝殻が見られ、鑑定の結果、ヤマトシジミであることが分かっている。最南部の壁面には新溝同様の集石が見られた。開削時期は15世紀代、廃絶時期は16世紀中葉か。

第12号溝集石遺構（第28図）

上述したように、第12号溝には、新旧ともに南壁部分に集石が見られる。新溝の集石遺構を調査後に掘り下げた結果、ほぼ同一箇所南よりに旧溝のそれを検出した。何れも溝底に近い箇所に横木を渡して杭で留め、周辺のおおよそ2m四方に石を配したものである。石は花崗岩などの自然石を中心とするが、破損した粉挽き臼、石鉢の破片等も含まれている。それらは不規則に配置されてはいるものの、石鉢は底部を上に向けるなど、概ねフラットな面を上にして置かれており、足場や作業台として用いられたことが窺われる。それを裏付けるのが新溝で出土した砥石である。第59図489がそれであるが、宝篋印塔の笠を転用した大型のものである。石材は砂岩とみられ、その粗さから見て、大型の道具を研いだのではないかと推定される。また、砥石の横には打撃痕のある石も見られた。

この集石遺構が、旧溝が埋められた後も新溝に新たに造られたということは、この遺構が本溝にとって必要不可欠なものであった事実を示しており、言い換えれば、水を溜めてこの場で何らかの作業をするために本溝を掘削したとも言えよう。

（3）掘立柱建物跡

第14号掘立柱建物（第29図）

1間×1間の掘立柱建物である。柱間寸法は南北約390cm、東西約170cmを測り、南北方向に細長い。柱穴は他の柱穴群に比して大きく、南北列には根石が見られる。南東隅の柱穴については根石の下に更に小礫を詰めており、その柱穴規模と併せてかなり大きい柱が建てられていたと推定され、他の掘立柱建物群とは異なった印象を受ける。第39号土坑を切って建てられる。主軸はN-21°-E。

第15号掘立柱建物（第29図）

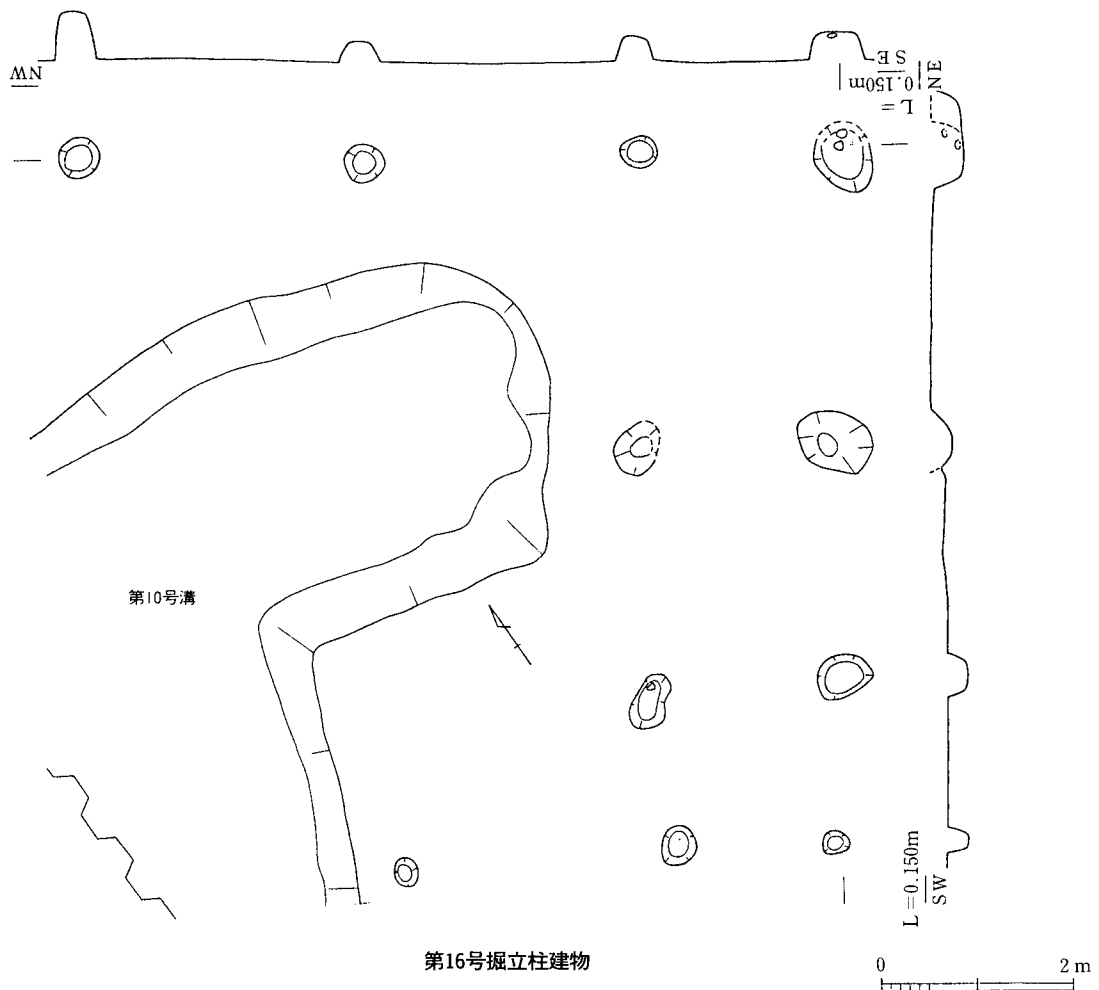
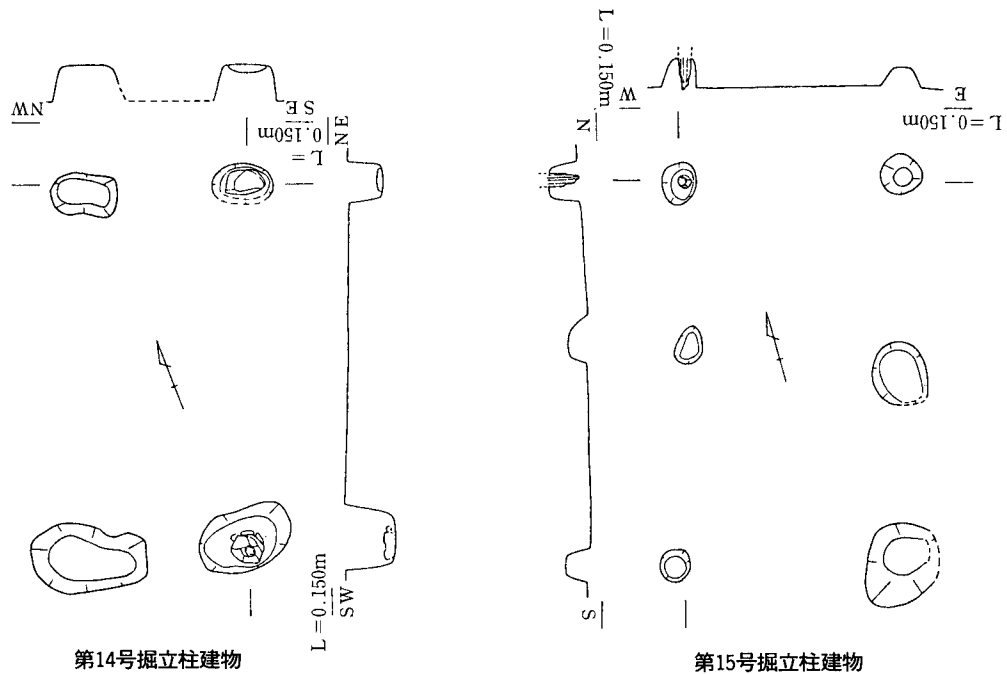
2間×1間であり、規模的には第14号掘立柱建物に近い。柱間寸法は桁行西側柱列北から約175、235cm、梁行は約230cm。第14号掘立柱建物同様、第39号土坑を切って建てられる。これら2棟は近接しており、同時に存在したとは考え難く、前後関係は明らかでないものの、場所をやや移動しての建て替えと思われる。主軸はN-15°-E。

第16号掘立柱建物（第29図）

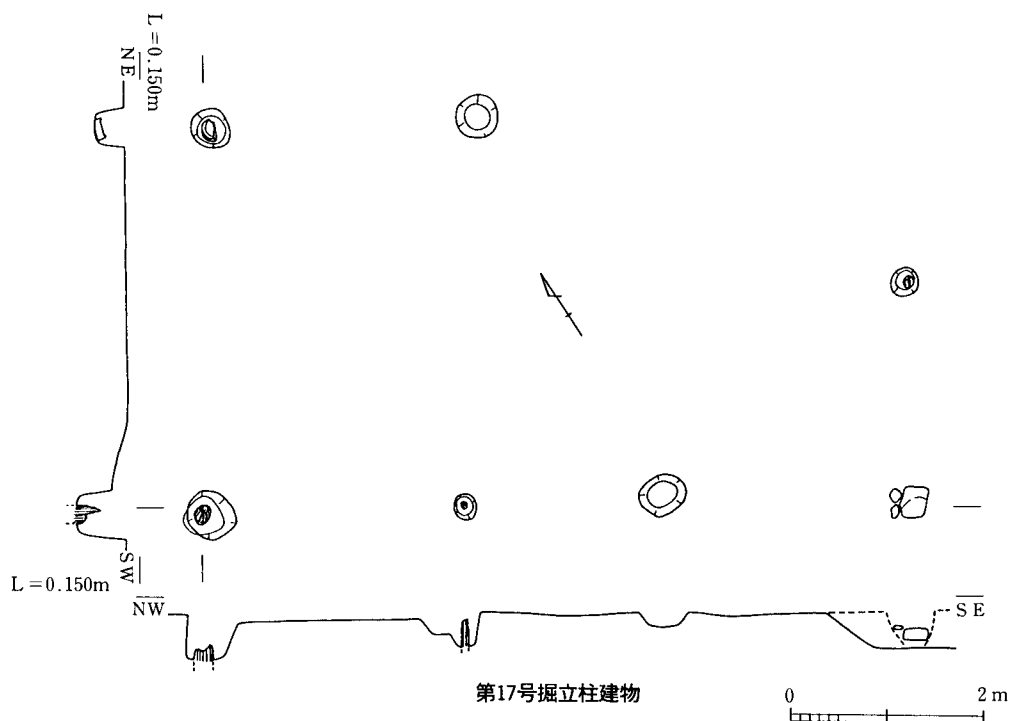
2間×2間の身舎南部及び東部二面に廂が付く建物と推定される。柱間寸法は北東側柱列が西から約300、295、210cm、南東側柱列が北から約315、245、175cm。第10号溝埋没後の15世紀後半以降に建てられたと考えられるが、耕作溝により攪乱を受けていることもあってか、溝上面にての柱穴の検出はできなかった。主軸はN-55°-W、又はN-35°-E。

第17号掘立柱建物（第30図）

3間×2間の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行南側柱列西から約275、215、265cm、梁行西側約405cmを



第29图 敷地C 掘立柱建物跡実測図1 (S = 1/80)



第30図 敷地C 掘立柱建物跡実測図2 (S = 1/80)

測る。梁行については、東側柱列との対応を考慮すると、間に柱穴が存在したことが想像される。第22、26、43号土坑を切って建てられ、第23号土坑に切られたとみえ、15世紀後半から近世初頭の間機能した建物と推定される。第16号掘立柱建物との前後関係は不明。主軸は $N-55^{\circ}-W$ 。

以上の掘立柱建物群は、第1～13号掘立柱建物同様、概ね中世に帰属するものと推定されるが、前述のように、AB両敷地の建物が、他の遺構を切ることなく建てられていたのに対し、本敷地の建物は既存の土坑及び溝を切り込んで建てられている。このことは、ABの敷地が当初から建物を築造することを目的に開発が進んだのに比し、Cでは当初、土坑等が掘削されるに留まり、ABにやや遅れて建物が建てられたと推定される。ただし、柱穴出土遺物からは、その時期差は証明できない。

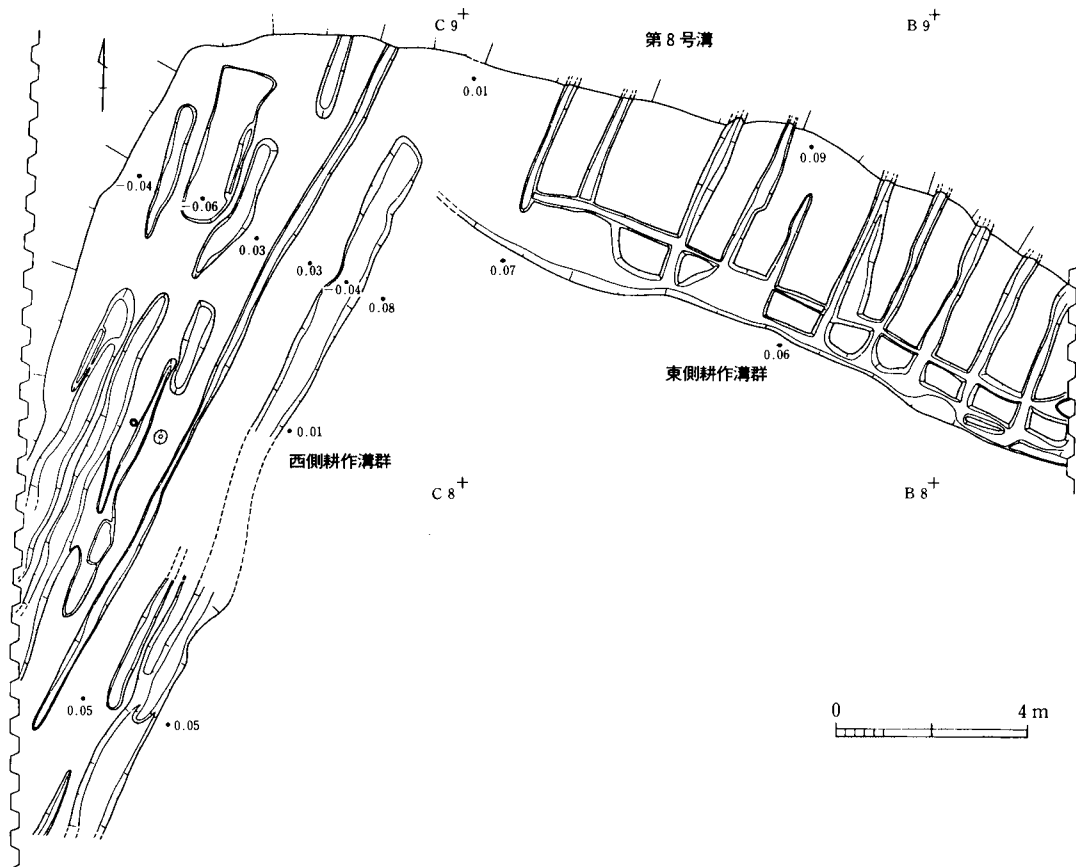
なお、確実に近世に下る柱穴が一基、敷地東方の第30号土坑南部にて、第12号溝新溝を切り込んだ形で検出されているが、対になる柱穴は確認されなかった。

(4) 耕作溝 (第31図)

A～C 9区、C 8区付近にて検出した。大きくは第12号溝から第8号溝東半上面にかけて連なる東側耕作溝群と、第10、11号溝から第8号溝西半にかけて続く西側耕作溝群に分けられる。

東側耕作溝群は、南部の北西―南東方向に走る2条の溝に直行する形で数条の溝が北東方向に伸びる。第8号溝上面まで溝が続くのは確実であるが、プランがはっきりせず、北東端は確認できなかった。ただし、第8号溝セクションベルト上面にて観察できた1条に関しては、第8号溝第3次埋め立て部までしか伸びておらず、土層断面にて観察した1条については第1次埋め立て部にて収束している。残る数条も同様であったとは断言できないが、その可能性の方が高いと考えている。おそらく第8号溝がまだ使用されている段階で、耕作溝も使用されたとみられる。上限は第30、31、36号土坑を切っていることから17世紀後半頃、下限は第8号溝が埋まる18世紀前半代か。

西側耕作溝群は東側のそれに対して幅、長さ共に勝っているが、やや不定形である。主軸はほぼ同一であ



第31図 敷地C 耕作溝全体図 (S = 1/160)

る。2条程が第8号溝上面まで続くが、わずかな伸びで収束したと記憶している。これも最終段階の第8号溝南壁までは到達していない可能性が考えられる。上限は第16号掘立柱建物廃絶以降である。

東西両群が同時に存在したかどうかは不明である。ただし、近世の土坑が敷地Cの東半に偏在することからすると、西側耕作溝群が存在する西半には、東半より早く空間が生じたと推定される。そう考えると、第30、31、36号土坑等の井戸が使用されていた時期に、西側耕作溝群が東側に先んじて掘削され、住居部の更なる東遷によって空いた東側に耕作溝が移動されたとも推測される。遺物等による検証ができず、あくまで可能性にすぎないものの、そのように考えることもできよう。

第5節 水田部

敷地の北部及び南部には水田部と推定される遺構僅少地帯が広がる。北側水田部では東西に伸びる畦畔が3条と、はざ穴と思しき径10~20cm程度の小ピットが数基検出された。これらの時期は不明である。

南側水田部では北側のような畦畔は確認できなかったが、はざ穴らしい径20cm程のピット、及びその土質から水田部ではなかったかと考えている。耕作土の床土と認識した層からは11世紀後半から16世紀にかけての遺物が出土しており、中には完形の粉挽き白下白も含まれている。

敷地内の中近世の遺構から稲粃が検出されており、少なくとも中世には周辺地域で稲作が行われていたらしいが、これらが中世の水田部であるとは明確にはできなかった。

第5章 遺物

第1節 溝

第4号溝（第32図）

1は京・信楽焼系の小杉茶碗。2は盤とみられ、腰部にカンナ目が明瞭に残る。産地は不明である。3は獅子を象った土人形、4は煙管の吸い口部である。これらは全て18世紀後半～19世紀前半の製品と思われる。

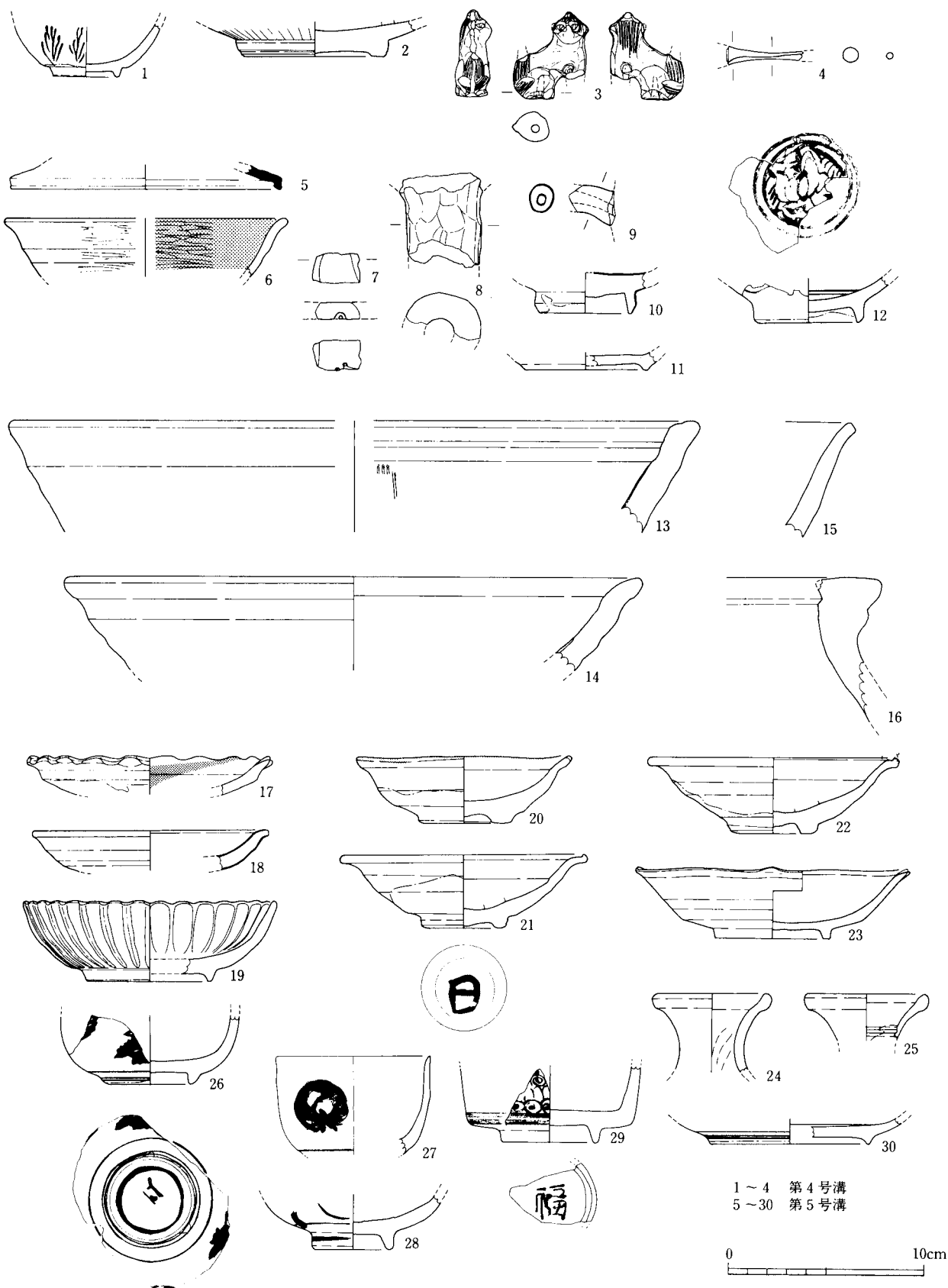
第5号溝（第32、33図）

5は須恵器坏蓋、6は内面黒色土器碗である。7は黒色の粘板岩製で、表面が平滑で裏面が粗い加工であること、裏面のU字形の紐穴から、石帯の破片であろう。8は須恵器質の陶片である。胎土は灰色で気泡を多く含み、外面は降灰により光沢を帯びる。外面にはへら状工具による調整痕が確認される。筒状を呈し、上方にやや広がりを見せることから、把手、或いは脚部等と推測される。

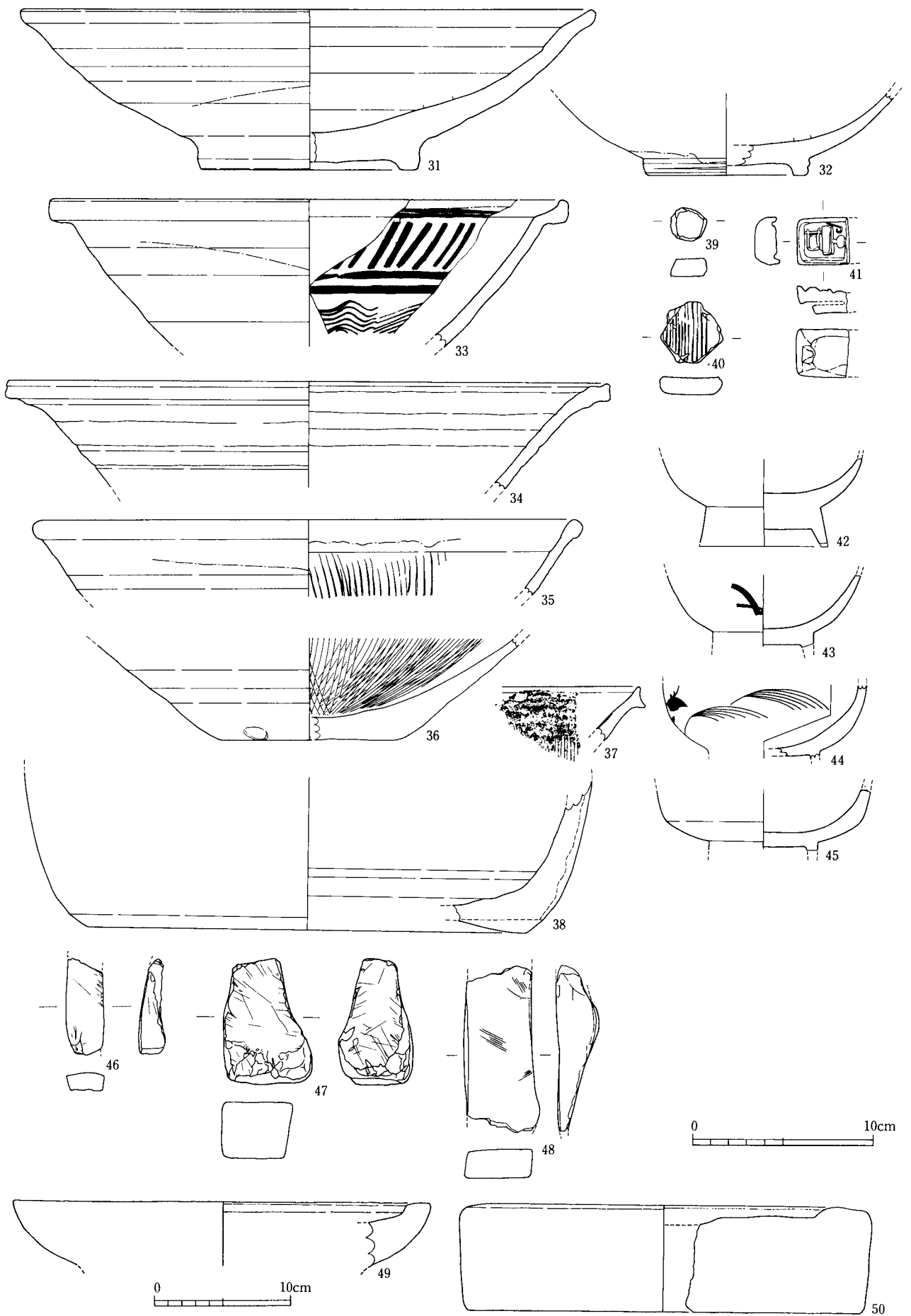
9、10、12は中国製品である。9は青白磁の水注の注口部である。10は青磁碗の底部で、灰色で粗い素地にオリブ灰色で透明感のある釉が薄く掛かる。畳付け、高台内は無釉とする。12は染付碗である。11は瀬戸・美濃焼の皿。内底面には釉止めの段を設け、内底、畳付けを除いて灰釉を施すが、白濁しており、熱を受けたとみえる。外底には輪トチ跡が残る。大窯段階の製品であろう。14は珠洲焼の片口鉢。13、15、16は越前焼。15は捏鉢で、口縁部は外反し、端部で面を取っており、内面には降灰が見られる。胎土は赤灰色を呈し、堅緻である。13は擂鉢、16は甕である。15は12世紀後半、9～14は15世紀～16世紀前半、16は16世紀中葉～後葉の年代が与えられよう。以上の5～15は本溝開削以前の遺物であり、長期間の使用が予想される16を除いて、敷地A・Bからの混入と考えられる。

17は越中瀬戸焼の輪花皿で、口縁内外面に鉄釉が掛かるが、おそらく内底は無釉となろう。鉄釉を施した後、斜めに灰釉を掛け分けている。18は志野の丸皿で、素地は灰白色を呈し、気泡が多く入る。釉も灰白色で、口縁部に細かい貫入が見られる。19は型押しによる志野の菊皿である。3点とも16世紀末～17世紀初の製品と判断される。23は口縁端部を外方に折り曲げ、一部を凹ませることによって、かすかに輪花型に整形する皿である。畳付け、高台内を除いて灰釉が掛けられているが、被熱のためか白濁している。産地は判断としないが、その素地、高台の造りなどから、美濃焼の可能性が高い。年代は18世紀前後と考えられる。

20～22、24、25、31～36は肥前系陶器である。20は口縁部がかすかに輪花形を呈す皿である。釉はオリブ灰色を呈し、内底、畳付けには砂目跡が4カ所見られる。口縁端部には燈芯油痕が残り、燈明皿としての使用が知られる。このように肥前系陶器皿に、燈明の痕跡が付着した製品を数点確認している。21は口径12.5 cm程の溝縁皿で、素地は明褐灰色を呈し、やや白濁した釉が掛かる。外底部には「日」と墨書している。肥前系陶器皿に墨書したものは数点出土しているが、「日」及び「×」状の二種類しか確認されない。22も同法量の溝縁皿で、素地が灰白色を呈し、釉は緑色を帯びて白濁している。いずれも内底部に4箇所砂目跡を残す。24は褐釉、25は藁灰釉を施した瓶類の口縁部である。31～34は鉢。31、32は胎土目跡を有し、それぞれ釉は灰オリブ色、オリブ黄色を呈す。34は赤褐色の素地に同系色の釉が掛かる。33は橙色の素地に白泥を塗り、それを掻き落とすことにより文様を描く。更に内面の一部に灰釉、口縁部内面から外面下半近くまで鉄釉を施している。35、36は擂鉢である。これらの年代は20～22が大橋編年II期、35、37がII～III期、33がIV期と考えられる⁽¹⁾。



第32図 溝出土遺物実測図 (S = 1/3)



第33図 第5号溝出土遺物実測図 (S = 1/3, 49、50は S = 1/4)

30は肥前系磁器の皿、26、27、29は碗である。26は低い高台をもつ丸碗であり、豊付けのみ露胎とし、その周辺には砂が溶着している。胴部はコンニャク印判により施文される。27もコンニャク印判による団鶴の文様をもつが、26よりも小ぶりで、口縁部はやや外反する。29はやや大振りの筒茶碗であり、胴部には渦巻き文、外底部には「福」の裏銘を持つ。28は陶胎染付け碗、37は越中瀬戸焼の播鉢である。38は瓦質の火鉢類で、断面の観察によると、一旦成形した後、更に粘土を貼り付けて器壁を滑らかに仕上げた様子が窺える。色調はにぶい黄橙色を呈す。26～28は大橋編年Ⅳ期に位置付けられよう。

39、40は円盤状陶製品であり、前者は越前焼、後者は珠洲焼の片口鉢を転用する。41は型押し成型の土製品である。何を象ったものか定かではないが、左端は桶状のものにも見える。径2mm程度の穿孔が見られ、成型後に乾燥させた際の棒穴とも推測される。

42～45は漆器碗である。何れも口縁部を欠失しており、口径は明らかでないが、高台基部外径は5.6～6.4cmと近似する。ただし42は底部がかなり厚く、他と形態を異にする。42～44は内面赤色外面黒色漆であり、43、44は外面に赤色漆で文様を描く。44はススキ文であろうか。42、44の内面では黒色の下地が観察される。45は腰部がやや張るタイプであり、高台内は黒色漆、それ以外には赤色漆を施している。赤色漆の下地は黒色である。これらは全て16世紀末以降の製品と思われる。

46～48は全て、凝灰岩質の中砥石である。49は砂岩質の茶臼の受け皿部の破片である。本遺跡では葉茶を挽くための茶臼は49を含め、わずかに小片2点のみの出土であり、粉挽き臼に比して非常に少ない。50は粉挽き臼の上臼。臼目が確認できないほど摩耗している。石材は火山礫凝灰岩であり、通称桑山石と同定されるものである。その他銅銭が13枚出土し、うち11枚は錆着状態で溝底から出土した。一端の文字は永樂通宝と読める。

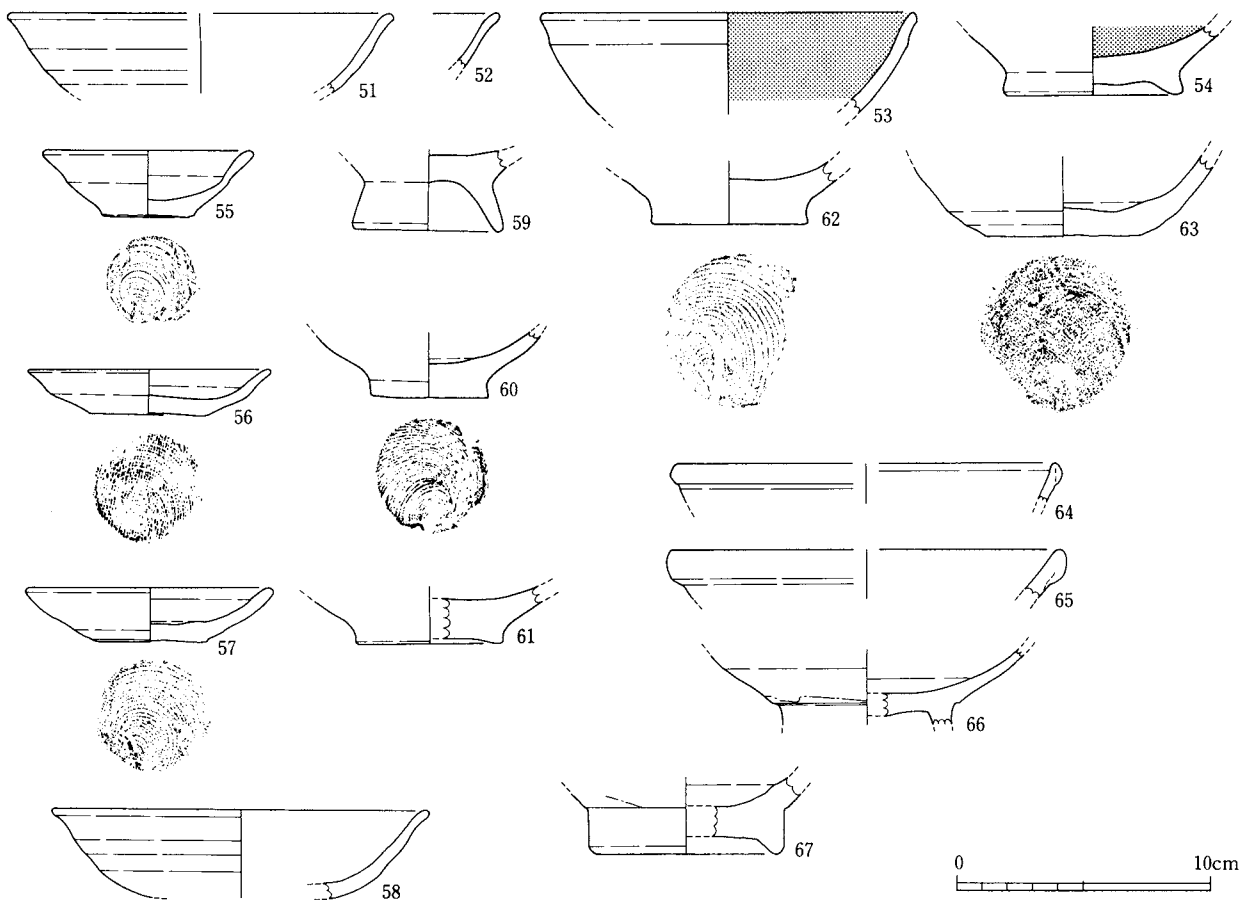
第8号溝（第34～41図）

本溝は、遺跡の営続期間にほぼ重なるほど長期にわたって使用された溝であり、遺物の種類、出土量とも全遺構中最も多い。幾度か掘り直しが為されていることから、溝に廃棄或いは転落した遺物が全て残存する訳ではないが、この地に生活した住人の移り変わりを物語っている。出土遺物は、大きく見ると上層には新しい遺物が多く、下層には古相を示す遺物が多い。しかし最下層からも最も新しい遺物が数点出土しているため、多量の遺物が出土していながら、良好な出土状況になく、層ごとに時期を押さえることができない。そのため、現地調査では上層、下層、最下層として遺物を取り上げたが、ここでは層を区別する事なく報告したい。

51、52は灰釉陶器碗、53、54は内面黒色土器碗である。54は底部糸切り離しの後、高台を貼り付けている。55～63は土師器である。55は口径8cm、器高2.6cmを測る小型で深めの皿で灰白色を呈す。56、57は口径がともに9.6cm、器高は1.8cm、2.1cmを測る、口径の割に器高の低い皿で、浅黄橙色を呈す。3点とも底部は明瞭な糸切り痕を留め、内外面には丁寧なヨコナデが施される。胎土には57のみに大量の海綿骨針が含まれる。60、61も皿とみられ、底径4.6cm、5.6cmを測り、色調は橙色、浅黄橙色を呈す。58は浅型の碗で、内外に丁寧なヨコナデが施され、稜線が明瞭に観察される。色調は浅黄橙色。62、63も碗とみられ、底部に糸切り痕を留め、内外とも丁寧なヨコナデが施される。底径はそれぞれ6.2cm、6.1cmを測り、色調は褐灰色、灰白色を呈す。

64～67は中国製の白磁である。何れも小片であるが、64～66は太宰府分類の碗Ⅱ、Ⅳ、Ⅴ類⁽²⁾、67は瓶類とみられる。

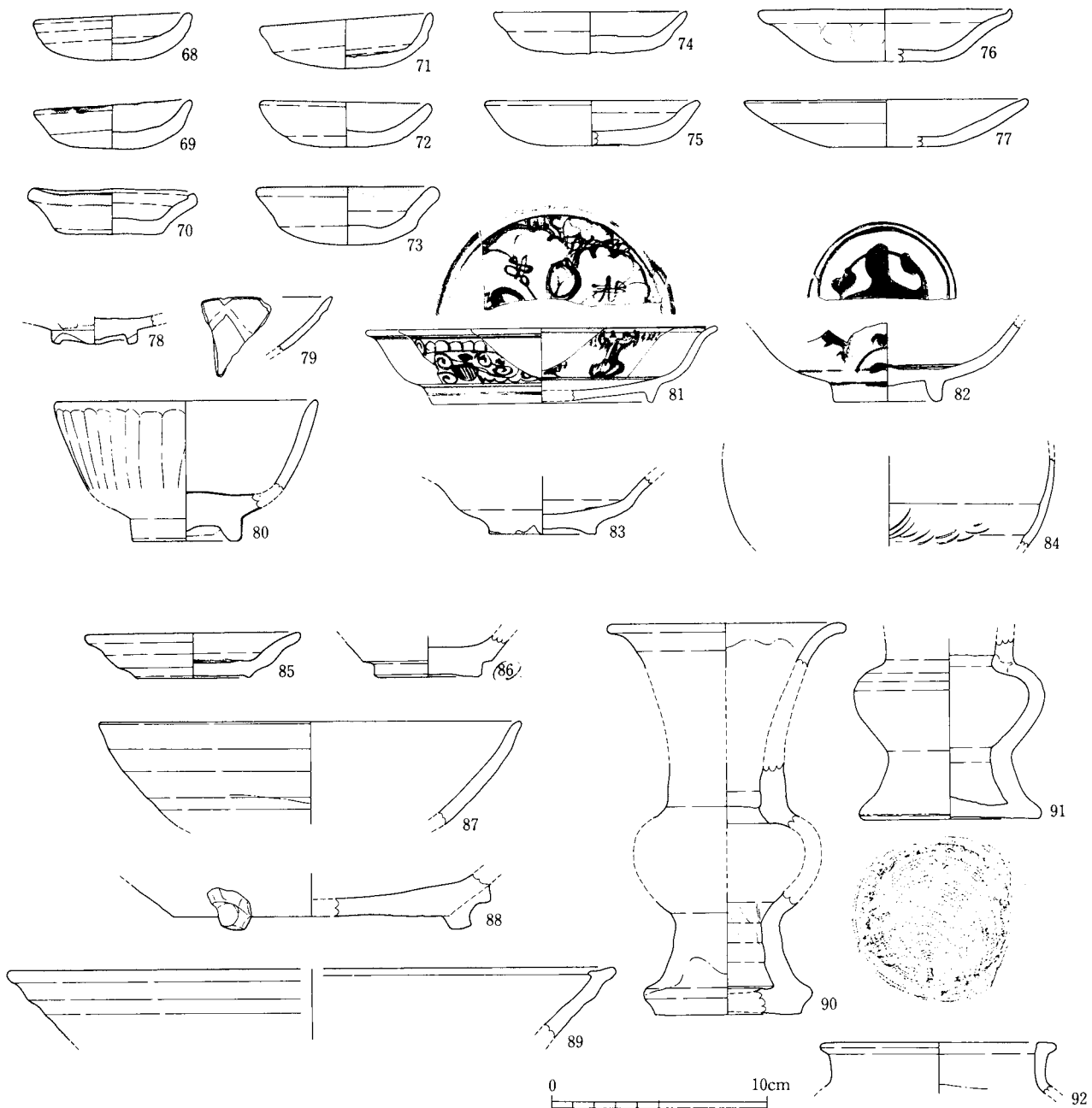
以上の多くは概ね11世紀後半から12世紀代に位置付けられよう。同時期の遺物は他にも多く出土してお



第34図 第8号溝出土遺物実測図1 (S = 1/3)

り、その多くは最下層或いは地山直上からの出土であることから、溝の開削時期を示す遺物であると考えられる。68~77は土師質土器皿である。68~73は口径7~8cmを測る。口縁部外面に一段のナデを軽く施し、内面はの字状にナデ上げる。68の外底部には指頭圧痕、71には板目状圧痕が見られる。70の口縁端部は内屈みに収め、平底であることと合わせ、他と形態を異にしている。色調は71、74が褐灰色、69、72が灰黄褐色、68、70がにぶい黄橙色を呈す。全て胎土に海綿骨針を含み、口縁部には燈芯油痕が残る。74、75は口径9cm代を測り、口縁部外面に一段のナデを施す。74の口縁部内面、及び外底部には調整の際の布目状圧痕が見られる。色調は74がにぶい黄橙色、75は橙色を呈し、胎土には海綿骨針を含む。76、77は口径11cmを越える製品である。76は体部外面を指押さえし、口縁端部を大きくつまみ上げる。胎土には海綿骨針を含まず、精良であることから、水簸されたとみえる。色調は浅黄橙色を呈す。77はいわゆる京都系の製品である。口縁部外面にナデを施し、見込みには低い凸圈線が巡る。胎土は比較的精良であるが、少量の礫が混入する。色調は灰白色。これら2点と69は、南壁埋め立て土からの出土である。時期は、68~75は14世紀中葉~15世紀中葉に収まるもの、77が16世紀前半、76が17世紀初頭と思われる。

78~82は中国製品である。78は高台を挟り込む白磁小皿、79は青磁の鎚蓮弁文碗である。80も青磁の線描き蓮弁文を持つ碗で、素地は灰色、釉はオリーブ灰色を呈す。高台途中まで施釉した後、畳付けの釉を掻き取っている。81は端反りの染付皿である。外面に唐草文、内面にはアラベスク文を描く。82はやや軟質で淡橙色の素地に白濁した釉が掛かり、呉須は濃紺に発色する。外面には唐草文が見られる。17世紀初頭頃に輸入された、漳州窯系の染付碗と判断される。83、84は朝鮮製である。83は全面に施釉された小碗で、釉は青灰色を呈する。84は舟徳利の胴部下半である。器壁は薄く、内面にはタタキ成形時の同心円文が見られる。

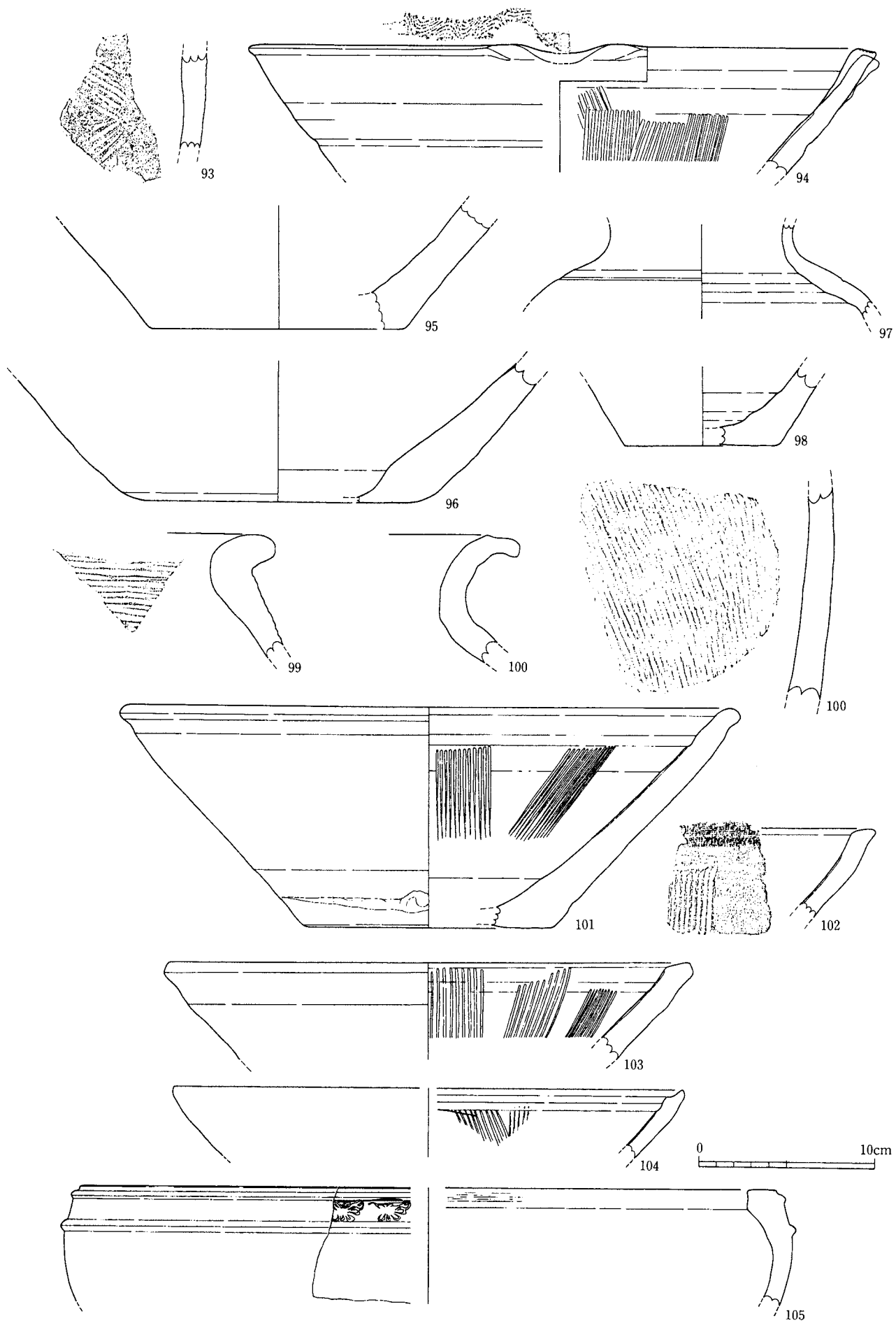


第35図 第8号溝出土遺物実測図2 (S = 1/3)

78は15世紀前半、80は15世紀後半、81は15世紀後葉～16世紀前葉、83、84は16世紀代に流通した製品である。なお、81は121の肥前系陶器とともに南壁部から出土しており、17世紀前半頃に廃棄された可能性が指摘される。

85～92は瀬戸・美濃焼であり、86の天目茶碗以外は、灰釉製品である。85は稜皿で、全面に施釉した後、内底と畳付けの釉を掻き取っている。86は内反り高台で、高台周辺には薄いサビ釉を施す。87は平碗で、口径約20cmを測り、胴部はやや丸みを帯びる。88は折れ縁深皿で、一部に釉の付着が見られるものの、内底部に施釉は見られない。89も折れ縁深皿とみられるが、卸目付き大皿となる可能性もある。90、91は尊式花瓶で、90の脚部には絞り目が明瞭に見られる。92は袴腰香炉である。85は大窯第3段階⁽³⁾、86～92は古瀬戸後期の製品であり、中でも87、91はやや古手のものと判断される⁽⁴⁾。

93は加賀焼の肩部片であり、押印の特徴から、湯上ユノカミダニ窯の製品と推定される⁽⁵⁾。色調は灰白色



第36图 第8号沟出土遗物实测图3 (S = 1/3)

で、焼成も良い。94～96は珠洲焼の片口鉢である。95、96の内面は卸し目が判別し難いほど摩滅しており、後者は底部が極めて薄くなっていることから、底が抜けるまで使用されたと考えられる。すりこ木等で描つたとみられる円形の使用痕も数条確認される。色調はともに灰色を呈す。97、98は珠洲焼の壺で、前者は肩部に一条の沈線が巡る。降灰が見られ、頸部内面には炭化物が付着する。器面は灰色を呈す。99、100は珠洲焼の甕で、100は口縁部片と胴部片を示したが、胎土が暗赤灰色を呈し、堅緻な特徴から同一個体と判断した。頸部が長く、口縁端部が嘴状に張り出す形態から、吉岡編年のI期の製品とみられる⁶⁾。101～104は越前焼の播鉢である。101は口径約35cmを測る。12本で一単位を成す卸し目が施されるが、その下半は、使用のため摩滅している。色調は赤褐色を呈す。102、103は口縁端部を面取りしており、後者は端部間際より卸し目を施条している。色調は102がにぶい赤褐色、103が淡橙色～橙色を呈す。104は、2.7cm幅9本を数える卸し目が密に施されている。断面は灰色、器表は黄灰色～赤灰色を呈し、非常に堅緻である。南壁埋め立て土から出土した。101は15世紀後半、102、103は16世紀後半、104は17世紀初の製品である。105は瓦質の火鉢で、口縁部に2本の突帯を巡らし、その間にスタンプ文を押す15世紀代に普遍的に見られる形態を呈す。

106、107、110は越中瀬戸焼。106、107は口径11cm弱の丸碗である。何れも光沢のない、にぶい赤褐色を呈す鉄釉を薄く胴部下半まで施す。素地は灰色で、白色の微砂粒を多く含み、堅緻である。前者には口縁部内外面と内底付近に一部黄褐色の灰釉が掛かる。いずれも17世紀初頭の製品とみられる⁷⁾。110は皿の底部である。素地は軟質で灰白色を呈し、高台は削り出しているが、かなり摩滅している。高台周辺と内底は無釉とするが、胴部に茶褐色の鉄釉が見える。

108、109は瀬戸・美濃焼である。108は天目茶碗で、灰白色の素地に赤褐色～黒褐色に発色した鉄釉を施し、胴部下半は露胎とする。大振りで、口唇部を幅広く取る器形からすると、大窯第5段階の所産であろうか。109は高台を持つ瓶類で、高台内と内面は露胎とし、外面には赤黒色を呈する鉄釉を薄く施す。近世以降の製品と思われる。

111～133、138～140は肥前系陶器である。111～115、119は皿で、内底或いは高台周辺部に胎土目跡を残す。111、112は口縁部を内湾気味におさめるタイプであり、素地は灰色で外面胴部下半を除いてオリーブ灰色の釉が掛かり、後者には細かい貫入が多く入る。112の高台内から外面胴部下半、口縁端部にはタール状の付着物が見られる。113、114は胴部に明瞭な段を設けるタイプで、前者は絵唐津である。素地はにぶい黄橙色で、見込みにかすかに草文を描いているようであり、その上に施した灰釉が灰オリーブ色に発色する。114は灰色の素地に細かい貫入の入った灰オリーブ色の釉が掛かる。115、119は大振りで口縁部をやや外反させるタイプ。前者の素地は灰白色、釉は灰オリーブ色を呈し、口縁外面に重ね焼きによる溶着痕が見られる。後者の素地はにぶい橙色を呈し、釉はやや白濁する。以上は大橋編年I期の所産である。

116～118、120～122は砂目跡を持つ皿。116は口縁部が外反するタイプで、素地は灰白色、釉は透明感のないオリーブ灰色を呈す。117、118、120は胴部に段を持つタイプであるが、同様の胎土目製品に比べると口縁部がやや肥厚し、高台内の削り込みは浅い。117の素地はにぶい橙色で黒色の鉾物粒を多く含み、釉は灰オリーブ色を呈す。内底には重ね焼時の溶着痕が残る。118は灰白色の素地に灰オリーブ色の釉を薄く掛け、外底部には「×」と墨書する。120の素地はにぶい黄橙色、釉は灰白色を呈す。同様に外底部に「×」の墨書がある。121はやや深めの溝縁皿で、高台は高く、丁寧に削り出している。素地は灰白色で細かい気泡が多く、やや軟質であり、白濁した釉を高台内まで全面に施す。122は底部を糸切り離しのまま残す。素地はにぶい赤褐色を呈し、硬質である。釉は灰白色で、内面と外面上半に掛かるようである。以上は大橋編年II期の所産とみられる。

123は碗底部、124～126は口縁部がやや外反する碗である。124は器高が高く、高台も丁寧に削り出す。素地は赤褐色、釉はやや緑がかった鉄釉が掛かる。125は口径の割に器高が低く、ぼってりとした印象を受ける。高台の削り出しは甘く、外底部には焼成時の溶着物が見られる。素地は灰色で気泡を多く含み、暗オリーブ褐色を呈する鉄釉を施す。126の素地は灰白色、釉は明オリーブ灰色を呈す。127、128は天目茶碗で、前者の胴部は直線的に立ち上がり、口唇部はやや屈曲する。素地は浅黄橙色で、褐色に発色した鉄釉が薄く掛かる。後者はやや丸味を持って立ち上がり、高台も丁寧に削り出す。素地は浅黄褐色で黒褐色の鉄釉が掛かる。130は胴部から口縁部にかけて直立気味に立ち上がる碗である。灰色の素地は緻密であり、貫入の多く入った灰白色の釉が掛かる。129は刷毛目唐津の丸碗で、素地は赤褐色で均質である。外面は白土で文様を描き、内面は打ち刷毛目とした後、透明釉を施す。131は皿の可能性もあるがここでは碗とした。高台は高く、丁寧な造りである。素地は灰白色を呈し、さっくりとしている。釉は白濁しており、畳付けを除いて全面に施釉される。素地の観察からすると美濃焼風であるが、造りが非常に121に似ており同一窯の製品ではないかと考えている。皿に比べると碗の年代は判別し難いが、125が大橋編年Ⅰ期、124、126はⅡ期、127、128はⅡ～Ⅲ期、129はⅣ期の製品とみられる。

132は大皿。灰色の素地に灰釉を施し、その上に鉄釉で文字を書く。文字の正位は中心を向いており、見込みを中心にして円形に文字が配列するものと推定される。133は片口で、素地は橙色で緻密であり、白色で不透明な釉が内面と外面片口部より上方に掛かるが、口縁端部は露胎とする。

138、139は播鉢である。138は口縁部を内面に折り返し、卸し目は細かく、3cm幅で13ないし14本認められる。素地は褐灰色で緻密であり、口縁部内外面に鉄釉を施す。139は底部を碁笥底に造り、外底には何か繊維様の付着物が認められる。一単位7本以上の卸し目が右回りで密に施されており、内底部は使用によりかなり摩滅している。素地はにぶい黄橙色で、細かい気泡を含む。139は17世紀前半、138は17世紀前葉から中葉の所産とみられる。

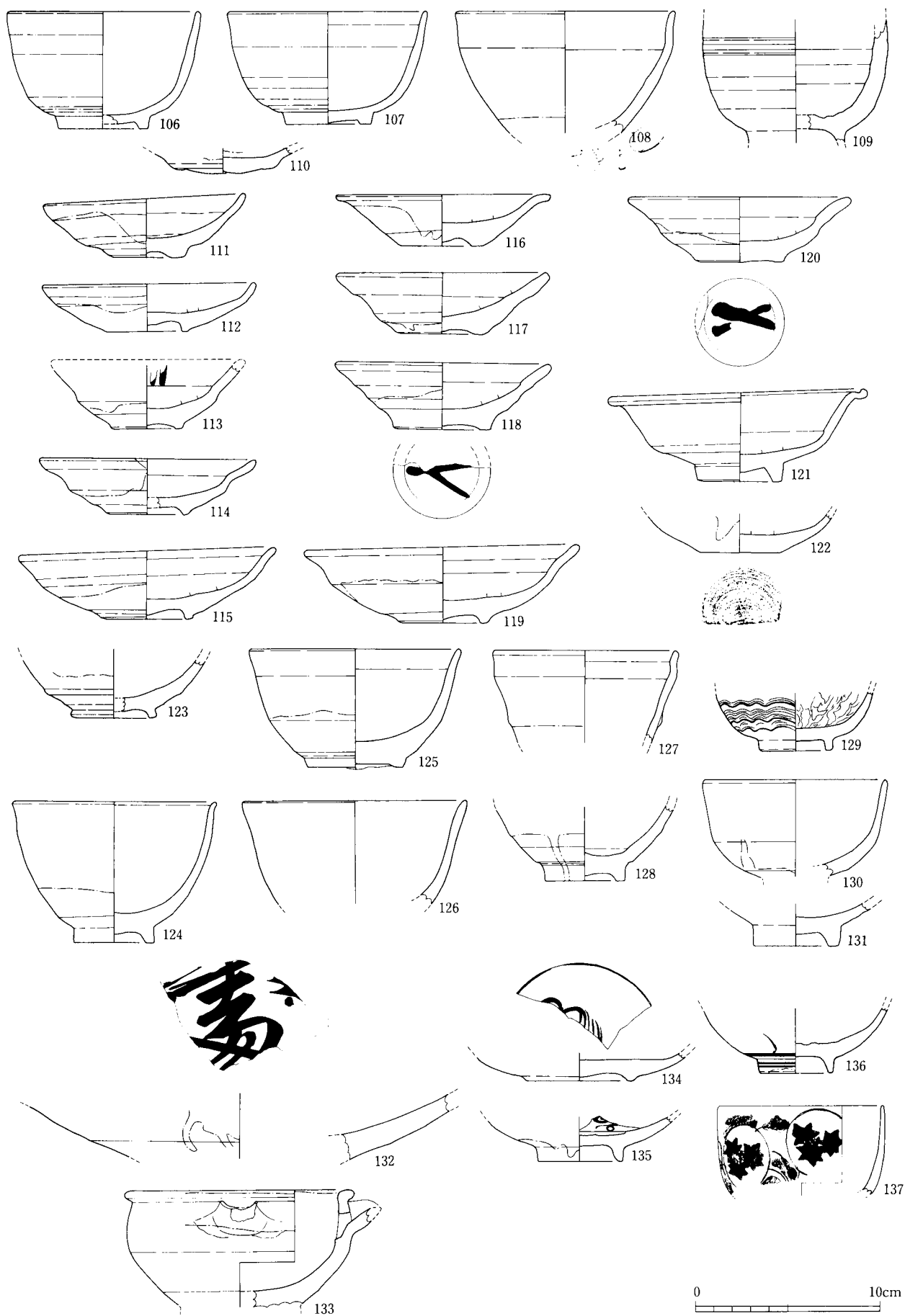
140は口径35cm前後の甕である。頸部はほぼ直立し、口縁部は断面T字型となり、丸味を帯びた肩部には2条の突帯が巡る。内面には同心円状の当て具痕が残り、口縁端部には貝目跡が見られる。素地は赤灰色で、白色の微砂粒を多く含み、縞状を呈す。緑がかった灰白色の釉が口縁端部を除いた内外面に薄く掛かっている。大橋編年Ⅰ～Ⅱ期初頭の製品であろう。

134～137は肥前系磁器である。134、135は皿。134は畳付けを除いて施釉され、畳付けには砂が付着する。素地は灰色味がやや強い。135は高台内外面を無釉とし、見込みは蛇ノ目釉剥ぎされる。釉はやや青味を帯び、染付も見られるが、白磁に分類されている製品である。136、137は碗。136も見込みを蛇ノ目釉剥ぎし、畳付けを除いて施釉される。137はコンニャク印判による装飾を持つ。134が大橋編年ⅡまたはⅢ期、135～137はⅣ期の年代が与えられよう。

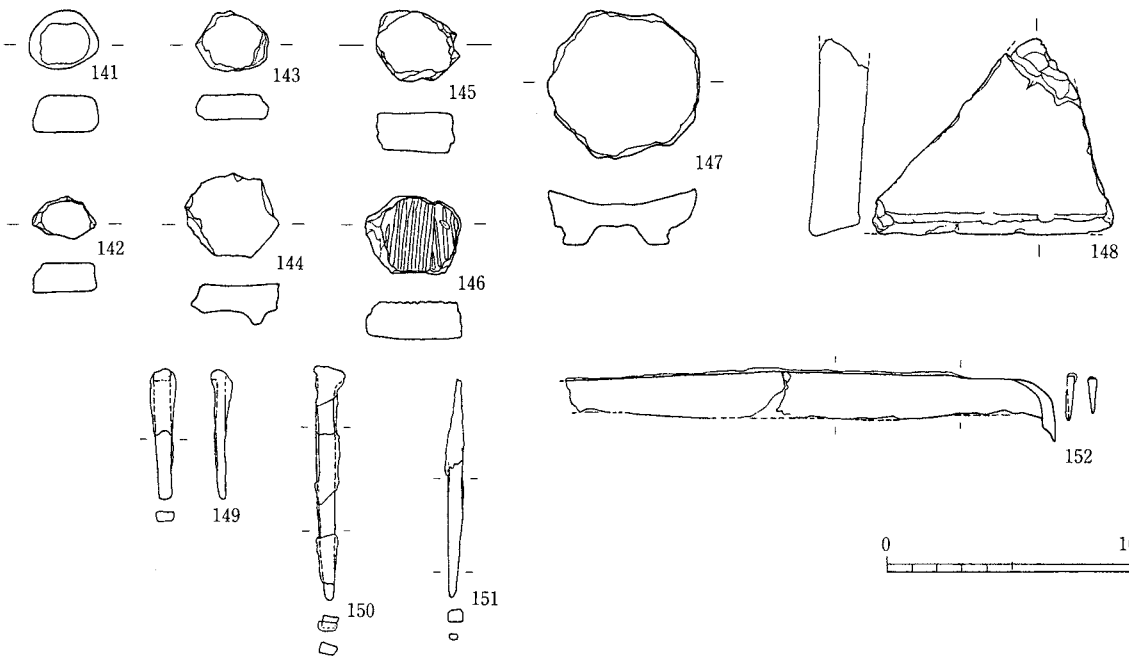
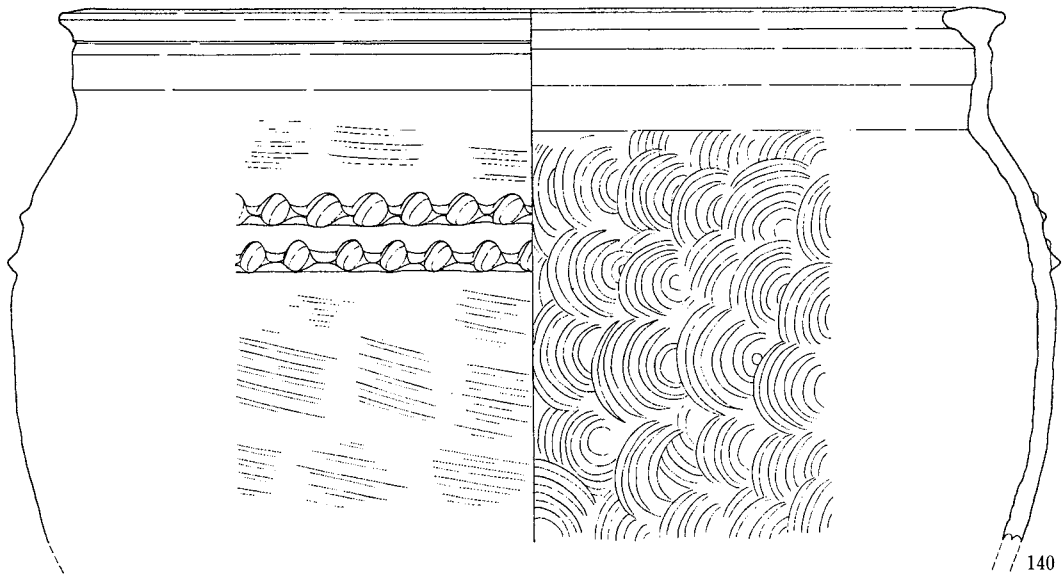
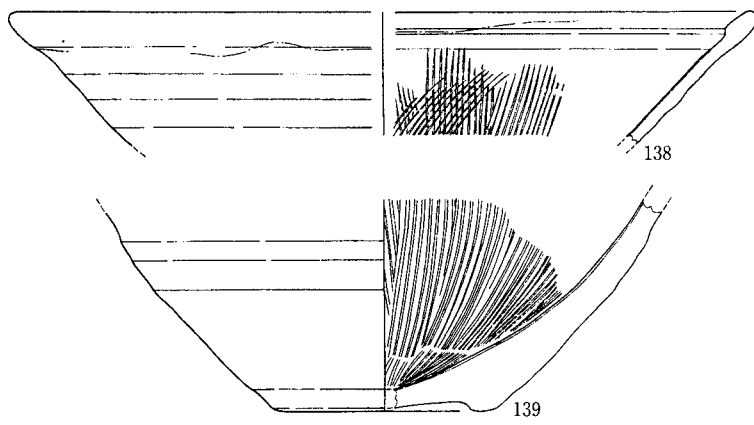
以上近世の遺物は、134が最下層からの出土であるなど、上層から最下層まで幅広く出土しており、層位ごとには年代を押しえられない。しかしながら、南壁部、及び南壁埋め立て土中からの出土は107、108、112、114、119、121、127など17世紀前半までにほぼ収まるものである。

141～147は円盤状陶製品。141、143、145、146は珠洲焼片であり、前二者は甕、146は播鉢を転用する。142は越前焼片である。144、147は肥前系陶器片で、前者は砂目跡を持つ皿、後者は碗の底部である。148は磚、又は瓦である。その他に、土製品としては様々な形態の土錘が約90点出土している。

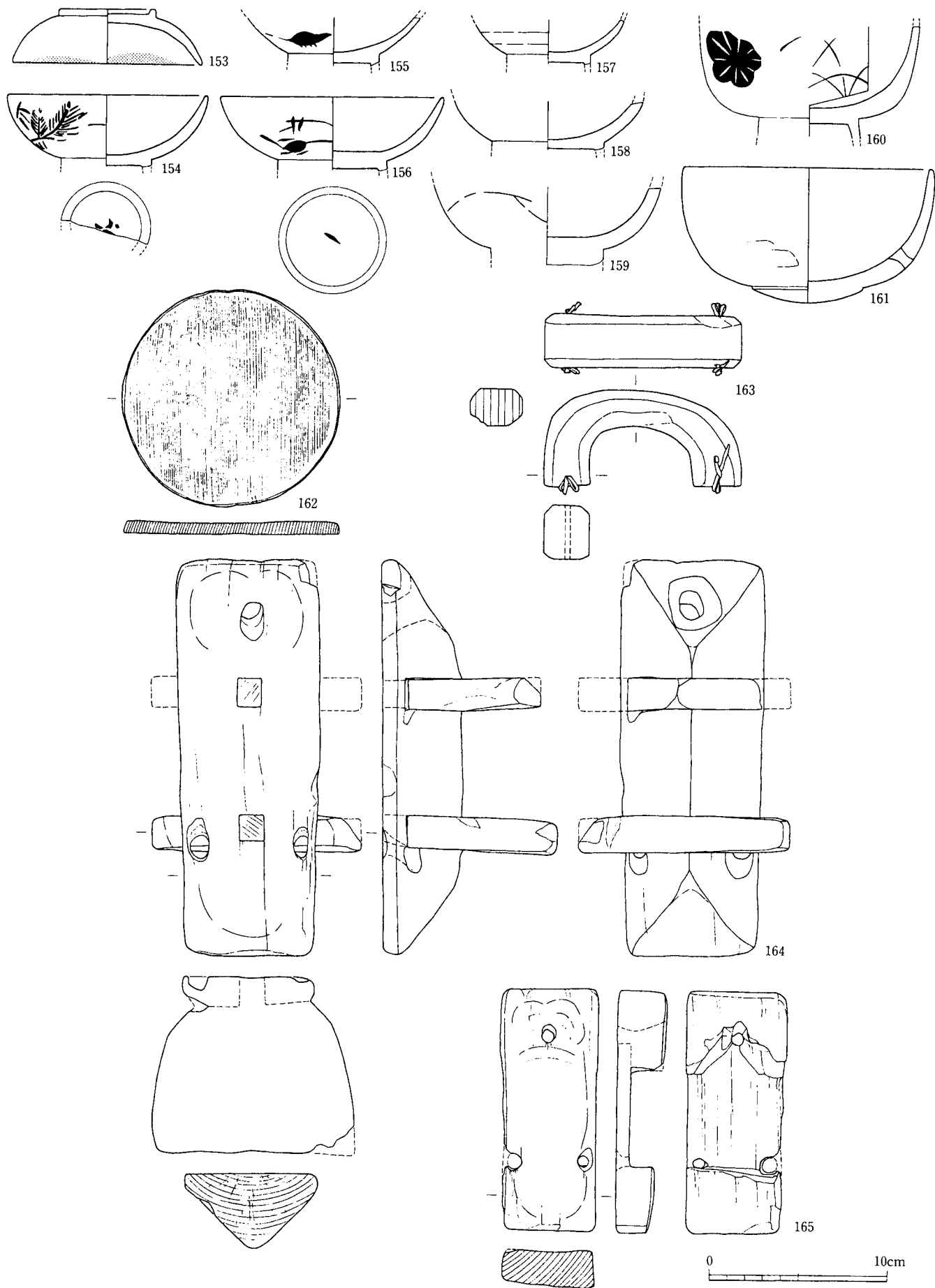
149～151は角釘で、149、150は頭部を折り返している。151は両端とも尖っており、隠し釘などの用途が考えられる。152は鉄製の刀子状製品。金属製品では他に銅銭が8枚出土している。



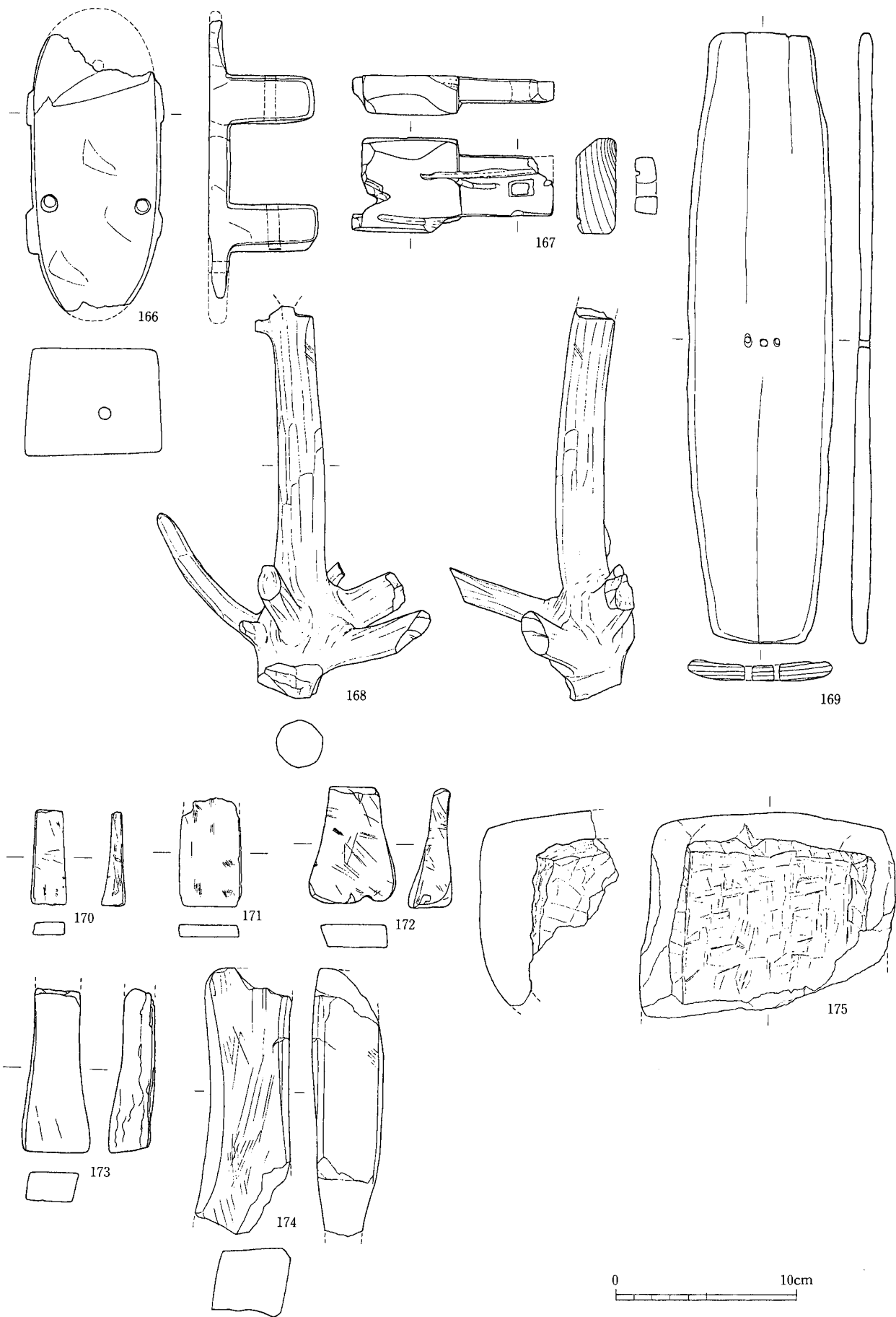
第37图 第8号沟出土遗物实测图4 (S=1/3)



第38图 第8号沟出土遗物实测图5 (S = 1/3)



第39图 第8号沟出土遗物实测图6 (S = 1/3)



第40图 第8号沟出土遗物实测图7 (S=1/3)

153～160は漆器である。153は蓋として報告するが、皿の可能性もある。つまみ内は黒色漆、それ以外は黒色の下地に赤色漆を厚く塗っている。口縁部内外面は火を受けて焦げている。154～156は皿とみられ、内面赤色外面黒色漆を塗り、外面に赤色漆で文様を描く。154は松葉文、155は四つ足動物であり、ネズミかと思われる。154、156については外底に文字様のものが赤色漆にて記される。3点とも内面は下地が黒色であることが観察される。158も皿で、高台内が黒色漆の他は内外面赤色漆を施すが、赤色の発色は良くなく、褐色に近い。これも黒色の下地が認められる。外底部には赤色漆で何か記すが破損しており、不明である。157は小椀と考えているが皿の可能性もある。黒色の下地に内面赤色外面黒色漆を施す。

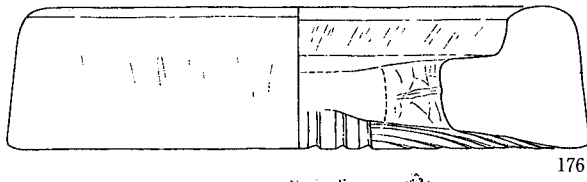
159、160は椀で、口縁部、高台を欠損しているが、高い高台が付くと推定される。159は黒色の下地に内面赤色外面黒色漆を塗り、外面には赤色漆にて弧線状の文様を描く。160は内外面とも赤色漆を施し、外面に黒色漆で梅花文を描く。本例は胴部の立ち上がりが高く、高台が高い特徴からすると16世紀後半を大きく遡る製品ではないと思われ、南壁埋め立て部の出土であることと合わせ、17世紀前半に収まる製品と理解される。161は椀の転用品である。内面は黒色の下地に褐色に発色する赤色漆を塗り、外面には黒色漆を塗っていたとみられるが、外面の黒色漆は鑿状工具で削り取っている。高台部もきれいに削られ、丸味を帯びる。胴部下半に一か所径約6mmの穿孔が見られることから、柄を挿して柄杓として用いたと推定される。このような転用品は福井県一乗谷朝倉氏遺跡などでもよく知られる⁽⁸⁾。

162～169は木製品である。162は径約12cmの曲物底で、その大きさからして、柄杓の可能性もある。163はU字型の取っ手で、両端に樹皮とみられるものが残存している。164～166は下駄である。164は露卯下駄で、台、歯ともにモクレン属の木材で造られる。台表には足跡が残っており、その形状から左足用であったとみられる。それは21cmを測り、成人男性と考えるにはやや小さい。露卯下駄は県内で12世紀末～13世紀初頃には出現するが、本例は台部の幅が狭いことなどから、近世の所産と推定される⁽⁹⁾。165は一木造りの露地下駄である。木材は桧。足跡は12.5cmと小さく、子供用とみられる。後歯が擦り減り、足跡が明瞭に残っていることから、長期間使用されたことが窺われる。166は連歯下駄で、全長は推定約17cmを測り、これも子供用かと推定されるが、足の痕跡は認められない。前後の歯の中央近くに、用途不明の径6mm程度の穿孔が見られ、あるいは実用品でなかった可能性も考えられる。167は部材である。168は一見自然木に見えるが、鉤などの用途が考えられる。材はアカマツ。169は長方形に近い板の中央部に3つの穴を空け、側面はきれいに角を取っている。田下駄等かとも思われるが、用途不明である。

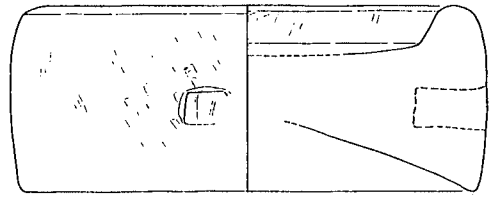
170～174は中砥石で、172の小口及び側面には、幅6mm、断面半円形の溝がみられる。石材は全て凝灰岩質である。175は行火で、前面、及び平面形は台形を呈すと推定される。垣内分類のI種にあたる⁽¹⁰⁾。176～179は粉挽き白の上白である。178の白面は大きく湾曲し、摩耗のため白目は全く残っていない。180は石鉢で、その質感から石材は通称桑山石と思われる。181～183は五輪塔の一部で、181は空風輪、182は火輪である。183は水輪であり、蓮座の上に円相を表現し、その中に金剛界大日如来を表す梵字種子「バン」を薬研掘りする。これらの五輪塔は、その法量、石材の違いから判断すると、セットを成すものとは考え難く、近辺に少なくとも3基の五輪塔が存在していたことが推測される。

その他に、カラスガイ、フナ、スッポン、ウマなどの動物遺体が出土している。

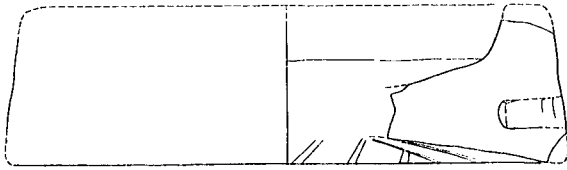
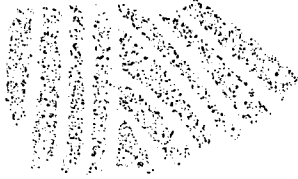
以上本溝の出土遺物は、大きくは11世紀後半～12世紀代、14世紀後半～15世紀前半、16世紀末～17世紀前半の三期に中心を持つ。このことは、本遺跡全出土遺物と同様の傾向を示し、12世紀前後に本溝が開削されることによって、人が住める土地となり、集落が栄え、17世紀前半に集落が東遷して耕作地になったという遺跡の栄枯盛衰に密接に関わってきたことを語っている。



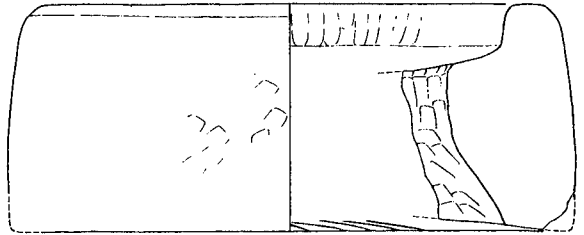
176



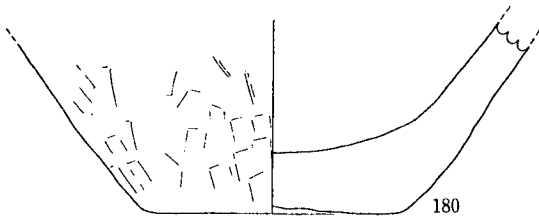
178



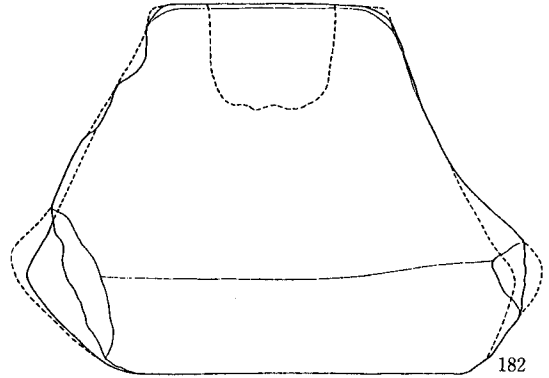
177



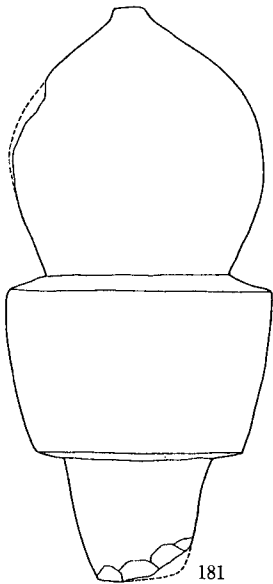
179



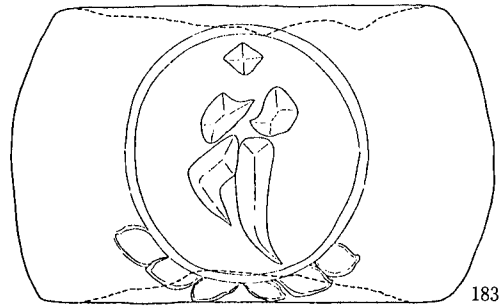
180



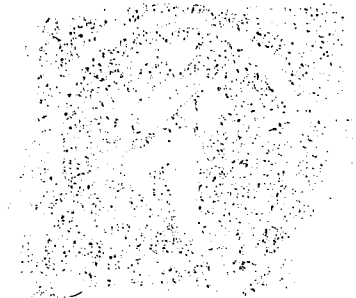
182



181



183



第41图 第8号沟出土遗物实测图8 (S=1/4)

第2節 敷地A

(1) 土坑

第5号土坑 (第42図)

188は折敷の側板と思われ、底板との結合部に13カ所目釘跡が確認される。189は無歯下駄である。3カ所の緒穴には木質の楔があり、藁状の繊維が残存している。黒く示した場所は焼けた痕跡が見られる。かかと付近に台表から2本の釘を打ち込み、裏面に突出した部分を折り曲げている。台表は使用のためかやや凹んでいるが、裏はさほど摩滅の跡が見られない。このことから、裏にはわらじ等があてがわれていたと思われ、かかと部の釘と併せて雪下駄の類いであることが想定される。

第6号土坑 (第42図)

184は土師質土器。口径約7cmの完形品で、色調はにぶい橙色を呈す。時期は15世紀の後半か。

第7号土坑 (第42図)

185は土師質土器で、色調はにぶい橙色を呈す。186は青磁の盤である。素地は灰色で緻密、釉は緑灰色を呈す。B12区整地土等の出土破片と接合した。187は珠洲焼の片口鉢で暗灰色を呈し、堅緻である。卸し目は9本以上確認できる。吉岡編年V期の製品とみられる。

第9号土坑 (第42図)

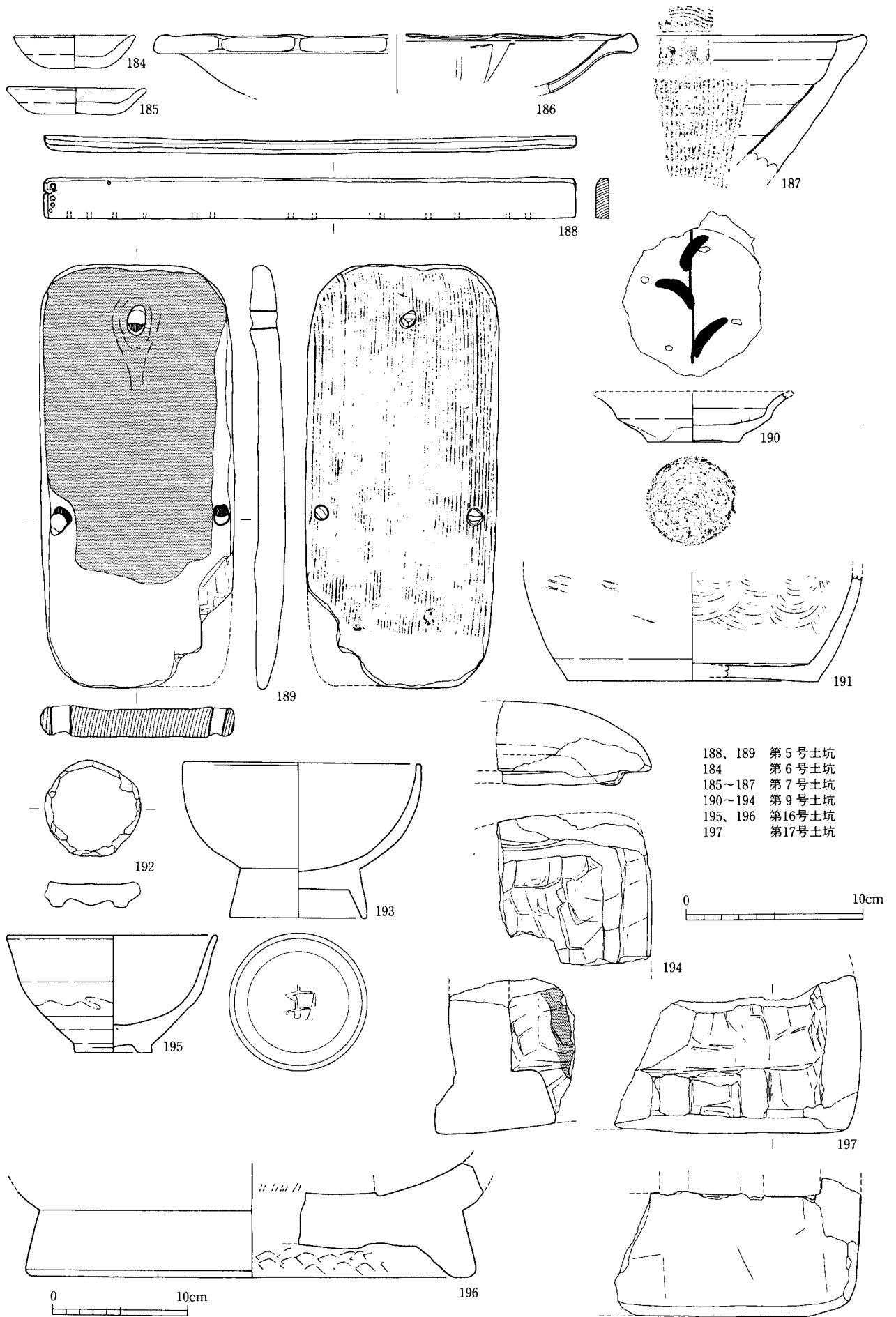
190、191は肥前系陶器。190は絵唐津の皿で、見込みには芦文の鉄絵を施し、半透明の木灰釉が掛かる。胎土目跡が4つ確認され、底部は糸切りのまま残している。191は内面に同心円状の当て具痕をもつ小型の甕であり、素地には気泡、白色砂粒を多く含む。192は肥前系陶器碗の底部を打ち欠いた円盤状陶製品である。193は漆器碗で、黒色の下地に、高台内が黒色漆の他は赤色漆が施される。外底部には赤色漆による記しが見られる。194は石製の行火の蓋で、D字、垣内分類によるIIa種になろうか。以上はその出土状況から、同時に廃棄されたと推定される。190～192は大橋編年I期の製品と見られることから、17世紀前半の廃棄と考えられる。漆器碗も形態から見て同時期の所産であろう。

第14号土坑 (第43図)

本土坑からは数点の土器が廃棄された状態で出土した。198は珠洲焼の壺で、胎土は内外面灰色で堅緻である。30数点の同一個体片が第8号溝、第37号土坑、A12区整地土からも出土し、図上にて復元した。口縁端部、頸部、胴部に波状文を施し胴部のそれは9本確認される。肩部には9弁を数える印花文と、へら状工具による文字を記している。「き□□ひさ□」と6文字が確認できるが、更に下に文字が続く可能性もあろう。吉岡編年II期後半～III期の製品とみられる⁹⁾。199は珠洲焼の甕であり、胎土は灰色を呈し、気泡、砂粒を多く含む。内面はピット状の剥離が著しく、タタキは3cm幅、8本と粗い。同一個体がB12区整地土、B12区ピット群などからも出土した。200は越前焼の播鉢で、口縁端部に面を取り、内面にやや引き出している。卸し目は3cm幅で10本を数え、色調は暗灰～褐灰色を呈し、非常に堅緻である。17世紀に入る所産である。198、199の同一個体片が整地土等、中世の遺構から出土しているため、これらが17世紀まで使用されたとは考えられない。したがって、200はピット等からの混入品である可能性が高い。

第15号土坑 (第44図)

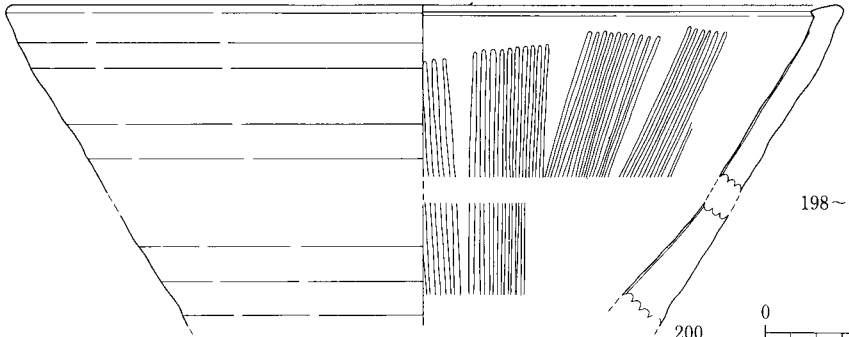
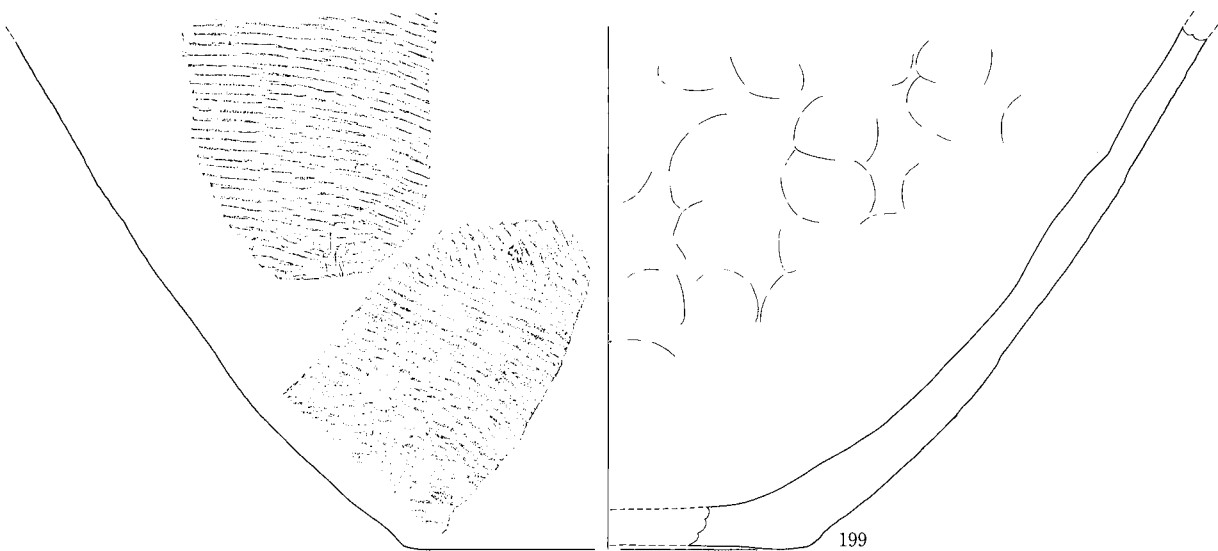
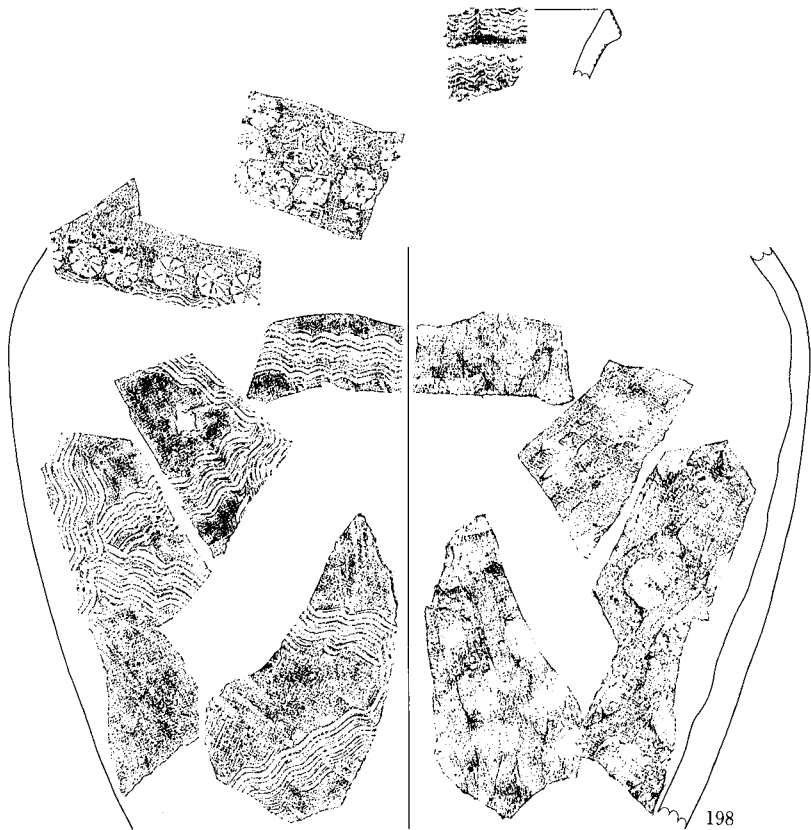
209は土師質土器で、器壁はやや薄く、口縁部外面を強くナデる。外面には広くススが付着しており、色調はにぶい橙色を呈す。210は珠洲焼の片口鉢で、卸し目は14本以上を数えるが、上方2.5cm程残して殆ど摩滅している。内外面に炭化物が付着する。色調は灰色。211は瓦質の羽釜である。口径は約21cmを測り、端



- 188、189 第5号土坑
- 184 第6号土坑
- 185~187 第7号土坑
- 190~194 第9号土坑
- 195、196 第16号土坑
- 197 第17号土坑

0 10cm

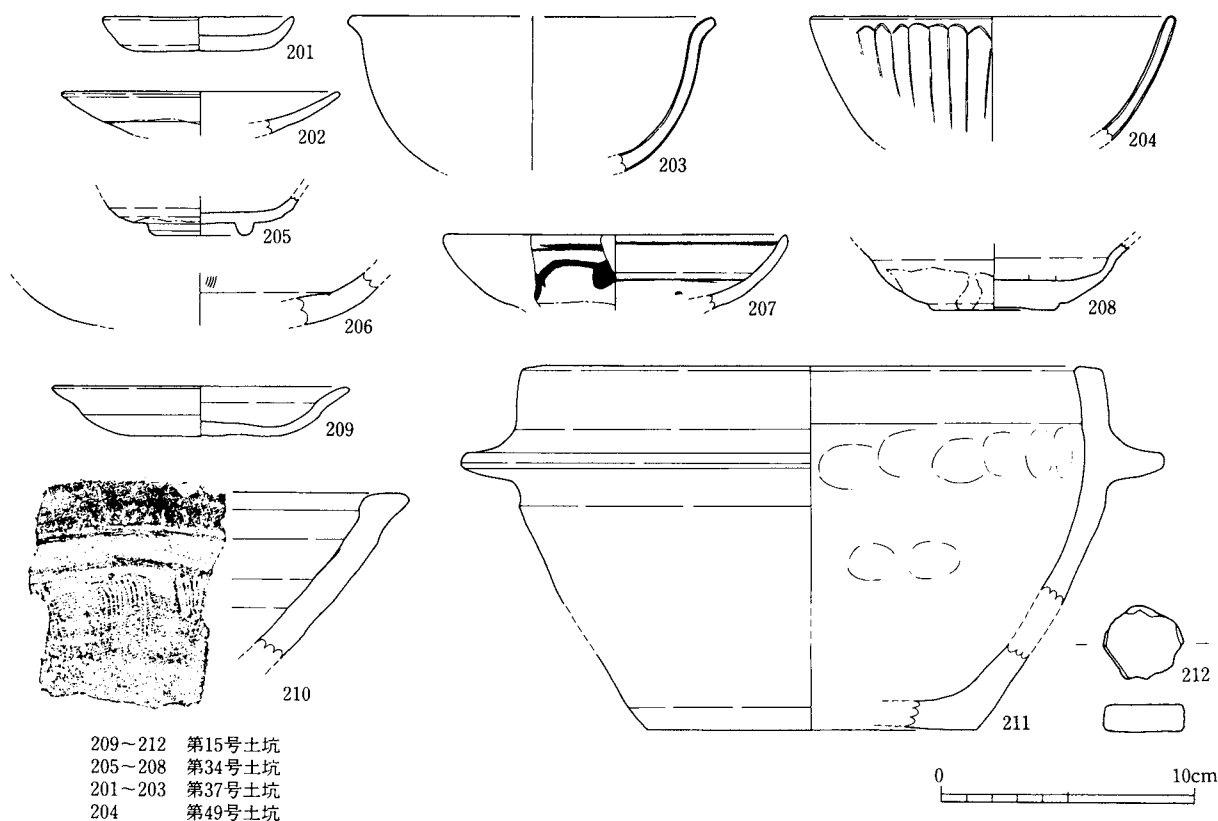
第42图 敷地 A 土坑出土遺物実測図 1 (S = 1/3, 196は S = 1/4)



198~200 第14号土坑



第43图 敷地 A 土坑出土遺物実測図 2 (S = 1/3)



第44図 敷地 A 土坑出土遺物実測図 3 (S = 1 / 3)

部は丁寧に面取りされる。内外にはヨコナデが施され、内面には指頭圧痕が残る。外面鏝より下方には炭化物が付着し、火にかけられたことが想像される。色調は灰色を呈し、胎土には海綿骨針を含む。第8号土坑、その他4基のピット出土破片と接合した。212は加賀焼片転用の円盤状陶製品である。その他に焼壁塊が多数出土している。本土坑は家屋火災後の片付け穴と思われる、羽釜を除く土器の炭化物は被災の痕跡と理解される。

第16号土坑 (第42図)

195は肥前系陶器の碗。赤褐色の素地に明オリブ灰色の灰釉が掛かるが、釉は縮れている。一部熱を受けた痕跡が見られる。大橋編年 I 又は II 期。196は茶臼の下臼で、石材は砂岩である。

第17号土坑 (第42図)

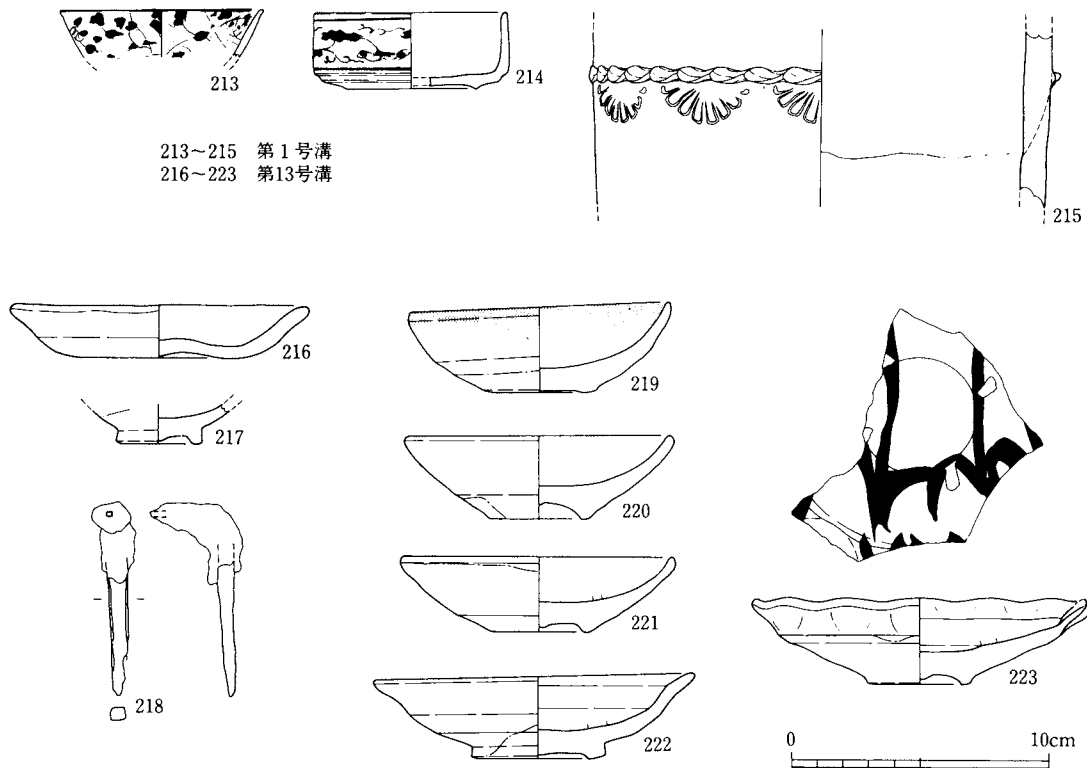
197はD字型の行火で、正面に縦格子の窓を造りだし、底部には足を削り出している。

第34号土坑 (第44図)

205~207は中国製品である。205は白磁小皿で、素地は灰白色でやや軟質である。割れ口には漆継ぎの跡が残る。206は青磁碗で、劃花文が確認できる。素地は気泡を多く含むが堅緻であり、透明度の高いオリブ灰色の釉が薄く掛かる。207は染付皿で、素地は淡橙色で軟質、釉も白濁している。底部は残存しないが、碁筈底となろうか。205は15世紀前半、207は16世紀末の搬入品とみられる。208は肥前系陶器皿。内底に鉄絵が描かれた絵唐津で、底部は糸切り痕を留める。法量、作風とも第9号土坑出土の190と共通しており、組み物として購入された可能性もあろう。同様の皿が第8号溝からも1点出土している。大橋編年 I 期の製品である。

第37号土坑 (第44図)

201は土師質土器、202、203は中国製品である。202は白磁皿で、割れ口には漆継ぎの跡が確認される。203



第45図 敷地A 溝出土遺物実測図 (S = 1/3)

は端反りの青磁碗である。両者とも15世紀前半の製品である。

第49号土坑 (第44図)

204は中国製の青磁碗であり、胴部にやや粗雑なへら描き蓮弁文を施す。

(2) 溝

第1号溝 (第45図)

213は瀬戸、214は肥前系の磁器で、いずれも染付である。214は口縁端部及び腰部が無釉となっており、重ね焼いて量産したものとみられる。19世紀後半、或いは20世紀に入る製品か。213は瓦質の火桶である。

第9号溝 (第46、47図)

本溝からは11世紀後半～12世紀代、15～16世紀の遺物が中心に出土しているが、第8号溝同様最下層から最新の遺物が出土しており、良好な出土状況は見られない。15～16世紀の遺物に関しては、その出土状態から基本的には敷地Aで使用されていた製品と考えられ、その内容は住人の嗜好を反映している。

224、225は内面黒色土器碗である。胎土は224がにぶい橙色、225がにぶい黄橙色で微砂粒を多く含む。226は土師器皿である。内面はナデ調整により、体部中央付近に段が生じている。胎土は灰白色で、赤色粒を含む。227、228は土師器碗。227の底径は7.8cmと大きく、228は6.0cmを測る。229は中国製の白磁碗Ⅷ類である。以上は224、225が11世紀後半、226～228が12世紀前葉～中葉の所産と思われ、本溝の開削時期を示す資料である。

230～243は土師質土器であり、胎土、形態の違いから、大きく2グループに分けられる。一つは砂粒、海綿骨針を一定量含むグループ (230～232、237～241)、もう一方は砂粒、海綿骨針を含まない製品で、京都の影響を受けて在地で生産されたとされる、いわゆる京都系のグループ (234～236、242、243) である。233は胎土に砂粒、海綿骨針を含まないが、形態的には前者に類似する。

前者のグループのうち、230～232、238、239は口縁部外面にヨコナデを施し、内面は口縁部付近を布状用具で押しえた後、底部近くから「の」の字状にナデ上げる。中でも230は布目状の圧痕を明瞭に留める。237は外面は同様に調整し、内面は口縁部付近を布状用具で押しえ、体部にヨコナデを一周させた後、更に底部にナデを施す。240、241も外面は同様であるが、内面は体部をヨコナデした後、底部をナデる。布目状圧痕は認められないが、ナデ消されている可能性もある。230～232、240、241には燈芯油痕が付着し、241はそれが一周する。239は油痕とは異なるが、炭化していない油しみのような跡が確認できる。また、238の底部には墨書が見られるが、判読できない。口径は237が6.4cmと小さく、238、230が7cm前後、231、232が8cm弱、239が8.6cm、240、241が9cm強を測る。色調は230が灰白色であるほかは、にぶい黄橙色系を呈す。時期は概ね15世紀前葉～中葉か。

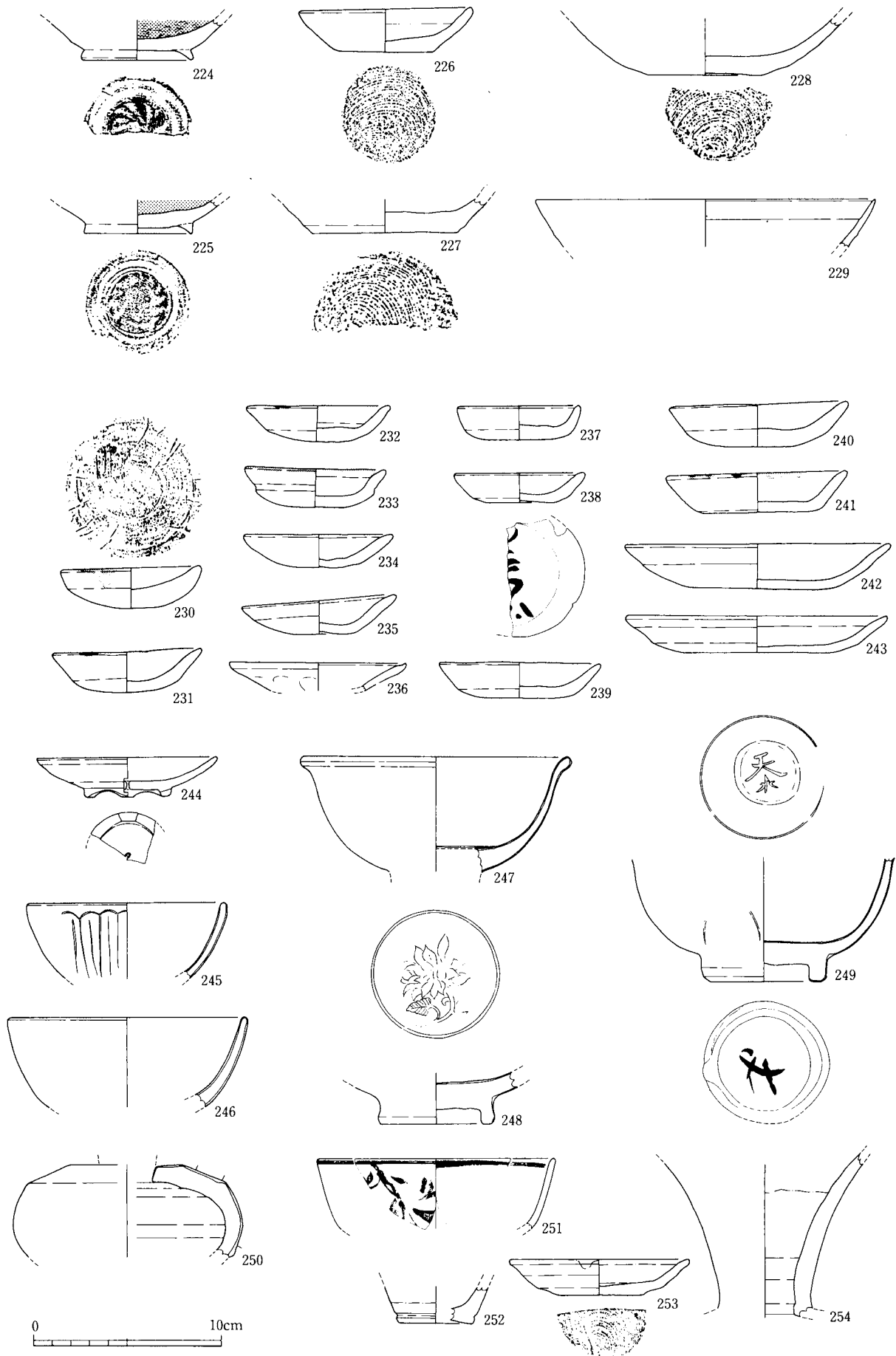
後者のグループは口縁部外面にヨコナデを施す。内面は234で「の」の字状のナデを確認できるが、その他については体部にナデが認められるものの、完形品でないため、ナデ上げるのか横位に一周するのかわからない。いずれも口縁部は外方にわずかに屈曲し、236は端部をつまみ上げている。燈芯油痕は236にのみかすかで見られる。法量は234、235が口径8cm前後、236が9.4cm、242、243が約14cmと大・小に分かれる。色調は236が黒褐色、234、242がにぶい黄橙色、235、243が灰白色を呈す。同種の製品が本遺構からもう二個体出土しており、それらには242、243の内底には認められない凸圏線が確認される。それ以外には第8、11号溝、第45号土坑で各1点見られるほかは、いわゆる京都系の製品は殆ど確認されていない。15世紀末～16世紀前半の所産と見られる。なお、235、243は掘り直し後の第6～8層からの出土である。

244～252は中国製品である。244は白磁小皿で、底部中央付近に内外面から錐状工具で穿孔されている。穴に釉が流れ込んでいることから、焼成前に開けられたものと考えられる。これでは使用に耐えないと思われる。釉の掛け方も非常に雑であることを合わせ、焼成見本等が誤って流通した可能性があろう。245～249は青磁碗である。245は胴部に粗雑なへら描き蓮弁文を施し、釉はオリーブ黄色で細かい貫入が多く入る。246は無文で、オリーブ灰色の釉が厚く掛かる。247は端反り碗で、胴部は無文とするが、内底には界線が一条巡る。248は内底に印花のスタンプを施し、高台内まで施釉するが、外底の釉は掻き取っている。249は外面胴部下半に幅広の蓮弁文をへら描きし、内底は界線を巡らした中に「天水」とスタンプを押している。釉は高台内面途中まで掛かり、露胎とする外底には漆で文様を描いている。245、246、248、249の4点の割れ口に漆継ぎ痕が残っており、大切に使用されたことが窺われる。250は青磁の小壺と推定される。素地は灰白色で緻密、釉は緑灰色を呈し、肩部付近の釉が剥離していることから、耳等が付されていたと推定される。251は染付碗である。呉須の発色は良いが、釉にムラがあり、大きなピンホールが数箇所見受けられる。252は瓶類の底部である。素地は灰色で、気泡を含むがきめ細かい。外面途中まで鉄釉が掛かるが、表面は沸いており、被熱した可能性が高い。244、247～249は15世紀前半、245、246は16世紀前半に多く流通した製品である。251は16世紀末～17世紀初の製品と思われるが、本遺構の廃絶が16世紀中葉を下らないと推定されることから、混入と考えたい。

253、254は瀬戸・美濃焼。253は縁釉小皿で、鉄釉を施す。254は灰釉の尊式花瓶の頸部である。いずれも古瀬戸後期の製品で、15世紀前半の年代が与えられよう。

255～257は珠洲焼の片口鉢であり、前二者は片口部周辺の破片である。256は内外面は暗灰色を呈するが、断面は灰白色で焼成は良くない。256が吉岡編年II期、255、257はV期の製品か。258は越前焼の甕底部である。259、260は円盤状陶製品で、何れも珠洲焼の甕片を利用している。

261、262は漆器碗である。261は内外面に黒色漆を施しており、内底近くにかすかに赤色漆で文様を描く。



第46图 第9号沟出土遗物实测图1 (S = 1/3)

262は高台内が黒色漆の他は黒色の下地に赤色漆が塗られ、外底部に赤色漆で十字状の記しが付される。両者とも高台が高いが、前者が口径が大きく扁平なのに対し、後者は口径がやや小さく、体部が深い。四柳氏の編年案によると²²、262は17世紀にまで下る可能性もある。

263は曲物底であり、側面に目釘跡が見られる。264は折敷等の底板であろうか。穿孔が確認される。265は箸状木製品である。262～265は一か所に集中して出土している上、付近の土層観察で、第9号溝を切り込むピットが確認されることから、ピット内出土遺物である可能性も指摘されよう。

266は仕上げ砥石である。267は粉挽き白の上白、268、269は鏝である。270は銅製と思われる菊皿で、破損しているが、花卉は16枚と推定される。お歯黒、紅などに関係した化粧用具として知られる。県内の出土例は多くないが、中島町定林寺前遺跡²³など、16世紀代を中心とした遺跡に見られる遺物である。392は筭である。その質感から獣骨製とみられる。菊皿と合わせて当時の化粧、装いを想像させる遺物である。271は鉄製の火箸である。先端部は細く尖り、もち手部分にはねじりが入る。

その他に、フィゴの羽口、椀型滓が極少量と、人為的に巻かれたつる状の植物も出土している。また、イタヤガイ、オキアサリ、マガキ、チョウセンハマグリなどの動物遺体が出土しており、食用後に廃棄されたものと判断される。

第13号溝（第45図）

216は土師質土器、217は中国製白磁小皿の底部である。これらは中世の遺物であり、混入と考えられる。

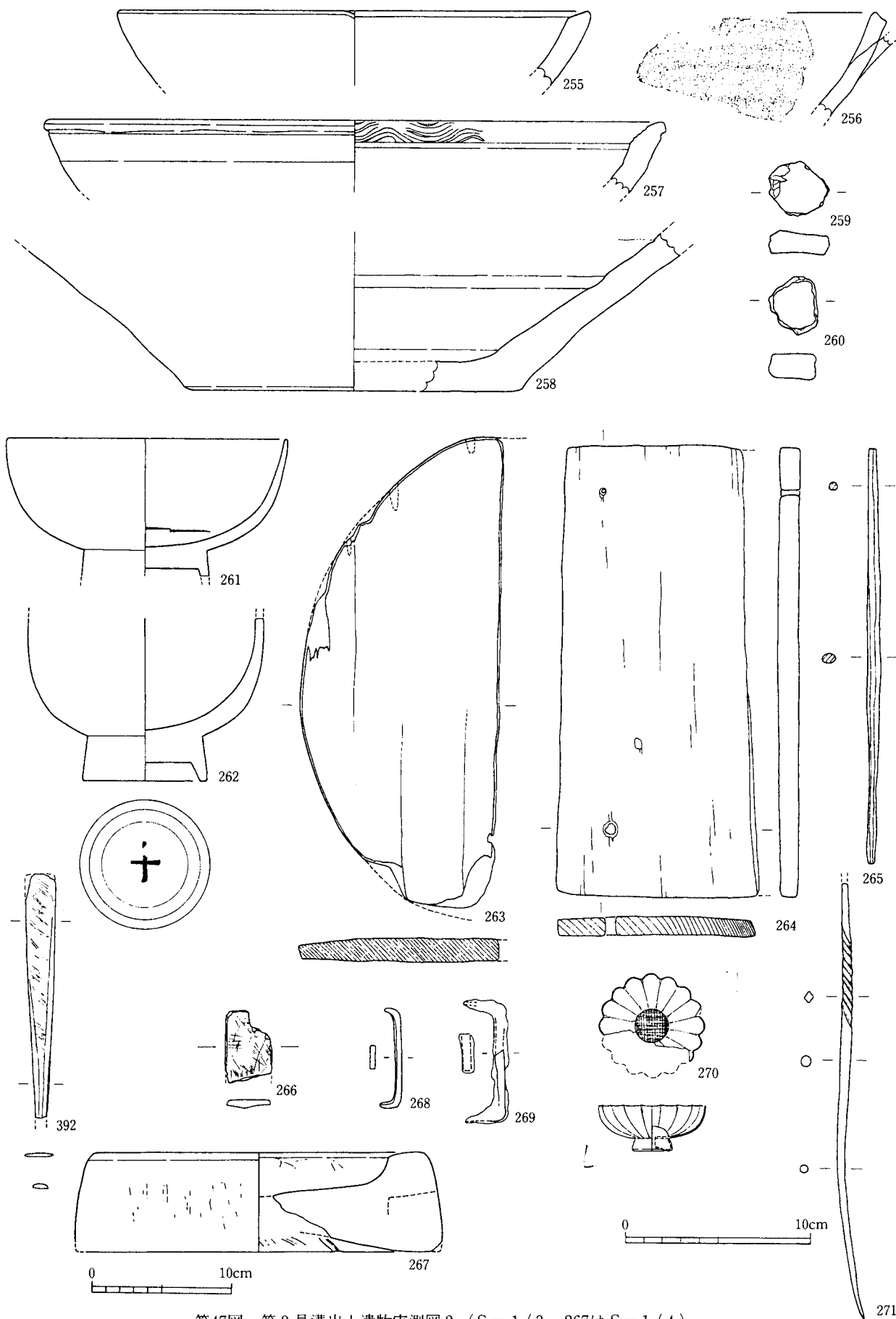
219～223は肥前系陶器の皿である。221、223は胎土目跡、222は砂目跡が残る。それ以外は目跡の痕跡はないが、その器形から胎土目段階のものと推定される。219はにぶい橙色の素地に、灰オリーブ色を呈する灰釉が掛かる。高台の削りは最初から浅かったと思われるが、更に摩滅しており、外底部が殆ど接地している。口縁内外面にべったりとタール状の付着物が全周する。口縁の四分の一程が欠失しており、割れ口にも付着物がみられることから、割れた、或いは意図的に割った後、燈明に使用されたものと考えられる。220は底部を碁筭底とし、素地、釉調は219に似るが、釉に透明感がない。221は胴部下半から高台を削り出しているが、碁筭底に近く、外底は縮緬状を呈す。素地は橙色で黒色の鉱物粒がやや多く混ざり、釉は火を受けて灰白色に変色しているが、本来は220と同系色であったとみられる。222の素地は浅橙色を呈し、焼きがやや甘い。釉は白濁し、縮れている。223は絵唐津であり、内面に草花文を描く。口縁部は指で押圧して輪花とし、口縁部内面及び見込みに段を設けている。222は大橋編年のII期、その他はI期の製品と判断される。218は釘で、頭部を大きく折り曲げる。

図示していないものも含め、本溝出土遺物は、大橋編年II期の製品は1点のみであることから、これらの廃棄年代は、17世紀前半でもさほど下らない時期と推定される。

（3）掘立柱建物跡、柱穴群（第48図）

掘立柱建物は調査時に確認できなかったため、建物に付随する遺物と認識して採り上げたものは皆無である。それに加え、数棟が重複しているため、遺構検出面出土遺物をいずれかの建物に帰属させることは難しい。従って、掘立柱建物を構成する柱穴から出土した遺物を各建物のものとして報告するが、その遺物が柱穴掘削時に混入したものか、柱根抜き取り後に入ったものかは判断が及ばない。そのため、報告する遺物がそのまま建物の構築時期を示すものではないことをお断りしておきたい。

また、多数のピットは、その多くが柱穴であったと考えられるが、復元できなかったため、柱穴群出土遺物としてまとめて報告することとする。



第47図 第9号溝出土遺物実測図2 (S = 1/3, 267はS = 1/4)

第5号掘立柱建物（第49図）

297は粉挽き白の下白の完形品である。7分画され、白目は最大7本確認される。桑山石と同定される石材である。西側桁列中央の柱穴に横位で出土しており、柱を固定するために意図的に納置されたものと判断される。

第7号掘立柱建物（第48図）

288は北西隅の柱穴から出土した珠洲焼片口鉢である。卸し目は2.5cm幅8本で一単位を成すが、底部付近はひどく摩滅している。色調はオリーブ灰色を呈す。293は北側梁列中央から出土した、越前焼甕片である。298は東側桁列から出土した粉挽き白の下白である。底部からの出土であり根石として埋置されたものと判断される。

第8号掘立柱建物（第48図）

283は瀬戸・美濃焼灰釉皿、289は越前焼播鉢を転用した円盤状陶製品である。

柱穴群（第48、49図）

272～277は土師質土器である。273～275は完形品で、いずれも口縁部外面に一段のヨコナデを施すが、273、274のそれは極めて弱い。275は器壁が薄く、口縁端部をやや外反気味に引き出す。276の底部にはへら状工具痕が、277には板目状圧痕が残る。法量は、272～275が7～8cm前後、276、277が9cm代を測る。色調は、272、274、276がにぶい橙色、273、275、277が浅黄橙色を呈す。

278～282は中国製品である。278～280は白磁小皿であり、279の割れ口には漆継ぎ跡が残る。281は青磁碗で、灰色で薄手の素地に透明感のあるオリーブ灰色の釉が掛かる。282は染付皿である。内外面に文様があるが、小片であり、意匠は不明。畳付けには砂が付着している。

284、285は瀬戸・美濃焼である。284は鉄釉の縁釉小皿で、内底は使用のためか滑らかである。285は折れ縁深皿であり、胴部中央付近まで内外面に灰釉が掛かり、底部には足が剥離した痕跡が見られる。出土片には卸し目は認められないが、卸し目付き大皿となる可能性もあろう。同一個体片がB12区整地土、包含層から数点、第5号溝から1点出土している。第7号土坑北東部のピットより出土したが、整地された際にピットに混入したものと推定される。

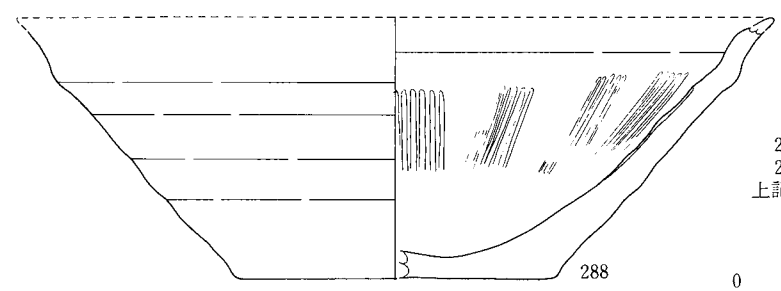
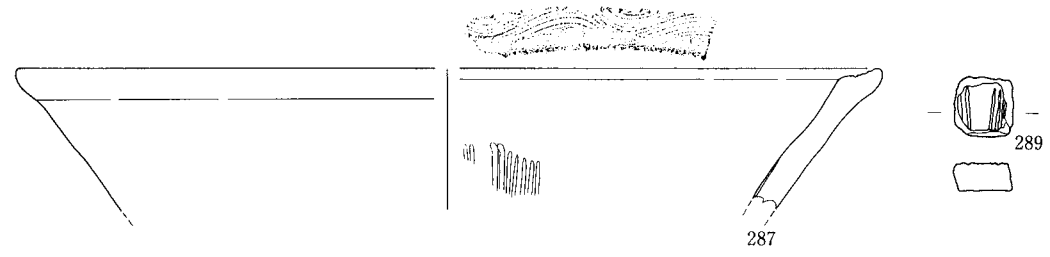
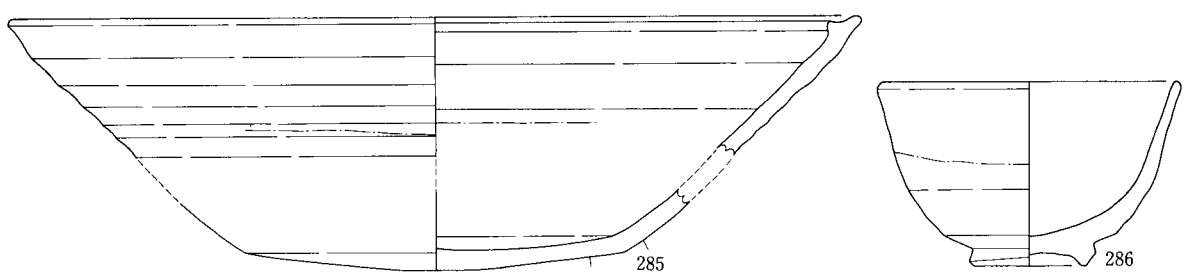
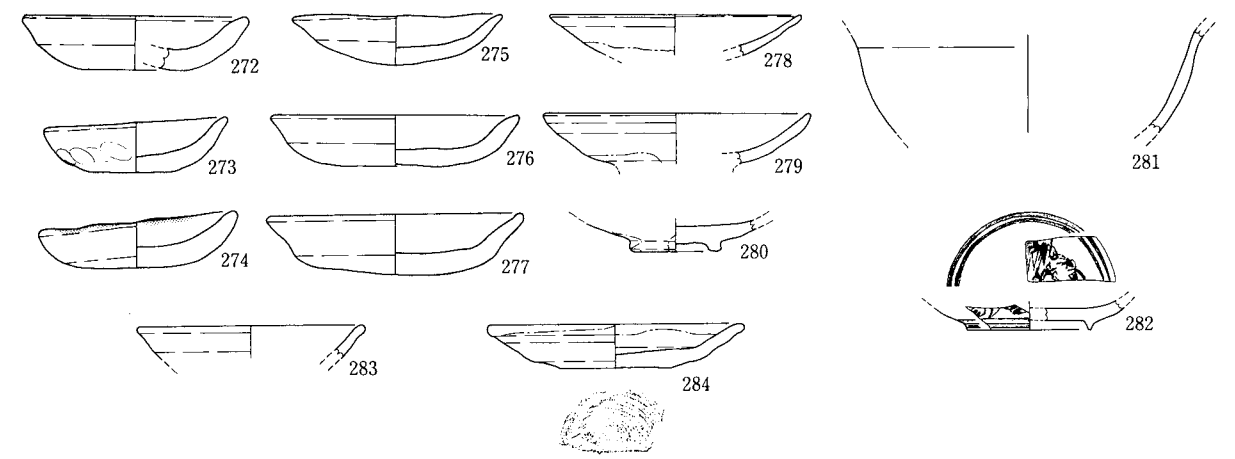
287、290は珠洲焼である。287は片口鉢で、卸し目は7本まで確認できる。290は甕であり、タタキは深く施され、3cm幅8本を数える。第6号土坑に接するピットから出土した。291は越前焼の甕、292は信楽焼の壺である。

286は肥前系陶器碗である。淡黄色の素地に灰白色の釉が、内面及び外面途中まで掛かるが、内底周辺ではムラがあり、縮れている。296は金属製の筭である。294、295は中砥石で、294は白色の凝灰岩質の製品であり、熊本県産の天草砥とみられる。

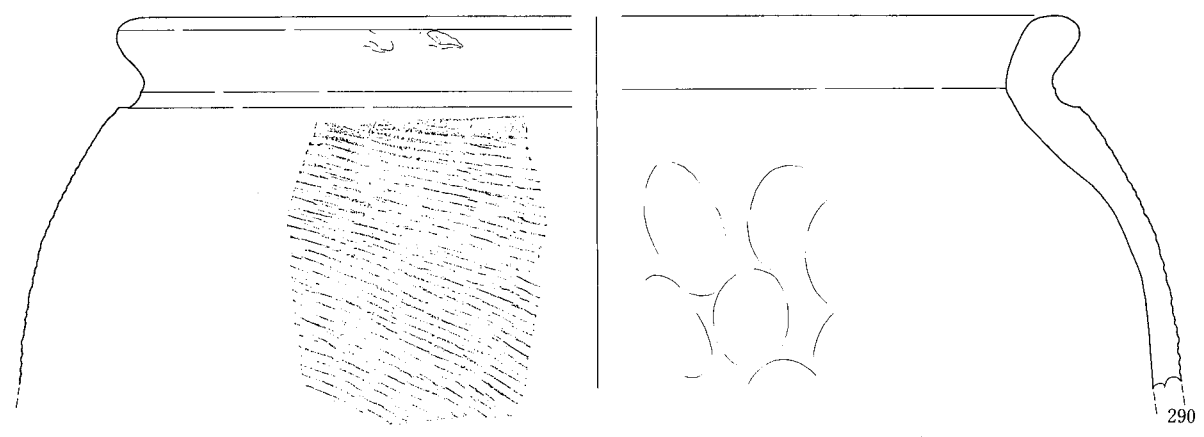
以上は286を除いて概ね14世紀後半から15世紀代を中心とする遺物であり、多くの柱穴群が16世紀まで下らないことを示している。

B12区ピット群（第50図）

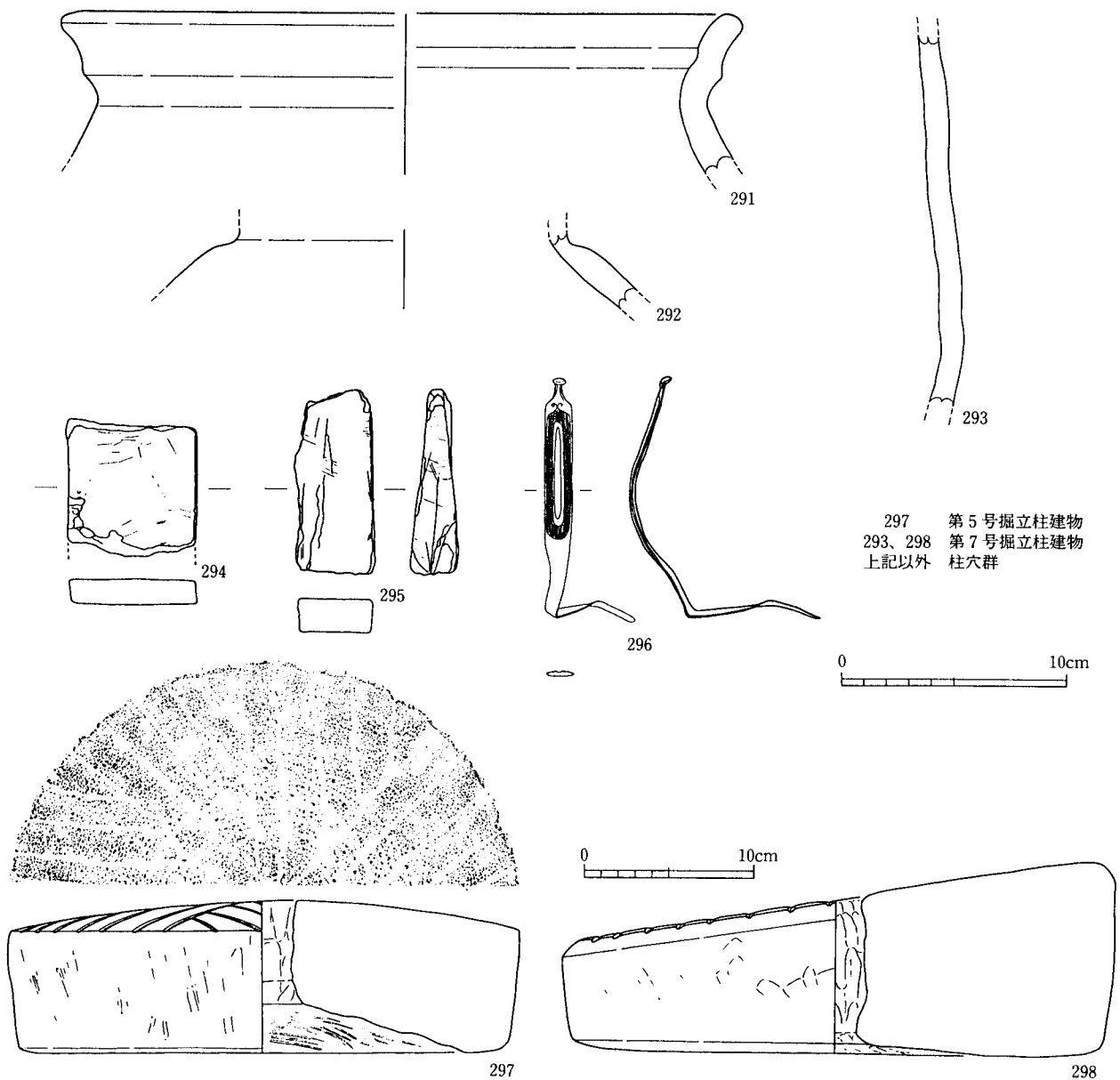
B12杭周辺に切り合いながら集中するピット群から出土した遺物である。299～302は土師質土器である。全て口縁部外面に一段のヨコナデを施し、内面は「の」の字状にナデ上げる。299は完形品であり、ナデ調整前の布目状圧痕が9箇所明瞭に認められる。内外面には黒い滲みが見られ、油等を入れたと思われる。それ以外の製品には燈芯油痕等は認められない。法量は299、300が7～8cm、301、302が9cm代を測る。色



288 第7号掘立柱建物
 283 第8号掘立柱建物
 上記以外 柱穴群



第48図 敷地 A 掘立柱建物跡・柱穴群出土遺物実測図1 (S = 1/3)



297 第5号掘立柱建物
293、298 第7号掘立柱建物
上記以外 柱穴群

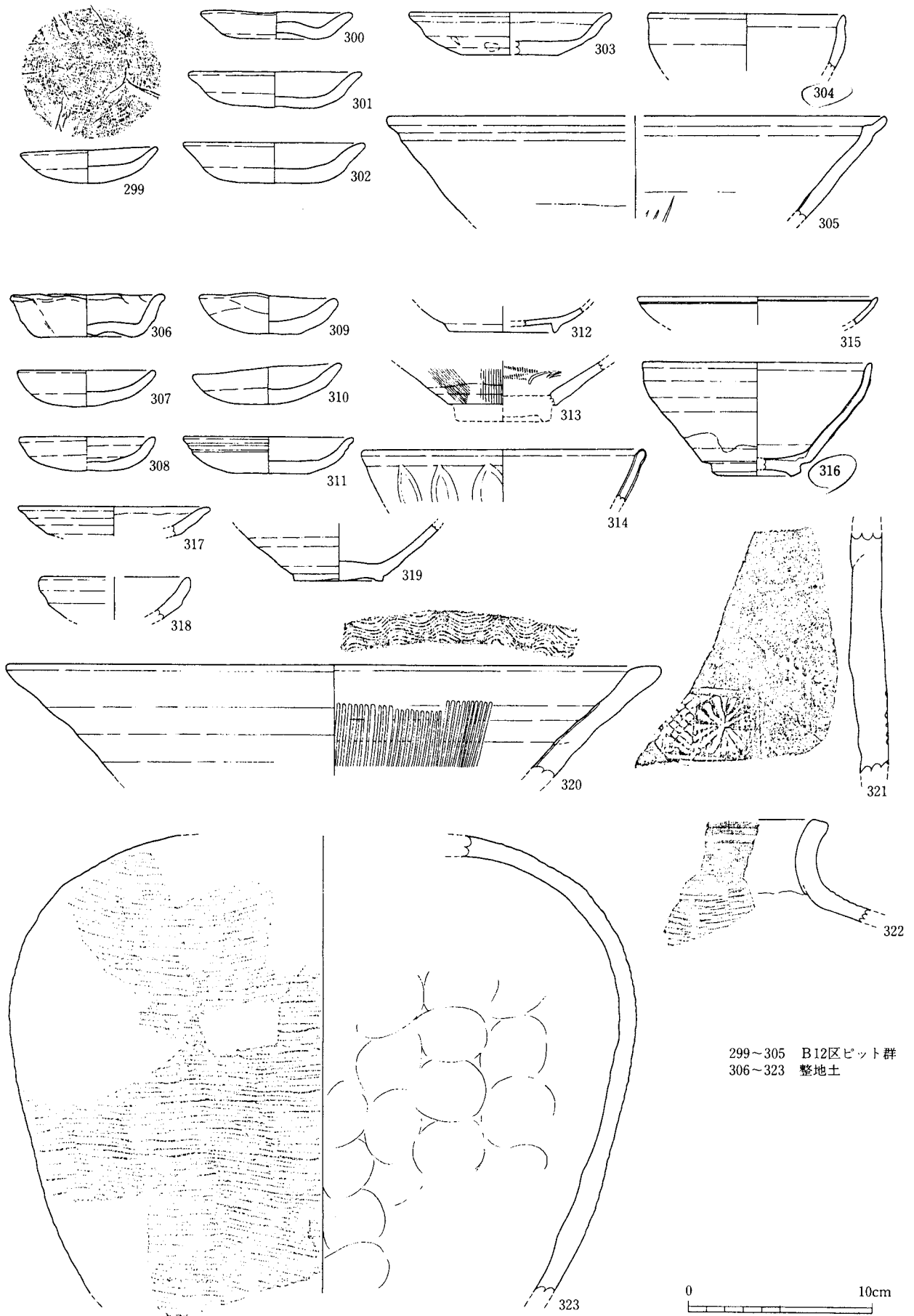
第49図 敷地 A 掘立柱建物跡・柱穴群出土遺物実測図2 (S=1/3, 297, 298はS=1/4)

調は299が浅黄色、302が黒褐色、300、301がにぶい橙色である。その他にも土師質土器片が多数出土しているが、燈芯油痕は殆ど確認できない。15世紀前後の所産か。

303~305は瀬戸・美濃焼である。303は灰釉の縁釉小皿である。304は天目茶碗で、鉄釉は口縁端部が赤褐色に発色する以外は黒褐色を呈す。305は卸し目付き大皿である。体部上半内外面に浅黄色を呈する灰釉を施し、内面下半に卸し目を施す。一部に二次加熱を受ける。3点とも15世紀代の所産とみられるが、その中でも303は前半、304、305は後半に比定できよう。それ以外に、土錘が約20点出土している。

(4) 整地土 (第50、51図)

306~311は土師質土器である。307、309は完形、308、310はほぼ完形である。307~310は口縁部外面に一段のヨコナデを施し、内面は「の」の字状にナデ上げるタイプであり、308以外は布目状圧痕が比較的明瞭に残る。他遺構出土土器にも共通するが、内面に布目状圧痕を明瞭に残すものは口縁部外面のヨコナデが弱い傾向にある。306は口縁部が大きく歪み、外底部には指押さえの跡が明瞭に残る。309は内外面に燈芯油痕



299~305 B12区ピット群
306~323 整地土

第50図 敷地 A ピット群・整地土出土遺物実測図 (S = 1/3)

が見られ、全体が黒褐色を呈す。306、307はにぶい橙色、308、310、311はにぶい黄橙色を呈す。法量は306～310が7～8 cm強、311が9.2cmを測る。いずれも15世紀前葉～中葉の所産と思われる。

312～316は中国製品である。312は白磁皿であり、畳付けを除いて施釉される。313は青磁碗で、同安窯の製品であり、外面胴部下半は無釉とする。314は鐏が崩れ、間弁のない蓮弁文を持つ青磁碗である。釉は明オリブ灰色を呈するが、くすんでいる。315は染付皿。316は天目茶碗で、素地は灰色を呈し、気泡を含むが硬質である。釉は口縁部周辺は赤褐色、以下は漆黒色を呈し、内底には厚く溜まる。外面体部下半の上方にはサビ釉を施し、下方から高台にかけては無釉とする。314、316は14世紀後半頃、312、315は16世紀代に搬入された製品とみられる。

317は瀬戸・美濃焼で、鉄釉の緑釉小皿である。319も瀬戸・美濃焼の平碗で、高台の削り出しは浅く雑であり、高台幅は狭いところで4 mm弱、広いところで7 mmとムラがある。釉はオリブ黄色に発色する。319は15世紀前半以降、317は15世紀中葉～後葉の製品と考えられる。

321は加賀焼の甕の肩部片である。内面には板状工具による調整痕が残り、外面には斜格子文と花文で構成された押印が見られる。類似の押印が湯上ユノカミグニ窯跡から出土しており⁹⁰、同窯の製品である可能性が高い。内外面の一部には炭化物が付着する。

318、320～324は珠洲焼。318は小皿状の製品で、胎土は微砂粒を含むが精良で焼きも良い。320は片口鉢で、卸し目は一単位13本以上を数え、間隙なく密に施される。322～324は壺である。322のタタキは3 cmあたり10本を数え、内外面に炭化物が付着する。323のタタキは細密な原体を用い、3 cmあたり13本前後と細かい。324はそれよりも粗く、3 cmあたり7本のタタキを持つ。タタキ調整の後内面はナデを施し、肩部外面にはローマ字のNのような刻文が見られる。322～324は吉岡編年Ⅲ又はⅣ期、320はⅤ期頃の製品か。

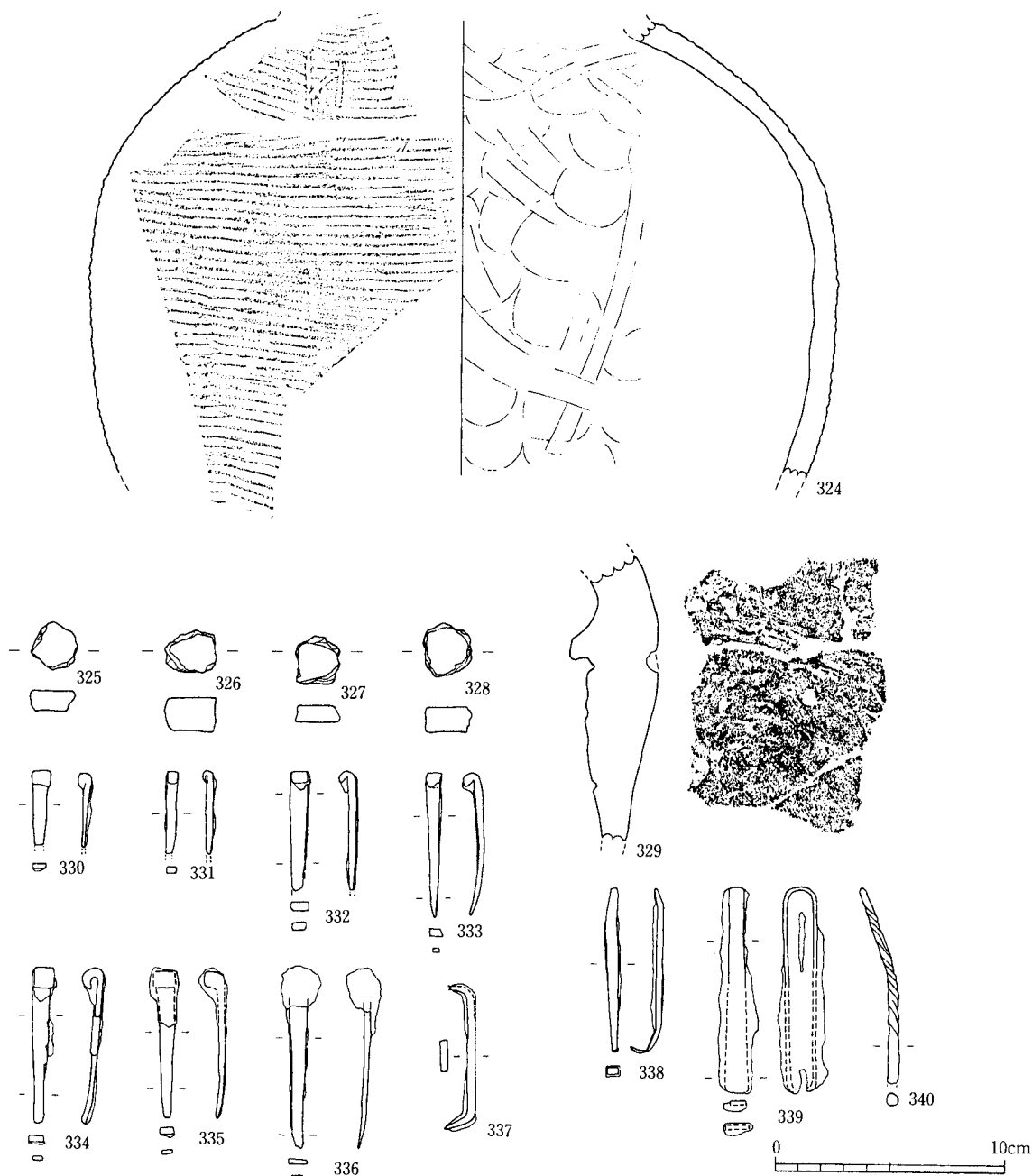
325～328は円盤状陶製品である。325は須恵器とみられ、326、327は珠洲焼の甕と片口鉢、328は越前焼である。329は焼土で、木舞の痕跡が見えることから、壁土と考えられ、火災により焼けた家屋の壁と推定される。外部は赤褐色に焼けるが、内部は黒色を呈す。焼壁は整地土全体から大量に出土しているが、特にB11区に帯状に集中して出土した。その他土錘も大量に出土している。

330～340は鉄製品である。330～336、338は全て断面形が長方形となる角釘であり、338を除いて頭部は折り返す。337は錠、339は毛抜きである。340は火箸で、持ち手部分にはひねりを有する。その他に銅銭も数多く出土した。これら金属製品に関しては、当時はまだ貴重品であり、再利用することが多かったと思われる鉄製品、貨幣価値のある銅銭が何故拾われずに他の遺物とともに整地されたのか大いに疑問に感じる。

整地土出土の遺物は、前述のように焼壁がB11区に集中し、それ以外は遺構の希薄なA B12区の出土が殆どを占める。このことは火災後の整理時に土器・金属製品類を意図的に敷地縁辺部に廃棄したことを意味している。遺物の年代は土師質土器が15世紀前葉～中葉が主体となるのに対し、陶磁器類はやや後出的な製品が数点見られる。それらを混入と見るかどうかは判断が難しいが、土師質土器は伝世しないと判断され、多く出土したそれらが時期的にまとまっているため、家屋の焼失は15世紀中葉頃と考えたい。整地面を切り込んでピット等が穿たれていることから、16世紀代の遺物はピット内遺物とみられるが、火災が16世紀に下る可能性も否定はできない。

(5) 包含層 (第52図)

341、342は土師質土器である。341は底部ほぼ中央に径7 mmの穿孔がみられる。焼成の前後何れに空けられたものかは判別し難いが、穴は外底から内面に向かって空けられたと推定される。

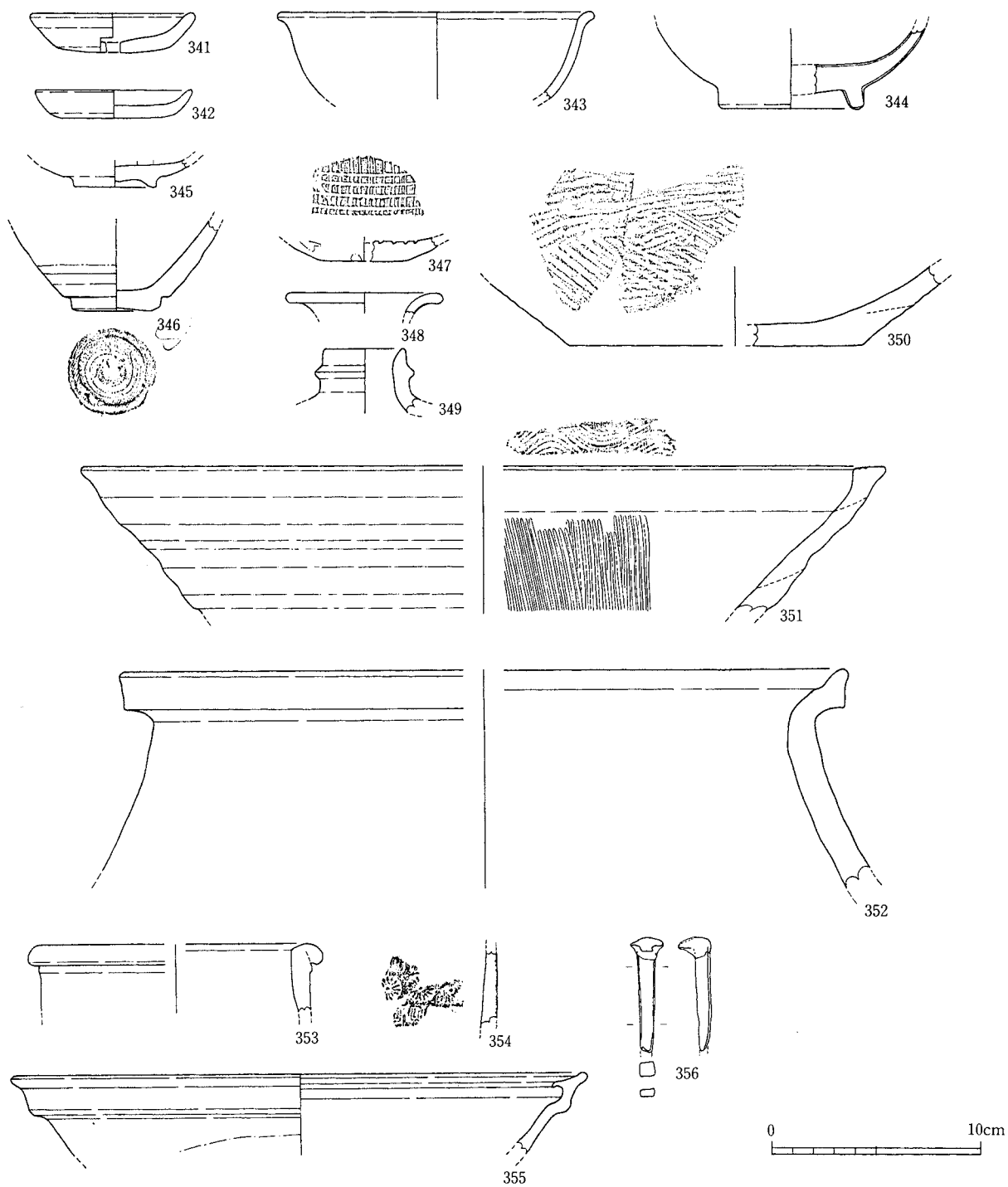


第51図 敷地 A 整地土出土遺物実測図 (S = 1 / 3)

343、344は中国製の青磁碗である。343の素地は灰色、釉は透明感のある明緑灰色で、割れ口には漆継ぎの跡が見える。344の素地は灰白色～橙色で、大きい気泡を多く含む。釉は緑灰色を呈し、全面に厚く施釉した後、外底部の釉を掻き取っている。全体に二次加熱を受ける。345は朝鮮製の坏である。素地は灰白色で堅緻、釉は灰オリーブ色を呈し、全面に薄く掛けられる。内底、畳付けには砂目跡が見られる。

346～349は瀬戸・美濃焼である。346は天目茶碗で、外面体部下半は露胎とし、底部は内反り高台とする。347は卸し皿、348は鉄釉の仏花瓶、349は灰釉の瓶子である。

350、351は珠洲焼である。350は甕で、底部には砂敷きの跡が残り、タタキは3cm幅で7本を数える。351は片口鉢。352は越前焼の甕である。353は信楽焼の壺である。胎土は微砂粒を含むものの緻密で、断面灰白色、器表は灰赤色を呈す。354は瓦質の花瓶である。小片ではあるが、雷文と菊花文のスタンプがみられる。



第52図 敷地A 包含層出土遺物実測図 (S = 1 / 3)

花卉は16枚か。胎土はにふい黄橙色を呈す。355は唐津系陶器の播鉢、356は角釘である。

以上のうち342、346、348、349は遺構検出面から出土した。

第3節 敷地B

(1) 土坑

第12号土坑 (第53図)

359は珠洲焼壺底部であり、外底には静止糸切り痕、板目状圧痕が残る。土坑底面から出土した。

第13号土坑（第53図）

357は土師質土器。358は瀬戸・美濃焼の卸し皿である。

（2）掘立柱建物跡、柱穴群

第9号掘立柱建物（第53図）

363の珠洲焼片口鉢が出土している。口縁端部に波状文を施すが、やや粗雑である。卸し目は一単位8本以上とみられ、密に施される。色調は灰色。

第10号掘立柱建物

図示しなかったが、珠洲焼片口鉢、甕の破片が出土している。

第11号掘立柱建物（第53図）

362は瀬戸・美濃焼の折れ縁深皿であり、内外面に灰オリーブ色の灰釉が掛かる。その他越前焼甕なども出土している。

第12号掘立柱建物（第53図）

364、365は珠洲焼である。364は壺であり、底部には静止糸切り痕を留める。365は器壁のやや薄い片口鉢で、卸し目は7本以上とみられる。胎土に礫を多く含み、色調は灰色を呈す。366は石製の行火底部片であり、削り出しの足が付く。

第13号掘立柱建物（第53図）

361は中国製の青磁碗である。

柱穴群（第53図）

360は土師質土器である。

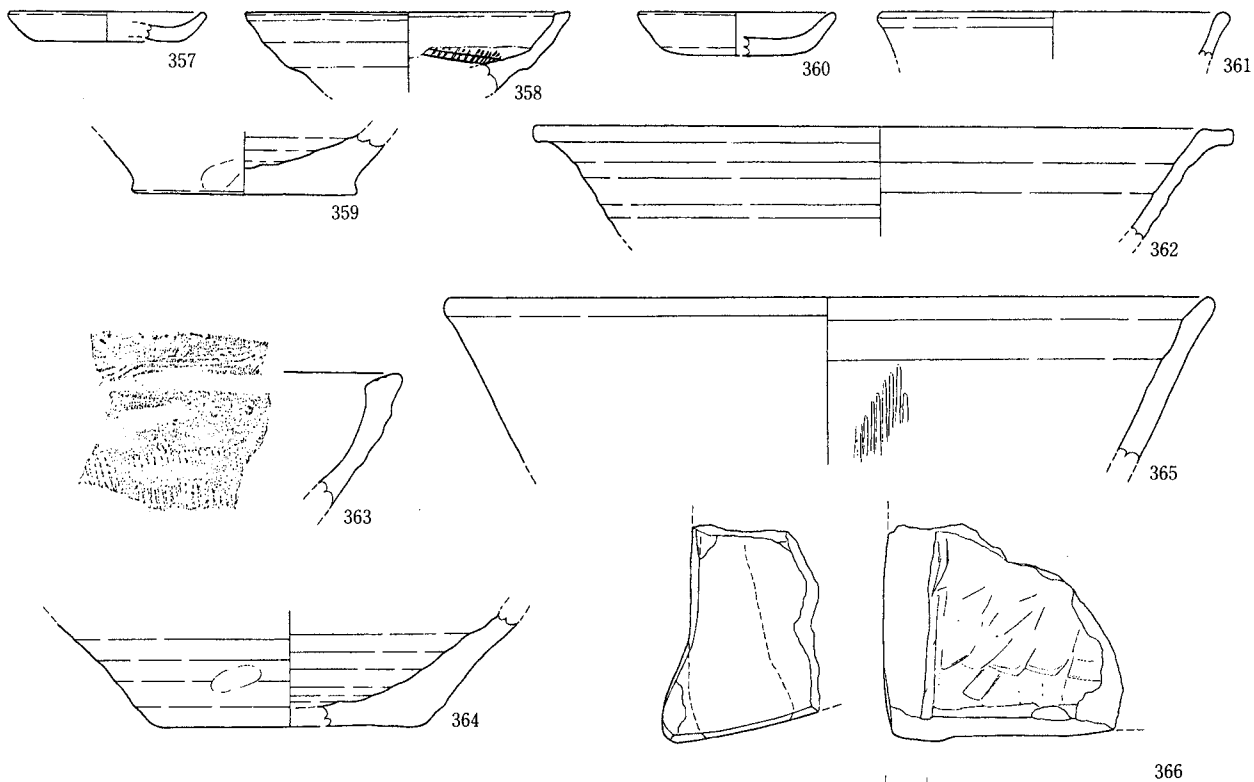
以上の出土遺物は概ね15世紀代の所産とみられる。

（3）包含層（第53図）

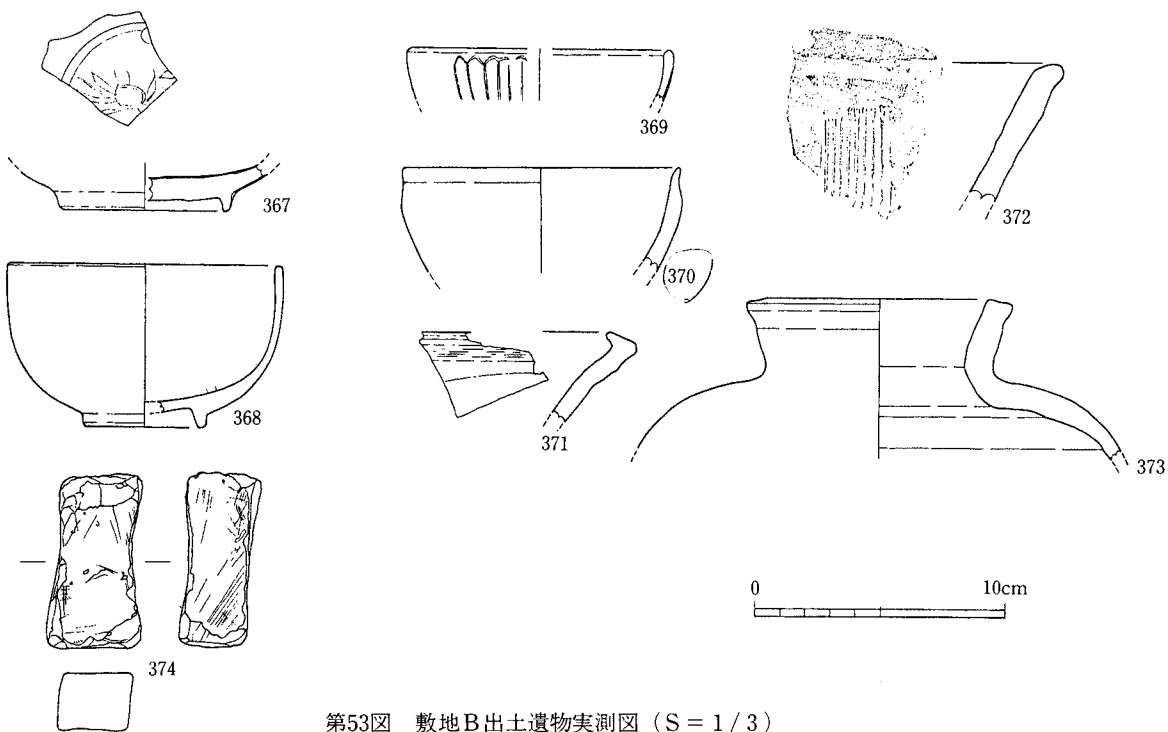
367は中国製の青磁皿とみられ、釉はオリーブ灰色に発色し、高台内は無釉とする。369、370は瀬戸・美濃焼である。369は灰釉の丸碗で、体部外面に中国製青磁碗の蓮弁文を模した押印を施す。このような装飾は大窯第1段階第1小期に見られる⁹⁹。370は天目茶碗である。

372は土師質の播鉢である。胎土は灰白色で1mm前後の砂粒を多く含み、卸し目は2.8cm幅で11本を数える。土師質の播鉢は、その形態から、主に16世紀代の越前焼の形態を模倣した製品と思われるが、軟質であり、陶製播鉢と同様に使用され得たのかどうかは疑問が残る。同質の製品は、県内では鹿西町谷内ブンガヤチ遺跡などでも少量確認されているが⁹⁸、富山県梅原護摩堂遺跡ではバラエティーに富んだ形態の製品が多く出土している⁹⁷。

373は珠洲焼の壺で、頸部から肩部にかけて降灰が見られる。胎土は堅緻だが、断面はサンドイッチ状を呈す。368は丸碗で、内底には三足ハマ跡が残る。素地は灰色、釉はオリーブ灰色を呈す。産地は不明であるが、18世紀以降の製品とみられ、近地窯の製品である可能性が高い。371は肥前系陶器の播鉢であり、口縁内外面に鉄釉を施す。374は白色で凝灰岩質の中砥石である。



- 359 第12号土坑
- 357、358 第13号土坑
- 363 第9号掘立柱建物
- 362 第11号掘立柱建物
- 364~366 第12号掘立柱建物
- 361 第13号掘立柱建物
- 360 柱穴群
- 367~374 包含層



第53图 敷地B出土遺物実測図 (S = 1/3)

第4節 敷地C

(1) 土坑

第20号土坑 (第54図)

382は中国製の白磁皿である。高台内は無釉とし、畳付けも一部釉を掻き取っている。

第22号土坑 (第54図)

375、376は土師質土器で、径はいずれも約10cmを測る。375の器壁は滑らかで、外面のナデは明瞭でない。断面では成型時に粘土を継ぎ足した様な痕跡が見え、あたかも型押し成型であるかの印象を受ける。胎土は精良で海綿骨針を含まない。377は中国製の白磁小皿、378は鉄製の鉢である。

第23号土坑 (第54図)

395～397は肥前系陶器である。396は胎土目跡を持つ皿で、浅黄色の素地に同系色の釉が掛かる。397は大皿である。橙色の素地には白色の微砂粒が混ざり、釉は灰色を呈す。395は鉢であり、口縁部は玉縁状を呈し、端部の釉を掻き取っている。高台を削り出してはいるが、碁笥底に近い。内底中央部には胎土目跡が4つ残り、小型の製品を重ね焼きしたものとみられる。胴部に鉄絵を描き、やや透明感に欠けるオリーブ黄色の釉が掛かる。素地は灰白色で硬質に焼けている。

399は越中瀬戸焼の播鉢。内外にサビ釉を施し、内面の一部に鉄釉を掛けている。素地には大小の礫が多く混ざる。398は瀬戸・美濃焼の天目茶碗であるが、口径の割に器高が低く偏平で、器壁もやや厚い。高台は削り出し輪高台であり、高台脇の削り込みは広い。釉は口縁部周辺が明赤褐色、胴部が灰オリーブ色、内底及び外面の釉溜まりが黒色と美しく変化する。高台周辺は無釉とするが、一部畳付けまで釉垂れが生じており、使用時は据わりが悪かったと想像される。大窯第3段階でもやや新しい様相を示すものか。

401、402は中砥石。何れも白色系の凝灰岩で、熊本県産天草砥と判断される。400は粉挽き白の下白である。本土坑からはこれらに混ざって、自然礫も多く出土し、水晶原石も1点出土している。また、成人の焼けた下顎骨も出土した。

以上の遺物は16世紀後半から17世紀初頭に比定される製品であり、17世紀前半でも早い段階に廃棄されたものと推定される。

第24号土坑 (第54図)

393、394は肥前系陶器である。394は皿、393は絵唐津の大皿である。内底に草文を描くが、その上に透明感のない灰色の灰釉が掛かっているため、はっきりしない。内底には胎土目跡が残る。

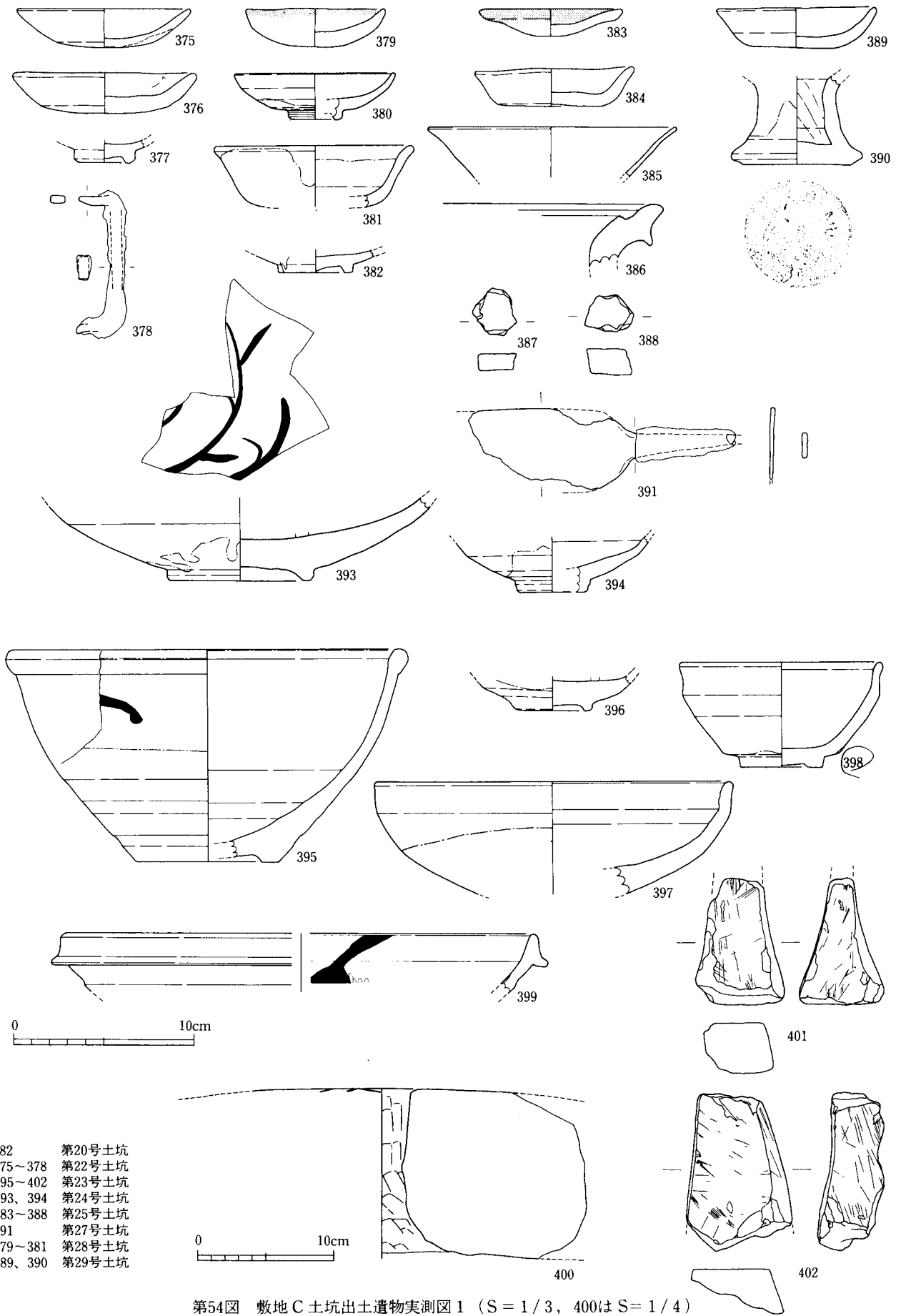
第25号土坑 (第54図)

383、384は土師質土器である。384は口縁部外面から底部付近までナデ調整を施し、底部にはへら状工具痕が残る。385は中国製の白磁皿である。素地は緻密で堅緻、釉は透明で薄い。386は越前焼の甕である。器表面は茶褐色、胎土は灰色で、白色の砂粒が多く含まれる。内面には布目跡が確認される。387、388は円盤状陶製品である。前者は珠洲焼、後者は越前焼を利用する。

第27号土坑 (第54図)

391は包丁である。木製の柄はすでにないが、鏨中に木質の痕跡が確認される。本土坑からはトウガンの種子、焼けた魚骨・鱗等が出土しており、この包丁でさばいたと想像すると面白いが、出土層位が異なっており、その可能性は高くはない。

第28号土坑 (第54図)



- 382 第20号土坑
- 375~378 第22号土坑
- 395~402 第23号土坑
- 393、394 第24号土坑
- 383~388 第25号土坑
- 391 第27号土坑
- 379~381 第28号土坑
- 389、390 第29号土坑

第54図 敷地C土坑出土遺物実測図1 (S = 1/3, 400はS = 1/4)

379は土師質土器で、口縁部内外面に切れ目なくタール状の付着物が見られる。380は中国製の白磁小皿である。口縁内面の一部を打ち欠き、燈明に使用したとみられる。381は瀬戸・美濃焼の緑釉小皿である。鉄釉が施され、硬質に焼ける。底部は回転糸切り痕を留める。3点とも15世紀前半代の年代が与えられよう。

第29号土坑（第54図）

389は土師質土器で、色調は浅黄橙色を呈す。390は瀬戸・美濃焼の仏花瓶である。素地はきめ細かく灰白色、釉はオリーブ黄色を呈する。脚部内面にはしぼり目が明瞭に残る。

第30号土坑（第55図）

420は肥前系陶器の碗である。器高は低く、内底を広くとり、鉄釉を施しているが非常にムラがある。

第31号土坑（第55図）

419は肥前系陶器の皿である。口縁端部は虫食い状に欠け、内底に胎土目跡が残る。素地には黒色鉍物粒を多く含み、釉は灰オリーブ色を呈す。大橋編年Ⅰ期の製品である。418はほぼ完形の刃物であり、刃部長10.0cm、柄部長18.6cmと柄の方がかなり長い、その形状から包丁とみられる。土坑底部南よりに、切先を下方に向け、垂直に突き刺さった状態で検出された遺物である。

第35号土坑（第55図）

411は灰釉陶器の碗。412は珠洲焼の甕である。胎土に礫を少量含むが良質であり、焼きも良い。タタキは3cmあたり10本を数え、頸基部から施される。

第36号土坑（第55図）

403は土師質土器。口縁外面を面取りする古手のタイプであり、混入品とみられる。

421～425は肥前系陶器皿である。425が砂目跡を有する以外は胎土目跡である。421は、素地は灰黄褐色、釉は灰オリーブ色を呈し、底部は殆ど碁笥底状となる。422は素地は灰色、釉は明オリーブ灰色で三日月高台となる。423は素地は橙色で気泡を多く含み、釉は明褐灰色でやや縮れている。424の素地は褐色、釉は濃いオリーブ灰色を呈す。425は高台を明瞭に造り出すが、高低差が生じているため、口縁が大きく傾いている。素地は他の肥前系陶器に比して異質で、灰白色で緻密、硬質であり、砂粒も一切含まない。高台内を含め、全面に施釉される。釉は火を受けているためやや白濁しているが、本来は透明に近かったとみられる。同質の製品は、佐賀県嬉野町内野山南窯等で知られている⁹⁸。

426は下駄の一種であろうか。形態的には第5号土坑出土の189に似るが、やや薄く、緒穴も見られない。しかし県内では前緒穴しか持たない一つ目下駄の出土例もあり⁹⁹、その類いであることも考えられる。そうした場合、図面の天地は逆となろう。427は箸状木製品。

425は大橋編年Ⅱ期、それ以外の肥前系陶器はⅠ期の製品と判断される。425が遺構上面からの出土であることから、本遺構の廃絶年代は17世紀前半の比較的早い段階と推定される。

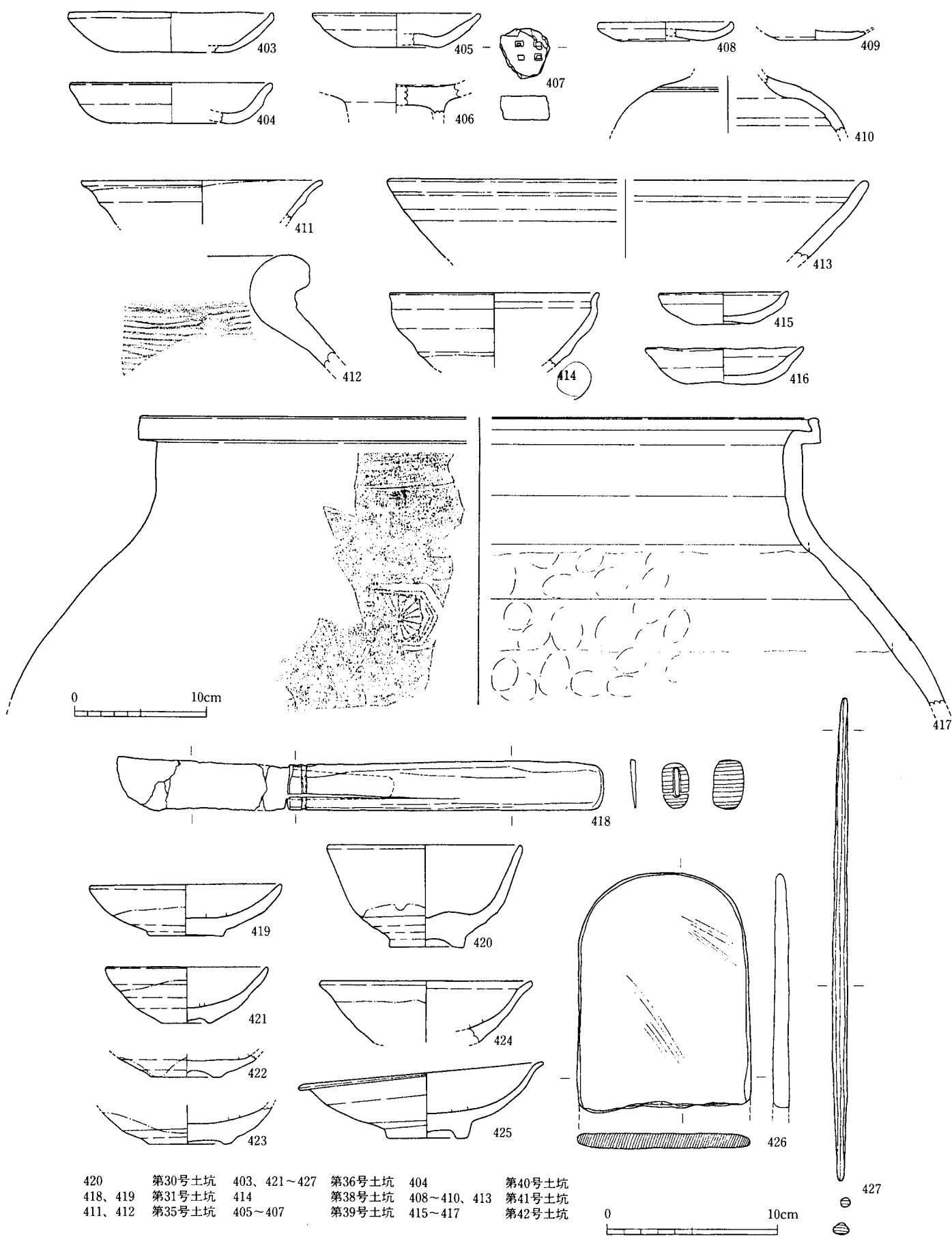
第38号土坑（第55図）

414は瀬戸・美濃焼の天目茶碗で、胴部途中まで黒色の鉄釉が掛かり、腰部にはサビ釉を薄く施す。大窯第2、或いは第3段階の所産か。

第39号土坑（第55図）

405は土師質土器である。口縁部外面上方を軽くナデ、色調は淡赤橙色を呈す。406は中国製の青磁碗で、内底には花文、界線を施す。外底にも釉が掛かるが、細く蛇ノ目釉剥ぎする。407は越前焼利用の円盤状陶製品である。

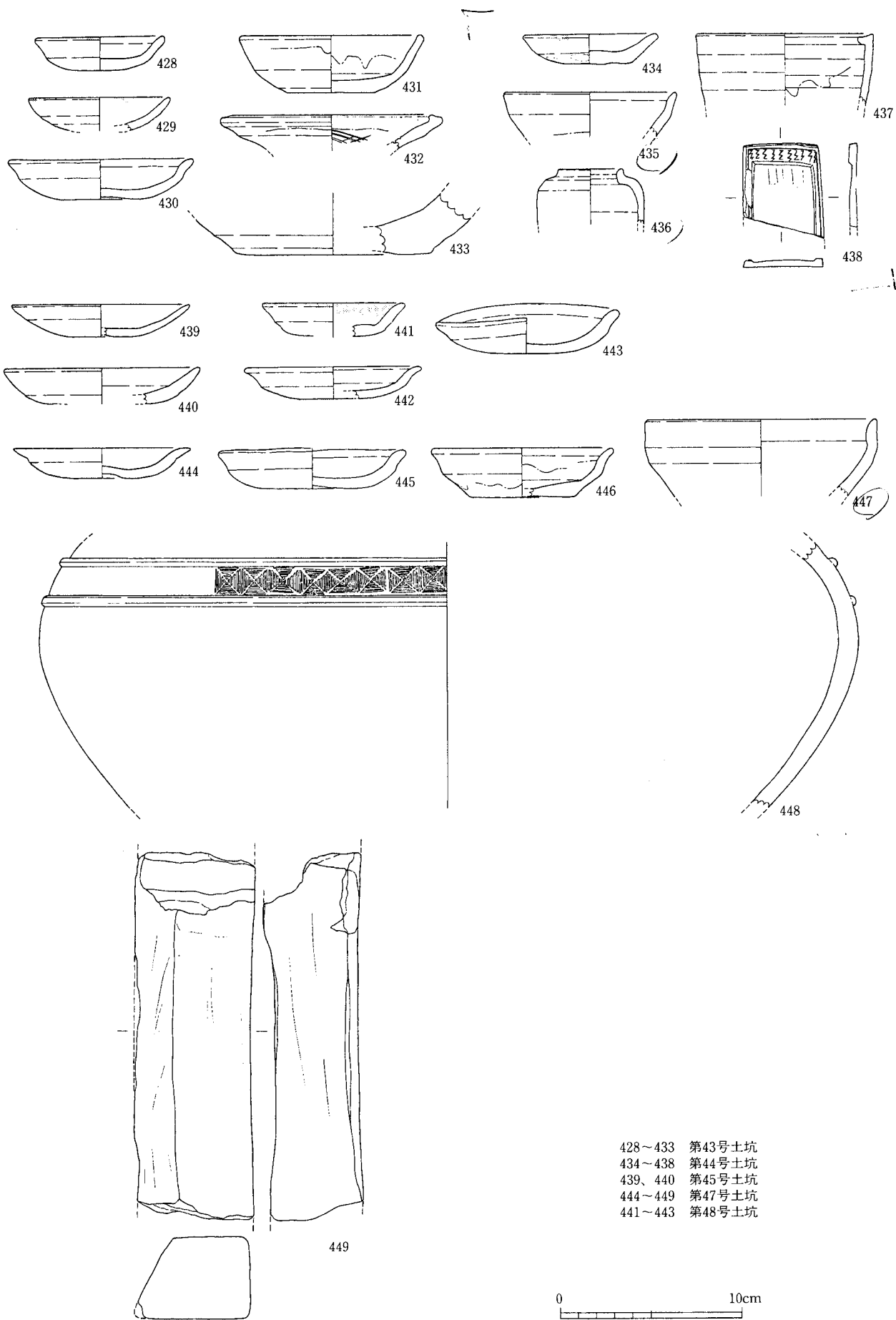
第40号土坑（第55図）



- | | | | | | |
|---------|--------|-------------|--------|-------------|--------|
| 420 | 第30号土坑 | 403、421~427 | 第36号土坑 | 404 | 第40号土坑 |
| 418、419 | 第31号土坑 | 414 | 第38号土坑 | 408~410、413 | 第41号土坑 |
| 411、412 | 第35号土坑 | 405~407 | 第39号土坑 | 415~417 | 第42号土坑 |

0 10cm

第55図 敷地 C 土坑出土遺物実測図 2 (S = 1/3, 417は S = 1/4)



第56图 敷地C土坑出土遺物実測図3 (S = 1/3)

404は土師質土器である。

第41号土坑（第55図）

408は土師質土器で、器高は1 cm強と低い。口縁部をやや内湾気味に収め、端部を面取りしている。409は中国製の白磁、410、413は瀬戸・美濃焼である。410は瓶子で、素地は灰白色、釉はオリブ灰色を呈す。413は直縁大皿である。底部片も出土しており、輪高台となる。気泡を多く含む灰白色の素地に、浅黄色の釉を施す。同一個体片が第28、35号土坑、第8、12号溝からも出土している。

第42号土坑（第55図）

415、416は土師質土器である。415は口縁端部から外面5 mm程を強くナデ、明瞭な段を形成し、底部は指頭圧痕により凹む。416は口縁部外面をナデつつ外反させ、端部を薄くおさめる。いずれも浅黄橙色を呈す。

417は加賀焼の大甕である。口径は約52cmを測る。口縁部は、N字口縁の初現的な形態を示し、L字状に垂直に立ち上がる。内面には調整時の当て具痕を留め、一部に漆様の付着物が見られる。肩部には横長の六角形の内部に菊花文を配した押印が、少なくとも6箇所押されたことが出土破片から確認される。この種の押印は窯出土資料では未確認であるが、消費地では富来町江添遺跡²⁰、中島町上町カイダ遺跡等で同様の押印を持つ製品が知られる⁽²¹⁾。色調は内外とも灰色で、焼成は堅緻である。約50点の破片が本土坑から出土し、敷地Cの包含層を始め数基の遺構から20点が出土している。年代は13世紀後半頃か。土師質土器が14世紀代の製品とみられることから、長期の使用の後、廃棄されたものと推定される。

第43号土坑（第56図）

428～430は土師質土器である。428は口径7 cmと小さい。431、432は瀬戸・美濃焼である。431は鉄釉の縁釉小皿で、底部は回転系切り痕を留める。432は卸し皿で、口縁部内外面にオリブ灰色の灰釉を施す。433は珠洲焼の壺底部である。以上は14世紀後葉～15世紀前半の製品とみられる。

第44号土坑（第56図）

434は完形の土師質土器である。口縁部外面に軽くナデを施し、底部には指頭圧痕が多く見られる。色調はにぶい黄橙色を呈す。437は中国製の青磁香炉である。素地は灰白色で気泡を多く含み、釉は明緑灰色を呈す。435、436は瀬戸・美濃焼である。435は小型の天目茶碗。436は肩衝茶入れで、外面と口縁部内面に鉄釉が薄く掛かり、赤褐色に発色する。438は硯である。海の部分は浅く、裏面は剝離している。側面は研磨するものの、造りは粗雑で、装飾は鋭利な工具でジグザグ模様を浅く描いた稚拙なものである。石材は粘板岩。435は15世紀前半、437は15世紀中葉～後葉の所産とみられる。

第45号土坑（第56図）

439、440は土師質土器である。439は器壁が薄く、胎土も精良であり、色調は浅黄橙色を呈す。

第47号土坑（第56図）

444、445は土師質土器である。445はほぼ完形で、口縁部外面にやや強いナデを施す。底部は指頭による調整を行い、中央部が僅かに盛り上がっている。胎土には5～10mm大の礫が少量含まれる。色調は灰白色。446、447は瀬戸・美濃焼である。446は鉄釉を施した縁釉小皿である。447は天目茶碗。口唇部は直立気味に立ち上がり、釉は口縁付近がにぶい赤褐色、以下は黒褐色を呈す。448は瓦質の火鉢である。器表は内外とも黒色を呈す。肩部には2本の突帯を巡らせ、その間に2個一組の重画文をスタンプする。449は大型の中砥石で、研磨面は四面認められる。

出土遺物は概ね14世紀後半から15世紀前半の所産と考えられる。

第48号土坑（第56図）

441～443は土師質土器で、法量は441は約8cmの小皿、442、443が10cm弱の中皿である。色調は441、442がにぶい橙色、443がにぶい褐色を呈す。年代は15世紀前半頃か。

(2) 溝

第10号溝 (第57図)

450は土師質土器である。453は中国製の青磁皿である。外面にはへら描き蓮弁文、内底には圏線を巡らせ、中央に双魚文をスタンプする。釉はオリブ灰色で、高台内は無釉とする。451、452は瀬戸・美濃焼の緑釉小皿である。前者は灰釉、後者は鉄釉が施され、何れも素地は灰白色で堅緻である。454は珠洲焼の片口鉢とみられるが、使用により卸し目は残存しない。胎土は灰色で礫、気泡を多く含む。456は珠洲焼の片口鉢を転用した円盤状陶製品である。455は破片であるが、ムコウデ（落潮）の部分で、黒色の粘板岩質の硯と判断される。

以上遺物の年代は14世紀後半から15世紀代に収まると思われる。

第11号溝 (第57図)

457、458は土師質土器である。458は口径約13cmと大きい。口縁部内外面は浅黄橙色を呈すが、内底及び外底部には黒斑が見られる。胎土は気泡をやや含むものの、精良で、海綿骨針は含まれない。16世紀前半の所産と考えられる。460は瓦質土器で、色調は内外とも黒色を呈す。459は中砥石である。側面を雑に打ち欠いた製品であり、他の中砥石とは様子が異なる。研ぎ面は表裏の二面である。青白色の凝灰岩質。

第12号溝

〈新溝〉(第57図)

461は瀬戸・美濃焼の天目茶碗である。体部は丸みをもって立ち上がり、端部はかすかに外反する。鉄釉は黒褐色に発色し、高台周辺には濃いサビ釉が掛けられる。462は越前焼の播鉢で、卸し目は一単位14条を数える。463は肥前系陶器の皿であり、素地はにぶい橙色、釉は灰白色を呈す。大橋編年第I期の製品である。464は刀子状の鉄製品、465は瓢箪である。

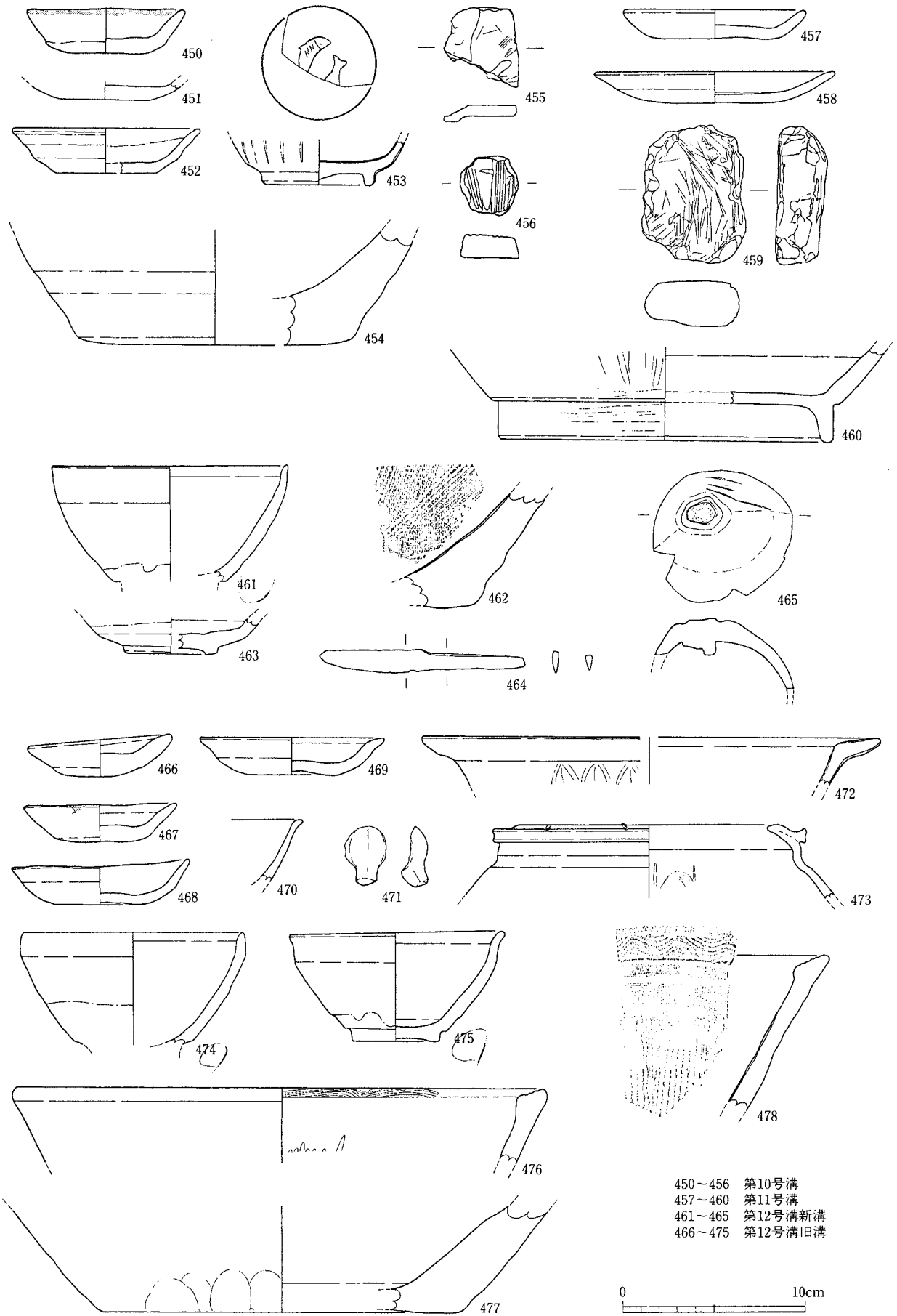
〈旧溝〉(第57、58図)

466～469は土師質土器である。466、467は厚手で、外面底部近くまでナデ調整を施すのに対し、468、469はやや薄手であり、ナデは体部上半に留まる。法量は前二者が約8cm、後二者が約10cmを測る。色調は466が灰黄色、467、468が浅黄橙色、469は黒褐色を呈す。469は15世紀代、466、467は16世紀前半の製品と推定される。

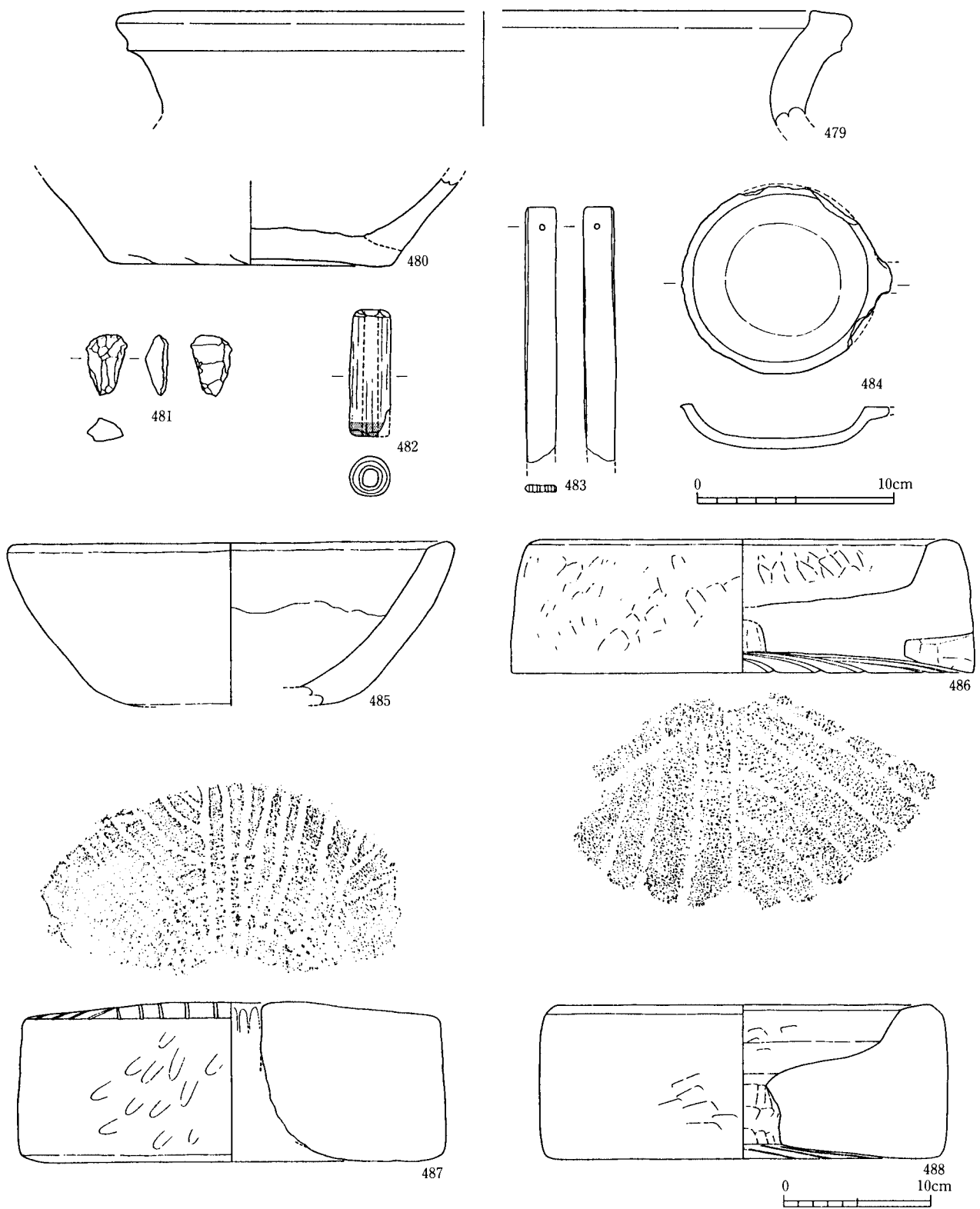
470は中国製の白磁碗Ⅷ類、471、472は青磁である。471は香炉の足で、釉は明緑灰色に発色するが、透明感はない。472は盤。胴部外面に鎬蓮弁文を持つ。口縁部には明緑灰色の釉が厚く掛かる。473は朝鮮製の甕である。素地は灰白色、緻密でやや粘質であり、縞状構造を呈す。灰オリブ色の釉が内外面に薄く掛かるが、ムラがある。口縁部上面には貝目とみられる目跡が残る。肥前系陶器にも類似した製品はみられるが、本溝からは16世紀中葉を下る遺物は確認されていないため、朝鮮の製品と判断した。

474、475は瀬戸・美濃焼の天目茶碗である。474の鉄釉は暗赤褐色に発色し、体部下半は露胎とする。475は器高が低く偏平で、高台幅は広いが高台脇の削り込みは浅く、内反り高台である。釉は黒褐色を呈し、高台周辺には濃いサビ釉を施している。割れ口には漆継ぎ痕が残る。474は古瀬戸後期、475は大窯第2段階の所産と考えられる。

476、478は珠洲焼の片口鉢で、卸し目はそれぞれ7本以上、10本以上確認される。478の胎土は白色の礫



第57图 敷地C溝出土遺物実測図 (S = 1/3)



第58図 第12号溝旧溝出土遺物実測図 (S = 1/3, 485~488は S = 1/4)

を多く含み、内外面は降灰のため、光沢がある。吉岡編年Ⅴ期の製品とみられる。477は珠洲焼の甕の底部である。

479、480は越前焼である。479は甕で、素地は灰白色を呈し、器表にはオリーブ灰色の自然釉がみられる。

482は中央部に穿孔のある木製品であり、一端は炭化している。本遺跡では土錘が大量に出土していることから、漁網の浮子である可能性が指摘される。483は木筒である。文字は判読できないが、穿孔されてお

り、荷札木簡等の性格が考えられる。484は鉄製品である。内外面に厚くタール状の付着物が認められ、出土当初は土師質土器の燈明皿と誤認した。口縁部の一部が更に外方へ伸びており、おそらく持ち手を有する製品と思われる。とりべとしての用途が考えられようか。

481は瑪瑙で火打ち石とみられる。485は石鉢。486、488は粉挽き白の上白、487は下白である。486の白目は6本以上、487は8本確認される。

第12号溝集石遺構

〈新溝〉(第59図)

489は宝篋印塔の笠を転用した大型の砥石である。研ぎ面は四面で、大型の製品を研いだものと推定される。490は円筒に近い石材を掘りくぼめた製品である。口縁内外には炭化物が付着する。491は粉挽き白の上白、492、493は下白である。492は8分画に復元され、白目は8本確認を数える。

〈旧溝〉(第60図)

494は片口を有する石鉢である。内面は使用のためか平滑であるが、被熱の痕跡があり、火鉢類としての使用が想像される。3分の2程度の破片であるが、重量は約11kgと重い。口縁部を下にした状態で出土した。495～498は粉挽き白の上白である。白目は495が6本、496、497が6本以上確認される。496は使用により、白面がかなり摩耗している。石材は桑山石と同定される。本遺構に限らず、遺跡全体の傾向として、粉挽き白は、下白に比して上白の出土点数が非常に多い。

(3) 掘立柱建物跡、柱穴群

第14号掘立柱建物 (第54図)

土坑出土資料を第54図382として報告した。

第15号掘立柱建物 (第61図)

503は土師質土器である。体部内面上方にはほぼ1cm間隔で布目状の圧痕が残る。506は中国製青磁の袋物である。素地は灰白色を呈し、細かい気泡を含むが緻密、釉は透明感のない灰オリーブ色である。口縁部に段を設け、釉を掻き取っていることから、蓋を有した製品と推定される。14世紀代の所産か。

第16号掘立柱建物

図示していないが、珠洲焼、瀬戸・美濃焼等の小片が多数出土している。

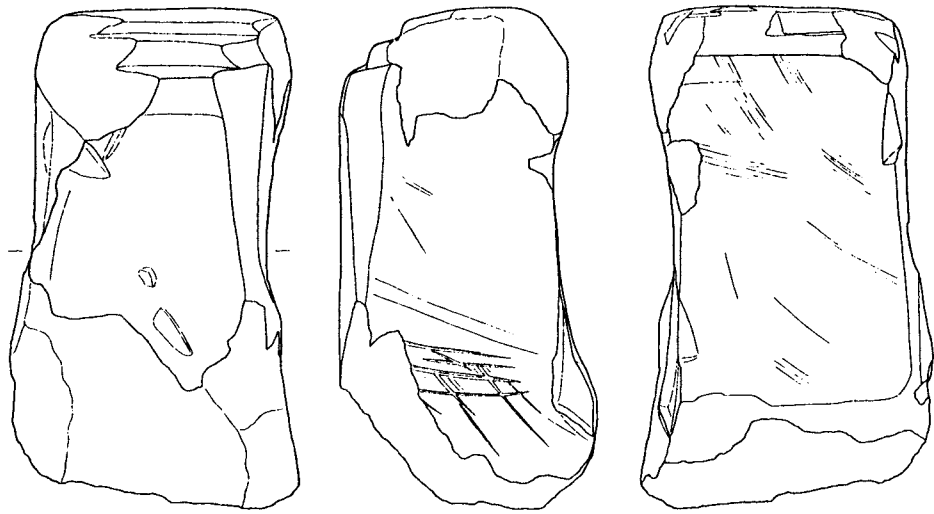
第17号掘立柱建物 (第61図)

507は中国製の青磁碗であり、体部に間弁のない片切り掘りの蓮弁文を施す。釉は透明感のない灰オリーブ色に発色する。513は粉挽き白の上白であり、北方角の柱穴から出土し、その状況から根石として使用されたとみられる。石材は桑山石と思われる。

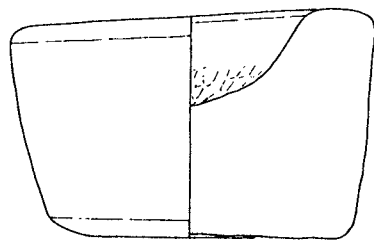
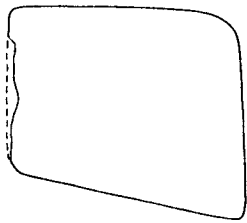
柱穴群 (第61図)

499～502、504、505は土師質土器である。いずれも口縁部外面に一段のナデを施すが、501のナデは極めて弱い。501の内面には布目状圧痕が明瞭に残る。502の口縁の一部、504にはほぼ全周して燈芯油痕が付着する。法量は499、504が口径7cm強、501、502は8cm弱、504、505は約10cmを測る。色調は499、502が灰白色、500、501がにぶい橙色、504、505が浅黄橙色を呈す。なお、500と501、504と505はそれぞれ同一ピットから出土した。

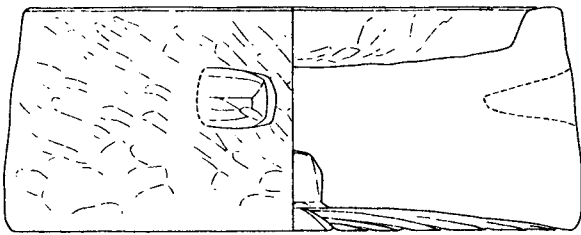
508は瀬戸・美濃焼の折れ縁、或いは直縁深皿である。内外面体部上方に灰釉が施され、底部には粗雑な三足が付く。509は珠洲焼壺で、500、501と同一ピットから出土した。512は越前焼の大甕である。外面には



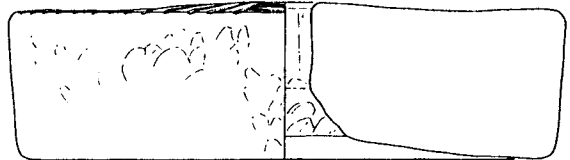
489



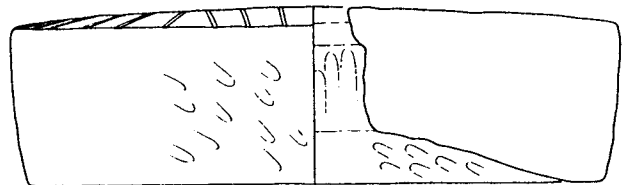
490



491



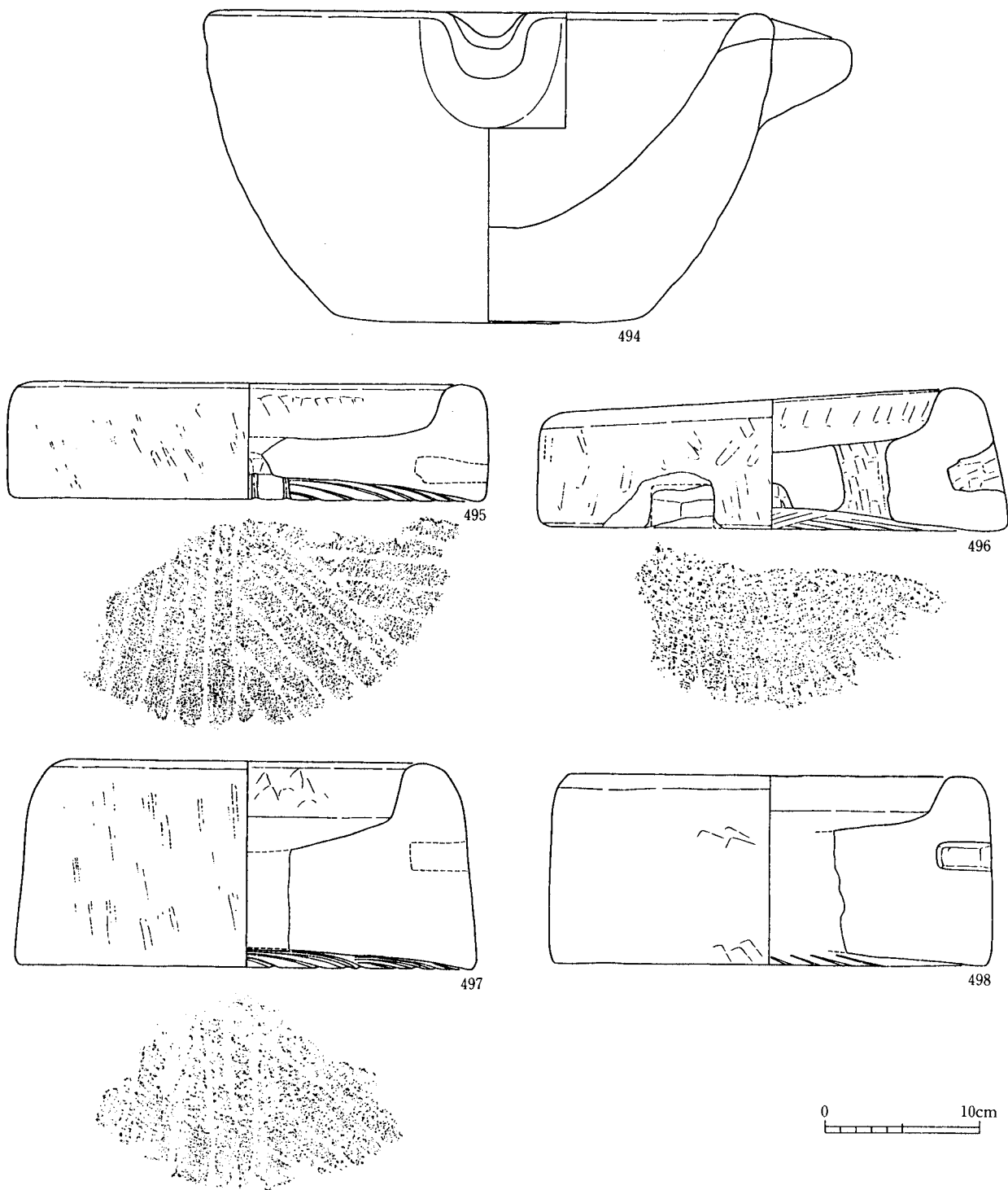
492



493

0 10cm

第59图 第12号溝新溝集石遺構出土遺物実測図 (S = 1/4)



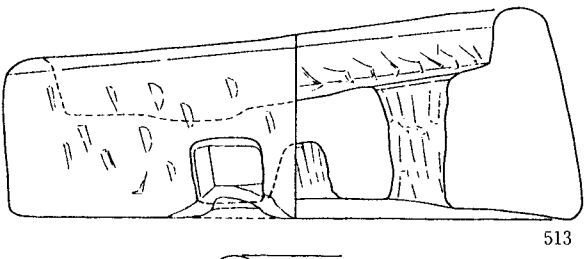
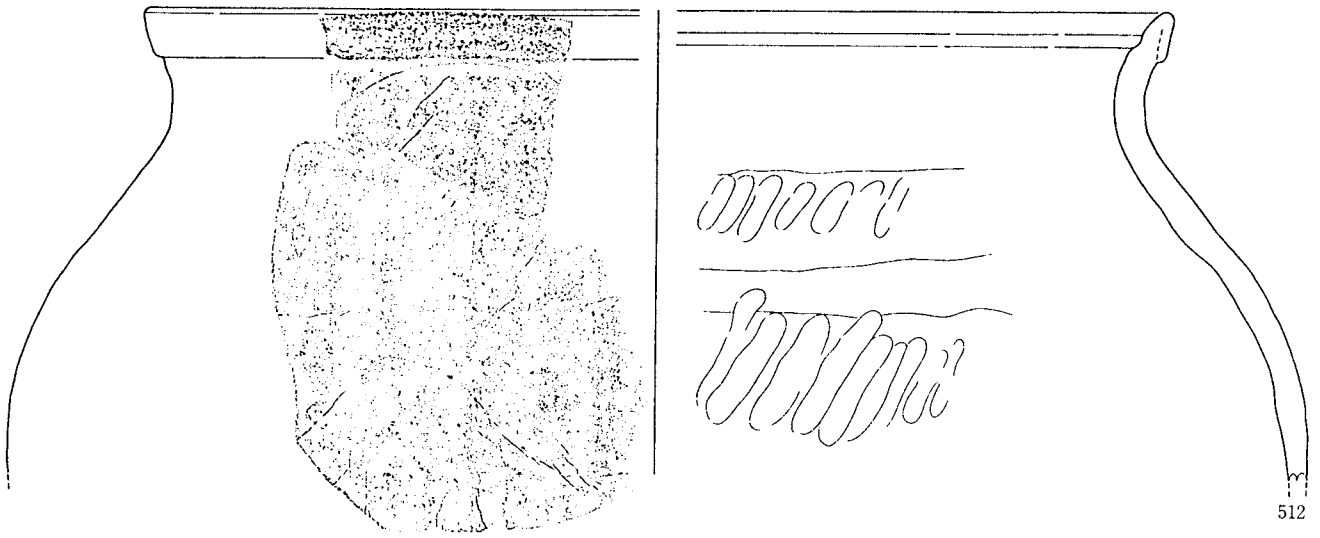
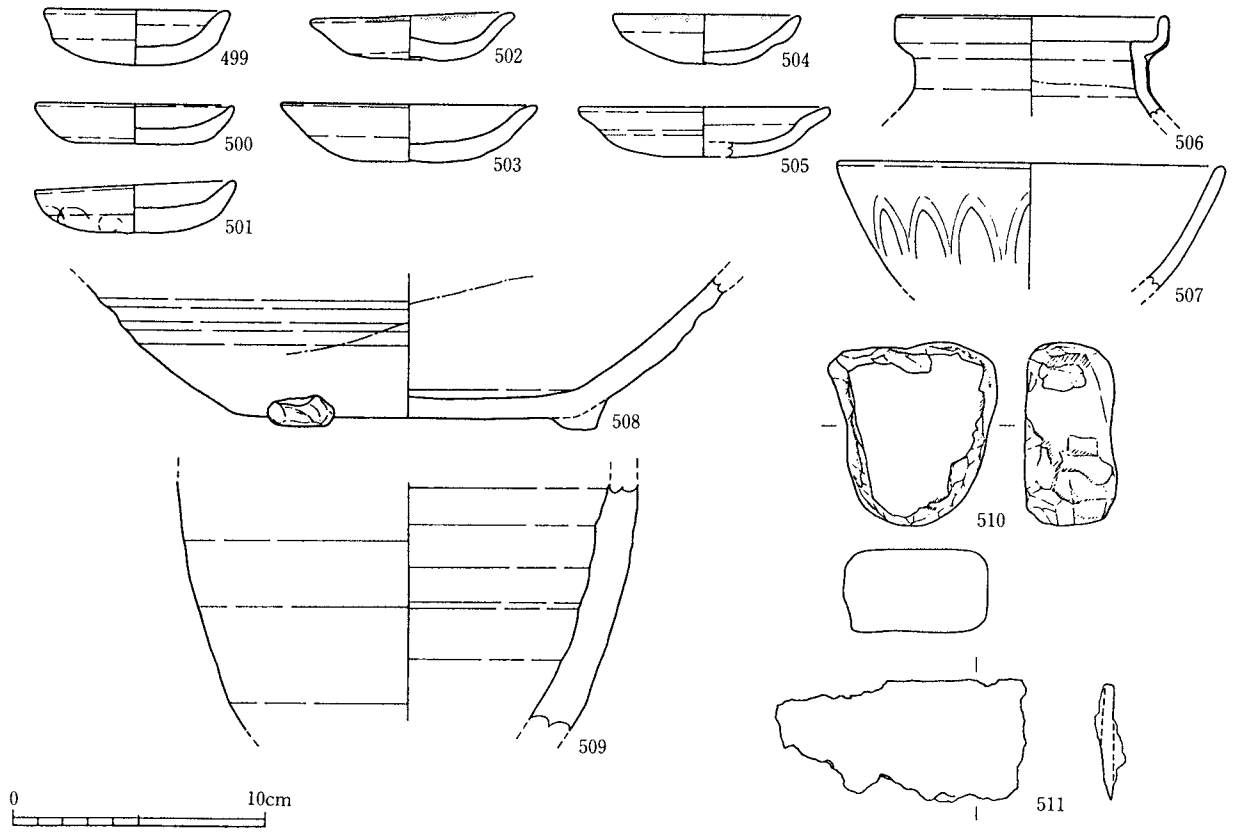
第60図 第12号溝田溝集石遺構出土遺物実測図 (S = 1/4)

灰オリーブ色の自然釉が筋状に流れ、内面には粘土紐の接合部を押さえた指跡が残る。

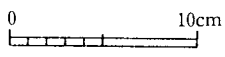
510は火打ち石、511は鉄製品で、木葉ノコの先端部とみられる。

以上の遺物は概ね14世紀後半～15世紀前半に収まるものである。わずかな遺物で断定はできないが、柱穴出土の遺物からは、敷地 A・B に遅れて敷地 C に建物が構築されるとした推定を検証できない。

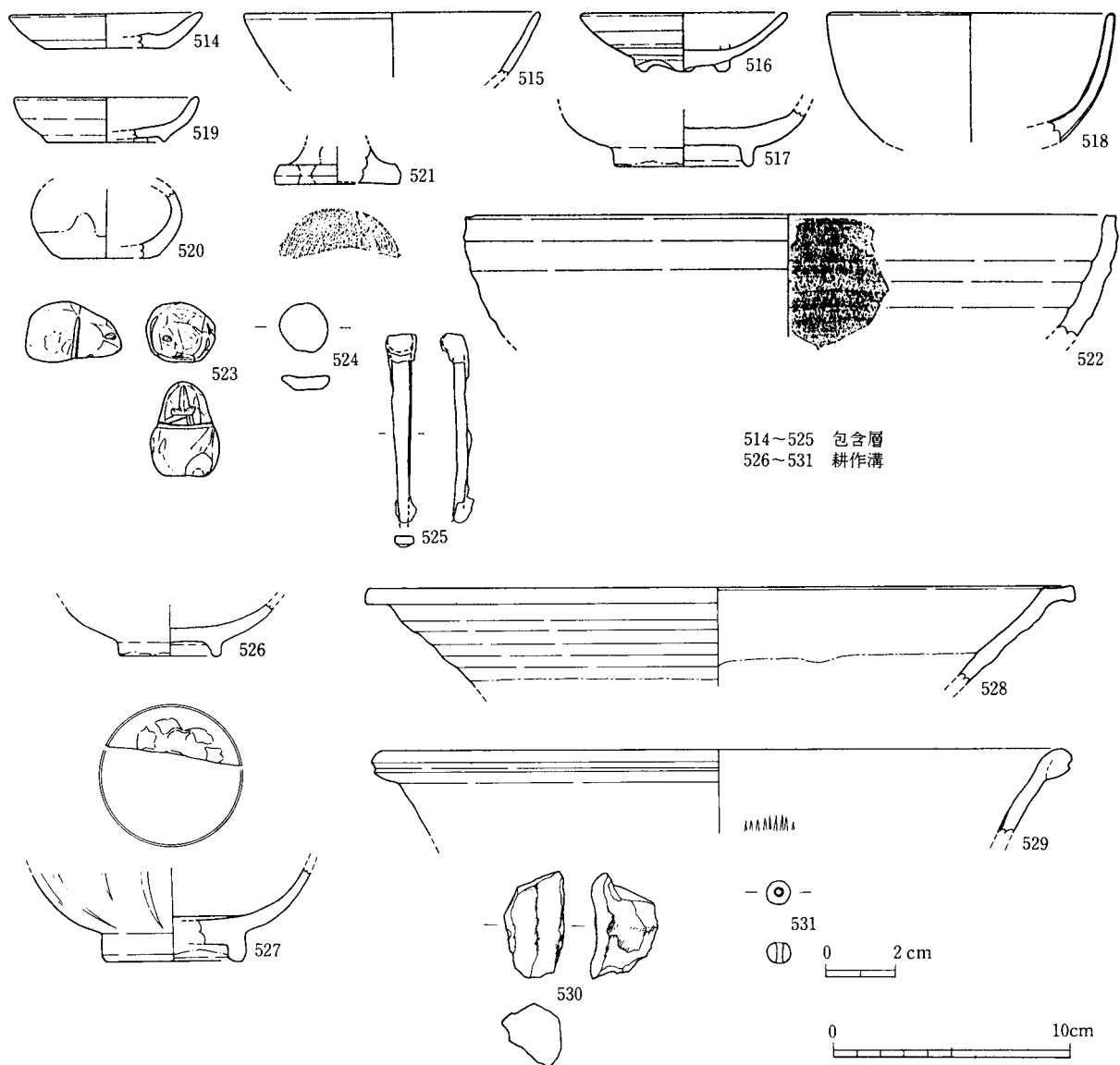
(4) 包含層 (第62図)



503、506 第15号掘立柱建物
 507、513 第17号掘立柱建物
 上記以外 柱穴群



第61図 敷地C 掘立柱建物跡・柱穴群出土遺物実測図 (S = 1/3, 512、513は S = 1/4)



第62図 敷地C 包含層，耕作溝出土遺物実測図（S = 1/3，531はS = 1/2）

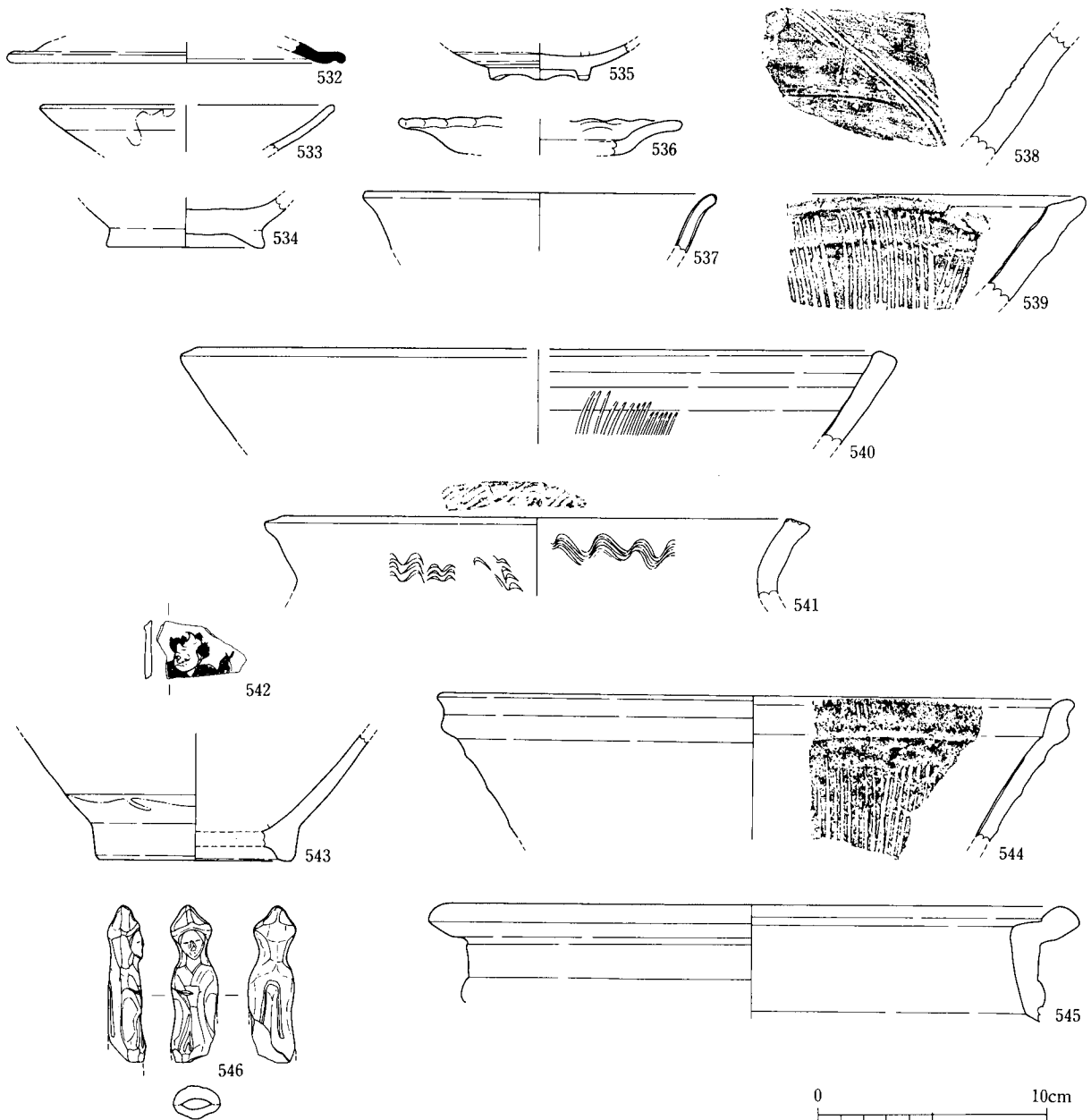
514は土師質土器であるが、断面灰色、器表は黒色を呈し、瓦質土器であるかの印象を受ける。

515～518は中国製である。515は白磁碗で、素地には気泡が多く、ピンホールが多数見られる。516は白磁小皿であり、内底には重ね焼き跡が残る。517は青磁皿で、釉は明緑灰色、畳付け、高台内面を除いて施釉される。518は無文の青磁碗で、灰オリーブ色の釉が厚く掛かっている。515が12世紀中葉～13世紀の製品であるほかは15世紀代の所産とみられる。

519～521は瀬戸・美濃焼である。519は小型の灰釉の丸皿で、外底にトチン跡が残る。印花の有無は不明。520は合子である。内面及び外面途中まで灰釉が掛かる。521は灰釉を施しており、仏花瓶と思われる。520は古瀬戸後期、519は大窯段階の製品である。

522は珠洲焼の片口鉢である。外表面は暗灰色で光沢を帯びる。

523は土人形である。その形状から、ネズミ等の動物ではないかと推測している。524は円盤状陶製品である。一般的に陶磁器の使用が多いが、これは土師器を利用したものであり珍しい。断面は滑らかであるが、研磨されたものか摩滅したものかは不明。525は角釘である。



第63図 水田部（北部）出土遺物実測図（S = 1 / 3）

（5）耕作溝（第62図）

527は中国製の青磁碗である。胴部外面にはへら描き蓮弁文、内底にはスタンプ文が施される。526、528は瀬戸・美濃焼である。526は丸碗であり、畳付けを除く外面には鉄釉が、内面には灰釉が施される。時期は特定できないが、近世の製品と思われる。528は灰釉の折れ縁深皿。529は肥前系陶器の播鉢である。口縁部は折り返して玉縁状とし、沈線を巡らす。内外面には錆釉を施している。530は火打ち石で、石材は瑪瑙である。531は数珠玉。材質は硝子と思われる⁽²²⁾。

以上はいずれも東側耕作溝群からの出土である。

第5節 水田部

(1) 北部 (第63図)

532は須恵器の坏蓋、533は灰釉陶器の皿、534は土師器碗である。

535は中国製の白磁小皿で、内底に重ね焼き跡が見られる。536、537は中国製の青磁である。536は稜花皿、537は端反り碗である。

538、540、541は珠洲焼である。538、540は片口鉢で、538は1cm幅4本の卸し目を斜位に施す。胎土は灰色で焼きも良い。541は壺。口縁端部、頸部内外面は波状文で装飾される。539は越前焼の播鉢で、卸し目は4cm幅に11本を数える。焼成が悪く、胎土は淡橙色を呈す。543は産地不明の碗である。素地は灰白色を呈し緻密、内面と外面途中まで透明感のないオリーブ黄色の釉を施す。544は越中瀬戸焼の播鉢である。卸し目は7本以上を一単位とし、密に施される。素地には砂粒、礫が多数混入し、器表はざらついている。内外面に赤褐色の錆釉が掛かる。542は肥前系磁器皿の底部である。人物画が染付されるが、頭頂部に角状の突起があり、鬼とみられる。545は瓦質の火鉢類で、内外とも黒色を呈し、口縁部内面から外面にかけてミガキが施される。546は土人形である。

(2) 南部 (第64図)

547は内面黒色土器碗、548は土師器の大皿である。

549～553は土師質土器で、550を除いて平底である。それらは外面底部間際まで極めて弱いナデを施す。法量は549～551が口径約7cm、552が約9cm、553が約11cmを測る。549～551は完形品であり、551は口縁部に燈芯油痕が全周する。色調は全て浅黄橙色を呈す。15世紀代の所産か。

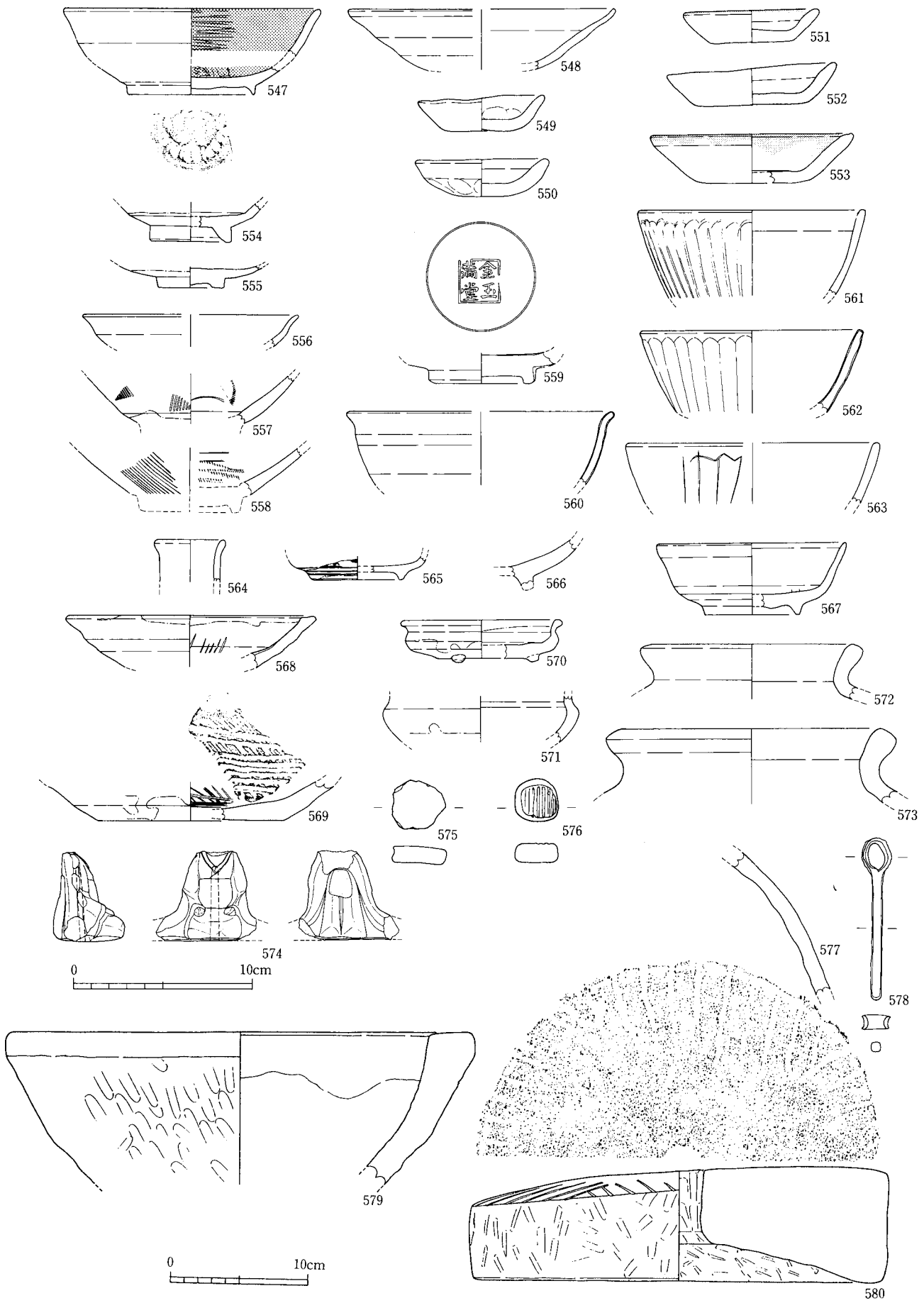
554は中国製の白磁碗、555、556は皿である。555の内底の釉にはムラがあり、細かい凹凸を成している。557～563は中国製の青磁碗である。557、558は同安窯の製品であり、灰色で気泡を含んだ素地にオリーブ灰色系の釉を高台近くまで施す。559は見込みに圈線を巡らし、その中央に「金玉満堂」とスタンプを押す。釉は非常に透明感のあるオリーブ灰色で、外面と一部畳付けから外底にかけて施される。560の器壁は薄手でシャープであり、稜線が明瞭である。素地は灰色、釉はオリーブ灰色を呈す。561～563は体部外面に線描き蓮弁文を施す。いずれも縦線を入れ、花卉を連続して描くタイプであり、蓮弁文碗の中でも新相を示す。560と563の割れ口には漆継ぎの跡が残る。年代は554が11世紀後半～12世紀前半、557、558、559が12世紀末～13世紀代、560が14世紀後半、561～563が15世紀後半以降に搬入された製品である。

566、567は朝鮮製である。566は青磁碗で、素地は灰色でサンドイッチ状を呈し、オリーブ灰色の釉が高台近くまで薄く掛かる。567は小碗で、内底に胎土目様の跡がみえる。素地は灰色で黒色の鉍物粒をやや多く含み、釉は明緑灰色で全面に施した後、畳付けから外底にかけて雑に掻き取る。二つに割れたと見え、残存する二分の一の割れ口には全面に漆継ぎの跡が残る。

568～571は瀬戸・美濃焼である。568、569は卸皿、570、571は袴腰香炉である。全て灰釉が掛かる。古瀬戸後期の製品と考えられる。572、573は珠洲焼短頸小壺、577は信楽焼の壺の肩部である。

564、565は肥前系磁器。564は青白磁の瓶類、565は染付である。

574は土人形。575、576は円盤状陶製品で、前者は信楽焼壺、後者は珠洲焼片口鉢の転用である。576は断面を研磨する。円盤状陶製品は本遺跡から多数出土したが、確実に断面を研磨したと認識できるのはこの1点のみである。578は留め金具様の鉄製品である。579は石鉢。580は粉挽き白の下臼の完形品である。かな



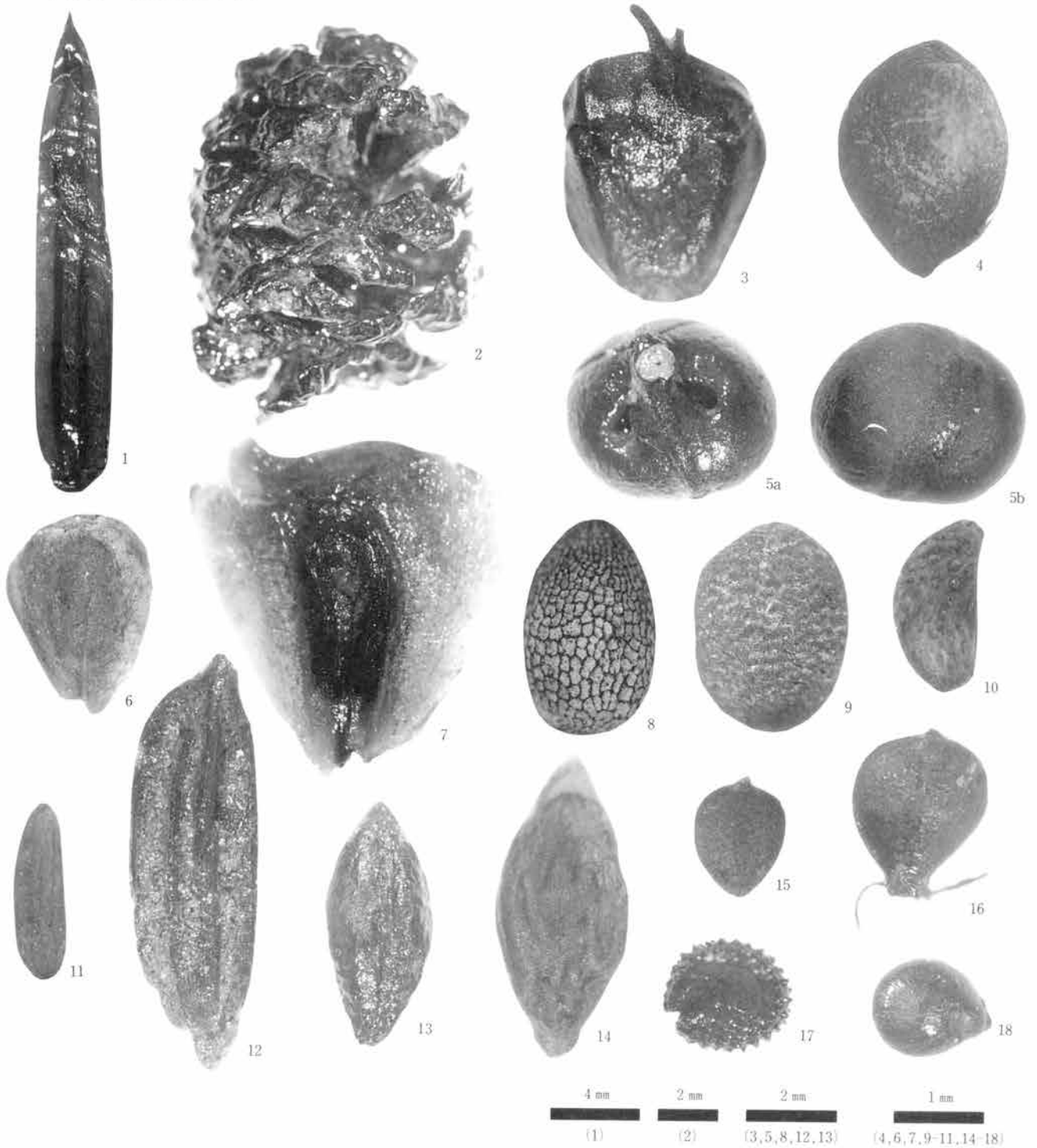
第64図 水田部(南部)出土遺物実測図 (S = 1/3, 579、580は S = 1/4)

り摩滅しており分画は判然としないが、白目は8本と推定される。石材は桑山石と同定されるものである。

註

- (1) 大橋康二 1988 『肥前陶磁』ニューサイエンス社
I期(1580~1600年代) IV期(1690~1780年代)
II期(1600~1650年代) V期(1780~1860年代)
III期(1650~1690年代)
- (2) 森田勉 1978 「太宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』九州歴史資料館
- (3) 瀬戸市史編纂委員会 1993 『瀬戸市史 陶磁史編四』
第1段階(1485~1520年) 第4段階(1590~1610年)
第2段階(1520~1555年) 第5段階(1610~1675年)
第3段階(1555~1590年)
- (4) 藤澤良祐 1991 「瀬戸古窯址群II—古瀬戸後期様式の編年」『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要X』瀬戸市歴史民俗資料館
後I期 (14世紀中葉) 後IV期(古)(15世紀中葉)
後II期 (14世紀後葉~15世紀初頭) 後IV期(新)(15世紀後葉)
後III期 (15世紀前葉)
- (5) 垣内光次郎・藤田邦雄・宮下幸夫 1990 「加賀窯の生産構造と製品流通」『中世北陸の在り地窯』北陸中世土器研究会
- (6) 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館
I期(12世紀中葉~後葉) V期(14世紀後葉~15世紀前半)
II期(13世紀前半) VI期(15世紀後半)
III期(13世紀中葉~後葉) VII期(15世紀末葉)
IV期(13世紀末葉~14世紀中葉)
- (7) 宮田進一氏のご教示による。
- (8) 南洋一郎 1986 「漆椀・皿に関する二、三の問題」『朝倉氏遺跡資料館紀要』福井県立朝倉氏遺跡資料館
- (9) 三浦ゆかり氏のご教示による。
- (10) 垣内光次郎 1990 「中世北陸の暖房文化」『石川考古学研究会々誌 第33号』石川考古学研究会
- (11) 吉岡康暢氏のご教示による。
- (12) 四柳嘉章 1987 「中・近世漆器の編年」『西川島』穴水町教育委員会
- (13) 中島町役場 1995 『中島町史 資料編』上巻
- (14) 註(5)に同じ。
- (15) 註(3)に同じ。
- (16) 石川県立埋蔵文化財センター 1995 『谷内・杉谷遺跡群』
- (17) 越前慎子氏等のご厚意により実見させていただいた。
- (18) 第4回九州近世陶磁研究会にて実見。
- (19) 七尾市教育委員会 1992 『七尾城跡シッケ地区遺跡発掘調査報告書』
- (20) 註(5)に同じ。
- (21) 註(13)に同じ。
- (22) 中山由美氏ご教示による。

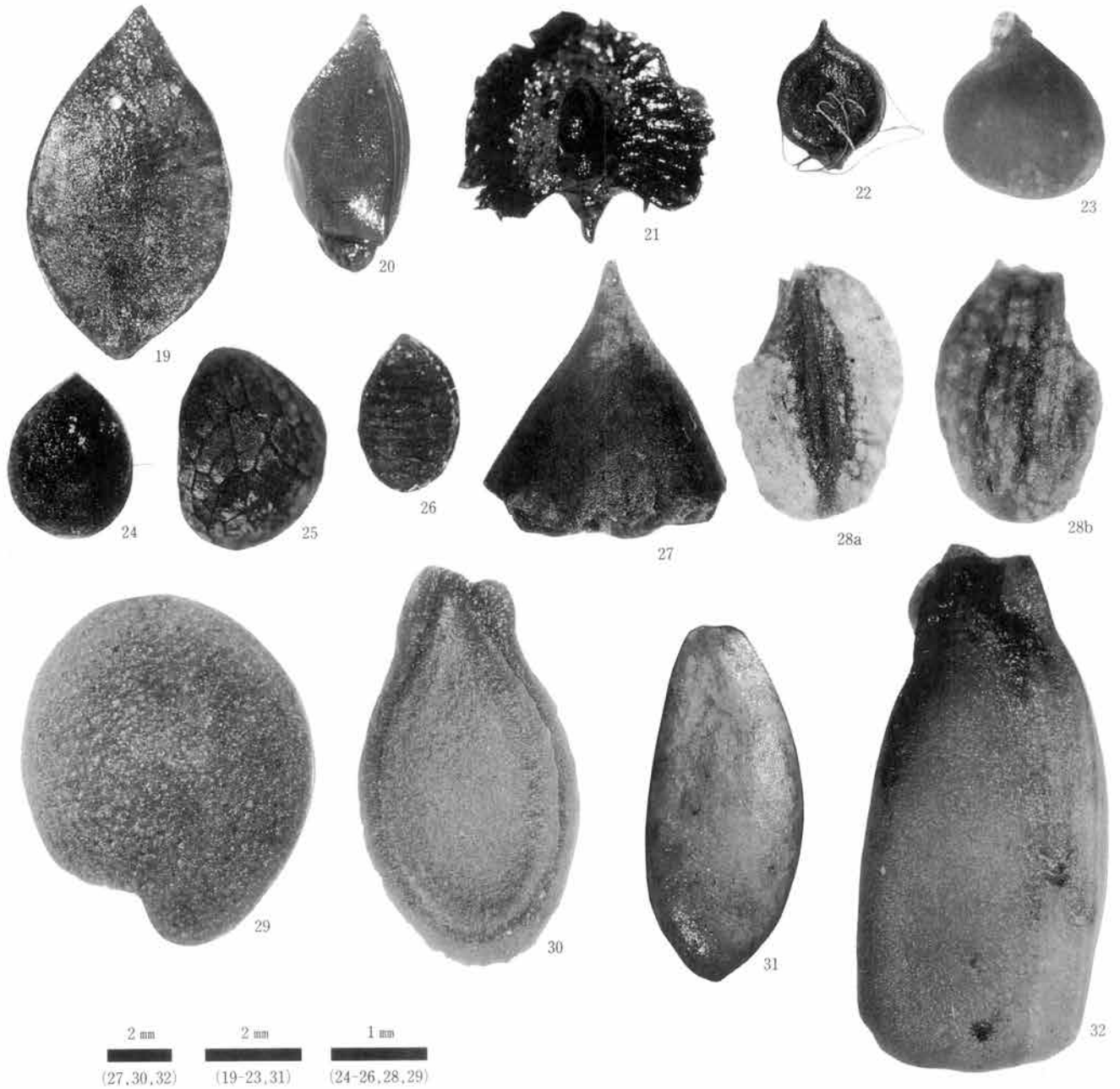
図版1 種実遺体 (1)



1. カヤ (第28号土坑No.6層C9区⑤)
3. ハンノキ亜属 (第9号溝No.7層⑨)
5. ノブドウ (第8号溝)
7. オモダカ属 (第8号溝)
9. ニワトコ (第9号溝No.7層⑩)
11. ミスアオイ属 (第28号土坑No.6層C9区⑤)
13. オオムギ (第28号土坑No.6層C9区④)

2. ハンノキ亜属 (第9号溝No.7層⑩)
4. クワ属 (第8号溝)
6. サジメモダカ属 (第10号溝セクションベルトNo.11, 13層)
8. サンショウ (第8号溝)
10. キイチゴ属 (第28号土坑No.6層C9区④)
12. イネ (第8号溝)
14. アワ近似種 (第10号溝セクションベルトNo.11, 13層)
15. カヤツリグサ科 (第9号溝No.7層⑪)
16. ホタルイ属 (第9号溝No.7層⑪)
17. ナデシコ科 (第28号土坑No.6層C9区⑤)
18. アカザ科—ヒユ科 (第10号溝No.11, 13層⑪)

図版2 種実遺体(2)



19. ノバ (第9号溝No.7層⑪)

21. ギシギシ属 (第8号溝)

23. トウダイグサ科 (第8号溝)

25. エゴマ近似種 (第10号溝No.11、13層⑬)

27. ヒシ属 (第10号溝No.11、13層⑬)

29. ナス近似種 (第8号溝)

31. メロン類 (第8号溝)

20. タデ属 (第8号溝)

22. サナエタデ近似種 (第8号溝)

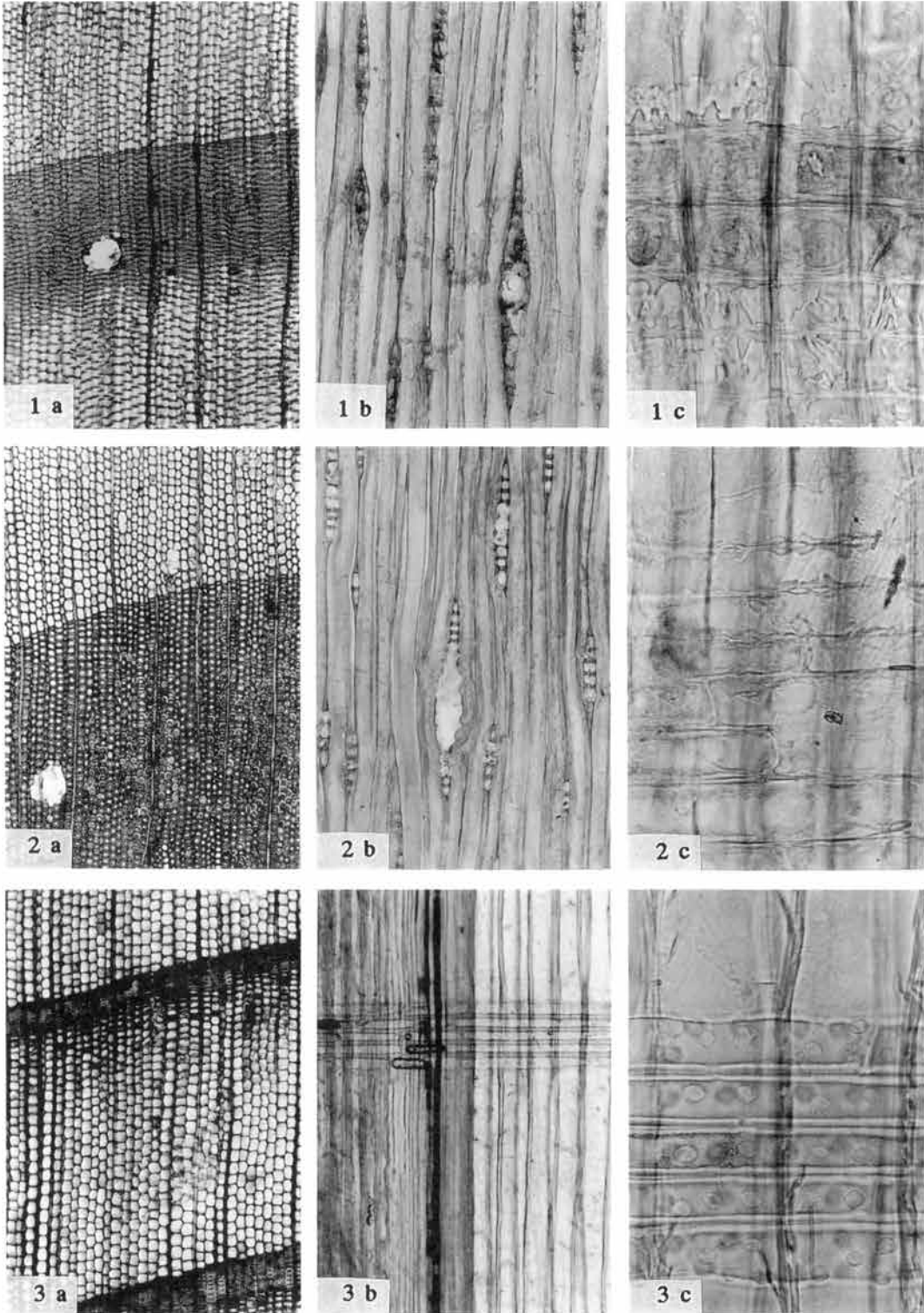
24. エノキグサ近似種 (第9号溝No.7層⑩)

26. カタバミ属 (第10号溝No.11、13層⑬)

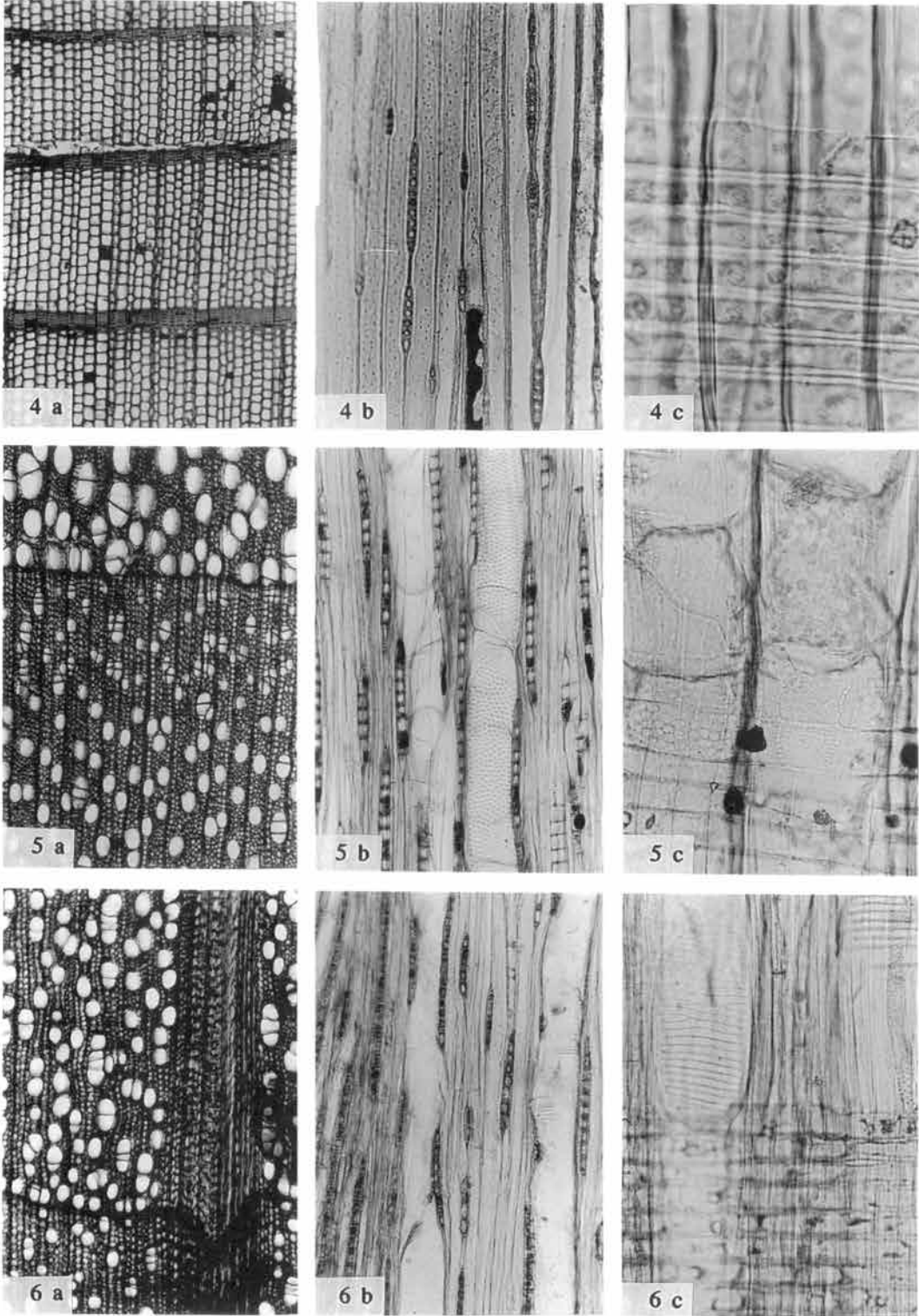
28. セリ科 (第10号溝No.11、13層⑬)

30. トウガン (第28号土坑No.6層C9区⑤)

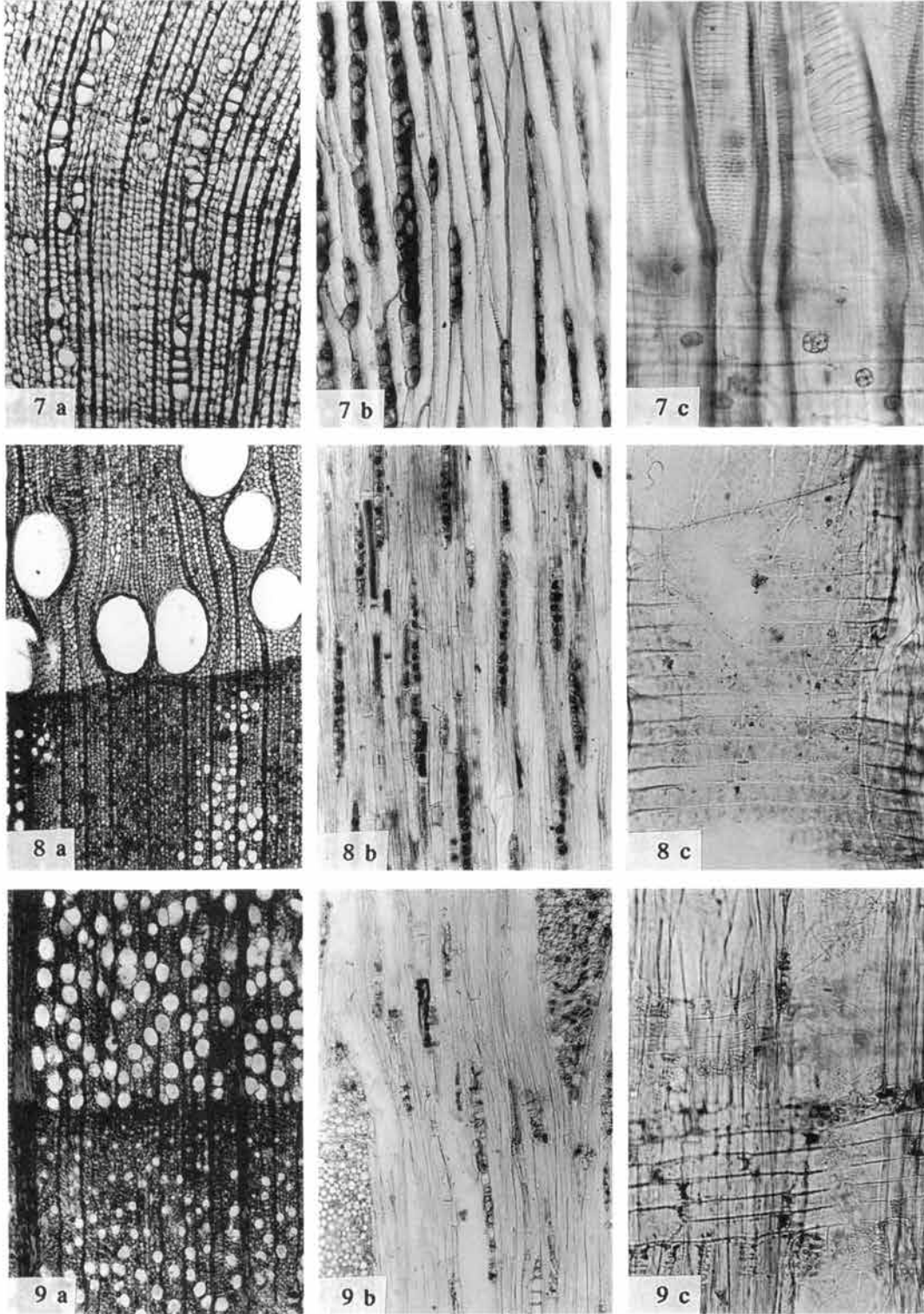
32. ヒョウタン類 (第8号溝)



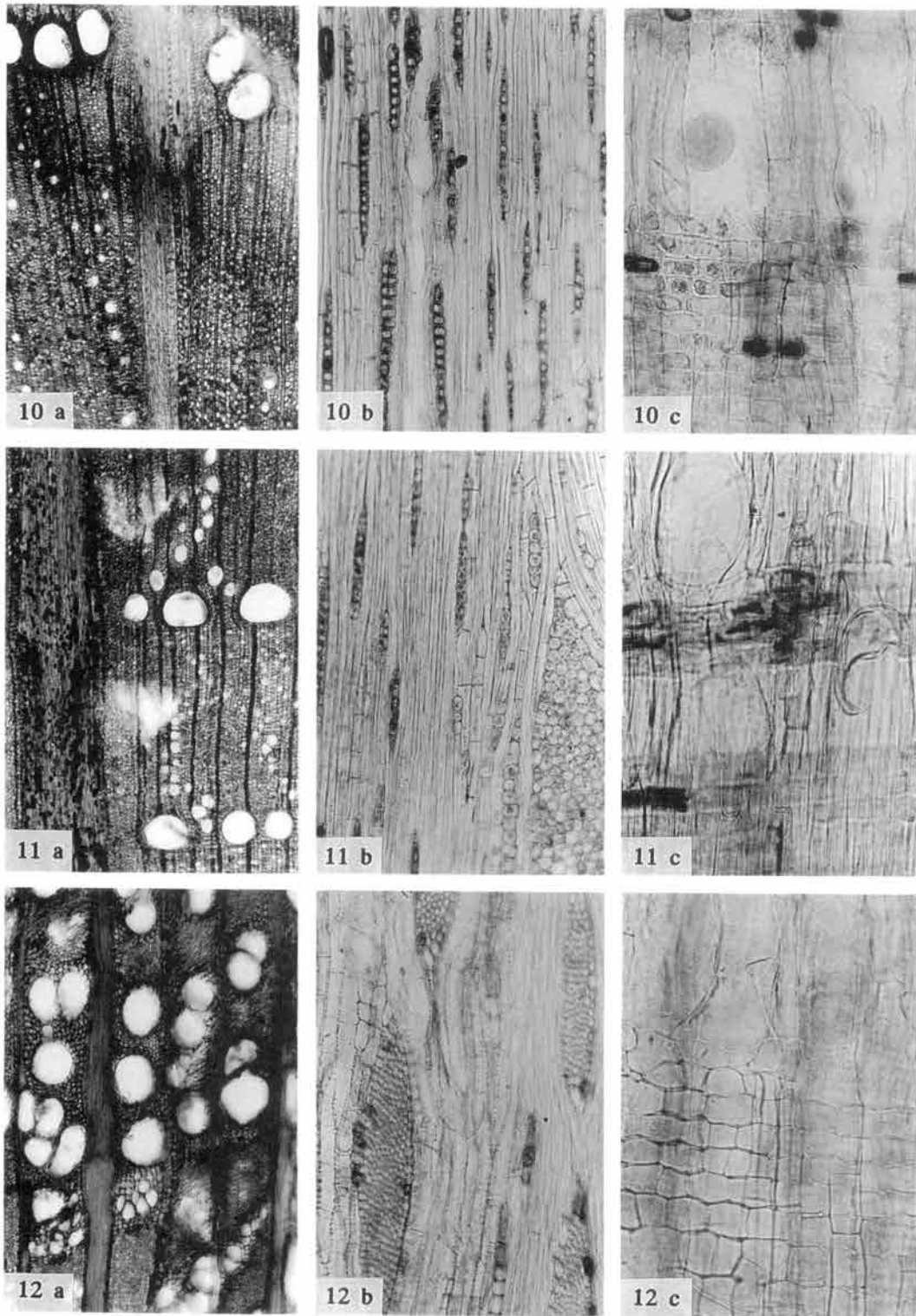
1. アカマツ ISF-1659. a: 横断面40X; b: 接線面100X; c: 放射面400X
 2. クロマツ ISF-1620. a: 横断面40X; b: 接線面100X; c: 放射面400X
 3. スギ ISF-1670. a: 横断面40X; b: 接線面100X; c: 放射面400X



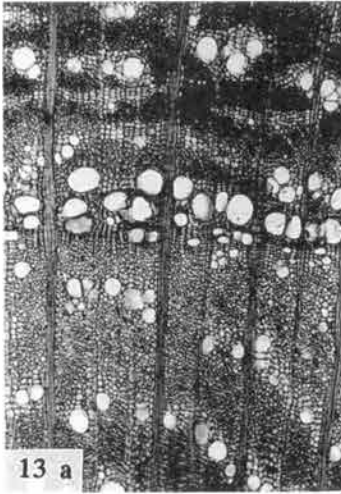
4. ヒノキ ISF-1674. a: 横断面40X; b: 接線面100X; c: 放射面400X
 5. ヤナギ属 ISF-1649. a: 横断面40X; b: 接線面100X; c: 放射面200X
 6. ハンノキ節茎材 ISF-1646. a: 横断面40X; b: 接線面100X; c: 放射面200X



7. ハンノキ節根材 ISF-1627. a: 横断面40X; b: 接線面100X; c: 放射面200X
 8. クリ ISF-1613. a: 横断面40X; b: 接線面100X; c: 放射面200X
 9. プナ属 ISF-1668. a: 横断面40X; b: 接線面100X; c: 放射面200X



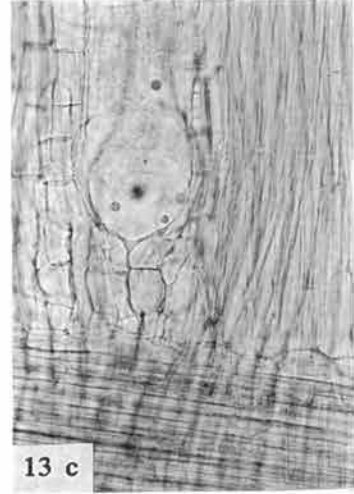
10. クヌギ節 ISF-1605. a: 横断面40X; b: 接線面100X; c: 放射面200X
 11. コナラ節 ISF-1617. a: 横断面40X; b: 接線面100X; c: 放射面200X
 12. エノキ属 ISF-1640. a: 横断面40X; b: 接線面100X; c: 放射面200X



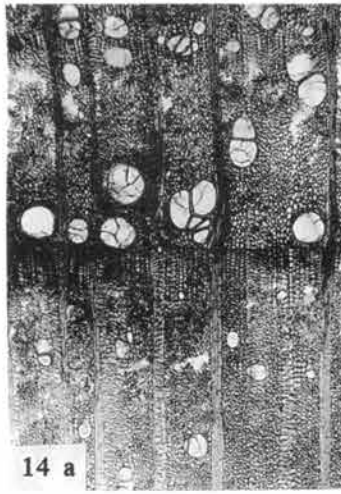
13 a



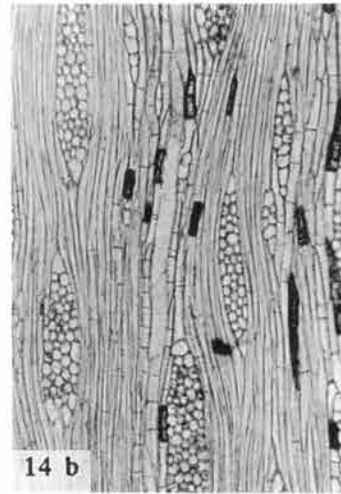
13 b



13 c



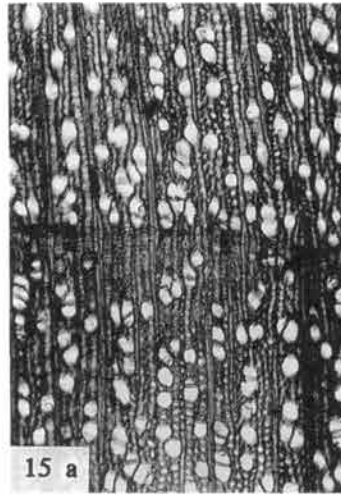
14 a



14 b



14 c



15 a

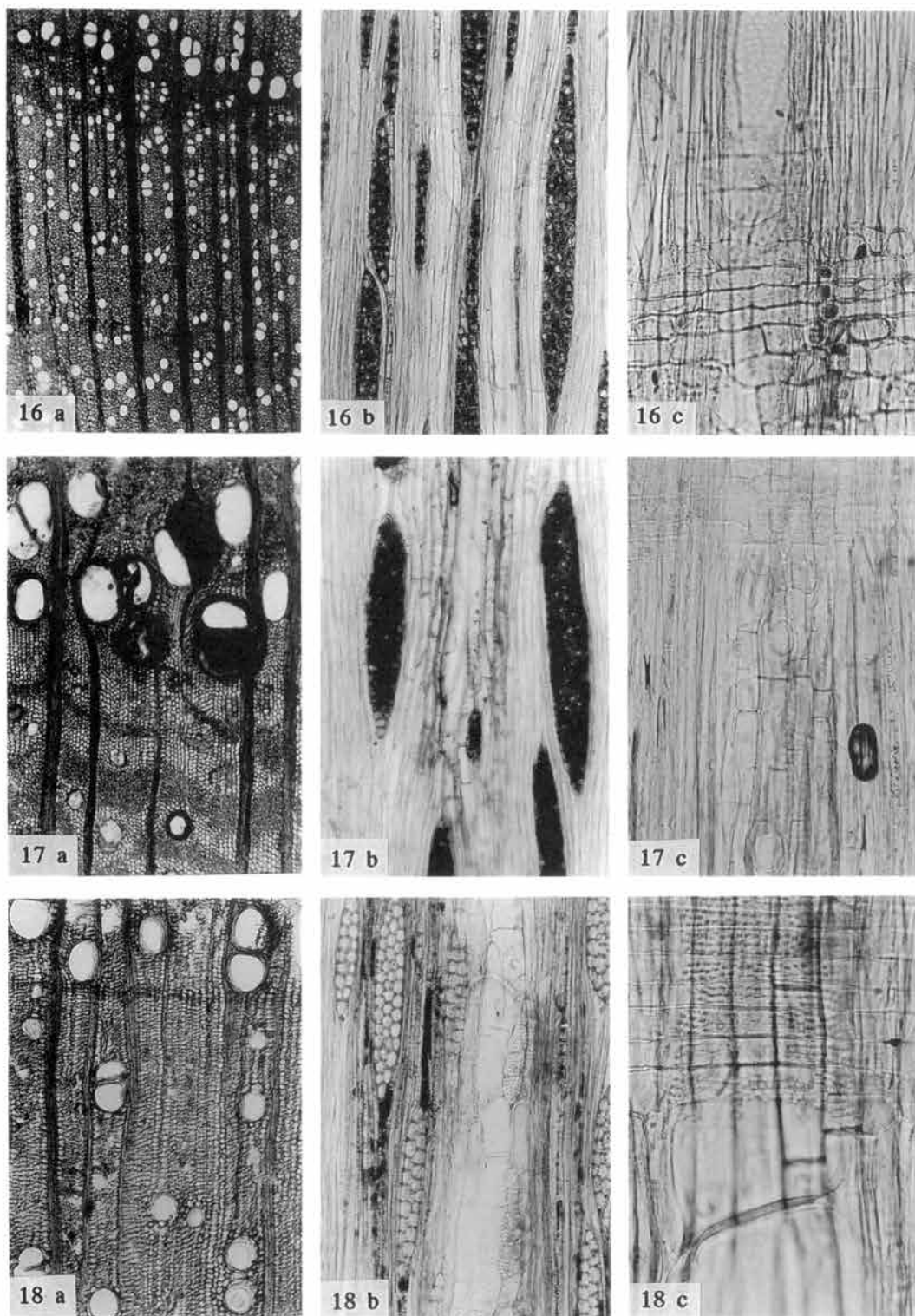


15 b

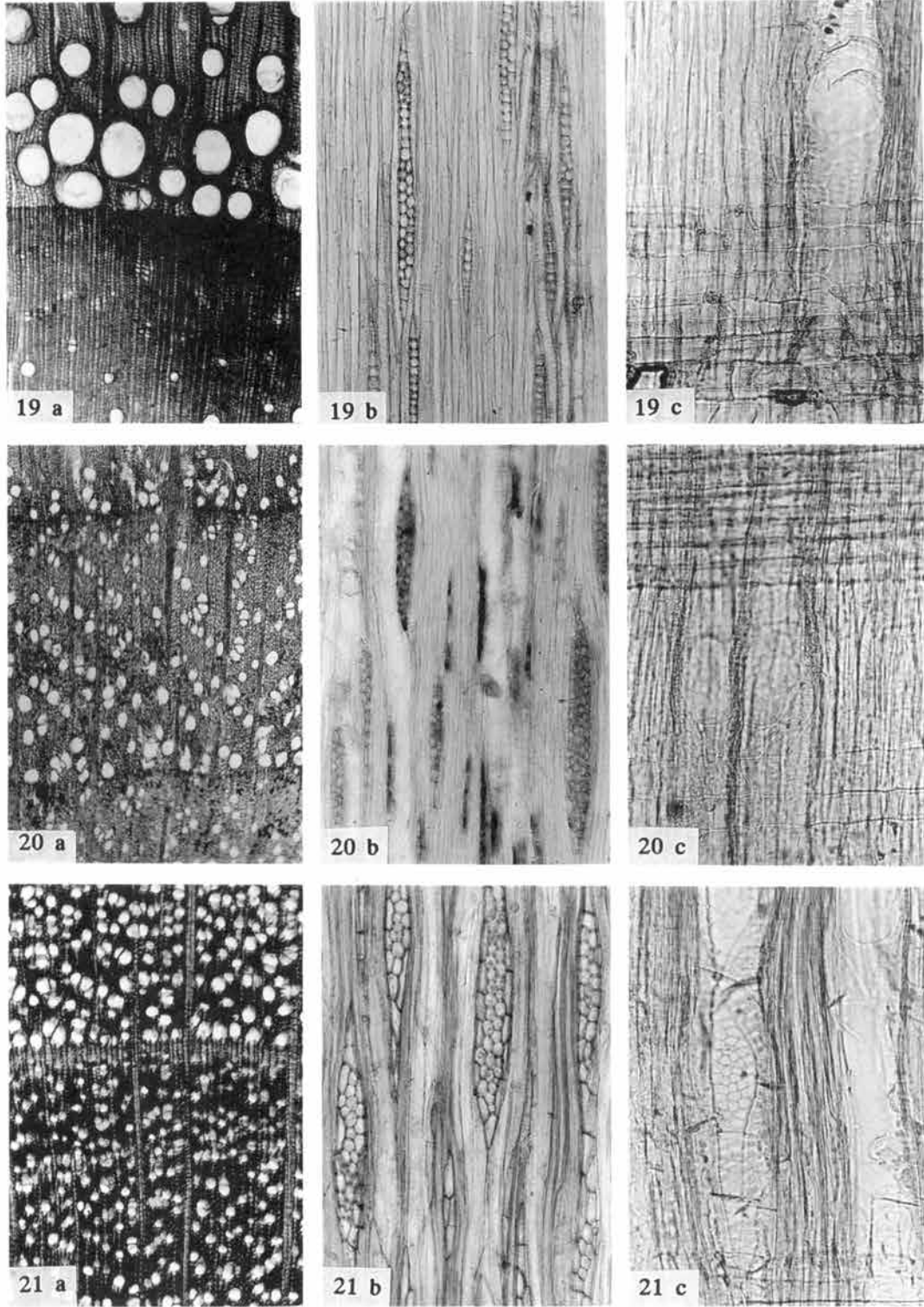


15 c

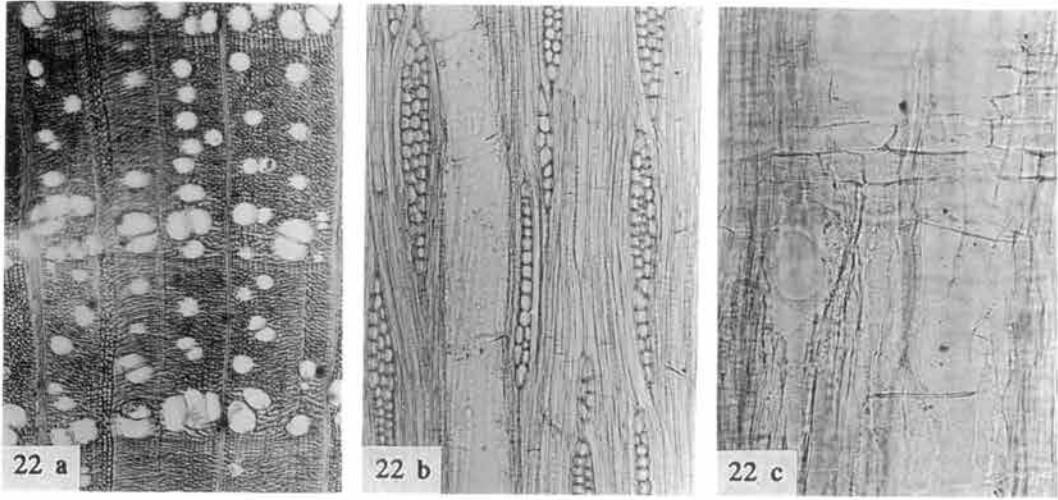
13. ケヤキ ISF-1639. a: 横断面40X; b: 接線面100X; c: 放射面200X
 14. ヤマグチ ISF-1628. a: 横断面40X; b: 接線面100X; c: 放射面200X
 15. モクレン属 ISF-1663. a: 横断面40X; b: 接線面100X; c: 放射面200X



16. サクラ属 ISF-1618. a: 横断面40X; b: 接線面100X; c: 放射面200X
 17. サイカチ ISF-1641. a: 横断面40X; b: 接線面100X; c: 放射面200X
 18. カラスザンショウ ISF-1644. a: 横断面40X; b: 接線面100X; c: 放射面200X



19. ヌルデ ISF-1608. a: 横断面40X; b: 接線面100X; c: 放射面200X
 20. カエデ属 ISF-1630. a: 横断面40X; b: 接線面100X; c: 放射面200X
 21. ニワトコ ISF-1672. a: 横断面40X; b: 接線面100X; c: 放射面200X



22. イヌエンジュ ISF-1610. a:横断面40X;b:接線面100X;c:放射面200X

第7章 考察

第1節 銭貨

本遺跡の調査区から検出した銭貨は92枚である。このうち、C区から一銭銅貨（昭和13年鑄造）1枚が出土しているが、これは除外することにする。したがって、ここで対象にする銭貨はわが国の中世において流通していた、いわゆる中国や朝鮮などから流入した91枚の渡来銭である。

第1図は、銭貨の出土状況を各区分に図示したものである。これによると、銭貨が集中的に検出されている箇所はA7～A12区、B6～B13区、C6～C12区までの範囲で、南と北側からの出土は皆無であった。遺構配置図の第8図を参照すると、遺構は調査区の中央付近に濃密に展開しており、銭貨の分布状況とほぼ符合がみられ、ある程度の傾向性がうかがえる。調査区中央部を東西方向に走る比較的大きい溝と、南北方向に走る溝によって方形に区画された、その区割り地に数多くの土坑やピットが検出されている。銭貨はそれらの遺構から散発的に出土しているが、以下に遺構別に出土枚数を記していこう。

まず、A9～C10区にかけて東西方向に走る第8号溝からは、やや多く9枚が出土している。A10～A11区にかけての第9号溝から2枚が出土。A9～B9区に走る第12号溝からは3枚出土。B13～C10区にかけて南北方向に走る第5号溝からは鑄着銭10枚を含む12枚が出土。A7区の第44号土坑から1枚が出土。A8区の第40号土坑から3枚が出土。A10区の第49号土坑から1枚が出土。B8区の第22・23号土坑から各1枚が出土。同区の第49号土坑から3枚が出土。B11区の第2号土坑から1枚が出土。C8区の第45号、C9区の第28号、C12区の第13号土坑から各1枚が出土。次いで、A11区の第86号、B10区の第214号、B11区の第15・19・40号の各ピットおよび、B12区のピット群から各1枚が出土している。また、整地層ではA8区、B11区から各1枚が出土。A～Cの各12区から各2枚が出土。B12区からは9枚が出土している。

次に、出土銭貨の初鑄年をみると、西暦621年（唐・武徳4）鑄造の「開通元寶」が最も古く、西暦1408年（明・永楽6）鑄造の「永楽通寶」が最新である。銭種は20種を数え、書体別では28書体に区別できる（第1表、出土銭貨分類表）。鑄造国別銭貨の比率は、北宋銭が圧倒的に高く68%（62枚）の数値を示す。次いで多いのは明銭11%（10枚）唐銭・南宋銭が各1.1%（1枚）とつづき、判読不明銭は18.7%（17枚）の割合である。北宋銭の構成比率の高さは全国各地からの出土傾向とほぼ同様と言えるが、唐銭の低率は注意をひくといえよう。

さらに銭種別に比率の高い順に掲げると、北宋銭の「皇宋通寶」が12%（11枚）で最も多い。次いで、同「元豊通寶」が11%（10枚）、同「熙寧元寶」8.8%（8枚）とつづき、明銭の「永楽通寶」が7.7%（7枚）認められる。そして「嘉祐元寶」・「元祐通寶」が各5.5%（5枚）の順になっている。ここで注意されることは、「永楽通寶」が北宋銭に混在して上位を占めていることである。中世後半になると、日明貿易などにより明銭の「洪武通寶」や「永楽通寶」などの輸入量が増加してくるといわれるが、その明銭の中でも「永楽通寶」の流通状況は他銭貨と若干様相が異なっている。要するに、東日本では永楽通寶を基準通貨とする「永高制」が採用され、非常に好まれていたようである。一方、西日本においては逆にきらわれ、あまり使用されなかったといわれているが、このことについて、中島圭一氏は「西と東の永楽銭」の中で詳しく述べられている。⁽¹⁾また、鈴木公雄氏は中世墳墓から出土する六道銭の分析を試みられ、その結果、石川県は永楽銭の流通圏である東日本の範疇に入るとし、その最も西よりに近い地域であるとしている。⁽²⁾本遺跡から検出した銭貨は東・西日本における銭貨流通状況を検討する資料としては、それほど多くはなく慎重をき

第1表 出土銭貨分類表

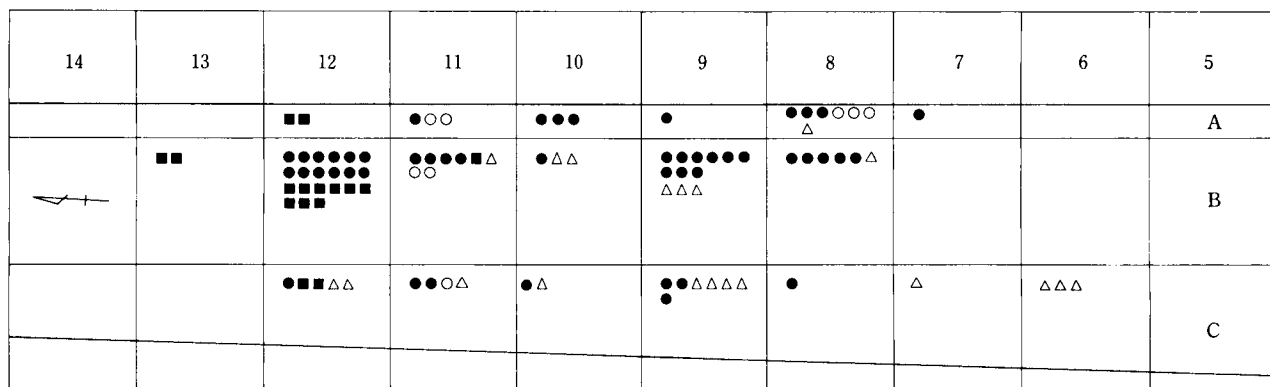
番号	銭貨名	時代	初 鑄 年	西 曆	書 体	枚数(%)
1	開 通 元 寶	唐	武 德 4 年	621	隸書 1	1(1.1)
2	宋 通 元 寶	北宋	建 隆 元 年	960	” 1	1(1.1)
3	咸 平 元 寶	”	咸 平 元 年	998	楷書 2	2(2.2)
4	祥 符 元 寶	”	大 中 祥 符 元 年	1008	” 2	2(2.2)
5	祥 符 通 寶	”	”	”	” 3	3(3.3)
6	天 禧 通 寶	”	天 禧 元 年	1017	” 2	2(2.2)
7-1	天 聖 元 寶	”	天 聖 元 年	1023	” 2	5(5.4)
-2	”	”	”	”	篆書 3	
8	明 道 元 寶	”	明 道 元 年	1032	楷書 1	1(1.1)
9-1	皇 宋 通 寶	”	寶 元 2 年	1039	” 4	11(11.9)
-2	”	”	”	”	隸書 3	
-3	”	”	”	”	篆書 4	
10-1	嘉 祐 元 寶	”	嘉 祐 元 年	1056	楷書 4	5(5.4)
-2	”	”	”	”	篆書 1	
11	治 平 元 寶	”	治 平 元 年	1064	楷書 1	1(1.1)
12-1	熙 寧 元 寶	”	熙 寧 元 年	1068	” 5	8(8.7)
-2	”	”	”	”	篆書 3	
13-1	元 豐 通 寶	”	元 豐 元 年	1078	行書 5	10(10.9)
-2	”	”	”	”	篆書 5	
14-1	元 祐 通 寶	”	元 祐 元 年	1086	行書 3	5(5.4)
-2	”	”	”	”	篆書 2	
15	元 符 通 寶	”	元 符 元 年	1098	行書 1	1(1.1)
16	聖 宋 元 寶	”	建 中 靖 國 元 年	1101	篆書 1	1(1.1)
17-1	政 和 通 寶	”	政 和 元 年	1111	楷書 2	4(4.3)
-2	”	”	”	”	篆書 2	
18	咸 淳 元 寶	南宋	咸 淳 元 年	1265	楷書 1	1(1.1)
19	洪 武 通 寶	明	洪 武 元 年	1368	” 3	3(3.3)
20	永 樂 通 寶	”	永 樂 6 年	1408	” 7	7(7.6)
	銭 種 不 明					18(19.5)
合 計						92(100.0)

さねばならないが、六道銭の分析結果を考慮にいと、「永樂通寶」の占有率が上位を占めていることは興味深いと言えよう。

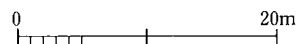
ところで、銭貨に特徴のみられるものとしては、背面に月・星文の記号や数字を鑄造するもの、外輪を削りとったり、刻み痕を入れる加工銭、⁽³⁾あるいは銭名が稚拙で独特な書体の島銭、また銭名のまったくない軽薄短小な無文銭など種々があげられる。本出土銭貨で特徴の認められるものは、背面に数字を印すものと加工銭の5例が数えられる。前者は俗に南蛮銭と呼ばれているものであるが、「咸淳元寶」(第3図-9)の背面上に「二」の数字を印すもの1枚がある。後者では外輪を故意に削りとり、いわゆる磨輪銭が「祥符通寶」(第2図-20)に1枚、孔形が星状にみえることから星形孔銭とよばれているものが「元豊通寶」に1枚、「皇宋通寶」(第2図-74)に2枚がある。加工銭には様々なものがあるが、いずれの加工銭についてもその意味するところは現在のところ不明である。ちなみに、磨輪銭については本県の普正寺遺跡⁽⁴⁾から「至道元寶」1枚、また一括埋納銭中からも少量ではあるが、混入品が認められる。そして徳島県の大里出土銭⁽⁵⁾から「元豊通寶」や「祥符元寶」・「咸平通寶」など30種562枚におよぶ銭貨の報告がなされている。これらは、1、2例をあげたにすぎず、全国からは数多くの出土例が知られており、特定の銭貨に施すものではないといえる。しかしながらこれらの殆どは宋銭であり、特に「祥符元寶」および「祥符通寶」に比較的多く施されていることも事実である。この両銭貨の銭名は吉語的な意味を有することから、しばしば奉寶銭や副葬銭などに恣意的に選択され使用されていたものであると推測されている。こうした意味を勘案すると、例えば経済通貨として鑄造された銭貨の外輪を削りとることは、そのものに非経済的な要素を付加する目的で加工されたものではなかったかと推考されるが、今後の検討課題としておきたい。

第2表 遺構別銭貨数量

地区名 遺構名 銭貨名	A7	A8	A9	A10	A11	A12	B8			B9		B10	B11				B12		B13	C8	C9			C11	C12	計					
	第44号土坑	第40号土坑	第8号溝	第9号溝	第49号土坑	第86号ピット	整地層	第22号土坑	第23号土坑	第48号土坑	第8号溝	第12号溝	第24号ピット	整地層	第2号土坑	第15号土坑	第19号ピット	第40号ピット	整地層	ピット群	第5号溝	整地層	第45号土坑	第9号溝	第12号溝		第28号土坑	第18号ピット	第5号溝	整地層	第13号土坑
開通元寶	1																														1
宋通元寶																			1												1
咸平元寶		1							1																						2
祥符元寶									1																						1
祥符通寶								1																				1			2
天禧通寶																								1							1
天聖元寶				1							1																				2
皇宋通寶	1								1	1					1			1									1	1		7	
嘉祐元寶												1					1											1		3	
熙寧元寶						1	1			1									2											5	
元豐通寶					1								1	1		1		2											1	7	
元祐通寶						1												1							1					3	
聖宋元寶										1																				1	
政和通寶										1		1														1				3	
咸淳元寶			1																											1	
洪武通寶										1								1												2	
永樂通寶	1		1							1									1	1			1					1		7	
銭種不明				1														1	10	2										14	
計	1	3	1	2	1	1	2	1	1	3	6	2	1	1	1	1	1	9	1	11	2	1	1	1	1	1	2	2	1	63	



- 遺構出土
- 整地層出土
- 遺構検出面出土
- △ 包含層出土



第5号溝 (C-11区) の1枚、第8号溝 (B-9区) の5枚、第12号溝 (B-9区) の2枚は出土区不明のため、便宜上それぞれの区に含めた。

第1図 銭貨出土位置分布模式図

さて、本調査区から検出した銭貨は91枚を数えるが、そのうちの約70%にあたる63枚の銭貨が遺構および整地層から出土している。第2表の遺構別銭貨数量表は土坑、ピット、溝ならびに整地層から出土した銭貨を一覧表にしたものである。それによると、土坑からの検出例は10基認められるが、これらの土坑からは1～3枚の少量が出土しており、計14枚が数えられる。ピットは7基認められ、いずれのピットも単数出土で、計7枚である。また溝は4条から出土している。第5号溝からの12枚（錆着銭10枚）と第8号溝の9枚は比較的まとまった出土状態を示しており、計26枚がある。そして、整地層のB12区からは9枚が散布状態で出土しており、付近からの出土と合わせると、計16枚が数えられる。なお、一覧表に掲載しなかったが、土坑3基の検出面から計6枚の銭貨が認められている。これを加えると都合13基の土坑から出土していることになり、土坑からの出土例が比較的が多いと言えよう。

出土銭貨はその出土状況から人為的に埋められたものと、そうではなく偶然に埋まったものに大別できる。さらに前者については、地鎮・鎮壇あるいは信仰にもとづくものなど呪術的な埋納とみられるものと、これに対して備蓄銭や隠匿銭など埋納から復すると貨幣本来に機能するものに2分される。本出土銭貨は各遺構から少量の1～10枚の範疇で出土していることは先記したが、これらの出土状況からは人為的に埋納したと断定できるものは1例も認められなかった。ただ、B11区の第15号ピットより柱根が検出されており、その中から「皇宋通寶」1枚が出土している。本銭貨は家を新築する際に行われる「立柱祭」に伴う埋納、すなわち地鎮（鎮宅）の鎮物の可能性も指摘できなくもないが、しかしながら埋納の要素といえる土器や穀物の共伴がみられない点や各遺構からの出土状況などを勘案すると、否定的にならざるを得ないといえよう。また、B12区とその付近の整地層から10数枚の銭貨が散布状態で出土していることは先述したが、当整地層は火災後の早い段階に整地されたものであると考えられており、そこから検出された複数の銭貨は整地作業時における何らかの行為の所産によるものか否かは注意をひくところであるが、ここではにわかに判断しがたく、今後の調査事例をまって検討していきたい。

ところで、加賀一向一揆の有力寺院であった木越光琳寺や鳥越弘願寺⁶⁾に蔵されている懇志請取状などの文書の一部をひき、当時の銭貨流通の様相の若干を窺ってみることにしよう。

志進上之通、披露候処、即被成御印書候、難有被存、弥法義無由断、心懸候、就中御所様一段御勇健御座候し、可心安候、将亦我らへ三十疋送候、芳意之至無冥加候、猶期後音候、恐々謹言、

八月十三日性乗（花押印）

光琳寺下
同在々

志衆中

（『光琳寺文書』）

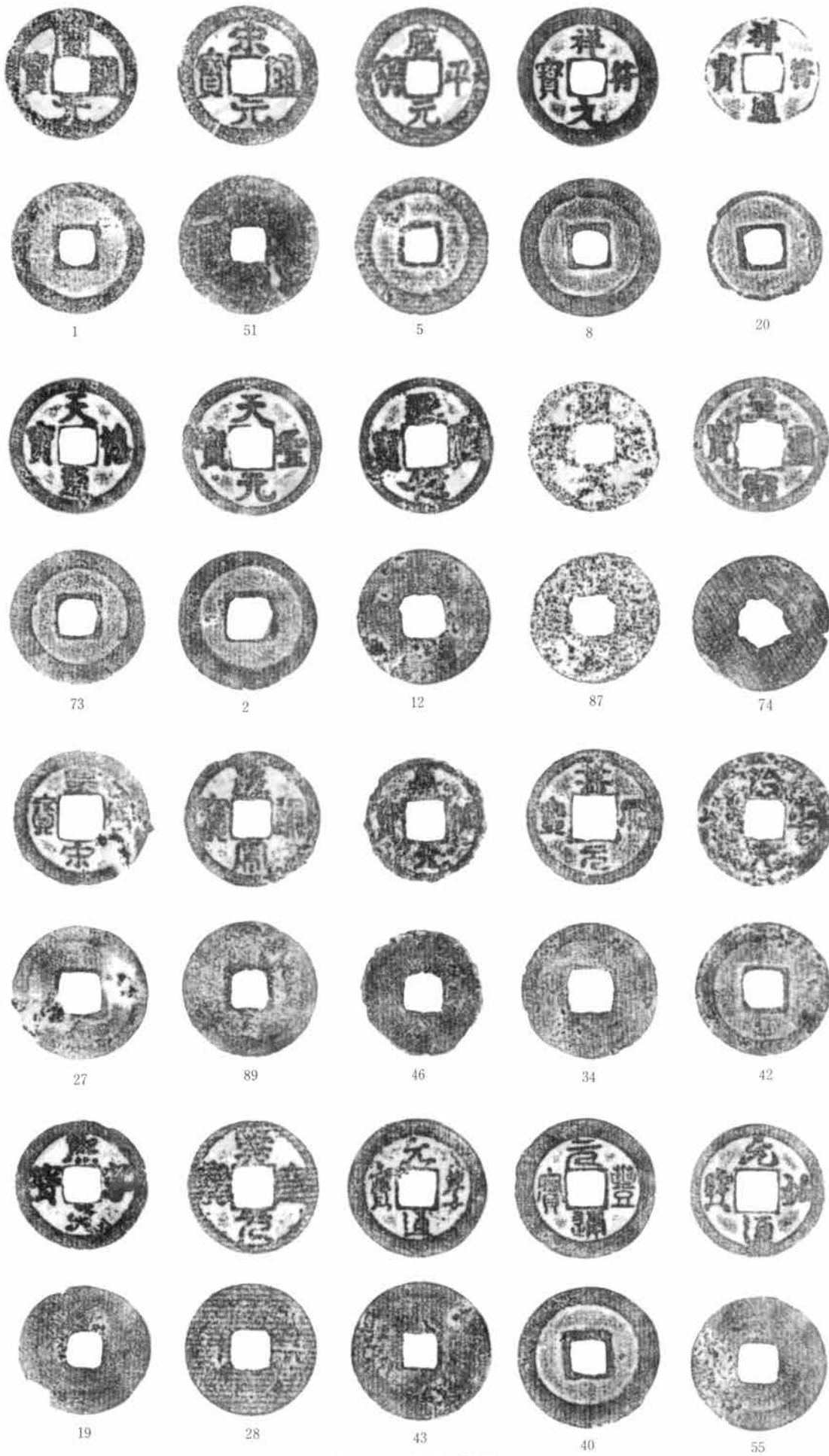
誠新春之佳悦、幸甚々々、殊五十疋到来珍重候、併表祝詞計候、弥法義無由断可被相嗜事、自何以世々々、可為果報候、不定之界にて候間、能々可被成其意者也、穴賢々々、

三月七日

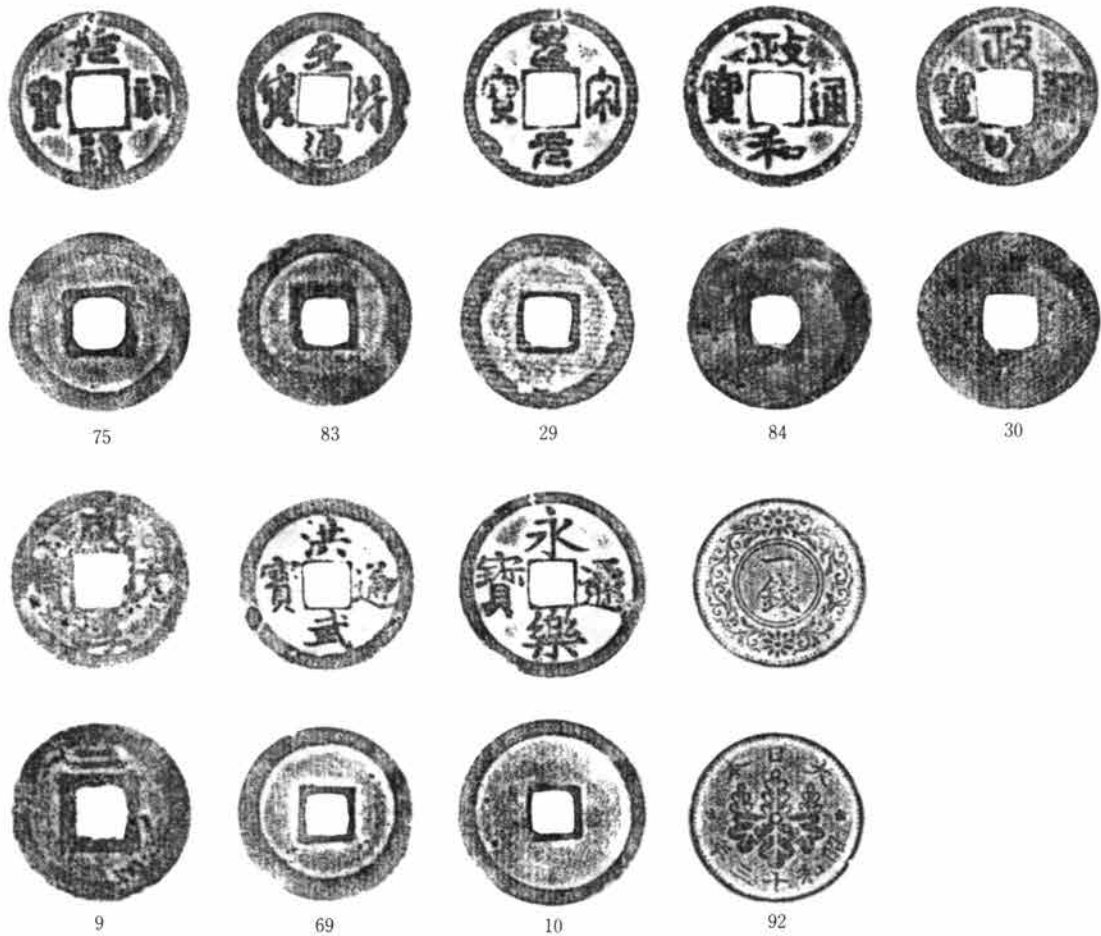
弘願寺御房

（『弘願寺文書』）

先掲の⁷⁾文書は、本願寺の奉者下間仲之から本願寺法主顕如に懇志を進上した光琳寺の志衆中に宛てた副状である。一方、後掲文書⁸⁾は鳥越弘願寺からの懇志に対する本願寺法主顕如の懇志請取状であるが、当寺にはこの他にも証如、顕如、教如の各法主ならびに興福寺の顕尊からの懇志請取状が写しを含めて16通⁹⁾現存している。これらの中には綿、布の進上物もみられるが、大半はその当時普遍的に流通していた銭貨が進



第2圖 錢貨拓影



第3図 錢貨拓影

上されている。このことは加賀一向一揆の有力寺院が門徒衆から寄せ集めた信仰錢の一部を新春の祝いや報恩講の折々に本願寺へ上納していたことを物語っている。数量的には五〇疋、あるいは百疋の錢貨であるが、それは当時の一向一揆寺院に錢貨が潤沢に集積されていたことを窺知させるものであるといえよう。

全国各地の中世遺跡から出土する錢貨は数枚あるいは十数枚の少量のものから、数十万枚におよぶ大量のものまで多種多様がある。その中で、一般的村落から出土する錢貨は通常散発的に検出される場合が多く、その殆どのものは僅少であるといえよう。本出土錢貨もそれらと同様に散発的な出土状況を呈しており、その各錢貨については、いずれも紛れこみや流れこみなど偶然による遺失錢と考えられるものであり、何らかの行為に基づくものと目されるものと認められなかった。しかしながら、本遺跡から錢貨が比較的多量に出土していることは錢貨の流通状況や遺跡の性格を考える上で注意をひくといえよう。

本遺跡は立地環境や出土遺物の検討などから、水稻耕作に従事した農業民の居住域とするよりは、魚撈および水運業に従事した人々が居住していた可能性が高いといえよう。水運は物資の輸送に最も有効な手段であり、河北潟を媒介として潟縁に点在する集落、ならびに日本海沿岸域の隔地間交易の要港として知られる宮腰津などと結ばれていたことは推測に難くない。戦国期の木越村はその湖上交通の一拠点として重要な位置を占めていたことは充分考えられる。⁽¹¹⁾本遺跡は加賀一向一揆の有力寺院木越光琳寺跡に近接しており、その門徒村落とみて間違いなく、魚撈および水運業に関わる非農業民的な様相を強く窺わせるものである。木越村の周辺を縦横に巡っていた大小の堀は、水運と防御の両機能を有していたものであるが、水運が当地域の商品流通に重要な役割を果たしてきたことは疑いないところといえよう。商品流通がただちに錢貨流通の展開を意味するものとは言えないまでも、本遺跡から比較的多量の錢貨が出土したことは、そこで展開した貨幣流通経済の状況を反映したものであろう。そして、それは後世、木越三光と呼ぶ地域を中心とする当

地域の経済活動の様相の一端を物語る興味深い資料である。

註

- (1) 中島圭一 「西と東の永楽銭」『中世の村と流通』 吉川弘文館 1992年
- (2) 鈴木公雄 「関東－永楽銭の東国集中－」『日本考古学協会1994年度大会』 研究発表要旨 日本考古学協会 1994年
- (3) 様々の加工銭が存在するが、これらの加工が中国などの鑄造国で行われたのか、あるいはわが国でなされたのか今のところ不明であるが、先年、韓国新安沖で引き揚げられた銅銭が今後調査されればそれは明らかになると考えている。
- (4) 石川県立埋蔵文化財センター 『普正寺遺跡』 1984年
- (5) 永井久美男 『阿波海南 大里出土銭』 徳島県海南町教育委員会 1994年。
- (6) 鳥越弘願寺は加賀一向一揆の北加賀の大坊としてよく知られるところである。丘陵の先端部を巧みに利用して造られた城郭寺院で、大規模な土塁や平坦面などの遺構が良好に残っており、当時の面影を偲ばせてくれる。
- (7) 八月一三日、本願寺奉者下間仲之副状(『光琳寺文書』)
- (8) 三月七日、本願寺顕如消息(『弘願寺文書』)
- (9) 木越祐馨「鳥越弘願寺文書について」『石川考古学研究会々誌』第30号 石川考古学研究会 1987年
- (10) 本遺跡の遺構群から検出された各銭貨は、いずれも人為的に埋納したと目されるものは認められなかった。本村落の壇那寺とみられる木越光琳寺は浄土真宗本願寺派に属する寺院であり、真宗の宗旨は祈願・祈禱を行わず、唯ひたすらに専修念仏を唱えることを本義とするものである。したがって、本遺跡に地鎮・鎮壇など呪術的な埋納行為が認められないことは、真宗の教義上からいえば至極当然であり、矛盾がないと言える。
- (11) 文化13年の旅日記である「海陸順達記」(笹井秀山)によると、文化年間は大崎から粟崎間に駄賃船が航行していたことが記されてある。また宇ノ気町在住の上杉知行氏によれば、明治初期頃まで、宇ノ気町内角から金沢市木越町と津幡町川尻へ舟の往来があったといい、舟便の場合、金沢の街へは木越から入ったといわれる。戦国期の湖上交通に関しては不詳と言わざるをえないが、近世において木越村は湖上交通の一拠点の役割を果たしていたことが窺われ、潟縁に点在する大根布、大崎、内角や川尻、才田などとともに「湖上の民」として河北潟を舞台に活躍していたことは想像に難くない。

※銭貨の拓図ならびに計測は、当埋蔵文化財センター遺物整理事業員の中村徳子・メイ亜紀両氏の手を煩わした。

第3表 出土銭貨一覧表

番号	出土地・遺構等	銭貨名	書体	銭径 (cm)	内郭 (cm)	銭厚 (cm)	重量 (g)	備考
1	A7区・第44号土坑	開通元寶	隸	2.39	0.57	0.17	4.05	錆化顕著、やや不明瞭
2	A8区・包含層	天聖元寶	楷	2.49	0.73	0.13	2.92	
3	"・遺構上面	祥符通寶	"	2.50	0.69	0.12	2.48	錆化のため比較的脆弱
4	"・"	皇宋通寶	"	2.46	0.71	0.10	2.88	
5	"・第40号土坑	咸平元寶	"	2.35	0.64	0.12	2.53	
6	"・"	皇宋通寶	篆	2.43	0.72	0.13	3.11	1/10欠失 腐食ぎみでやや不明瞭
7	"・"	永樂通寶	楷	2.47	0.55	0.16	3.17	
8	"・遺構上面	祥符元寶	"	2.50	0.60	0.11	3.38	
9	A9区・第8号溝	咸淳元寶	"	2.37	0.66	0.11	2.78	不純物付着、やや不明瞭、背に「二」
10	A10区・第9号溝	永樂通寶	"	2.51	0.56	0.14	2.25	
11	"・" 最下層	銭名不明	不明	2.33	0.65	0.19	4.21	錆化顕著
12	"・第49号土坑	天聖元寶	篆	2.42	0.74	0.15	3.13	
13	A11区・遺構検出面	熙寧元寶	楷		0.58	0.12	1.67	1/4欠失
14	"・"	元豊通寶	行	2.45	0.72	0.11	2.84	星形孔
15	"・第86号ピット	元豊通寶	篆	2.40	0.64	0.21	2.30	
16	A12区・整地土層	熙寧元寶	"	2.32	0.60	0.12	1.66	1/3欠失
17	"・"	元祐通寶	行	2.40	0.70	0.20	1.70	1/8欠失
18	B8区・包含層	元豊通寶	"	2.45	0.53	0.17	3.24	「元」に不純物付着
19	"・第22号土坑	熙寧元寶	楷	2.35	0.62	0.13	2.49	
20	"・第23号土坑	祥符通寶	"	2.03	0.60	0.13	1.22	磨輪銭
21	"・第48号土坑	咸平元寶	"	2.44	0.60	0.15	3.30	錆化顕著
22	"・"	祥符元寶	"	2.48	0.57	0.11	2.08	
23	"・"	皇宋通寶	篆	2.47	0.70	0.13	2.15	腐食が著しく、脆弱
24	B9区・包含層	天聖元寶	楷	2.43	0.51	0.19	3.66	錆化顕著
25	"・"	皇宋通寶	隸	2.30	0.73	0.12	7.08	錆着
26	"・"	銭名不明	不明	2.33	0.65	不明		錆着
27	"・第8号溝	皇宋通寶	隸	2.40	0.74	0.10	2.11	不純物が若干付着
28	"・"	熙寧元寶	篆	2.37	0.62	0.11	2.79	錆化やや磨減
29	"・"	聖宋元寶	"	2.39	0.70	0.13	2.82	やや錆化
30	"・"	政和通寶	"	2.40	0.72	0.99	2.33	
31	"・"	洪武通寶	楷	2.27	0.63	0.17	3.22	
32	"・"	永樂通寶	"	2.27	0.55	0.11	1.94	
33	"・第12号溝	天聖元寶	篆	2.49	0.66	0.15	1.92	
34	"・"	嘉祐元寶	"	2.46	0.74	0.13	3.13	
35	"・第168号ピット	皇宋通寶	楷	2.43	0.67	0.11	2.49	
36	B10区・第214号ピット	政和通寶	篆	2.41	0.64	0.10	2.83	やや磨減
37	"・包含層	元禧通寶	楷	2.39	0.63	0.19	3.06	錆化顕著
38	"・"	皇宋通寶	篆	2.42	0.80	0.10	1.85	「通」字の孔側破損
39	B11区・"	嘉祐元寶	楷	2.37	0.63	0.13	3.26	錆若干付着
40	"・整地土層	元豊通寶	篆	2.54	0.63	0.13	4.09	
41	"・遺構上面	熙寧元寶	楷	2.40	0.62	0.17	5.10	鉄塊付着
42	"・"	治平元寶	"	2.42	0.69	0.15	2.84	やや脆弱
43	"・第2号土坑	元豊通寶	行	2.51	0.62	0.15	4.12	
44	"・第15号土坑	皇宋通寶	楷	2.44	0.74	0.13	3.35	星形孔
45	"・第19号ピット	元豊通寶	行	2.48	0.70	0.12	3.08	
46	"・第40号ピット	嘉祐元寶	楷	2.25	0.67	0.13	2.27	磨減ぎみでやや不明瞭
47	B12区・整地土層	熙寧元寶	"	2.47	0.57	0.13	2.75	錆若干付着

番号	出土地・遺構等	銭貨名	書体	銭径 (cm)	内郭 (cm)	銭厚 (cm)	重量 (g)	備考
48	B12区・整地土層	元豊通寶	篆	2.40	0.72	0.16	2.30	
49	"・"	洪武通寶	楷	2.28	0.55	0.17	2.73	
50	"・"	銭名不明		2.44	0.62	0.16	1.97	
51	"・" (黄色)	宋通元寶	楷	2.48	0.63	0.11	2.27	「元」「寶」間にヒビ割れ
52	"・" (〃)	皇宋通寶	隸	2.47	0.72	0.15	2.41	
53	"・" (〃)	熙寧元寶	楷	2.44	0.66	0.15	2.61	「熙」「寶」間にヒビ割れ顕著
54	"・" (〃)	元豊通寶	篆	2.45	0.7	0.11	2.82	
55	"・" (〃)	元祐通寶	行	2.40	0.71	0.13	2.48	N5号溝付近より
56	"・ピット群	永樂通寶	楷	2.51	0.65	0.16	2.63	背側へ若干折れ曲っている
57	"・第5号溝底面	永樂通寶	楷	不明	不明	不明		40.04 錆着
58	"・"	銭名不明	不明	"	"	"		
59	"・"	"	"	"	"	"		
60	"・"	"	"	"	"	"		
61	"・"	"	"	"	"	"		
62	"・"	"	"	"	"	"		
63	"・"	"	"	"	"	"		
64	"・"	"	"	"	"	"		
65	"・"	"	"	"	"	"		
66	"・"	"	"	"	"	"		
67	B13区・整地土層	"	"	2.31	0.70	0.12	4.28	錆着
68	"・"	"	"	2.39	0.74	0.11		
69	C7区・床土	洪武通寶	楷	2.34	0.56	0.14	2.23	
70	C6区・"	天聖元寶	篆	2.39	0.67	0.15	2.63	錆化著しく不明瞭
71	"・"	熙寧元寶	"	不明	不明	0.12	0.53	3/4欠失
72	"・"	□□元寶	"	"	"	0.10	1.26	1/2欠失
73	C8区・第45号土坑	天禧通寶	楷	2.42	0.64	0.12	2.80	
74	C9区・包含層	皇宋通寶	"	2.42	0.74	0.10	1.95	星形孔
75	"・"	元祐通寶	篆	2.42	0.70	0.12	3.21	錆化顕著
76	"・"	銭名不明	"	2.42	0.70	0.26	6.15	
77	"・"	"	"	2.42	0.55	0.26		
78	"・第9号溝	永樂通寶	楷	2.49	0.53	0.15	1.83	「永」「通」と「通」「寶」間にス穴あり
79	"・第12号溝	元祐通寶	行	2.47	0.53	0.15	2.77	
80	"・第28号土坑	政和通寶	楷	2.37	0.65	0.14	3.32	
81	C10区・包含層	嘉祐元寶	"	2.35	0.59	0.13	3.00	やや不明瞭
82	"・第8号溝	元祐通寶	篆	2.41	0.73	0.11	2.75	やや脆弱
83	C11区・包含層	元符通寶	行	2.32	0.64	0.13	2.75	錆化著しく、不明瞭
84	"・遺構検出面	政和通寶	楷	2.37	0.56	0.2	3.18	
85	"・第5号溝	祥符通寶	"	2.21	0.67	0.06	1.09	
86	"・"	嘉祐元寶	"	2.31	0.65	0.11	2.72	若干錆漬れ
87	C12区・包含層	明道元寶	"	2.36	0.64	0.14	2.87	錆化磨減が著しく不明瞭
88	"・"	元豊通寶	行	2.52	0.60	0.15	3.51	やや錆化
89	"・整地土層	皇宋通寶	篆	2.41	0.64	0.12	3.13	錆化顕著
90	"・"	永樂通寶	楷	2.44	0.56	0.13	2.76	"
91	"・第13号土坑	元豊通寶	篆	2.47	0.66	0.13	3.89	
92	C18区・包含層	一銭銅貨	楷	2.29		0.13	3.49	

第2節 土錘

本遺跡では大量の土錘が出土している。その破片点数は833点に及び、完形或いはほぼ完形のものが388点を占める。これら土錘の殆どが漁網錘と考えられ、その形態、法量が実に多様であることから、数種類の網が存在したと推定される。

形態、全長、直径、孔径、重量など土錘の主な属性のうち、分類の第一義的な属性を孔径に求め、次に重量に求めることとする。漁網錘は一般的に漁網の沈子綱にくくり付けられることから、孔径はある程度その綱の径を反映すると思われ、ひいては網の大きさ、種類をも反映すると推定される。しかも、棒状の道具に粘土を巻き付けて製作しているため、同一網を目的とする場合、同一径の棒状用具が用いられ、その孔径は近似するはずである。重量は網の大きさ、対象魚種、使用場所など多くを示唆するものであるが、孔径に比べてばらつきが大きい。粘土塊が目分量、手秤にて測られていたとするとばらつきは当然のことであるが、その誤差の範囲が確定できない。仮に重量が近似していたとしても、孔径が大きく違えば同一網に装着されたとは考え難い。形態に関しては山本氏の論文に詳しく⁽¹⁾、ある程度年代を推定し得るタイプも指摘されているが、本遺跡出土の土錘は良好な出土状況になく、年代を限定できる資料ではない。したがって、11世紀後半～18世紀代という本遺跡の営統期間の範疇で考えるしかなく、形態差等は時期差を反映している可能性もあるが、ここではひとまず製作年代を考慮に入れず、雑多な土錘を分類することとする。

第1図は完形、ほぼ完形388点の孔径及び重量を示したグラフである。孔径は0.2～1.8cmの製品があり、大きくは0.6cm以下、0.8cm以上に分かれる。このグラフからは、0.7cmの製品が極めて少ないこと、0.9～1.3cmの製品が多いことが分かる。そのことからまず、孔径で0.2～0.6cm、0.7～1.3cm、1.4～1.8cmのグループに分け、それぞれA～C類とする。重量に関しては、A類に18gを越えるものはなく、口径が0.7cmを越えると10g以下のものはなくなる。また、1.3cm以下の製品の半数以上が32g以下に属する。1.4cm以上のものは総点数も減少し、33g以上に中心が移る。以下、重量による各類の細分案を示す。

A類 (1～28)

A I類…6g以下。孔径は0.2～0.5cm。(1～16) A II類…7～20g。孔径は0.3～0.6cm。(17～28)

B類 (29～93)

B I類…10g代。孔径は0.7～1.3cm。(29～51) B IV類…40g代。孔径は1.0～1.3cm。(83～89)

B II類…20g代。孔径は0.8～1.3cm。(52～73) B V類…50g以上。孔径は0.8～1.3cm。(90～93)

B III類…30g代。孔径は0.8～1.3cm。(74～82)

C類 (94～112)

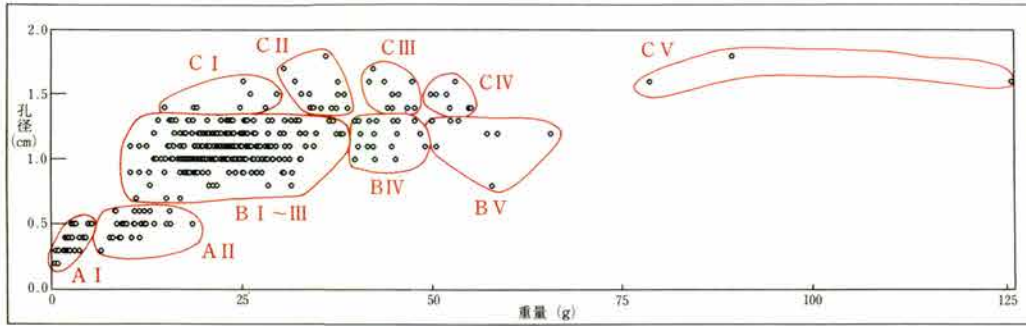
C I類…30g以下。孔径は1.4～1.6cm。(94) C IV類…50g代。孔径は1.4～1.6cm。(105～108)

C II類…30g代。孔径は1.4～1.8cm。(95～99) C V類…60g以上。孔径は1.6、1.8cm。(109～112)

C III類…40g代。孔径は1.4～1.8cm。(100～104)

第3、4図に各類の代表的なものを完形品を中心に示した。それぞれ若干の説明を加えたい。

A I類は孔径0.3cm、全長3cm前後を主体とする。1、2は全長が2cm前後と小さく、他に類例はない。漁網錘というより釣り糸に装着される沈子の可能性もあろうか。3～7は孔径0.3cm、直径1cm未満と均質であり、色調は赤橙色系。A II類は孔径0.5cm前後、重量10g前後を主体とする。17は表面が滑らかに成形されており、端部はきれいに面取りされる。色調は黄橙色で18、19に類似するが、それらは指による調整痕を残し、面取りは行われぬ。20～24は中央部が膨らみ、全長の割に直径が大きく、ややぼつりとした印

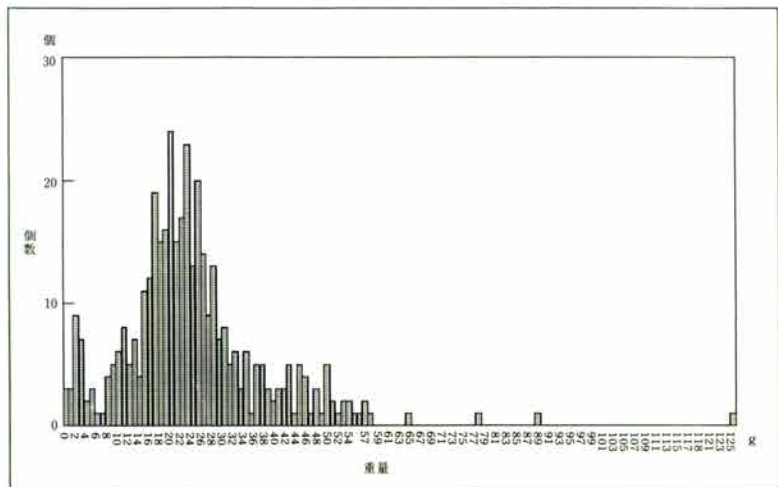


第1図 孔径、重量分布

象を受けるタイプ。色調は灰白色系。

25～28は顕著な膨らみを持たず、細長いタイプで、手で握り締めて成形した痕跡を良く留める。色調は灰白色系。

B I類は、全長3cm前後を主体とし、直径はほぼ3cm未満に収まる。重量は10g代後半が大多数を占める。32～35は本類でも小さいタイプで、法量も近似する。端部は面取りされ、色調は黄橙色系。36～39は同じく面取りするタイプであるが、それらより一回り大きい。このタイプは特に棒状用具に



第2図 重量別個体数

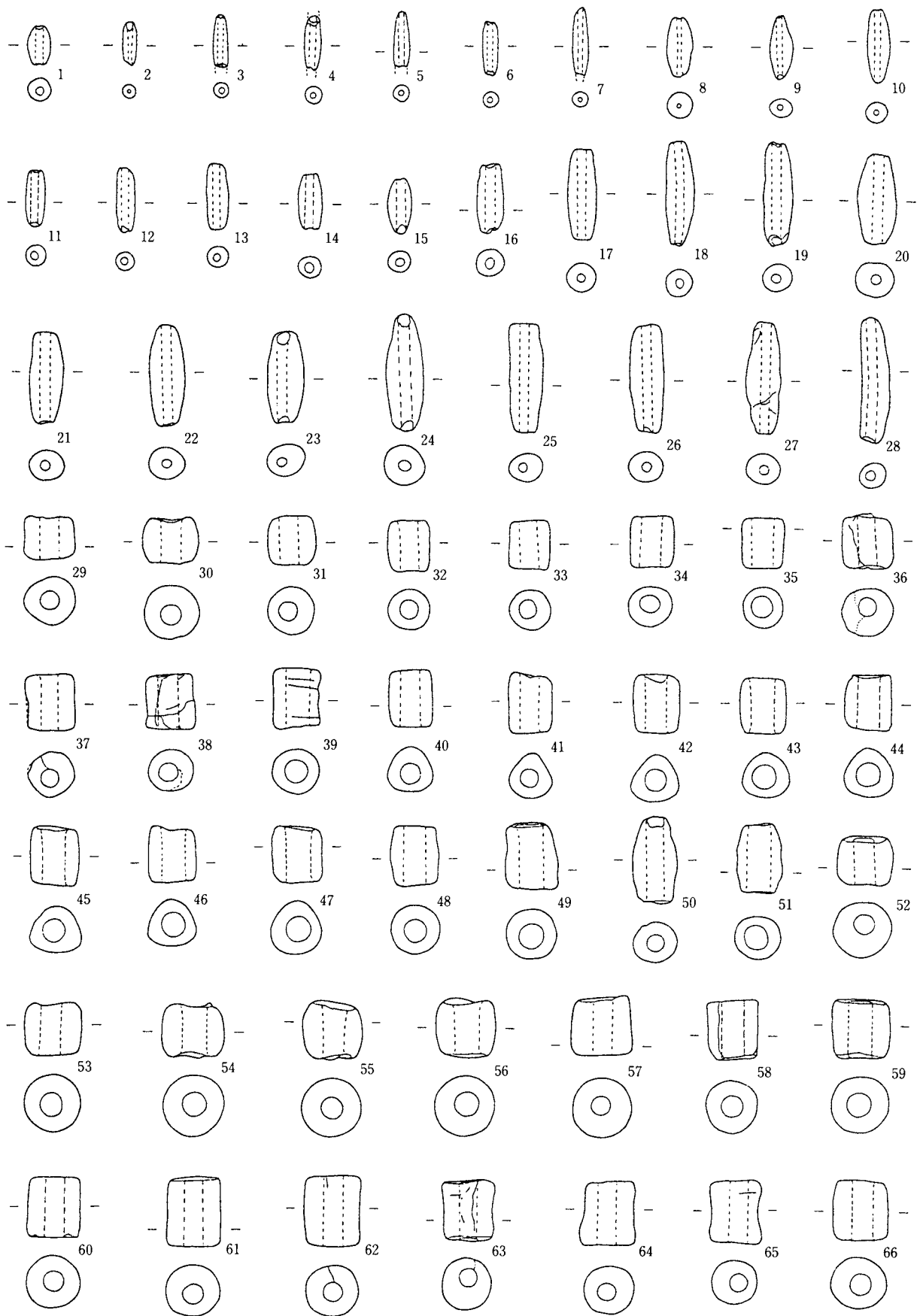
粘土塊を巻き付けた際の痕跡を留める。38、39は表面に布状の圧痕があり、布状用具をあてがい、指で押さえて成形したことが窺われる。色調は灰褐色～黄橙色系。40～47は断面形態が三角形を呈するタイプ。これらは比較的器壁が薄い。成形の際に、心棒を回転させるのではなく、押し付けたものと推定される。色調は浅黄橙色が中心であるが、褐灰色のものも存在する。51は本遺跡で唯一出土した陶錘である。産地は不明である。

B II類は全長3cm前半代、直径3cm前後を主体とする。52～56は全長よりも直径が大きいタイプ。端部の調整は施されず、やや波打つ。色調は黒褐色と黄橙色系がある。B I類30も同タイプ。57～67は端部を面取りするタイプであり、粘土塊を巻き付けた痕跡が見られる。色調は淡橙色～灰白色とばらつきがある。57～59は端部の一方は面取りされて平坦であるが、もう一方はやや斜めになる。60～65は両端ともきれいに面取りされる。うち、63～65は38、39同様布状の圧痕を残す。71は断面三角形。

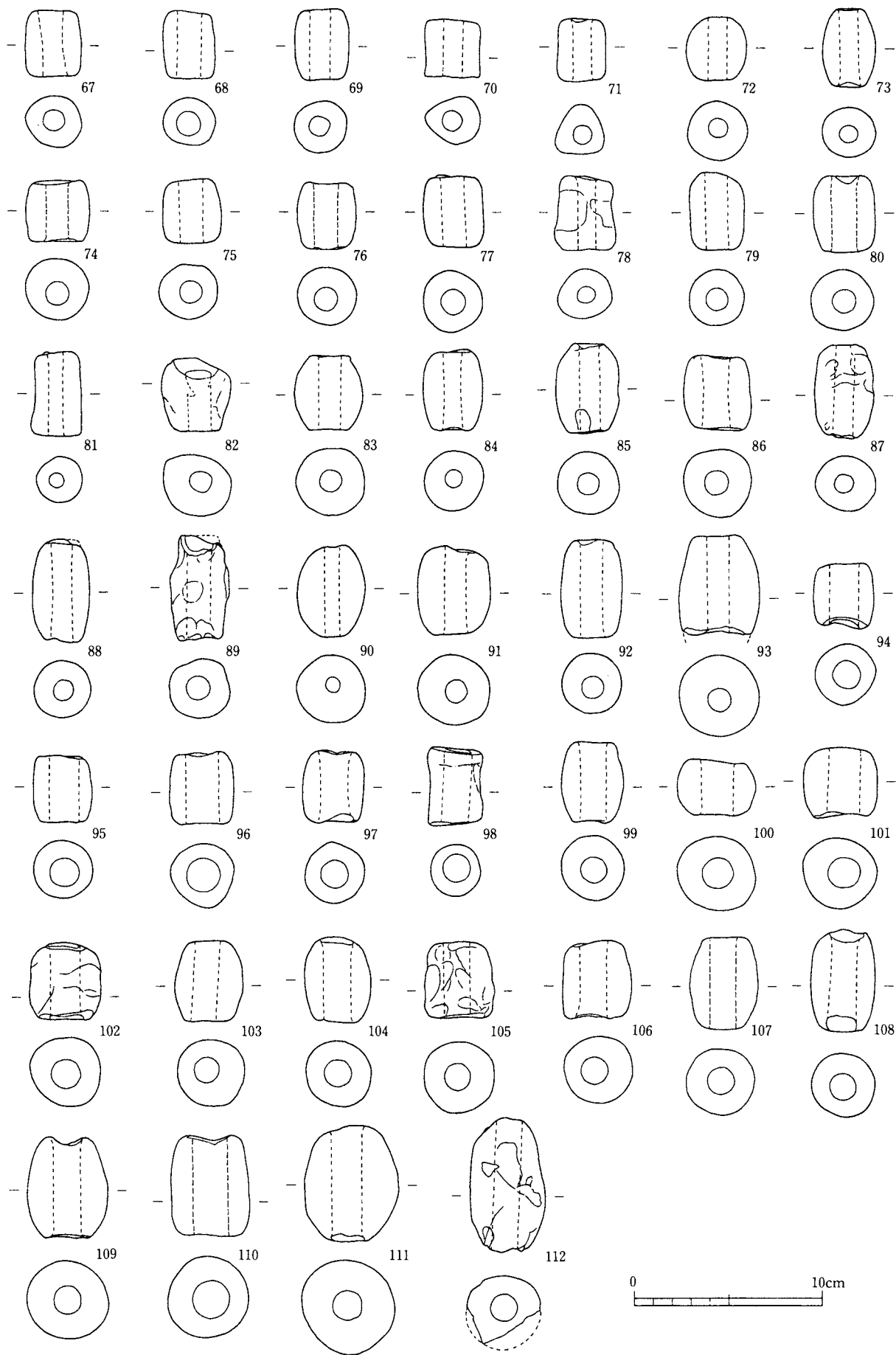
B III類は全長3cm後半代、直径3cm前半代、重量は30g前半代を主体とする。74は52～56と同タイプの大型品である。81は両端を面取りするタイプ。79、80は端部がやや丸く収まり、面を持たないタイプで灰白色を呈す。82は大きく歪み、器壁も成形されていない。棒状用具の抜き取りに失敗したのか、上方からも指により穿孔されている。子供が作ったのでは、と思わせるほど稚拙である。他に類例はない。

B IV類は全長4cm前半代、直径3cm後半代を主体とする。B I～III類は円筒形のものを中心であるのに対し、本類以降、C類を含め、中心部に膨らみを持つ形態のものが増加する。89は一部欠損するが、器表に指頭圧痕を多く留める、他に例のないタイプである。

B V類は、60gを越えるものはわずかであるため、50g以上として本類にまとめた。出土点数は多くない



第3図 土錘実測図1 (S=1/3)



第4図 土錘実測図2 (S=1/3)

が、全長4cm後半代、直径3cm後半代を主体とする。90は重量の割には孔径が0.8cmと小さく、50gを越えるものではC類を含めて、最も孔径が小さい。93は4分の1程度を欠失しているため、第1図中には含まれないが、88.6gを量り本類で最重量を誇る。完形ならば100gを越える資料である。

C I類は、10g代、20g代の資料が少ないため、30g以下としてまとめた。10g以下のものはない。

C II類は全長3cm後半代、直径3cm前半代を主体とする。95、96は孔径が1.7、1.8cmと重量の割に大きい。98は端部をきれいに面取りするタイプであり、握り締めた痕跡が明瞭に残る。

C III類は全長3cm後半～4cm前半代、直径3cm後半代を主体とする。100は直径が全長を大きく上回る資料であり、他に類例はない。101はB II類52～56に類似し、端部は波打つ。

C III類は全長4cm代、直径3cm後半代、重量50g前半代を主体とする。105、106の法量は類似するが、前者は指頭圧痕が多く残る。

C IV類は60gを越えるものをまとめたが、60g代の製品はなく、70g代、80g代と100g以上の製品である。111は完形品では最も重く、125.8gを量る。

以上孔径と重量によって分類したが、形式的なものであり、それらがどの程度網の種類を反映するものかは定かではない。同類に分類されるものでも、実に種々の形態がある。それらの数だけ網が存在したと考えるよりも、大きな形態差がない限り、孔径、重量が近似したものが同一網に装着されていたと考えるのが妥当ではないか。ただし、A類は比較的形態にもまとまりを持っており、A I、II類はそれぞれ同種の網に装着されていた可能性が高い。B類については、重量によって便宜的に分けてはいるものの、B I、II類を通じて孔径1.0～1.2cm、重量15～30gに集中が見られ、同種の網に装着されていた可能性が高いと考えている。

次に使用痕の観察を行いたい。土錘の使用痕には、沈子綱に通した後、固定するために別糸でくりつけられた際の糸による擦痕と、水底に接地した際の擦痕が考えられる。その観察から、魚網の種類を推定した報告もあるが²⁾、本遺跡出土資料では、明瞭な使用痕が観察されるものは僅少で、後者に関しては観察不可能であった。前者については、孔端部の一方に欠損の見られるものがB I～IV類に数点見られ、装着法、或いは網の使用法が、一端のみに力のかかるものであった可能性が考えられる。欠損が両端部の同一線上、又はやや斜めの線上に観察されるものもABC各類に認められるが、ごく稀である。形態差による使用痕の差異は顕著でないが、B I類の32～39、B II類の60～65の両端部をきれいに面取りするタイプには、端部が厚いためか、使用痕は認められなかった。

これらの年代は、A I類が敷地Aの整地土層など、15世紀代の遺構から多く出土していることから15世紀代、A II類は、第8、9号溝最下層を中心とする出土状況であり、他の遺構からは殆ど出土を見ないことから、12世紀代前後に帰属するものが多いと推定している。B、C類は各類様々な法量、形態が存在するため一時期に限定できるものではないが、中世、特に本遺跡で出土遺物の多い14世紀末～15世紀代の製品が多いと思われる。中でも、B I類の32～35、40～47、B II類の52～56などはその出土地から、15世紀代の所産とみられる。明らかに近世以降と推定されるのは51の1点のみである。第8号溝等の出土品の中には、近世に下る製品が含まれる可能性も否定できないが、中世の遺構からの出土品と区別できる要素は見当たらない。

最後に、これらの土錘を用いてどのような魚種を対象に漁が行われたのか考えたい。本遺跡は河北潟に近接しており、良好な漁場である潟内で網漁が行われたことが想像される。潟の漁業に関しては、『石川県湖潟内湾水面利用調査報告』第四巻に詳しく⁹⁾、これを参考にしたい。記載のあるのは、江戸時代後半～明治についてであるが、放流された魚種を除けば、生息する魚は古代からさほど変化はないものと推定される。それによると、主な対象魚種は、ボラ、フナ、コイ、ゴリ、エビその他多数が挙げられ、中世などでもおそ

らくそれらが主な捕獲対象となったことは想像に難くない。捕獲の道具としては、文化二年（1804）の記録によると、根抄漬、投網、巻網、持網、小網等計17種がみえる。これらは大きくは漬漁具類、掩網類、敷網類、引網類、刺網類などに分類される。前著には、明治43年（1910）当時の漁具が詳しく記述され、沈子、沈子網についても記載があり、第1表にそれを記した。ボラ網、フナ網、ボラ巻網などが沈子網の径、沈子の重量が小さく、公魚刺網、ハゼ刺網などはやや小さく、追鮎網は並、あみぐり網、五郎網は網径も重量も大きい。出土土錘に照らし合わせると、1～2匁に相当するAI類がボラ網やフナ網などに、4匁に近いBI類がそめごり網や蝦網などに使用されたことが考えられようか。中世から近世にかけては、操業形態、規模の変化も予想されることから、この数値をそのまま本遺跡出土の土錘に当てはめることはできないが、大いに参考となろう。

以上、多量の土錘から、多少なりとも内水面漁業が復元できたらと思ひ、思いつくままに分類を試みたが、筆者の力量不足により、志した結果には到達できなかった。土錘による網の同定には、属性の分類、使用痕の観察に加え、遺存する民俗資料の丹念な調査がかかせないと思われる。それを怠った怠慢さを戒め、今後の課題としたい。

註

- (1) 山本直人 1986「石川県における古代中世の網漁業の展開」『石川考古学研究会々誌第29号』 石川考古学研究会
- (2) 大沼芳幸 1990「正伝寺南遺跡出土の漁網錘について—網漁業の中での位置付け—」『正伝寺南遺跡』滋賀県教育委員会、(財)滋賀県文化財保護協会
- (3) 石川県水産試験場 1913『石川県湖潟内湾水面利用調査報告』 第四卷（河北潟の部）

参考文献

- 真鍋篤行 1993「付論 瀬戸内地方出土土錘の変遷」『瀬戸内地方出土土錘調査報告書（II）』 瀬戸内海歴史民俗資料館

	沈子網		沈子		
	材質	径	材質	重量	数量
ボラ網	麻	一分	陶器	二匁	175個
フナ網	麻	一分	陶器	二匁	225個
公魚刺網	錦糸	三十号	陶器	5匁	90個
ハゼ刺網		なし	陶器	六匁	不明
ボラ巻網	麻	一分	陶器	一匁	180個
立巻網		なし	陶器	二十匁	50個
そめごり網	麻	一分	鉛	四匁	60個
蝦網	麻	一分五厘	鉛	四匁	90個
あみぐり網	藁	二分	陶器	三十匁	50個
追鮎網	錦糸	三十号	鉛	十匁	10個
五郎網	藁	五分	陶器	六十匁	1300個

第1表 沈子網の径と沈子の重量
(註3文献をもとに作成)

第2表 土錘計測表

No.	長さ(cm)	直径(cm)	孔径(cm)	重量(g)	出土地	No.	長さ(cm)	直径(cm)	孔径(cm)	重量(g)	出土地
1	1.9	1.2	0.4	2.0	第8号溝	57	3.1	3.1	1.0	28.4	第9号溝
2	2.2	0.8	0.2	0.9	BC7区床土	58	3.1	2.8	1.2	21.2	A12区ビット
3	(2.6)	0.8	0.3	(1.1)	第17号土坑	59	3.1	3.0	1.3	23.9	第9号土坑
4	(2.7)	0.9	0.3	(1.8)	C9区包含層	60	3.2	2.8	1.0	26.5	A11区包含層
5	(2.8)	0.9	0.3	(1.7)	B12区整地土層	61	3.6	2.8	1.0	28.4	B12区整地土層
6	2.8	0.8	0.3	1.1	第10号溝	62	3.7	3.0	1.0	29.1	第10号溝
7	(3.4)	0.8	0.3	(2.1)	敷地Aビット	63	3.3	2.7	0.9	21.2	第12号溝旧溝
8	3.0	1.3	0.2	3.9	第8号溝	64	3.4	2.9	0.9	23.4	第12号溝旧溝
9	3.2	1.2	0.3	2.6	第10号溝	65	3.3	2.7	1.0	21.5	第14号土坑
10	3.8	1.1	0.3	3.2	B9区包含層	66	3.1	2.9	1.1	24.3	第5号溝
11	3.0	1.0	0.4	2.8	敷地Aビット	67	3.5	3.0	1.1	26.3	第12号溝旧溝
12	3.4	1.0	0.4	2.2	第45号土坑	68	3.6	2.8	1.3	22.3	B12区ビット群
13	3.5	1.1	0.4	3.8	第39号土坑	69	3.8	2.9	1.1	28.0	第28号土坑
14	2.9	1.2	0.5	3.1	B12区ビット群	70	3.1	3.1	1.1	25.6	第34号土坑
15	2.9	1.3	0.5	3.3	敷地Aビット	71	3.4	2.7	1.0	22.2	B7区床土
16	3.7	1.5	0.5	5.5	B12区整地土層	72	3.3	3.3	1.0	29.2	第8号溝
17	4.8	1.5	0.4	11.6	第28号土坑	73	4.2	2.9	1.0	27.1	第8号溝
18	5.5	1.5	0.4	9.0	敷地Cビット	74	3.2	3.3	1.2	33.4	第9号溝
19	5.5	1.5	0.5	9.5	敷地Aビット	75	3.3	3.1	1.2	30.1	B12区整地土層
20	4.7	2.0	0.5	13.5	第12号溝旧溝	76	3.5	3.2	1.3	31.6	A9区包含層
21	4.8	1.8	0.5	11.0	第8号溝	77	3.8	3.2	1.2	38.1	第8号溝
22	5.3	1.8	0.5	15.7	第8号溝	78	3.9	3.3	1.0	31.3	第8号溝
23	4.8	2.0	0.5	12.3	第9号溝	79	4.1	3.0	1.2	32.7	第31号土坑
24	6.2	2.0	0.6	15.6	第9号溝	80	4.1	3.3	1.3	36.4	第9号溝
25	5.7	1.8	0.5	15.2	第42号土坑	81	4.5	2.8	0.8	31.6	敷地A包含層
26	5.8	1.8	0.5	13.6	第8号溝	82	3.7	3.5	1.3	34.0	C6区床土
27	5.9	1.8	0.5	11.9	第8号溝	83	4.0	3.7	1.2	44.5	第10号溝
28	6.6	1.6	0.6	11.6	第8号溝	84	4.3	3.3	1.0	42.4	第8号溝
29	2.3	2.7	1.0	13.6	第5号溝	85	4.8	3.4	1.2	45.3	第8号溝
30	2.3	2.9	1.1	17.3	第8号溝	86	3.9	3.7	1.3	49.8	第8号溝
31	2.6	2.6	1.0	15.1	第8号溝	87	5.2	3.2	1.0	45.0	第5号溝
32	2.7	2.2	0.9	12.9	A12区整地土層	88	5.6	3.2	1.0	40.1	B12区整地土層
33	2.6	2.2	0.9	11.7	B12区包含層	89	5.6	3.7	1.3	(47.6)	第8号溝
34	2.7	2.2	1.1	11.7	A12区整地土層	90	4.9	3.7	0.8	57.8	第9号溝
35	2.7	2.2	1.1	12.7	第8号溝	91	4.8	4.0	1.2	65.6	第8号溝
36	2.8	2.8	0.9	18.7	B11区整地土層	92	5.3	3.3	1.2	50.5	第9号溝
37	2.9	2.6	0.9	(17.7)	第28号土坑	93	(5.2)	4.5	1.2	(88.6)	第8号溝
38	2.9	2.6	1.0	17.3	B9区包含層	94	3.5	3.3	1.6	25.3	C12区包含層
39	3.2	2.6	1.3	18.1	第7号土坑	95	3.6	3.2	1.7	30.5	第8号溝
40	3.0	2.4	1.0	15.8	B12区ビット群	96	3.7	3.5	1.8	36.0	敷地Cビット
41	3.2	2.2	1.0	13.9	第8号溝	97	3.8	3.3	1.5	33.0	第8号溝
42	3.1	2.5	1.1	15.6	敷地Aビット	98	4.2	3.1	1.5	37.5	C9区整地土層
43	2.9	2.4	1.2	13.6	B12区包含層	99	4.3	3.4	1.4	35.4	第8号溝
44	3.0	2.6	1.2	16.1	A11区包含層	100	3.1	4.1	1.6	41.6	C14区包含層
45	3.1	2.6	1.2	17.7	A11区包含層	101	3.7	4.0	1.6	43.6	B11区整地土層
46	3.0	2.5	1.3	14.0	B12区ビット群	102	4.1	3.7	1.6	47.3	第8号溝
47	3.0	2.8	1.3	18.6	第5号溝	103	4.2	3.7	1.4	46.7	第8号溝
48	3.1	2.6	1.2	17.6	C9区整地土層	104	4.5	3.6	1.5	44.7	第8号溝
49	3.5	2.7	1.3	19.1	第7号土坑	105	4.1	3.9	1.5	51.8	第8号溝
50	4.5	2.3	0.9	16.9	第8号溝	106	4.1	3.8	1.5	50.5	第8号溝
51	3.7	2.3	1.3	15.6	C17区包含層	107	5.0	3.6	1.4	52.4	第9号溝
52	2.6	3.0	1.0	21.2	B12区ビット群	108	5.6	3.5	1.4	54.8	第8号溝
53	2.9	3.0	1.1	23.2	B12区ビット群	109	5.5	4.4	1.5	78.7	第8号溝
54	2.9	3.2	1.2	24.8	敷地Aビット	110	5.4	4.4	1.8	89.4	第9号溝
55	3.0	3.1	1.1	25.9	第8号溝	111	6.1	5.2	1.6	125.8	敷地Cビット
56	3.1	3.2	1.3	25.8	第9号土坑	112	7.2	(4.3)	1.5	(101.4)	第8号溝

() は欠損により正確な数値が測定できなかったもの

第3節 出土陶磁器類の組成について

本遺跡からは、古代から近代に至る10,000点を越える陶磁器が出土した。その中で、遺跡の主体を成す古代末から近世初頭に搬入されたと考えられる製品を抽出し、その破片数から若干の考察を加えたい。

具体的には、12世紀前後に流通する中国製の白磁類を始めとし、国産磁器の搬入以前の17世紀前半代、肥前系陶器までを対象としている。ただし、11世紀後半から12世紀代にかけて使用されたと思われる、ロクロ製の土師器の碗・皿類に関しては点数に含めていない。また、肥前系陶器については一部国産磁器搬入以降の製品も点数に含まれている。もっと厳密に数えるべきであったのだが、御了承いただきたい。

出土した遺物は、当時の人々が使用した生活用具の一部であり、それらの破片を調べることは、当時の生活を垣間見る一助となる。陶磁器類に関連する生活用具には、壺・甕など食料や水を貯蔵するための貯蔵用具、播鉢・卸皿などの調理用具、碗・皿など飲食に用いる供膳用具、花瓶・香炉など仏教に関わる宗教用具などが挙げられよう。そのうち、貯蔵用具の茶壺、茶入れや、供膳用具の天目茶碗などは喫茶に関連する製品であるため、日常用具とは区別して嗜好用具として分類される場合もある。生活に必要な不可欠な用具の種類は、どこの家でも同じであるが、その内容は、時代、地域、住人の嗜好、貧富などによって差があり、その違いが組成比の違いとなって現れると考えられている。

まず、近世以前の組成を見ていきたい。時期的には11世紀後半～16世紀代を対象とするが、15世紀代の遺物が中心を成し、14及び16世紀代の遺物がそれに続く。総破片数は5,493点を数え、内訳は土師質土器が約57.3%、珠洲・越前焼等の貯蔵用具等が約29%と二者で8割以上を占める。残りは供膳用具を中心とした中国製品が約6.5%、瀬戸・美濃焼が約6%とほぼ同率を示し、瓦質土器1.1%、朝鮮製品0.1%と続く。

県内の中世遺跡出土陶磁器の組成比が明確にされた報告は多くはないが、数例挙げると、同じく北加賀地域に位置し、14世紀中葉～15世紀中葉の金沢市普正寺遺跡で土師質土器70%、珠洲・越前焼等23.6%、瀬戸・美濃焼3.2%、中国製品2.9%、瓦質土器0.3%⁽¹⁾、鶴来町白山遺跡では土師質土器77.5%、珠洲焼5.1%、越前焼5.4%、加賀焼1%、中国製品4.6%、瀬戸・美濃焼5.8%、瓦質土器0.4%と報告されている⁽²⁾。この2遺跡は前者が港湾集落、後者が社僧坊と性格を異にするものの、土師質土器が70%代であること、中国製品と瀬戸・美濃焼が近似した比率を示すことなど共通要素も認められる。また、15、16世紀代の集落とされる松任市小川遺跡では土師質土器が34.3%と少なく、珠洲・越前焼等が49.8%、輸入陶磁器が11.9%と高率を示し、瀬戸・美濃焼3.6%、瓦質土器0.4%となる⁽³⁾。これはやや特異な例であり、現在知られるところでは、土師質土器が70%前後、珠洲・越前焼等が20%前後、中国製品と瀬戸・美濃焼がほぼ同率という組成を示す遺跡が県内の中世後半の集落では多いとみられる。組成は、集落の性格、立地、調査箇所等によって多分に変化するものであり、一概に論じることにはできないが、本遺跡の陶磁器組成は、県内の当該期の他遺跡に比較して大きく逸脱するものではない。しかし、やや土師質土器が少なく、珠洲・越前焼等がわずかに多い傾向が認められ、組成比ではむしろ隣県福井の一乗谷朝倉氏遺跡の町屋、寺院等の組成に近似している⁽⁴⁾。

用途別の組成比では、甕・壺・鉢の日常用器は珠洲焼約44.4%、越前焼約43.7%、加賀焼約10.4%、信楽焼約1.3%である。これを器種別にみると、第2表のように貯蔵用具の甕では越前焼が半分以上を占め、壺では珠洲焼が他を圧倒する。生産地の近い加賀焼が最も少ないという事実は、本遺跡の中心時期が、加賀焼の生産が衰退した14世紀後半以降にあることと深く関係しているとみられるが、加賀焼が流通した時代に限定しても、鉢類を含め、使用量は極めて少ない。信楽焼の壺は、該期の集落址からは少量ながらも出土することが多い。すでによく指摘される場所であるが、葉茶を入れて運搬した容器とされる⁽⁵⁾。本遺跡の場

製 品				点数	製 品				点数	製 品			点数
中	青 磁	碗		112	瀬戸・美濃焼	盤		54	国	珠洲焼	播鉢	207	
		皿		4			灰	花瓶			20	その他	72
		鉢		4				香炉			3	計	707
		盤		6		釉		瓶子		19	越前焼	甕	419
		壺		2			合子	1		壺		79	
		香炉		5			その他	26		播鉢		99	
		その他		23			鉄	丸碗		5	その他	98	
	計		156	皿		26		計		695			
	白 磁	碗		35		釉		花瓶		7	加賀焼	甕	133
		皿		73			茶入	3		壺		13	
坏			11	その他	10		播鉢	5					
壺			1	天目茶碗	70	その他	14						
その他			34	志野釉	丸皿	4	計	165					
計			154		菊皿	8	信楽焼	壺	20				
青白磁	その他		1	その他	2	その他		1					
	染 付	碗		14	計	342	計	21					
		皿		9	越中瀬戸焼	丸碗	11	産地不明陶器	甕	3			
壺			1	皿		3	瓦質土器		花瓶	3			
その他		9	播鉢	4		香炉			2				
計		32	計	18	羽釜	7							
鉄 釉	天目茶碗		13	肥前系陶器	碗	83	火鉢類	火鉢類	20				
	その他		1		皿	274		その他	20				
中国製品合計					357	鉢		43	計	62			
朝	青 磁	碗		1	片口	4	土師質土器	皿	3,136				
		雑 釉	小碗		5	播鉢		38	播鉢	11			
	鮮		舟徳利		1	甕		104	計	3,147			
		甕		1	その他	54	国産製品合計		5,760				
朝鮮製品合計				8	計	600							
国	瀬戸・美濃焼	灰	平碗		25	珠洲焼	甕	191					
			皿		46		壺	237	総 計			6,125	
			卸皿		13								

第1表 出土陶磁器破片数

合も、天目茶碗、茶入、茶臼等の茶道具の出土と合わせ、葉茶壺の可能性が高い。調理用具の鉢は珠洲焼が多く使用されるが、近隣の普正寺遺跡でその比率が85.7%に上るのに比べるとかなり少ない。この結果は珠洲焼の生産が盛んであった15世紀中葉までで集落が廃絶したとされる普正寺遺跡に対し、珠洲焼の生産が衰退し、越前焼がそれに取って代わった16世紀代まで存続した本遺跡との違いと捉えられる。正確な数量は確認していないが、越前焼の鉢99点中には、16世紀代の製品が多くを占める印象を持っている。

	甕(%)	壺(%)	鉢(%)
珠洲焼	25.7	67.9	66.5
越前焼	56.4	22.6	31.8
加賀焼	17.9	3.7	1.6
信楽焼	0	5.7	0

第2表 甕・壺・鉢の割合

供膳用具については、碗・皿類に限ってみると、碗では中国製の青磁が40%、白磁12.5%、染付5%、天目茶碗約4.6%、朝鮮製品約2.1%、瀬戸・美濃焼約35.7%となる。青磁、瀬戸・美濃焼で約8割を占め、白磁がそれに続くが、白磁碗の多くは12世紀代前後の製品であるため、14～16世紀代の期間で考えると、青磁と瀬戸・美濃焼が同じくらい使用されていたことになる。ただし、瀬戸・美濃焼約35.7%のうち7割が天目茶碗で占められ、中国製の天目茶碗を含めると実に碗全体の30%に上る。碗の約3分の1が嗜好用具と言える天目茶碗で占められるということは、喫茶を嗜むまでに経済的なゆとりがあったことを示している。中でも、中国製の天目茶碗は、その財産的価値が瀬戸・美濃焼より非常に高く、その嗜好を裏付けよう。皿では土師質土器、卸皿を除いて考えると、青磁約2.5%、白磁約46.2%、染付約5.7%、瀬戸・美濃焼約45.5%と

なる。白磁の多くは森田氏分類のD類、高台付き小皿が占め⁶⁾、瀬戸・美濃焼ではほとんどが窖窯段階の縁釉小皿である。いずれも15世紀代に大量に流通した製品である。

碗・皿の組成比では、染付の製品がやや少ない印象を受ける。染付は、主に15世紀後半代から搬入され、16世紀にかけて青磁に取って代わる。本遺跡の場合、組成比からすると確かに染付は少ないが、他の製品に関しても15世紀末～16世紀代、特に15世紀末～16世紀初頭の遺物は希薄であるように思える。16世紀代の集落の調査で比較的多く出土する瀬戸・美濃焼大窯段階の、端反り皿や丸皿は非常に少ないのである。したがって、染付のみの使用量が少なかったとは断定し難い。該期の遺物が希薄となる問題については、光琳寺の開創が文亀元年（1501年）と伝えられることと関連して更に考察を加えなければならないだろう。

本遺跡は光琳寺跡の一角に比定されているが、調査ではそれを裏付ける遺構等は確認していない上、遺物においても宗教用具とされる花瓶等の出土比率は、普正寺遺跡や小川遺跡と変わらず、寺院跡地であることを積極的に肯定する結果とはなっていない。

さて、中世の様子は上記の通りであるが、近世に入るとどうか。情報は近世初頭に限られるが、様々な産地の豊富な器種が揃っていた中世に比べると、産地、器種ともかなり限定される。まず、中国製品は染付碗がわずかに出土するが、ほぼ100%国産陶器で占められ、その9割以上が肥前系陶器となる。中世で多量に出土した土師質土器は、1個体が確認されるのみで、大量に出土する城下町の様相とはかなり異なる。このことは、一括廃棄を伴う宴会が必要のない住人の生活環境、そして燈明皿を必要としなくなったという生活様式の変化を想像させる。貯蔵・調理用具では甕、播鉢に1、2点の越前焼、播鉢に数点の越中瀬戸焼が確認されるが、肥前系陶器が席卷し、供膳用器にしても瀬戸・美濃焼、越中瀬戸焼はわずかであり、肥前系陶器が大量に消費される。肥前系陶器は初期の藁灰釉などの製品こそないものの、I期の製品が大量に使用されており、中世に国内唯一の施釉陶器としてシェアを誇った瀬戸・美濃焼を押さえ、一気に販路を広げたものと想像される。ただし、本遺跡では、肥前系陶器生産開始前の16世紀代の遺物は多くなく、瀬戸・美濃焼の出土量が限られるため、中世から近世への組成の変化は、16世紀代を通じて定量の遺物が出土する遺跡で検討されなければならないだろう。

註

- (1) 石川県立埋蔵文化財センター1984『普正寺遺跡』
- (2) " 1985『鶴来町白山遺跡・白山町墳墓遺跡』
- (3) " 1992『小川遺跡』
- (4) 小野 正敏 1984「福井県一乗谷における陶磁器の組成と機能分担」『貿易陶磁研究No.4』日本貿易陶磁研究会
- (5) 註(4)に同じ
- (6) 森田 勉 1978「太宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』九州歴史資料館

第4節 水郷の世界—その成立と暮らし—

(1) 木越光琳寺遺跡の評価

本遺跡は金沢市木越町に所在する集落遺跡で、古代末の11世紀後半から近世前半の18世紀前葉までの遺構と遺物を検出している。その出土遺物のなかでも、銭貨、土錘、陶磁器類などについては、本章の第1節から第3節で、整理と検討を加えている。また本遺跡に暮らした人々の食文化と、植性を中心とした生活環境の裏付けとなる自然科学的調査の成果は、第6章に三本の調査報告として掲載している。

大量に出土した土錘の分析と種子・動物遺体の同定報告は、河北潟南端の三角洲（デルタ）地形と環境を反映した内容で、本遺跡を特徴づける興味深い資料である。さらに出土した銭貨への検討は、当地に伝承される光琳寺が属した宗門と門下の経済的な結びつきから、銭貨の集積と進上を考えたものである。

また付章の文献から見た光琳寺では、伝承される浄土真宗寺院の歴史を史料から詳説し、戦国時代に木越村の一角を支配した光琳寺の具体的な姿を復元している。

(2) 水郷の風景

金沢市の北部に広がる河北潟は、内灘砂丘の発達により形成された潟湖で、1958年からの干拓事業が実施される以前は、東西4km、南北約8km、深さ2.5mを測り、広大な内水面として知られていた。この河北潟は、金沢市、津幡町、宇ノ気町、内灘町の四市町にまたがり、潟へ流入する河川は、東方の開析丘陵から流下する浅野川、金腐川、森下川、津幡川、能瀬川、宇ノ気川などの諸河川があるのに対して、排水河川は、河北潟の南端から発して、日本海に注ぐ大野川だけであった（第2図参照）。

河北潟へ注ぐ諸河川の河口部近くでは、標高が1m前後の低湿な三角洲地形が形成され（巻頭図版1参照）、灌漑・排水・交通の機能を備えた溝渠（クリーク）が、網状に分布していた。第1図は1916（大正5）年の木越地区の土地現形図である。この図面を見ると、金腐川の旧流路を流れる小河川が南北方向に並走し、東西方向と水田間に溝渠が入り込み、小河川や溝渠を埋立てることで、水田の拡大が進められた様子が詳しく知られる。

この地形図から知られるように、河北潟の周辺の村々では、水路としての溝渠が、集落内にも整備されることで、写真のように川舟が宅地脇に係留される光景が、一般的な姿として見られたのである。それは水郷固有の風景であり、その背景には、低湿地での暮らしを守るために、常に水と闘いつつ、溝渠の保全と埋立てを行い、水田の開発と整備を図ってきた水郷特有の歴史があると考えられる。

河北潟を公共の内水面として成立した当地の水郷は、水田間を網状に分布した大小の溝渠で結ばれ、川舟を常用した水田耕作を主な生業としながらも、潟や溝渠を漁場とした内水面漁業、川舟を運送手段とした湖上水運も生業として定着させていたことは、近代史料からも知られる生活模様である。

このような水郷の村々が展開した河北潟周辺も、潟の干拓事業と道路の整備が進展した昭和30年代以降、水郷の生命線であった溝渠の埋立てが進み、その姿を急速に変容させた



係留された川舟

のである。景観が大きく失われた現在は、水田地帯を流れる小河川の一角で、かつての面影を見るだけである。

(3) 水郷の土地開発

これまで北陸地方の低湿地の開発と水稲耕作の普及は、一体の現象として理解されてきた。それは弥生時代でも中期以降の集落遺跡が、低地の自然堤防上に設営される事例と数例の用水施設の確認から、弥生時代後半には低湿地の開発が開始されたと、一般的に説明されてきた。それは集落遺跡周辺の低湿地が、水田耕作の適地として判断されたからである。

本遺跡が立地する金腐川下流から河北潟周辺の低湿地では、安定した水稲耕作の生産基盤となる水田を開発する方策として、幅2～6mの溝渠を一定間隔に開削し、かき揚げた土砂で、水田面のかき上げを行う開田方法が行われてきた。この溝渠の開削は、排水が可能な水田の基盤が出来上がると同時に、湛水した溝渠が、灌漑と交通の水路として利用され、水郷固有の風景を育ててきた。溝渠の開削後も水田の保全と面積拡大を目的として、溝渠の底に堆積した土砂のかき揚げ作業が、毎年実施されるのが通例であった。作業の実施時期は、農閑期で潟の水位が低下する早春とされてきた。

潟湖の沿岸に形成された三角洲などの低湿地は、土壌と植性の両面からも水稲耕作に適した土地である。さらに広大な未開発地が容易に確保されるが、安定した水田経営を目的とした営農基盤の確立のためには、水田を効率的に開発する工法の導入が必要である。地勢に調和した形で、溝渠を開削する工法は、当地のような低湿地を開田する方法として、ある時期に広く普及したものである。

堆積土が軟弱な低湿地で、数多くの溝渠を開削するには、多大の労力を要するが、大きな水害を受けることが無ければ、翌年には豊かな収穫が見込まれる水田を開発することが可能となる。また営農や溝渠の管理は、潟湖の生活で使用されていた川舟を使うことで容易に行える。

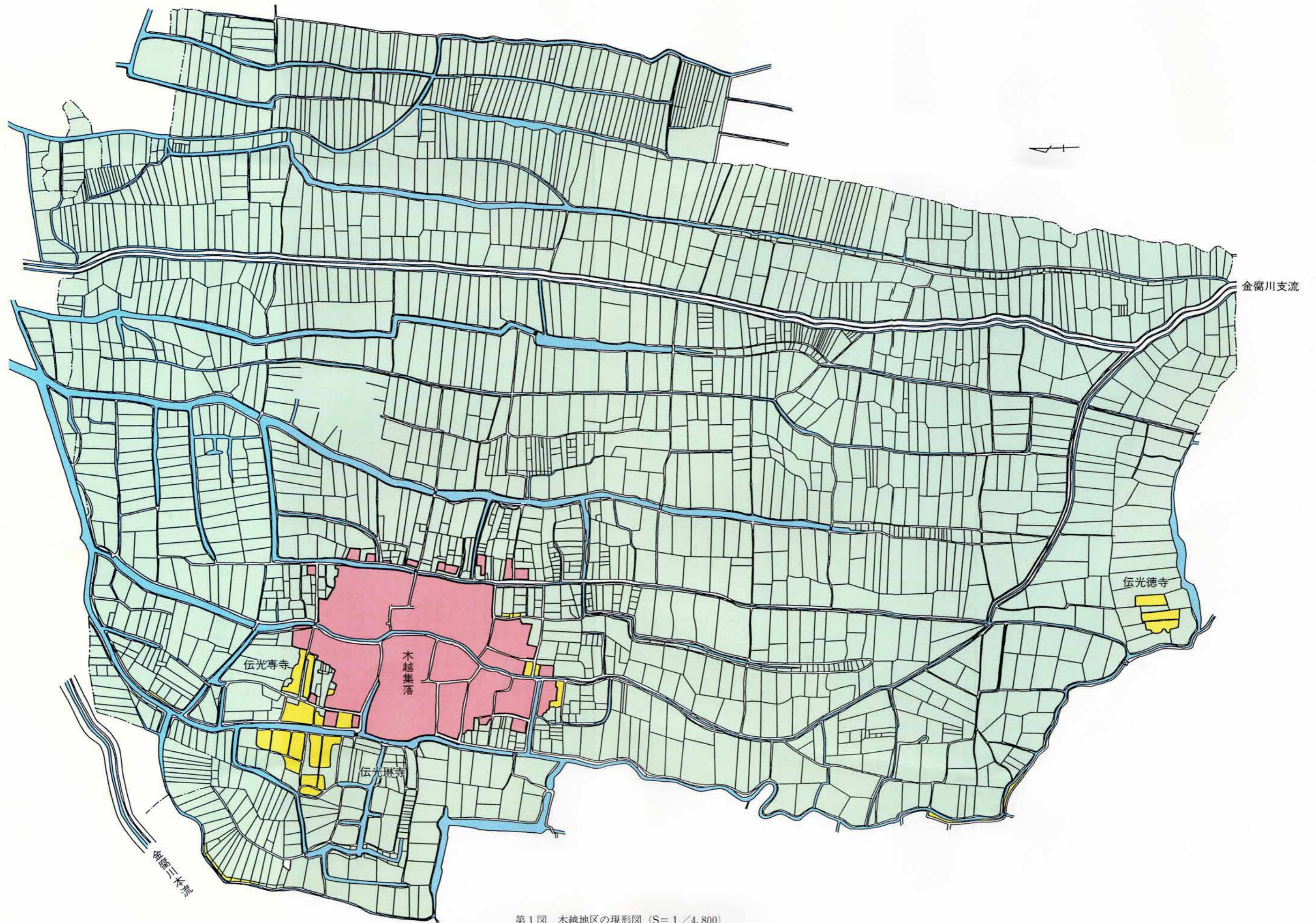
しかしこのような開田方法は、水郷と呼ばれる低湿地特有の工法であり、当地への導入時期とその歴史は不明であった。加賀の近世の農林漁業を色彩で描き、説明を加えた農書『民家検労図』を開いても、開田方法に関する説明は無い。それは加賀や能登の潟湖周辺で見られた水郷の村々の歴史が、未解明であることを意味している。

(4) 木越光琳寺遺跡と土地利用

本遺跡の調査区中央で検出した第8号溝は、幅5～6m、深さ0.7～1mの規模を測る溝で、11世紀後半から12世紀初頭頃に開削された溝渠であると判断された（第4章第1節を参照）。さらに第8号溝は、幹線となる溝渠で、これから派生した第9号・第10号・第11号の三条の溝は、その規模からしても、第8号溝の枝溝としてはほぼ同時に開削された溝渠と確認されている。これら枝溝の埋立ては、幹線よりも早く、第10号溝は15世紀後半、第11号溝は16世紀初頭、第9号溝は16世紀中頃と、戦国時代に順次埋立てが進み、屋敷地へ編入されている。これに対して、幹線の第8号溝の埋立ては、16世紀前半から進められるが、水田化したのは18世紀前半と遅い。

本遺跡で確認された溝渠の開削時期が、古代末の11世紀後半から12世紀初頭である事実と、当該期がいわゆる大開墾時代であったことを考慮するなば、河北潟周辺の低湿地の開発は、ほぼ同時期に開始されたと判断される。そのため当地に水郷の風景が展開するのも、12世紀中葉以降である。そして1916（大正5）年の木越地区の土地現形図に見られる小河川や溝渠は、古代末期から開削と埋立てを積み重ねた遺構であり、そこでみられた土地利用は、水田の拡大を目指した開発の歴史の到達点である。

本遺跡の調査区内の敷地Aや敷地Cにあたる範囲は、中世から近世の屋敷地であったことから、周囲の水



第1図 木越地区の現形図 (S=1/4,800)

田よりも一段高く、木越地区でも数少ない畑地として利用されている。だが18世紀に水田化された第8号溝の部分は、畑地間にL字形の水田として残る。このL字形の水田区画は、溝渠として開削された第8号溝の形態に規制を受けていることは、再度の説明をするまでも無く、その延長部は南に位置する溝渠に接続していたことは明らかである。そしてこの敷地Aや敷地Cの屋敷地を踏襲した畑地が、調査区の東方を流れる血ノ川まで広がることは、二面の屋敷地が、同様に東側に大きく広がっていたことを意味する。これは水郷での土地の利用形態が、土地の安定度合いや排水性能で決定されたからである。

現形図には本遺跡が立地する畑地を含め、大きな畑地が三ヶ所記載されているが、これらは木越三光と呼ばれた浄土真宗寺院の光徳寺、光琳寺、光専寺の跡地と伝承されることからしても、中世の集落遺跡や寺院跡である可能性が高い。各畑地は共通して、古い溝渠の跡地を示す細長い水田が入り、二・三の区画に分割されている。

以上、低湿地の開田方法を踏まえて、本遺跡の調査成果からみた水郷の成立時期、木越地区の土地現形図から知られる土地利用の概要を整理してみた。そして当地の低湿地が開発される要因としては、古代末の気候変動と開発技術の普及にあると考えている。

古代末の12世紀頃は、山本武夫も指摘するように、9世紀以降つづいていた温暖期が、終息に向かう時期で、天候が不順となり早ばつが頻発していた。たて続く早ばつは、潟湖の水位低下を引き起こし、低湿地の開発の最大の条件が好転したと考えられる。他方、関東南部の武士団を研究した石井進は、古代末の大開墾時代の担い手を国衛や在庁官人と密接な関係を持ちえた武士と推定し、そこで蓄積された開発経験が、鎌倉時代中期に各地の低湿地を直営地とした地頭達へ伝えられたと推定している。ともに重要な指摘である。

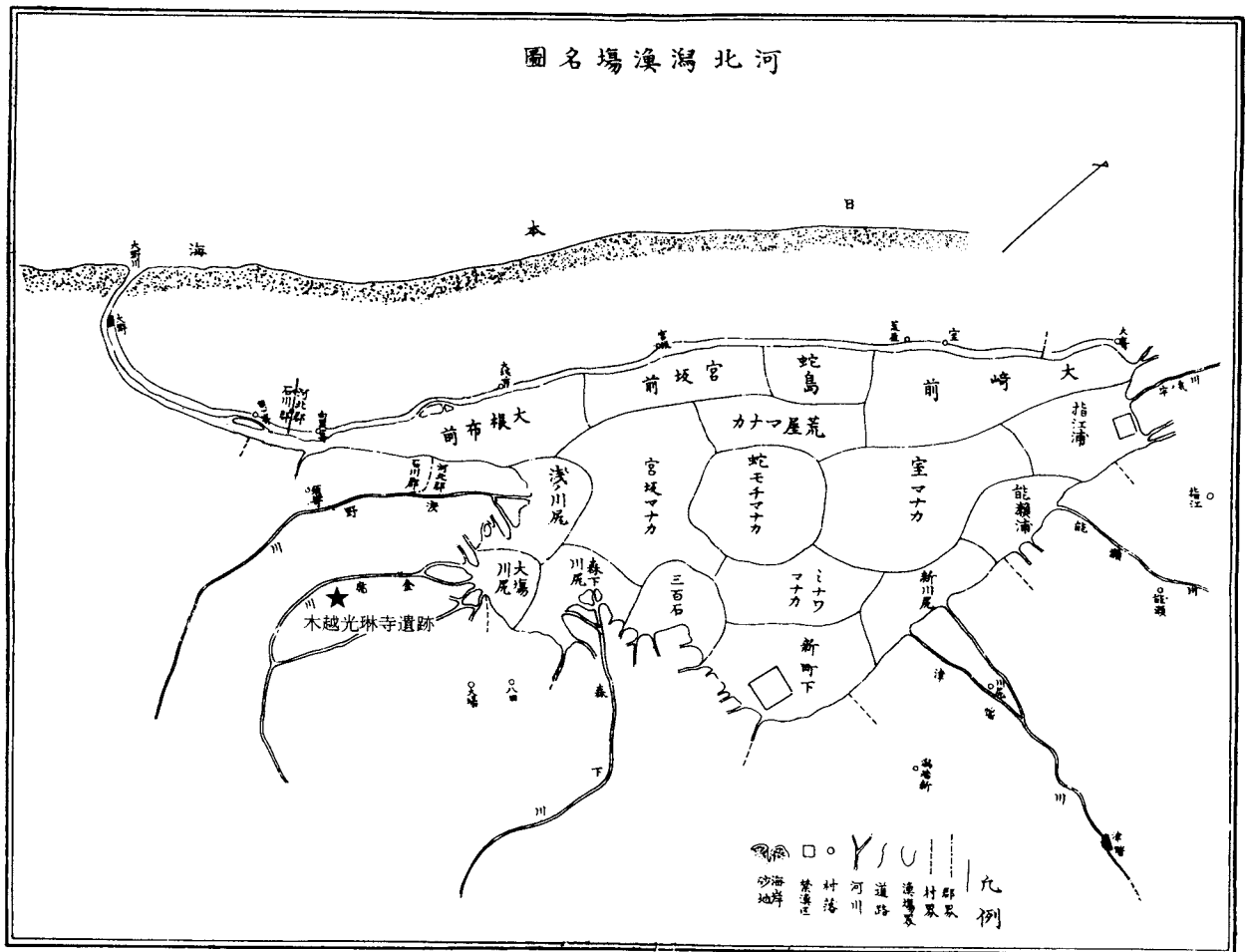
鎌倉時代の木越は、朝廷で外記局を担当した中原氏の開発私領地の倉月荘に含まれる。その荘域が浅野川から金腐川下流の低湿地に広がることから、前述のような開発要因を背景に成立した荘園と理解している。

(5) 潟湖の暮らし

石川県水産試験場は、明治の末年に県下の潟湖を調査し、その利用実態を明らかにしている。調査の対象となった潟湖は、加賀地方の今江潟、木場潟、柴山潟と河北潟、能登地方の邑知潟で、その報告書は、『石川県湖潟内湾水面利用調査報告』として、1912（明治45）年に「今江・木場潟之部」と「邑知潟之部」の2巻、1913（大正2）年に「柴山潟之部」と「河北潟之部」の2巻を刊行している。各報告書は、総論から書き起こし、潟の沿革、漁具漁法の制限、漁師の人数、漁船や漁具の構造など多項目に及び、図表を多用しつつ詳細に報告している。また巻頭の写真は、漁の模様や潟淵の光景など、忘れ去られた潟湖の風景そのものである。この近代史料から、本遺跡の成立と展開に大きな存在であった河北潟と水郷の暮らしをみてみたい。

河北潟の報告書によると、1912（明治45）年に河北潟周辺の12町村で、潟や河川の内水面漁業の就労人口は1,608名である。このうち木越地区を含み、潟の南部に位置する川北村では、180名を数える。構成率は約11%で、内灘村の600名に次ぐ規模である。しかし1907（明治40）年の協定書にある漁目は、小網、延縄、投縄の3種目と少なく、漁業人口117名の八田村の13種目とは、大きくかけ離れている。これは木越の村が水郷地帯に位置する村であっても、住人の多くは、水稻や麦の栽培を中心とした農業が生業で、潟を主な漁場とした内水面漁業への依存が弱かったことを意味している。第2図は河北潟内部の漁場名図である。木越地区の河口部は、「大場川尻」の包括され、独自性が見られない。

1670（寛文10）年の村御印をみても、木越村の草高は1,457石で、隣村の大場村とは大きな開きは無いが、小物成の猟船權役は、大場村の銀245匁に対して、木越村はわずか銀20匁で、川舟を多用する漁業活動の弱さをみせている。この様相はたぶん江戸時代以前からのもので、木越村では漁業が盛行する事はなく、つね



第2図 遺跡の位置と河北潟漁場名 (S=1/100,000)

に農閑副業的な活動規模で行われたと理解できる。

河北潟での漁業活動が弱くても、溝渠が縦横に走る水郷では、川舟は農業や交通でも重要な存在である。その川舟を同報告書に見ると、河北潟では向粟ヶ崎舟、大根布舟、八田舟、八田胴舟の4種類の川舟が製造され、潟の全域で使用されている。このときの舟名は、舟の建造地と構造を示す。向粟ヶ崎と大根布は、潟の西側に位置する村で、八田は潟の東側にあつて木越の北東2kmに位置する村である。河北潟で使用される川舟は、この3村の舟大工が建造している。また八田胴舟以外は、笹舟形態の川舟で、構造が似通う。

木越村で使用されていた川舟は、河北潟で最も普及した八田舟である。舟の規模は、総長1丈9尺8寸(約6m)、胴幅3尺(約0.9m)で、約2,000kg前後の荷物が、竹竿一本で運搬することができた。建造費用は、37円を要するが、15年間の使用に堪え、各村の家々には、男手に応じた舟数を保有するまでに普及し、水郷での生活と農作業などに利用されていた。

当地で溝渠が開削され、水郷の景観が成立したであろう12世紀中頃以降、これらの川舟は人々の生活を支えてきたと理解されるが、その川舟の歴史は不明である。今後の課題としたい。

参考文献

- 大場村史編纂委員会 『大庭のあゆみ』 金沢市大場町会 1991 金沢。
- 山本武夫 『気候の語る日本の歴史』 そしえて 1976 東京。
- 石井進 『鎌倉武士の実像』 平凡社 1987 東京。
- 石川県水産試験場 『石川県湖潟内湾水面利用調査報告』 第1～4巻 石川県 1912・1913 金沢。
- 須藤利一他 『船』 法政大学出版局 1968 東京。



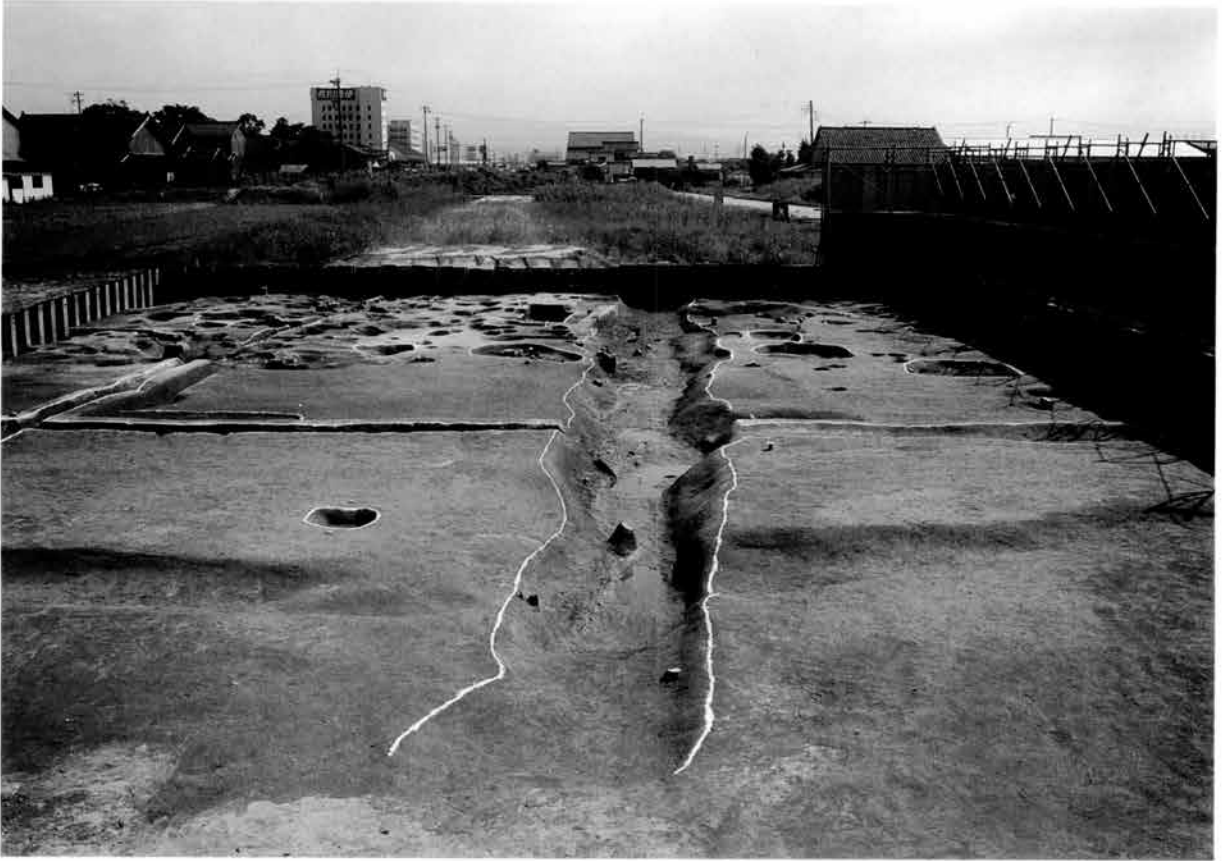
遺跡周辺の航空写真（昭和22年撮影）



北側調査区（南半）



南側調査区（北半）



北側調査区近景（北から）



南側調査区近景（北から）



北側水田部（南東から）



調査前風景（南から）



作業風景（南東から）



作業風景（東から）



調査区東西基本土層（北西から）



第5号溝（南から）



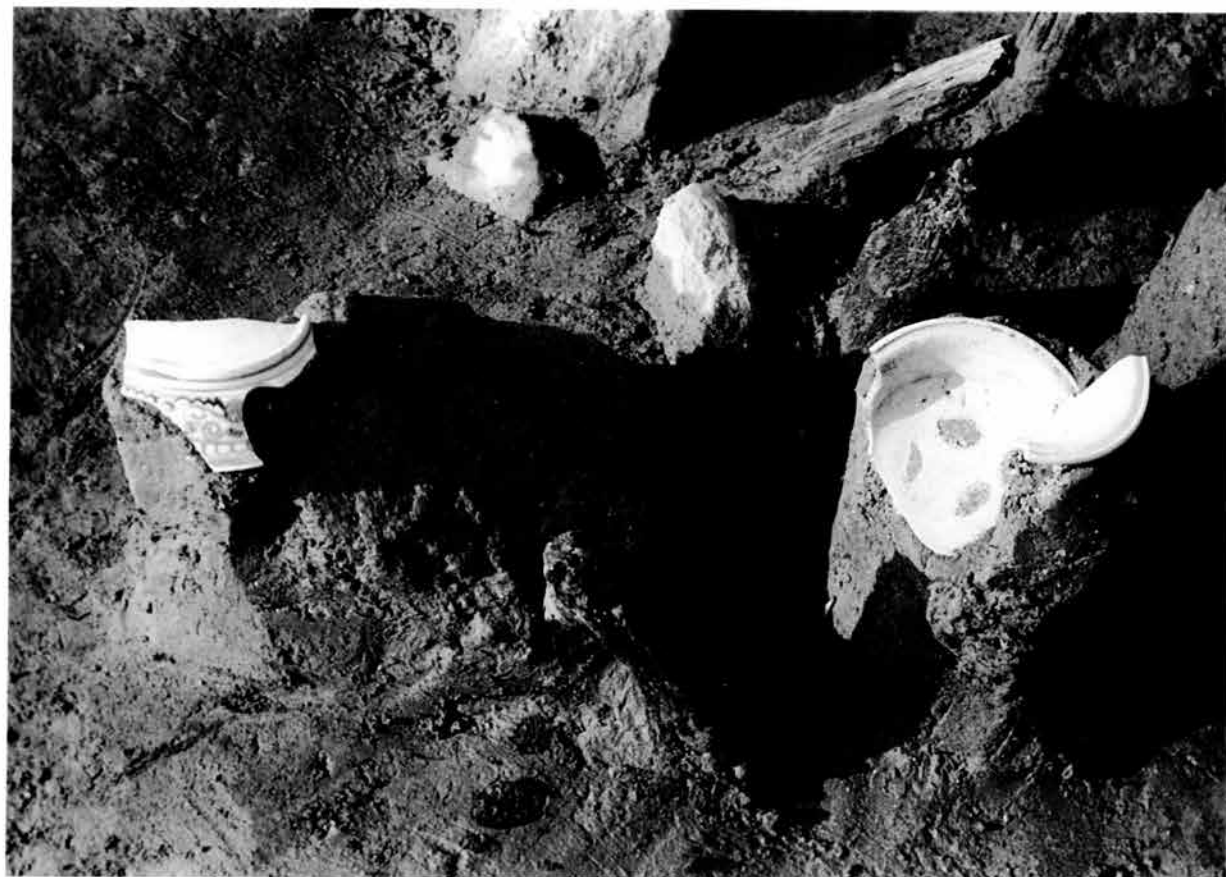
第8号溝全景（東から）



第8号溝土層断面（南東から）



第8号溝南壁杭列（東から）



第8号溝南壁土器出土状況



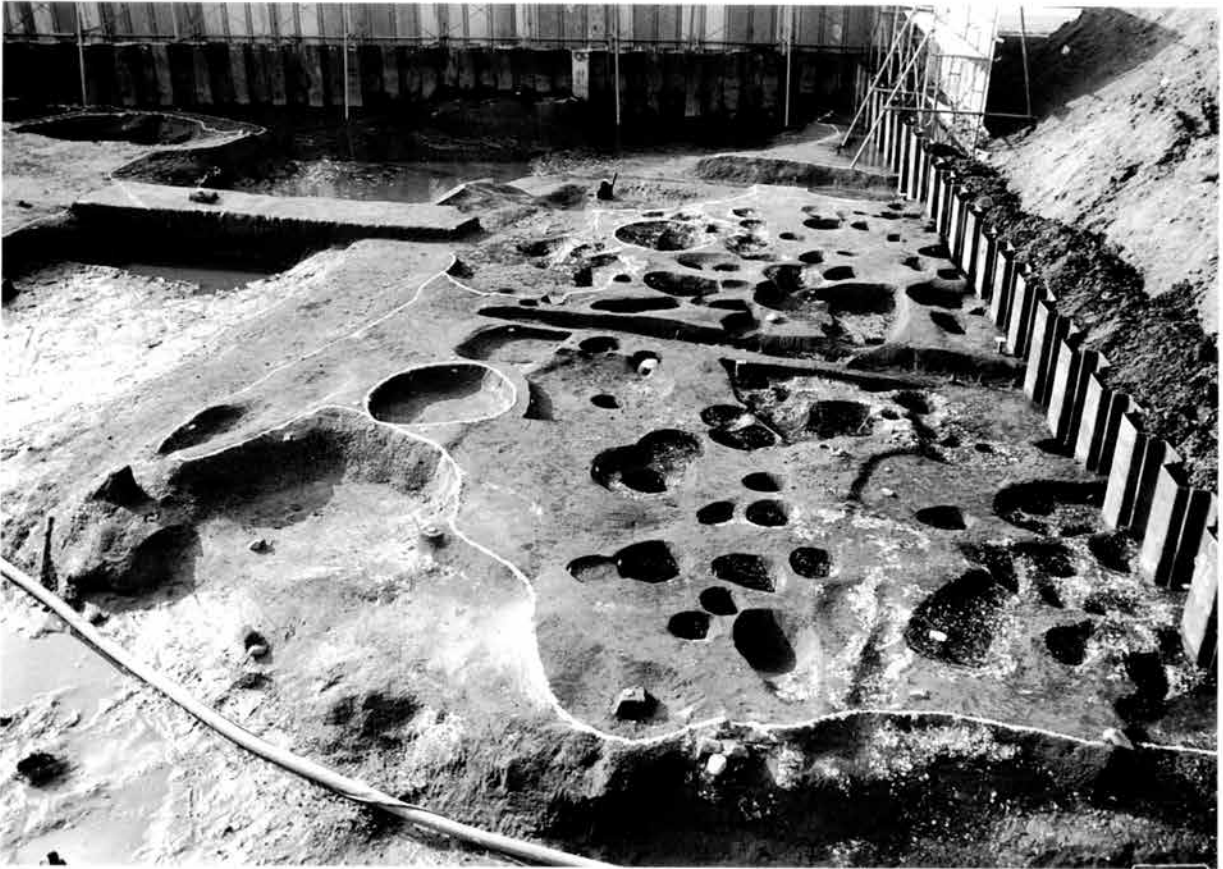
敷地A全景（北から）



敷地A西部（北から）



敷地A中央部（東から）



敷地A南部（東から）



第7、8号土坑（南から）



第9号土坑（北から）



第10号土坑 (南東から)



第7号掘立柱建物柱穴 (東から)



第13号溝 (東から)



第9号溝土層断面（南西から）



第9号溝遺物出土状況



同 左



敷地B全景（北から）



敷地C北半部（東から）



敷地C南半部（東から）



第19号土坑（北から）



第23号土坑（西から）



第28号土坑（北東から）



第33号土坑土層断面（南から）



第12号溝土層断面（南東から）



第12号溝新溝集石遺構（西から）



第12号溝旧溝集石遺構（東から）



第10号溝（東から）



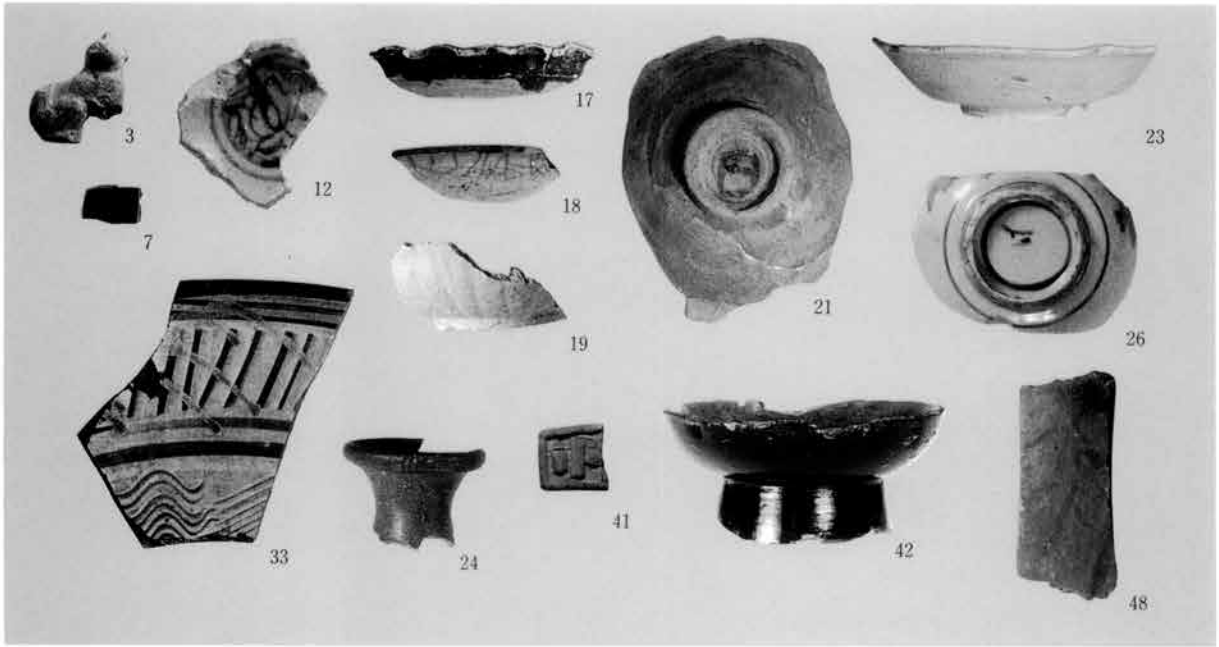
第11号溝（東から）



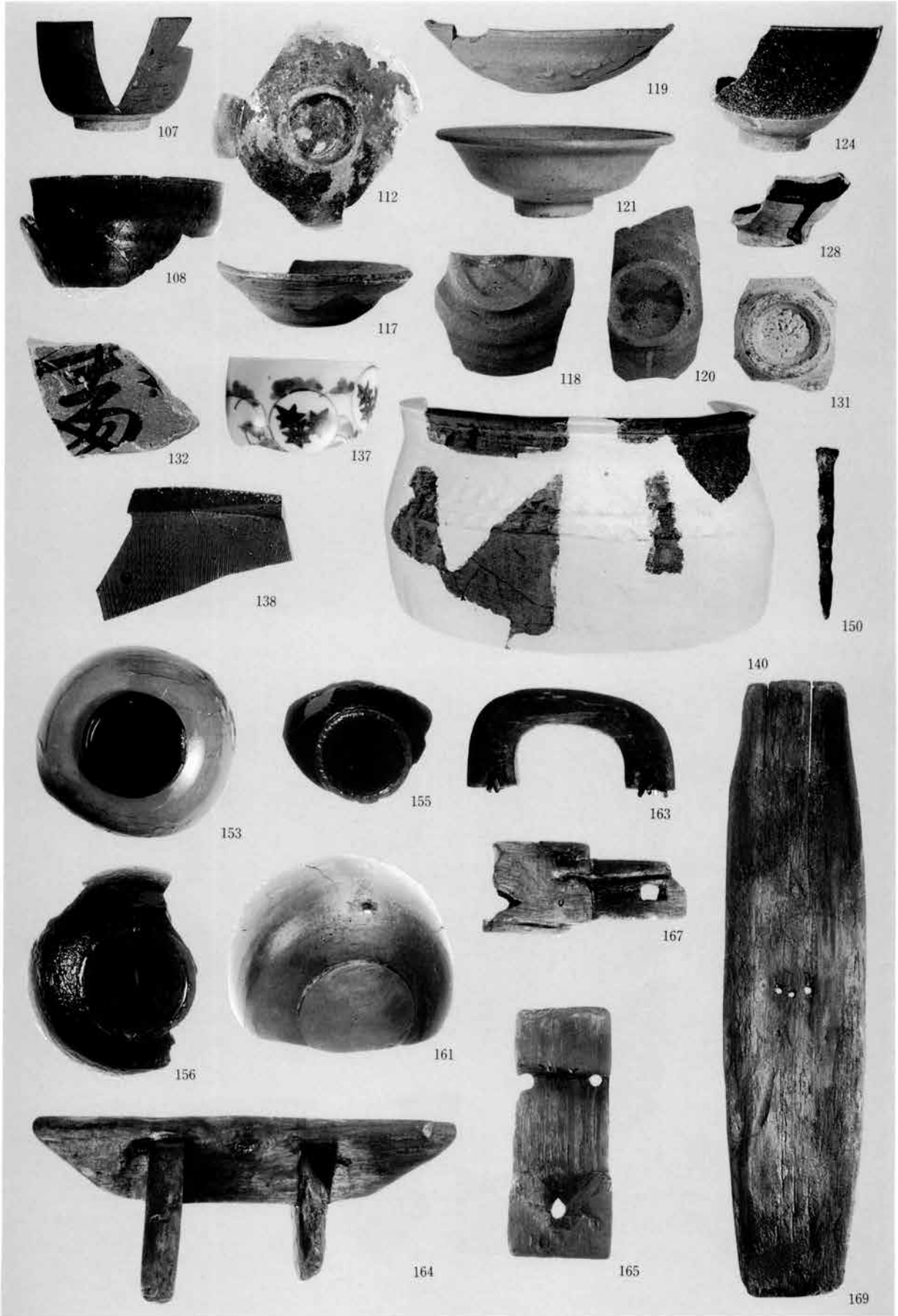
敷地C 東側耕作溝群 (西から)



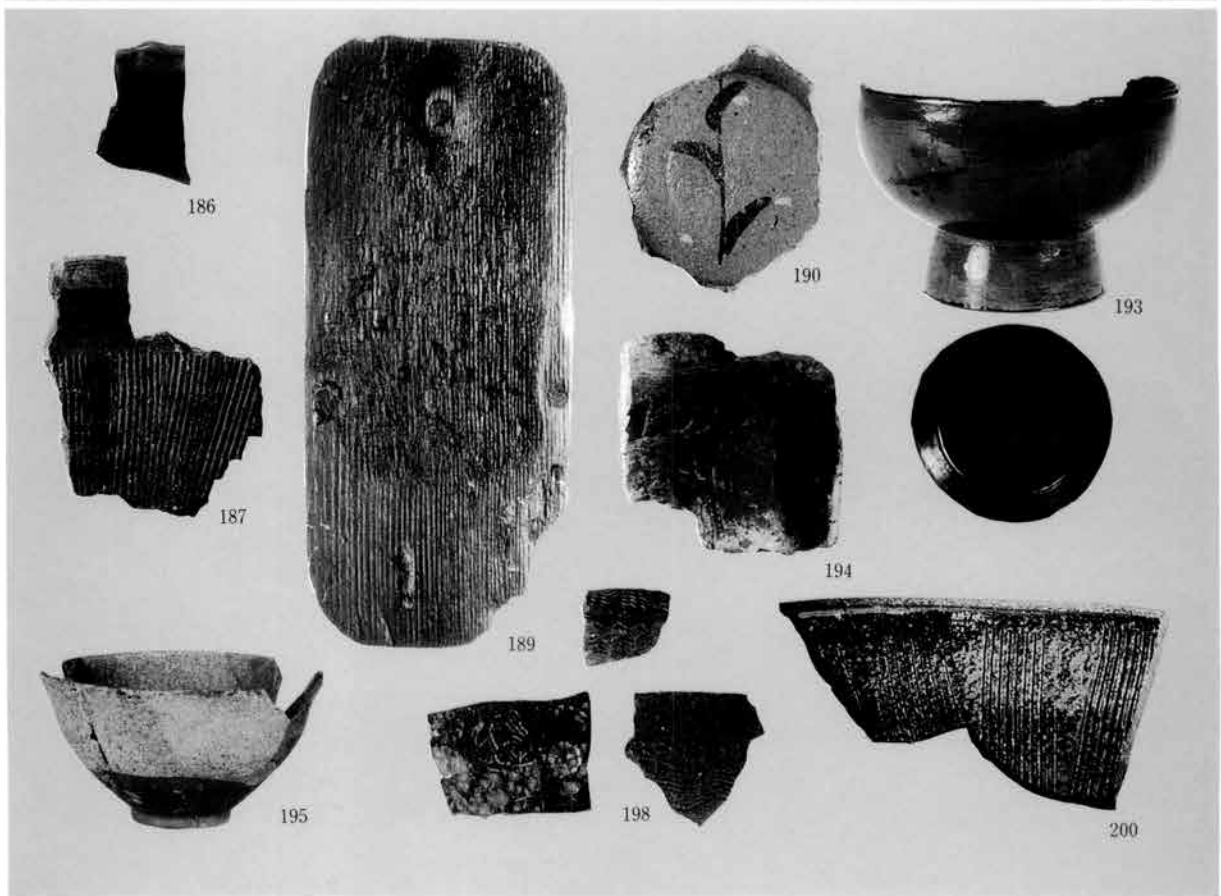
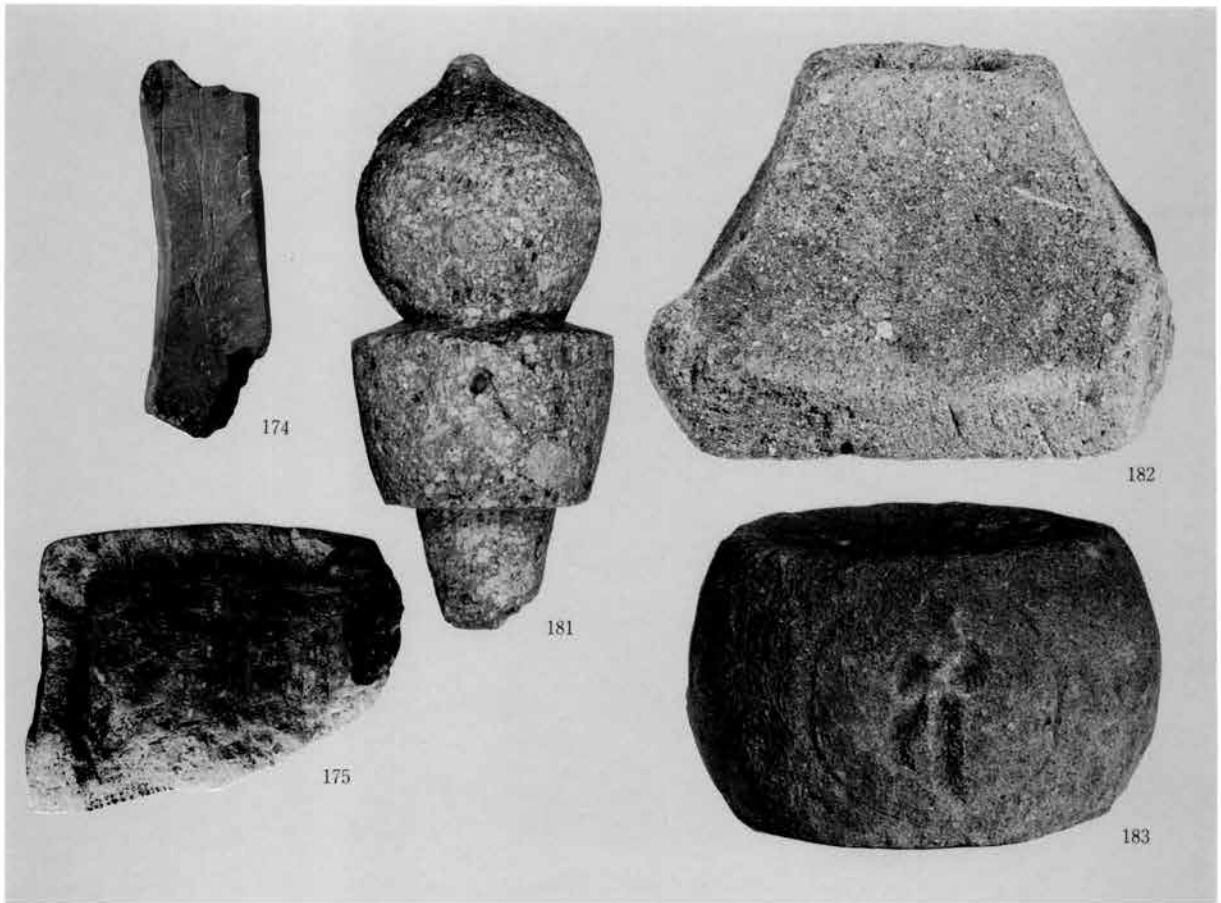
敷地C 西側耕作溝群 (北東から)



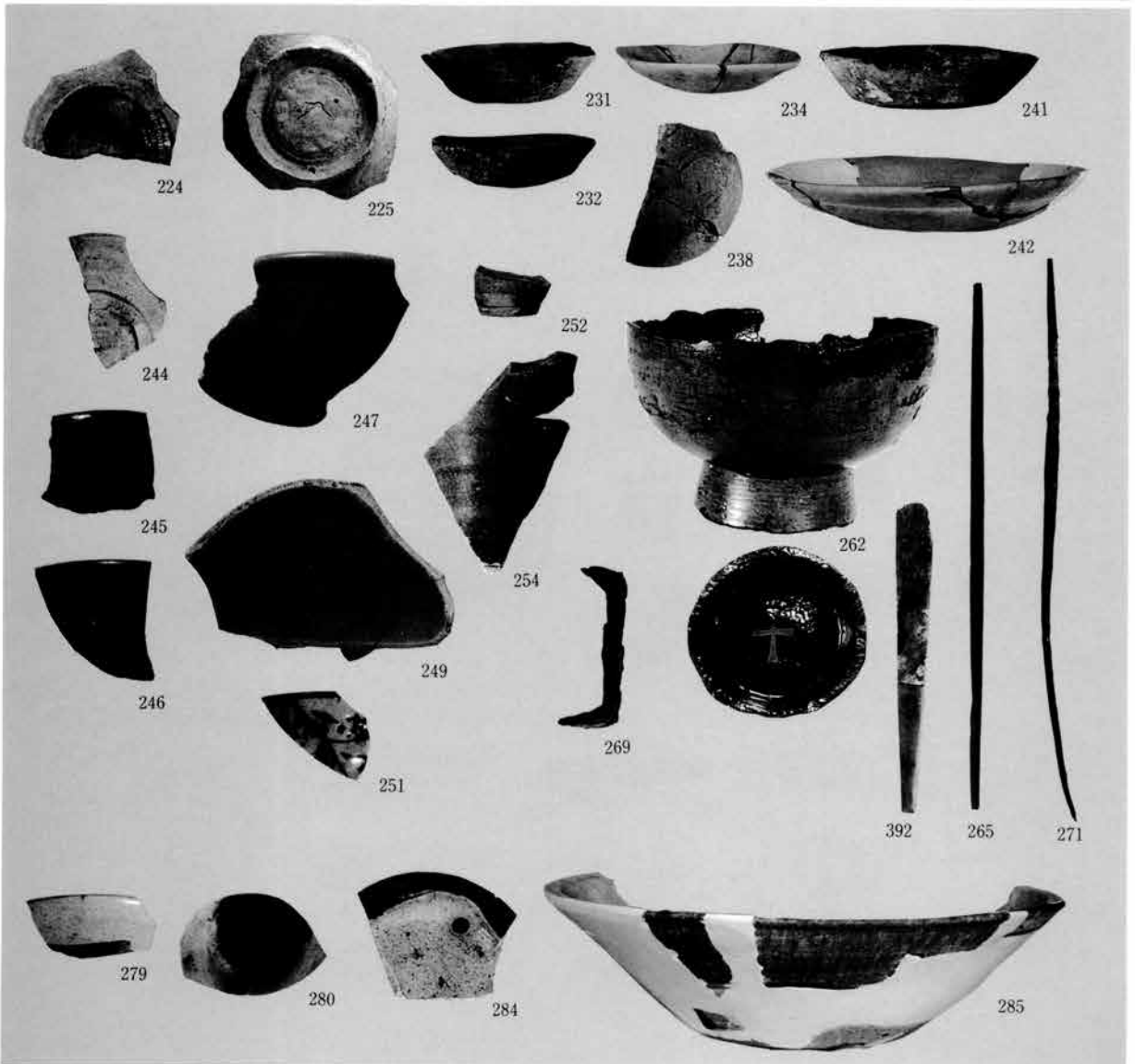
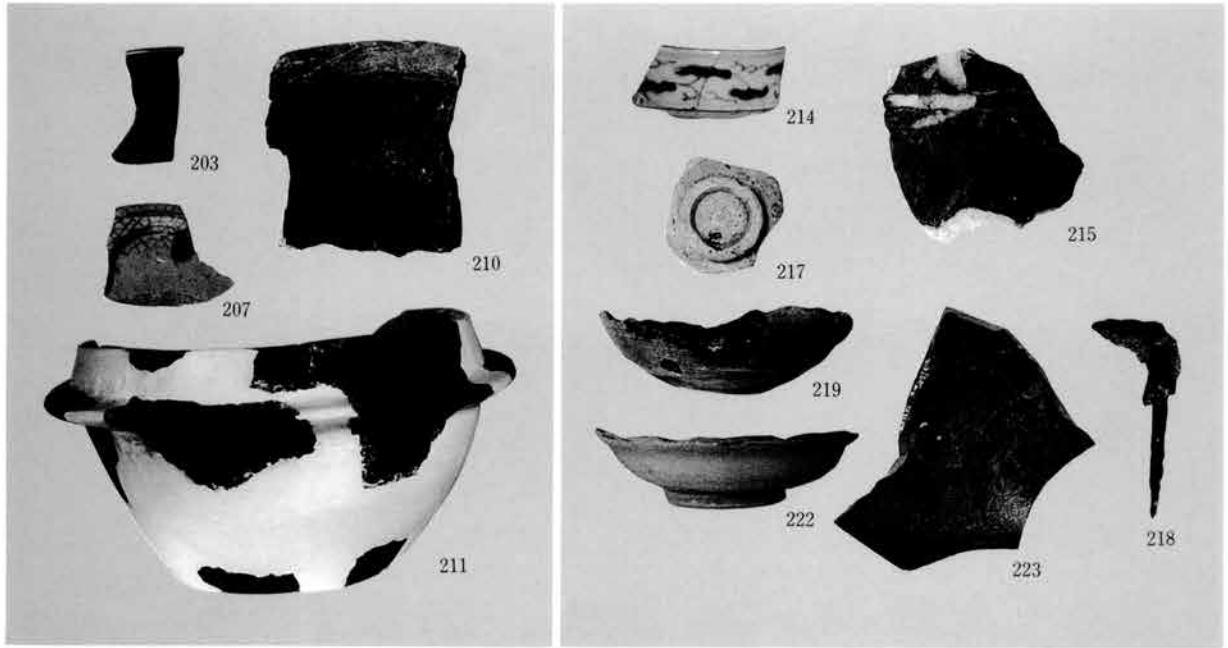
出土遺物



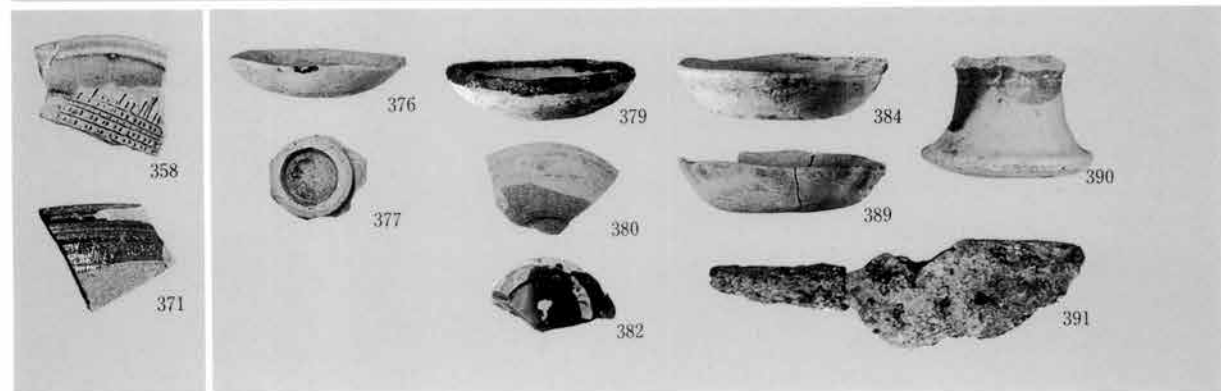
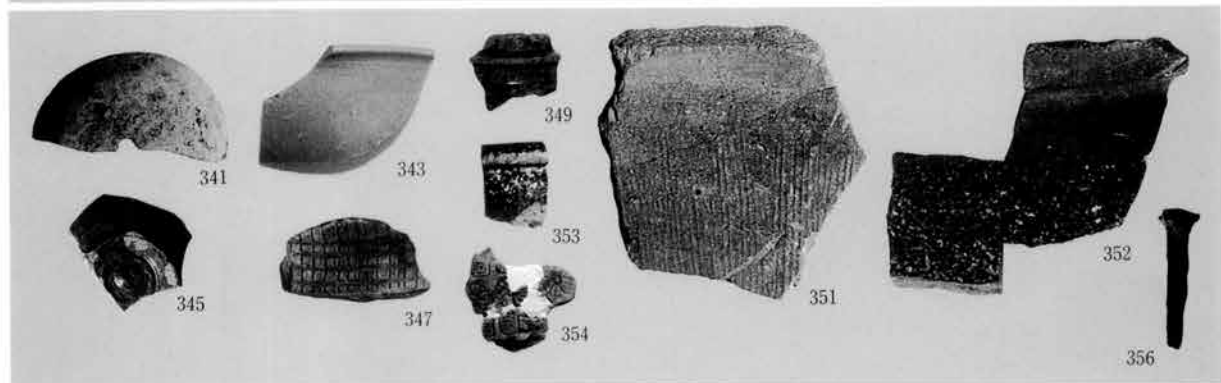
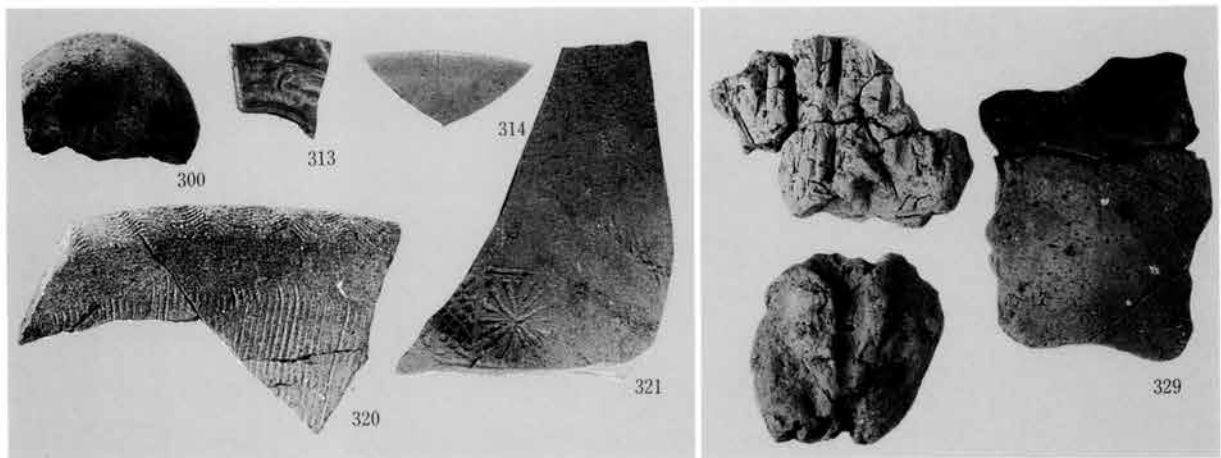
出土遺物

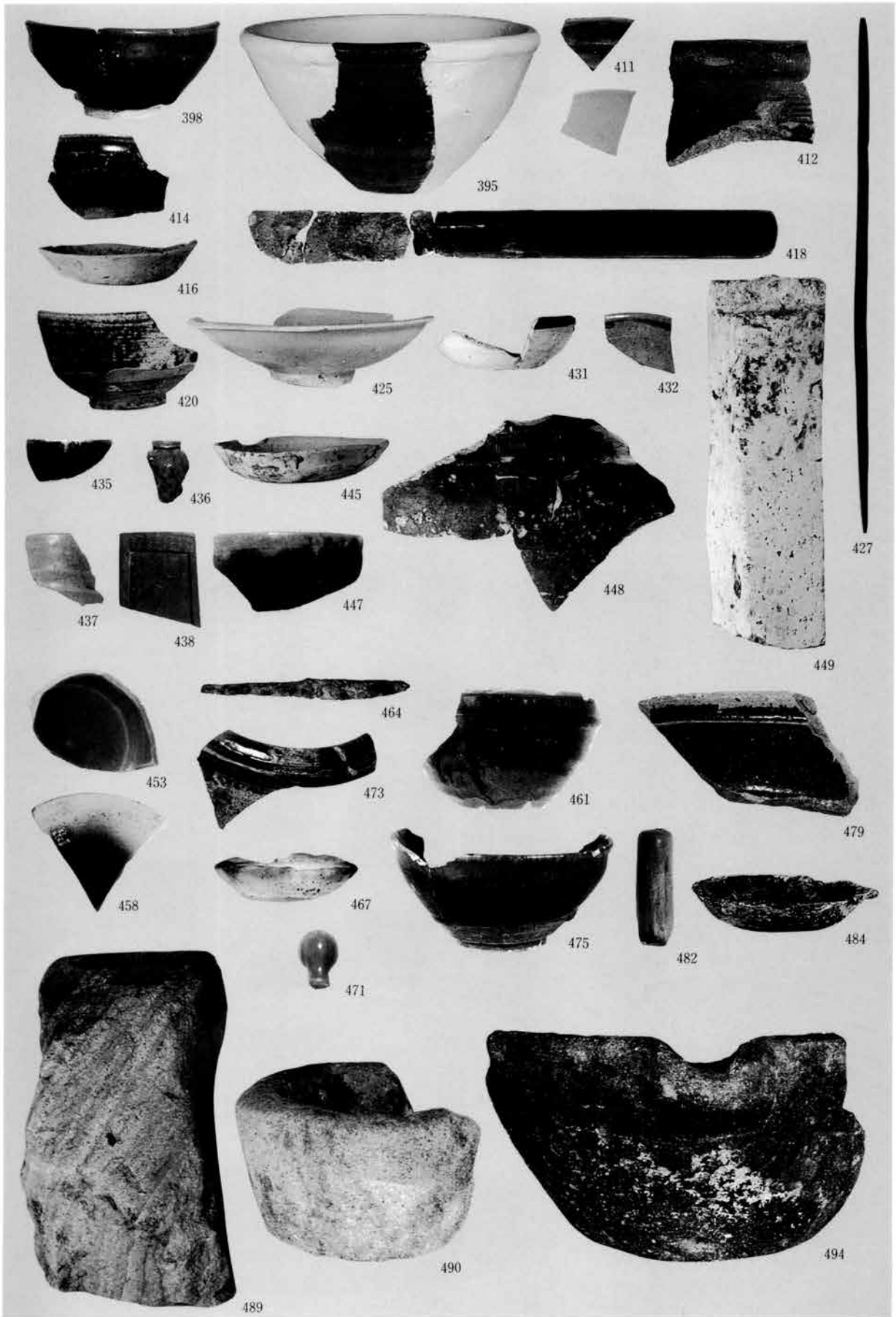


出土遺物

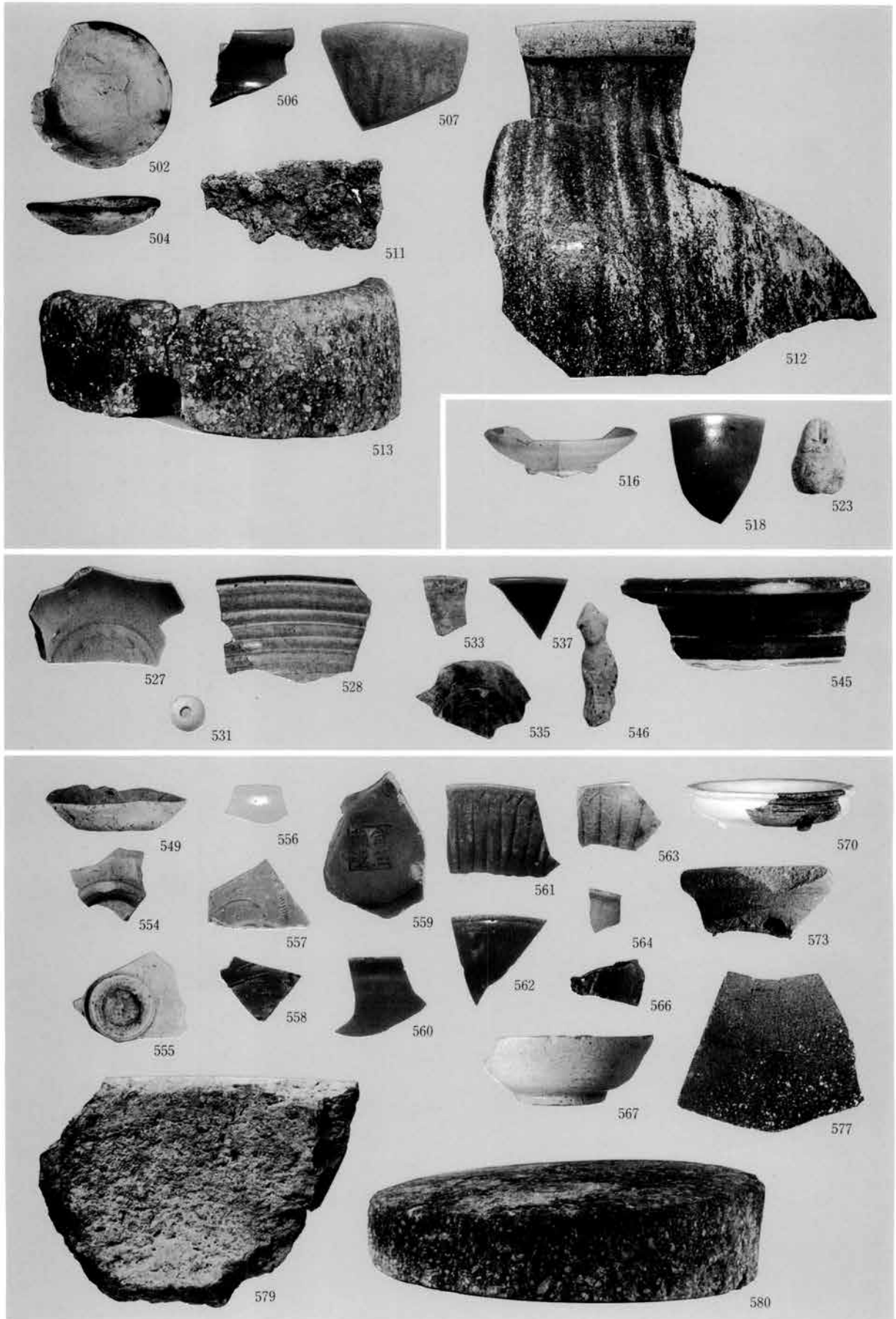


出土遺物





出土遺物



出土遺物



1



51



5



8



20



73



2



12



87



74



27



89



46



34



42



19



28



43



40



55



75



83



29



84



30



9



9-裏



69



10



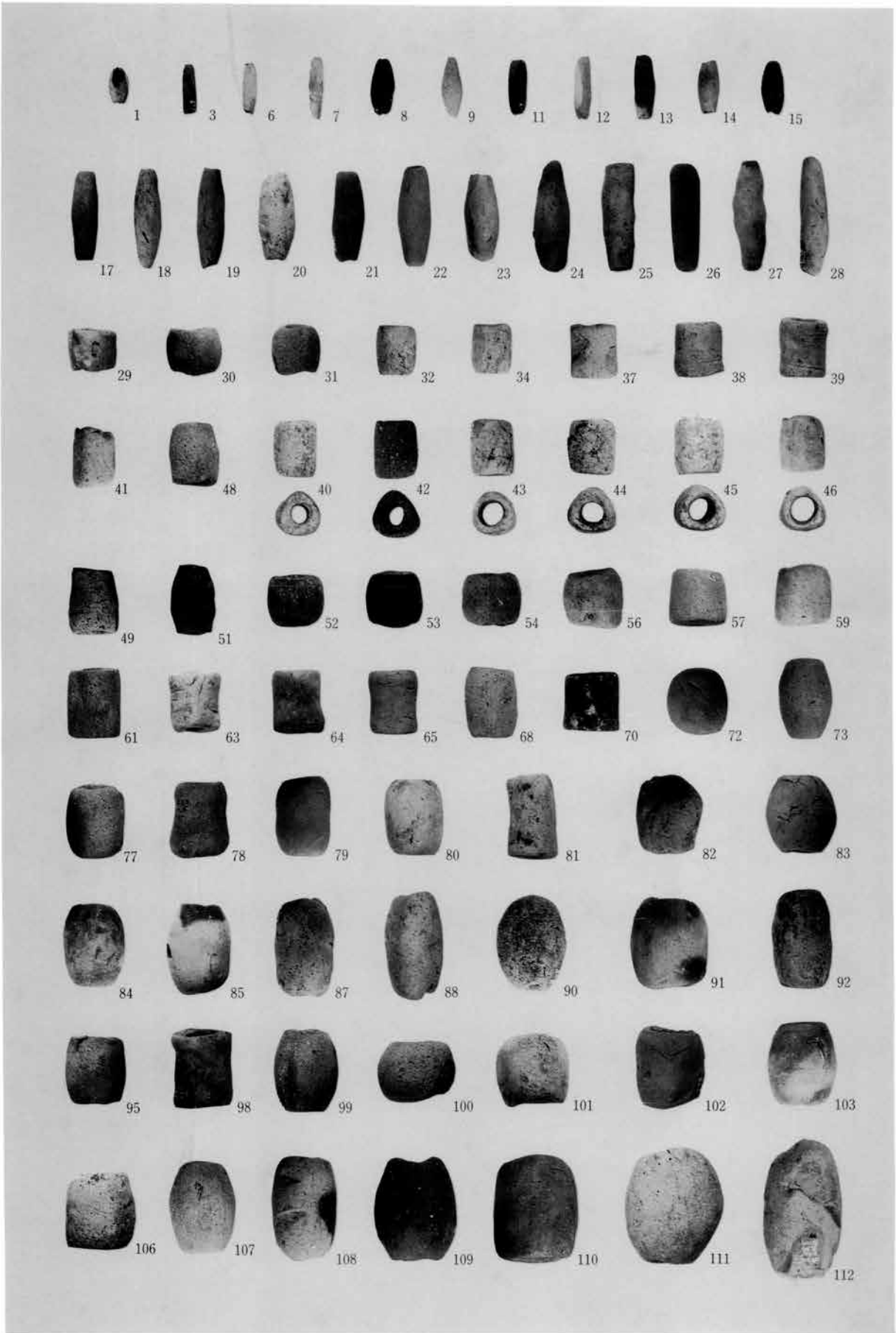
92



鑄着銭



錢貨



土錘

報 告 書 抄 録

ふりがな	きごしこうりんじいせき							
書名	木越光琳寺遺跡							
副書名	一般県道向粟崎安江町線道路改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	岩瀬由美、垣内光次郎、芝田 悟、木越祐馨、鈴木三男、西尾典子、能城修一、中野益男、(株)パリノ・サーヴェイ、金子浩昌							
編集機関	石川県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒921 石川県金沢市米泉町4丁目133番地 Tel (076) 243-7692							
発行年月日	西暦1998年1月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きごしこうりんじいせき 木越光琳寺遺跡	いしかわけん 石川県 かなざわし 金沢市 きごしまち 木越町	17201	01309	36°	136°	19920616	3,000	一般県道向 粟崎安江町 線道路改良 工事
				37'	39'	}		
				14"	43"	19921226		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡		主な遺物		特記事項	
木越光琳寺遺跡	集落遺跡	中世 近世	溝 13条 土坑 49基 掘立柱建物 17棟		土師質土器 中国製陶磁器 瀬戸・美濃焼 珠洲焼 近世陶磁器 木製品			

木越光琳寺遺跡

一般県道向粟崎安江町線道路改良工事に
係る埋蔵文化財発掘調査報告書

発行日 平成10年1月30日(1998)

編集・発行 石川県立埋蔵文化財センター
☎921-8044 石川県金沢市米泉町4丁目133番地
☎(076)243-7692

印刷 株式会社橋本確文堂
